(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第228集

西長岡南遺跡II・III

一級河川蛇川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書4

1997

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

西長岡南遺跡II・III

一級河川蛇川小規模河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 4

1997

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

太田市西北部の大間々扇状地扇端に源を発する一級河川蛇川は、太田市の西部を流れて石田川に合流しています。上流の太田市長岡、成塚付近を流れる蛇川は、昭和61年度より河川改修工事の対象となりました。この付近は、7世紀末に建立された寺井廃寺跡や駒形神社埴輪窯跡、県指定史跡二ツ山古墳等多くの埋蔵文化財があります。このため河川改修計画当時から、埋蔵文化財発掘調査の必要性が叫ばれていましたが、着工と同時に埋蔵文化財発掘調査が当事業団に委託されました。

当事業団では、昭和61年度、62年度、63年度、平成元年度、2年度、5年度、6年度、8年度の8回にわたって調査を行い、既に調査報告書についても「成塚石橋遺跡」、「成塚石橋遺跡Ⅱ」、「成塚石橋遺跡Ⅲ・ほか」の3冊を刊行しています。

本年度に入って、平成6年、8年度に調査した「西長岡南遺跡Ⅱ」、「西長岡南遺跡Ⅲ」の調査報告書刊行のための整理業務を行い、この度それが終了しましたので、ここに「一級河川蛇川小規模河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集　西長岡南遺跡Ⅱ・西長岡南遺跡Ⅲ」の調査報告書を上梓したく存じます。

本報告書の刊行をもって、蛇川の河川改修工事による埋蔵文化財発掘調査事業は、全て終了しました。最後の調査報告書を上梓するに際して、発掘調査、整理業務を通じて終始御指導、ご協力をいただいた群馬県土木部河川課同太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会、地元関係者等に衷心より感謝の意を表わすと共に、本報告書が地域の歴史を明かにする上で大いに活用されることを願い序とします。

平成9年3月

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　小寺弘之

例　　言

1．本書は、公共事業に伴う県委託事業であるとともに、文化財保護法とその施行令等に基づき作成した報告書である。

2．遺跡の記録保存資料および整理浄書図等資料は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3．発掘調査組織等の要目は次のとおりである。

西長岡南遺跡II　平成6年9月1日～平成6年12月28日

調査地　太田市大字西長岡字南328ほか、本文18頁参照

調査主体者　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

発掘担当者　大木紳一郎(当団専門員)・斉藤英敏(当団調査研究員) 以上当団調査研究部第4課職員

調査面積　4330㎡

協　　力　群馬県土木部河川課、群馬県太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会文化財保護課

西長岡南遺跡III　平成8年4月1日～平成8年5月31日

調査地　太田市大字西長岡字南463-1、本文125頁参照

調査主体者　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

発掘担当者　女屋和志雄（当団主幹兼専門員）・内田敬久（当団調査研究員）以上当団調査研究部第6課職員

発掘面積　320㎡

協　　力　群馬県土木部河川課、群馬県太田土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会文化財保護課

4．整理体制と整理期間

整理主体者　群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

期　　間　平成8年4月1日～平成9年3月31日

整理補助員　大友幸江・六反田達子・金子恵子・狩野フミ子・横坂英実・西村美保子・上原博美・鈴木未央

遺物写真撮影　佐藤元彦（当団普及資料課技師）、その補い大江正行

遺物保存のための化学処理と処置　関邦一（当団普及資料課技師）・土橋まり子（当団嘱託員）・小材浩一・萩原妙子

遺物図化　スリー・スペース土器実測班　長沼久美子・岩渕節子・光安文子・萩原光枝・立川千栄子・南雲富子

整理担当　大江正行（調査研究第6課）

事務・接渉　菅野　清・原田恒弘・神保侑史・蜂巣　実・右島和夫（当報告の渉外主務、調査研究第6課）・小渕　淳・笠原秀樹・国定　均・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・大澤友治・吉田恵子・松井美智代・内山佳子・星野美智子・羽鳥京子・菅原淑子・山口陽子

5．本書の作成にあたり、下記の方々に協力をいただいた。

群馬県工業試験場、木暮仁一（元群馬県教育委員会文化財保護課第3係長・地域史研究者）、県下在住の

文化財担当職員の皆さん及び当団職員

6．本書の凡例は、各篇の冒頭で説明したほか次のとおりである。

(1) 遺構方位は、西長岡南遺跡独自ではなく、既調査の蛇川改修工事に関わる管塩西両台遺跡・石橋永昌寺遺跡と同一の調査座標を使用した。座標軸は公共座標第IX系であり、方位記号は座標北である。

(2) 遺物の縮小率は、各図中、写真中に掲げた。遺物図は土器類を1：3で、埴輪類を1：4に統一した。遺物写真はおよその縮小率である。

(3) 遺構写真は、発掘担当者による。

(4) トーンの意味は、図傍と2、3篇の冒頭に示した。

本 文 目 次

第1篇　序　篇

第1章　調査に至る経緯と経過……1
第2章　調査の方法と基本層位……2
1、調査の方法……2
2、基本層位……2
第3章　周辺遺跡……6
1、周辺遺跡……6
2、蛇川河川改修に伴なう既調査と関連遺跡調査……12

第2篇　西長岡南遺跡II

第1章　発掘と整理上の例言と凡例……18
第2章　発見された遺構と遺物……20
1、古墳……23
古墳5……24
11号古墳……25
12号古墳……69
13号古墳……76
14号古墳……76
15号古墳……80
2、住居跡……82
1号住居跡……83
2号住居跡……84
3号住居跡……85
4号住居跡……88
3、溝跡……90
1号溝跡……91
2・3号溝跡……91
4号溝跡……93
5号溝跡……93
6号溝跡……93
7号溝跡……96
8号溝跡……96
9号溝跡……96
10号溝跡……99
23号溝跡……99
11・12号溝跡……99
13号溝跡……99
14・15号溝跡……102
16・17・18号溝跡……103
19・20・21号溝跡……105
22号溝跡……106
4、調査から見た地勢……106
台地上について……108
台地上の縄文遺構の調査……108
低地での浅間山B軽石（As-B）を含む面の調査……108
低地での榛名山 Hr-FA を含む層前後の調査……111
5、穴跡……112
1号土坑……112
2号土坑……112
3号土坑……113
4号土坑……113
5号土坑……114
6・7号土坑……115
9号土坑……116
10号土坑……116
11号土坑……116
12号土坑……118
13号土坑……118
14号土坑……118
15号土坑……118
6、小穴跡……118
ピット1～8・18……121
ピット9～17……121
7、風倒木痕……121
1～6号風倒木痕……123

8、畑遺構 ……124

第3篇　西長岡南遺跡Ⅲ

第1章　発掘概要と例言・凡例 ……125
第2章　発掘された遺構と遺物 ……126
1、古墳 ……128
16号古墳 ……128
2、穴跡 ……135
1号土坑 ……135
2号土坑 ……135
3号土坑 ……136
4号土坑 ……136
5号土坑 ……136
3、補足遺物 ……136

第4篇　遺物量と遺物観察

第1章　遺物量と遺物観察の凡例と例言……137
第2章　遺物観察 ……152

第5篇　科学分析と鑑定

第1章　群馬県、西長岡南遺跡の自然科学分析 ……166
第2章　西長岡南遺跡Ⅱ遺跡の動物の足跡について ……172
第3章　西長岡南遺跡出土埴輪胎土の材料分析と顔料分析 ……177

第6篇　ま　と　め

第1章　古墳に関連して ……196
第2章　西長岡南古墳群の占地 ……197
第3章　埴輪の焼成について考える ……197
第4章　生産基盤について ……198

挿 図 目 次

第 1 図　試掘・深堀トレンチ平面と土層断面図 …… 3
第 2 図　標準土層ほか土層断面図 …… 4
第 3 図　完新世示標テフラ層の分布図 …… 5
第 4 図　周辺遺跡分布図 …… 7
第 5 図　寺井廃寺跡出土瓦 …… 10
第 6 図　既調査図 …… 13
第 7 図　既調査図 …… 14
第 8 図　既遺物図 …… 15
第 9 図　調査区全図 …… 21・22
第 10 図　三角点下拡張区全図 …… 24
第 11 図　古墳 5 遺物図 …… 24
第 12 図　11号古墳遺構図 …… 27
第 13 図　11号古墳遺構図 …… 28
第 14 図　11号古墳土層断面図 …… 29
第 15 図　11号古墳土層断面図 …… 30
第 16 図　11号古墳遺構図 …… 31
第 17 図　11号古墳遺構図 …… 32
第 18 図　11号古墳遺構図 …… 33
第 19 図　11号古墳遺構図 …… 34
第 20 図　11号古墳遺構図 …… 35
第 21 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 36
第 22 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 37
第 23 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 38
第 24 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 39
第 25 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 40
第 26 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 41
第 27 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 42
第 28 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 43
第 29 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 44
第 30 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 45
第 31 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 46
第 32 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 47
第 33 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 48
第 34 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒） …… 49
第 35 図　11号古墳遺物図（埴輪朝顔） …… 50
第 36 図　11号古墳遺物図（埴輪家形） …… 51
第 37 図　11号古墳遺物図（埴輪家形） …… 52
第 38 図　11号古墳遺物図（埴輪大刀形） …… 53
第 39 図　11号古墳遺物図（埴輪大刀形） …… 54
第 40 図　11号古墳遺物図（埴輪盾形） …… 55
第 41 図　11号古墳遺物図（埴輪盾形） …… 56
第 42 図　11号古墳遺物図（埴輪盾形） …… 57
第 43 図　11号古墳遺物図（埴輪盾形） …… 58
第 44 図　11号古墳遺物図（埴輪盾形・人） …… 59
第 45 図　11号古墳遺物図（埴輪人・馬か） …… 60
第 46 図　11号古墳遺物図（埴輪馬か・盾不明） …… 61
第 47 図　11号古墳遺物図（埴輪盾不明ほか） …… 62
第 48 図　11号古墳遺物図 …… 63
第 49 図　11号古墳石室遺物図 …… 63
第 50 図　11号古墳石室遺物図 …… 64
第 51 図　11号古墳石室遺物図 …… 65
第 52 図　11号古墳補足遺物図 …… 66
第 53 図　12号古墳遺構図 …… 67・68
第 54 図　12号古墳土層断面図 …… 70
第 55 図　12号古墳土層断面図 …… 71
第 56 図　12号古墳遺物図 …… 72
第 57 図　12号古墳遺物図 …… 73
第 58 図　13号古墳遺構図 …… 74
第 59 図　13号古墳土層断面図 …… 75
第 60 図　13号古墳遺物図 …… 75
第 61 図　14号古墳遺構図 …… 77
第 62 図　14号古墳遺構図 …… 78
第 63 図　15号古墳遺構図 …… 79
第 64 図　15号古墳遺構図 …… 80
第 65 図　15号古墳遺構図 …… 81
第 66 図　1 号住居跡遺構図 …… 83
第 67 図　1 号住居跡遺物図 …… 84
第 68 図　2 号住居跡遺構図 …… 85
第 69 図　2 号住居跡遺物図 …… 86
第 70 図　2 号住居跡遺物図 …… 87
第 71 図　3 号住居跡遺構図 …… 88
第 72 図　3 号住居跡遺物図 …… 89
第 73 図　4 号住居跡遺構図 …… 89
第 74 図　4 号住居跡遺物図 …… 89
第 75 図　グリッド遺物出土位置図 …… 90
第 76 図　B地点遺物図 …… 90
第 77 図　1 号溝跡遺構図 …… 91
第 78 図　2 号・3 号溝跡遺構図 …… 92
第 79 図　4 号・5 号溝跡遺構図 …… 94
第 80 図　6 号・7 号溝跡遺構図 …… 95
第 81 図　8 号・9 号溝跡遺構図 …… 97
第 82 図　10号・23号溝跡遺構図 …… 98
第 83 図　11号・12号・13号溝跡遺構図 …… 100
第 84 図　14号・15号・16号・17号・18号溝跡遺構図 …… 101
第 85 図　19号・20号・21号溝跡遺構図 …… 102
第 86 図　22号溝跡遺構図 …… 103
第 87 図　溝跡遺物図 …… 104
第 88 図　溝跡遺物図 …… 105
第 89 図　縄文土器包含層遺物図 …… 107
第 90 図　As－B下面遺構図 …… 109
第 91 図　Hr－FA 下面遺構図 …… 110
第 92 図　低地調査区遺物図 …… 111
第 93 図　1 号・3 号・4 号・5 号土坑遺構図 …… 113
第 94 図　6 号・7 号・9 号・10号土坑遺構図 …… 114
第 95 図　11号・12号・13号土坑遺構図 …… 115
第 96 図　14号・15号土坑遺構図 …… 116
第 97 図　土坑遺物図 …… 117
第 98 図　1～8 号ピット遺構図 …… 119
第 99 図　9～17号ピット遺物図 …… 120
第100図　ピット遺物図 …… 121
第101図　1 号・2 号・3 号・4 号風倒木痕遺構図 …… 122
第102図　5 号・6 号風倒木痕遺構図 …… 123
第103図　風倒木痕遺物図 …… 123
第104図　サク跡遺構図 …… 124
第105図　各調査区補足遺物図 …… 124
第106図　調査区位置図 …… 125
第107図　H・I8・9 区遺構図 …… 126
第108図　10号古墳土層断面図 …… 127
第109図　10号古墳遺構図 …… 129
第110図　10号古墳北側周堀の遺物出土状態図 …… 130
第111図　16号古墳遺物図 …… 131
第112図　16号古墳遺物図 …… 132
第113図　16号古墳遺物図 …… 133
第114図　土坑遺構図 …… 134
第115図　土坑遺物図 …… 135
第116図　補足遺物図 …… 136

写真図版目次

写真図版1　上段　調査地と八王子丘陵近景
　　下段　調査地全景と八王子丘陵
写真図版2　上段　K13区低地の調査状況
　　中段左　調査地より金山丘陵を望む
　　中段右　J11・12区近景
　　下段左　I10区三角点下の調査区
　　下段右　H8区の調査区全景
写真図版3　上段　HI8区全景
　　下段左　HI8区試掘調査状況
　　下段右　HI8区試掘調査状況
写真図版4　J10・11区垂直
写真図版5　上段左　基本層序、J11区230北東壁
　　上段右　基本層序、J11区366北東壁
　　下段左　基本層序、J11区077
　　下段右　基本層序、J11区380・380
写真図版6　上段　11号古墳全景垂直
　　中段左　11号古墳近景
　　中段右　11号古墳全景
　　下段左　11号古墳全景
　　下段右　11号古墳近景
写真図版7　上段左　11号古墳墳輪出土状況近景
　　上段右　11号古墳主体部発見面状況全景
　　下段左　11号古墳主体部発見面状況近景
　　下段右　11号古墳竪穴系石室内遺物出土状況
写真図版8　1段左　11号古墳石室北半の遺物出土状況
　　1段右　11号古墳石室東壁側の遺物出土状況
　　2段左　11号古墳石室西壁と遺物出土状況
　　2段右　11号古墳石室北半の遺物出土状況
　　3段左　11号古墳石室の遺物出土状況近接
　　3段右　11号古墳石室の玉類出土状況
　　4段左　11号古墳石室の玉類出土状況
　　4段右　11号古墳石室中央部の遺物出土状況
写真図版9　上段左　11号古墳石室南側の遺物出土状況
　　上段右　11号古墳石室刀子出土状況
　　中段左　11号古墳石室掘方状況
　　中段右　11号古墳石室掘方土層断面と調査状況
　　下段左　11号古墳石室北側小口壁の近接
　　下段右　11号古墳南側小口壁の近接
写真図版10　上段左　11号古墳石室東壁の状況
　　上段右　11号古墳石室東壁北半の板石
　　中段左　11号古墳石室東壁中央の状況
　　中段右　11号古墳石室東壁の状況
　　下段　11号古墳石室掘方と西壁の状況
写真図版11　上段左　11号古墳石室掘方と土層断面
　　上段右　11号古墳北側小口壁の石組状況
　　中段左　11号古墳石室大石の石組状況
　　中段右　11号古墳石室と掘方間の築土状況
　　下段　11号古墳石室、現地で行った石組順、復元の試み
写真図版12　上段　11号古墳墳輪出土状況全景
　　中段左　11号古墳北側くびれ部周堀墳輪出土状況
　　中段右　11号古墳南側くびれ部墳輪出土状況
　　下段左　11号古墳後円部北側周堀墳輪出土状況
　　下段右　11号古墳後円部北側周堀墳輪出土状況
写真図版13　上段左　11号古墳後円部北側周堀墳輪出土状況
　　上段右　11号古墳前方部北側周堀墳輪出土状況
　　2段　11号古墳前方部南側周堀墳輪出土状況
　　3段　11号古墳後円部北側周堀中央墳輪出土状況
　　中段右　11号古墳後円部北側周堀中央土層帯
　　4段左　11号古墳前方部中央土層帯墳輪出土状況
　　4段右　11号古墳北側くびれ部土層帯墳輪出土状況
写真図版14　1段左　11号古墳周堀出土墳輪No.1
　　1段右　11号古墳周堀出土墳輪No.2
　　2段左　11号古墳周堀出土墳輪No.2
　　2段右　11号古墳周堀出土墳輪No.2
　　3段左　11号古墳周堀出土墳輪No.2
　　3段右　11号古墳周堀出土墳輪No.3
　　4段左　11号古墳周堀出土墳輪No.4
　　4段右　11号古墳周堀出土墳輪No.5
写真図版15　1段左　11号古墳周堀出土墳輪No.6
　　1段右　11号古墳周堀出土墳輪No.7
　　2段左　11号古墳周堀出土墳輪No.11
　　2段右　11号古墳周堀出土墳輪No.14
　　3段左　11号古墳周堀出土墳輪No.16・17
　　3段右　11号古墳周堀出土墳輪No.33・34
　　4段左　11号古墳周堀出土墳輪No.35・36
　　4段右　11号古墳周堀出土墳輪No.37
写真図版16　1段左　11号古墳周堀出土墳輪No.47
　　1段右　11号古墳周堀出土墳輪No.82・83
　　2段左　11号古墳周堀出土墳輪No.52・89
　　2段右　11号古墳周堀出土墳輪No.87
　　3段左　11号古墳周堀出土墳輪No.91
　　3段右　11号古墳周堀出土墳輪No.95
　　4段左　11号古墳周堀出土墳輪No.96
　　4段右　11号古墳周堀出土土器No.96
写真図版17　1段左　11号古墳石室土層断面
　　1段右　11号古墳石室土層断面
　　2段左　11号古墳周堀土層断面E
　　2段右　11号古墳周堀土層断面C
　　3段左　11号古墳周堀土層断面F
　　3段右　11号古墳周堀土層断面G
　　4段左　11号古墳周堀土層断面B
　　4段右　11号古墳周堀土層断面A
写真図版18　上段　12号古墳垂直全景
　　中段　12号古墳全景
　　下段　12号古墳全景
写真図版19　上段左　12号古墳全景
　　1段左　12号古墳中央部近景
　　2段右　12号古墳中央部近景
　　3段　12号古墳北側周堀遺物出土状況
　　4段左　12号古墳北側周堀内出土遺物
　　4段右　12号古墳を切る23号溝跡の遺物出土状態
写真図版20　1段左　12号古墳北側周堀土層断面G
　　1段右　12号古墳南側周堀土層断面C
　　2段左　12号古墳土層断面G南側
　　2段右　12号古墳土層断面B
　　3段左　12号古墳北側周堀土層断面
　　3段右　12号古墳土層断面D
　　4段左　12号古墳土層断面C
　　4段右　12号古墳土層断面D
写真図版21　1段左　13号古墳北側周堀近景
　　1段右　13号古墳南側周堀近景
　　中段左　13号古墳南側周堀
　　2段右　13号古墳南側周堀試掘時状況
　　3段右　13号古墳南側周堀土層断面
　　下段左　13号古墳北側周堀土層断面

	4段右	13号古墳北側周堀土層断面
写真図版22	上段	14号古墳竪穴系石室全景
	中段左	14号古墳石室掘方
	中段右	14号古墳石室蔽断面状況
	下段左	14号古墳石室蔽断面状況
	下段右	14号古墳石室南小口と掘方断面状況
写真図版23	上段	15号古墳試掘調査時の状況
	下段左	15号古墳石室と石材の状況
	下段右	15号古墳石室と石材の状況
写真図版24	上段	15号古墳竪穴系石室発見面の状況
	下段	15号古墳竪穴系石室全景
写真図版25	上段	15号古墳石室掘方全景
	下段左	15号古墳石室近景
	下段上	15号古墳南西壁の状況
	下段下	15号古墳北東壁の状況
写真図版26	1段左	1号住居跡床面状態
	1段右	1号住居跡遺物出土状態
	2段左	1号住居跡掘方状態
	2段右	1号住居跡遺物出土状態近接
	3段左	1号住居跡遺物出土状態
	3段右	1号住居跡遺物出土状態
	4段左	1号住居跡ピット2断面
	4段右	1号住居跡ピット3断面
写真図版27	1段左	2号住居跡ほぼ床面の状態
	1段右	2号住居跡遺物出土状態近景
	2段左	2号住居跡遺物出土状態近接
	2段右	2号住居跡遺物出土状態近接
	3段左	2号住居跡遺物出土状態近接
	3段右	2号住居跡遺物出土状態近接
	4段左	3号住居跡遺物出土状態
	4段右	3号住居跡掘方状態
写真図版28	1段左	3号住居跡土層断面
	1段右	3号住居跡遺物出土状態近景
	2段左	3号住居跡遺物出土状態近景
	2段右	3号住居跡ピット1断面
	3段左	3号住居跡ピット2断面
	3段右	3号住居跡ピット3断面
	4段左	4号住居跡近景
	4段右	4号住居跡近景
写真図版29	上段	1号溝跡全景垂直
	中段左	1号溝跡近景
	中段右	1号溝跡土層断面
	下段左	3号溝跡全景
	下段右	2号溝跡全景、左3号溝跡
写真図版30	上段	2号溝跡・3号溝跡土層断面
	中段左	4号溝跡近景
	2段右	4号溝跡近景
	3段右	4号溝跡土層断面
	4段左	5号溝跡近景
	4段右	5号溝跡近景と土層断面
写真図版31	1段左	5号溝跡土層断面
	1段右	6号溝跡（炭力形穴跡）全景垂直
	2段左	9号溝跡全景垂直
	2段右	7号溝跡土層断面
	下段左	8号溝跡近景
	3段右	8号溝跡土層断面
	4段右	9号溝跡全景
写真図版32	1段左	9号溝跡近景
	1段右	9号溝跡土層断面
	中段左	10号溝跡全景
	2段右	10号溝跡遺物出土状況
	3段右	10号溝跡遺物出土状況
	4段左	10号溝跡土層断面
	4段右	23号溝跡全景
写真図版33	上段左	11・12号溝跡近景
	上段右	11号溝跡土層断面
	中段左	11・12・14号溝跡近景
	中段右	11・12号溝跡土層断面
	下段左	11・12・14・15号溝跡全景
	下段右	13号溝跡全景
写真図版34	上段左	14号溝跡土層断面
	1段右	15号溝跡土層断面
	中段左	16・17・18号溝跡全景
	2段右	16・17号溝跡土層断面
	3段右	17・18号溝跡土層断面
	4段左	19号溝跡近景
	4段右	19号溝跡断面
写真図版35	上段左	20号溝跡全景
	1段右	20号溝跡土層断面
	2段右	21号溝跡全景
	3段左	21号溝跡土層断面
	3段右	21号溝跡全景
	4段左	作業風景、12号墳中央部
	4段右	作業風景、K13区As－B下の面
写真図版36	1段左	1号土坑全景、6号溝跡
	1段右	1号土坑土層断面
	2段左	3号土坑全景
	2段右	3号土坑土層断面
	3段左	4号土坑全景
	3段右	5号土坑全景・土層断面
	4段左	6号土坑全景
	4段右	7号土坑全景
写真図版37	1段左	9号土坑全景
	1段右	9号土坑土層断面
	2段左	10号土坑全景
	2段右	11号土坑近景・土層断面
	3段左	12号土坑全景
	3段右	13号土坑全景
	4段左	14号土坑近景
	4段右	15号土坑近景・土層断面
写真図版38	1段左	1号ピット土層断面
	1段右	2号ピット土層断面
	2段左	8号ピット土層断面
	2段右	16号ピット全景
	3段左	17号ピット全景
	3段右	1号風倒木跡近景
	4段左	2号風倒木跡土層断面
	4段右	6号風倒木跡土層断面
写真図版39	上段	J16区の弥生時代以前の遺構確認作業
	3段左	J11E192付近の縄文土器出土状況
	3段右	J11E192付近の縄文土器出土状況
	4段左	J11E192の縄文土器出土状況
	4段右	J11E192の縄文土器出土状況
写真図版40	上段左	J11EAs－B下の水田疑似面
	上段右	同左の面上の近接状態
	中段	K13EHr－FA下面
	下段左	K13EHr－FA下面
	下段右	K13E低地の調査状況
写真図版41	1段左	K13EHr－FA下面の状況
	1段右	K13EHr－FA下面状況
	2段左	K13EHr－FA下面の状況
	2段左	K13EHr－FA下面の足痕跡状凹凸
	3段左	K13EHr－FA下面の足痕跡
	3段右	K13EHr－FA下面の足痕跡
	4段左	K13EHr－FA下面の足痕跡
	4段右	K13EHr－FA下面の足痕跡

写真図版42　1段左　K13区As—C下面調査と土層断面
1段右　K13区As—C下面と直上の土層
2段左　K13区370付近遺物出土状態
2段右　K13区370付近遺物出土状態
3段左　K13区370付近遺物出土状態
3段右　K13区370付近遺物状土状態近景
4段左　K13区370付近遺物出土状態近接
4段右　K13区370付近遺物出土状態
写真図版43　上段左　西長岡南遺跡Ⅲ全景
上段右　西長岡南遺跡Ⅲ全景
中段左　16号古墳
中段右　16号古墳北周堀
下段左　16号古墳北周堀埴輪出土状態
下段右　16号古墳北周堀埴輪出土状態近景
写真図版44　1段左　16号古墳北周堀
1段右　16号古墳南周堀
2段左　16号古墳北周堀上層第113図21出土状態
2段右　1号土坑
3段左　2号土坑
3段右　3号土坑
4段左　3号土坑堆積物断面状態
4段右　5号土坑
写真図版45　上段左　11号古墳石室
1段右　11号古墳石室北小口壁
2段右　11号古墳石室南小口壁
中段　11号古墳出土玉類
下段　11号古墳出土玉類
写真図版46　埴輪形象と馬冑の色彩
写真図版47　5号古墳・11号古墳遺物
写真図版48　11号古墳遺物
写真図版49　11号古墳遺物
写真図版50　11号古墳遺物
写真図版51　11号古墳遺物
写真図版52　11号古墳遺物
写真図版53　11号古墳遺物
写真図版54　11号古墳遺物
写真図版55　11号古墳遺物
写真図版56　11号古墳遺物
写真図版57　11号古墳遺物
写真図版58　11・12・13号古墳遺物
写真図版59　住居跡遺物
写真図版60　住居跡・D地点・溝跡遺物
写真図版61　溝跡・低地・土坑遺物
写真図版62　西長岡南遺跡Ⅱピット・風倒木跡・補足遺物・西長岡南遺跡Ⅲ16号古墳遺物
写真図版63　16号古墳・土坑・補足遺物

第１篇　序　　篇

第１章　調査に至る経緯と経過

太田市の北西部に位置する一級河川蛇川流域のうち上鳥山・中鳥山・寺井地区が農業振興地区に指定され、太田北部土地改良事業が始められたのは、昭和43年度からであった。事前協議は県・太田市教育委員会と主体者であった県土木部・農政部の関係各課との間で進められた。特に鳥山地区の蛇川改修工事は、遺跡の存在が濃密な地区に当るため、昭和47年度に試掘調査が、４月～同年６月末日まで本調査が群馬県教育委員会により実施された。これが蛇川河川改修工事に伴なう最初の調査であり、幅30mの拡幅員、総長400mを対象に、集中区3600㎡の拡張調査が実施され、昭和49年３月に『太田市八幡遺跡発掘調査報告』（群馬県教育委員会）が概報の体裁で刊行され、本整理は平成元年度に実施され『太田市八幡遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1990により、ようやく完結している。

続いて、蛇川河川改修工事での県文化財関連の事業は、群馬県企業局が成塚に住宅団地の造成、および治良門橋駅北側延長50mの区間の河川拡幅が県土木部河川課で計画された。それを受け、県教育委員会文化財保護課は、県企業局・県河川課に対し、太田市教育委員会が、10600㎡余りの蛇川改修区間については、県河川課・県太田土木事務所をまじえての協議による調整により、㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団に調査委託を行なうこととなった。それを受けた当団は、第１次の調査を昭和62年２月16日～同年６月30日の間に約4000㎡の発掘調査を、昭和62年７月１日～昭和63年３月31日の間に整理作業を行なった。成果は、『成塚石橋遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988としてまとめられた。

事業の継続は、憂慮される調査中の増水、未決用地、それらと工事工程との係わりなどの問題から、以降において単年度完結調査の実施は困難との判断から結局、平成２年度にかけて４次に分けての調査実施となった。昭和63年度調査（第２次）は、第１次調査の以北・上流側の調査を昭和63年７月１日～同年10月30日の間に約3800㎡の調査が行なわれた。この調査は、家屋の未移転、現道の迂回が困難な道路が調査地内に存在することなどの理由から、こま切れ調査を行なわざるを得ない状況の中で実施された。昭和64年度調査（第３次）は、平成元年10月１日～同年12月31日の間に、約1200㎡の調査が行なわれた。昭和65年度調査（第４次）は、平成２年４月４日～同年５月31日の間に、約1600㎡の調査が第３次の上流部と一般市道成塚一北金井線にはさまれた部分について行なわれた。整理作業は、昭和63年～平成２年度までの３年間の成果をまとめるとし、昭和63年７月１日～平成元年３月31日までの間に昭和63年度調査分を、平成２年４月４日～３年３月31日の間に平成２年度調査分の整理作業が行なわれ『成塚石橋遺跡II』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1991として既刊されている。

４次にわたる調査は、当初、10600㎡と見られていた範囲が調査拡張の必要域であったが、調査の進展に伴ない、以北に広がりうる状況を呈していた。平成３年度以降、蛇川河川改修工事に伴なう幅員拡幅計画に則して、県教育委員会文化財保護課が試掘を行ない、その結果を踏まえた形で発掘調査を実施することとなった。平成３年度（第５次）は、成塚石橋地区以北に接する成塚永昌寺地区の調査が平成４年４月９日～同年７月28日までの間に約2200㎡が調査され、平成５年度（第６次）は、成塚永昌寺地区以北の菅塩西両台区および西長岡地区のうち用地収得済の場所のうち3368㎡が調査され、平成６年度に整理が実施され、成果は、未報告の一部と併せ『成塚石橋遺跡III・成塚永昌寺遺跡・菅塩西両台遺跡・西長岡南遺跡』（㈶群馬県埋蔵文

化財調査事業団）1996として既刊されている。一方、同年度は、西長岡南遺跡の北東側延長上にあたる個所と未決解決した個所を含む4330㎡にわたる西長岡南遺跡Ⅱの調査（第７次）が実施された。翌平成８年度には未決解決用地320㎡を対象として第８次調査が実施され、ようやく、蛇川河川改修に伴なう発掘調査は終了となった。本報告は平成７・８年度調査についての整理・報告である。

第２章　調査の方法と基本層位

１、調査の方法

成塚永昌寺遺跡の平成４年度調査区呼称法が変更され、以前の調査が座標呼称を行なっているのに対し、平成４年度から、大区の呼称は座標法を用い、100m四方を400等分した小区は、１～400までの小間割り呼称であり、平成５年度調査は、それを踏襲した。しかし現場においては、測量業者自身が呼称法を誤るし、記録実測図中の呼称も誤りが時おり認められ、やはり座標使用の呼称を行なうべきである。本書中の位置表現も実に煩しい文字量である。100m毎の大区は、東から西へＡ・Ｂ・Ｃで進行し、南から北へ算用数字が増加、南西隅が呼称点となる。この大区は公共座標第Ⅸ系に一致し、ＡラインはＹ＝－44.0、１ラインはＸ＝36.8である。小区は、100m格子の大区の中を５ｍ毎に小間割にしたもので、大座標は南と東から呼称するのに対し、小区は、東から西に、北から南に番号が送られている。大区隅北東隅の小間が小区001、南西隅の小間が小区400である。水準は、標高値である。

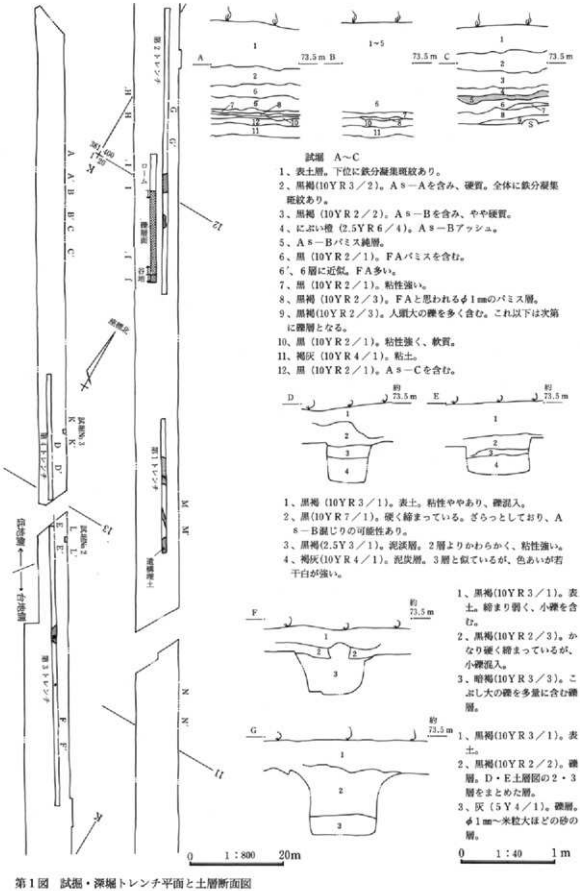
測図は、１：20・40を平面図として用い、それは主として遺構・遺物の粗密による。実測は平板による。土層断面、および遺構の成り断面は１：20で作成されている。等高線は、現場記入の図化である。

記録写真は、６㎝判白黒、35㎜判カラー・リバーサルと白黒で撮影してある。

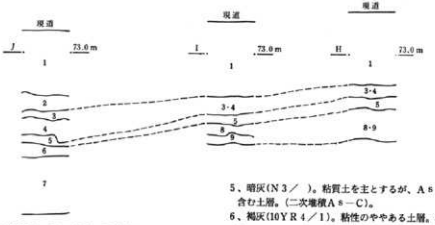
２、基本層位

基本層位は標識地点を定めて行なう方法と、複数の地点から得られた層順を概念化して行なう方法がある。前者は単調な場合に、後者は複雑な場合に用いられるが、西長岡南遺跡の総長は約1.7kmの長きに亘る。ここでは、本年度の西長岡南遺跡Ⅱ・Ⅲを主に層順の概念に触れ、前年度の西長岡南遺跡との相互点を加えたい。

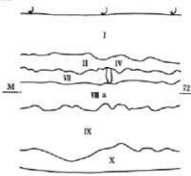
まず基盤は、旧波良瀬川の氾濫による大間々扇状地形の形成に伴なう礫層が広く存在するらしく、蛇川河川改修工事に伴なう構造物基礎の掘さくで、2.5～３ｍ以下で見られた。その礫層は、連続的に上方に続いてはいないらしく、小礫がローム層上面や古墳周堀中で部分的に顔を出し、遺跡Ⅱの北半では顕著のようであった。発掘調査の遺構発見面は、遺跡Ⅱ・Ⅲともにローム層上面付近に設けられているが、どの個所が水性や二次堆積か順堆積なのかの判断は困難であったようである。第１・２図に、調査当初の試掘図および深く掘り下げた個所を作図して掲げた中では、第２図土層注記Ｘに礫層があり、上方には、シルト質土があり土層断面Ｍ・Ｎの下方には水性堆積がおよんでいる。両断面は、現台地上であり、現低地である北方の水田に近接した個所の土層断面Ａ～Ｃの直下では、それら礫・シルト層が同レベルで存在しているのかは掘り下げが浅く明瞭でない。ローム上面と旧表土である黒色土との間の漸移層は台地側で、遺跡Ⅲの第108図土層断面６が唯一に近く、その直上にある旧表土の黒色土とともに削平もしくは耕作あるいは自然の力によるなどの理由により古墳周堀内を除き消失している。低地側では黒色味のある土壌が第１図土層番号10のように存在していたが、低地部分だけである。それらの黒色土中には多かれ少なかれ火山灰砂礫が含入していて、遺跡ⅡではFr―FA（榛名山二ツ岳FA）と説明され、既報告の西長岡南遺跡では、多く含む層についてHr―FP（榛

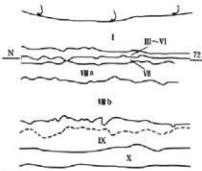


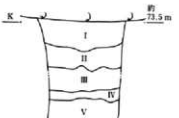
第１図　試掘・深堀トレンチ平面と土層断面図

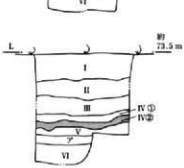


1、にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）。表土。硬く締まっている。
2、灰黄褐(10ＹＲ４／２)。Ａｓ－Ｂ軽石の２次堆積層。鉄分の赤茶色の斑点あり。
3、暗灰(Ｎ３／　)。水田面。粘質土層で、鉄分の赤茶色の斑点あり。
4、暗灰(Ｎ３／　)。３層と近似するが、ＦＡの軽石を斑点状に含む土層。
5、暗灰(Ｎ３／　)。粘質土を主とするが、Ａｓ－Ｃ軽石を多量に含む土層。(二次堆積Ａｓ－Ｃ)。
6、褐灰(10ＹＲ４／１)。粘性のややある土層。小礫をまばらに混入。
7、暗褐(10ＹＲ３／３)。粘性のややある土層。６層より粘性強い。
8、黒褐(10ＹＲ３／１)。粘性のややある土層。Ａｓ－Ｃ軽石粒をまばらに含む。
9、灰黄褐(10ＹＲ４／２)。粘性のややある土層。にぶい黄褐色のブロックを含む。







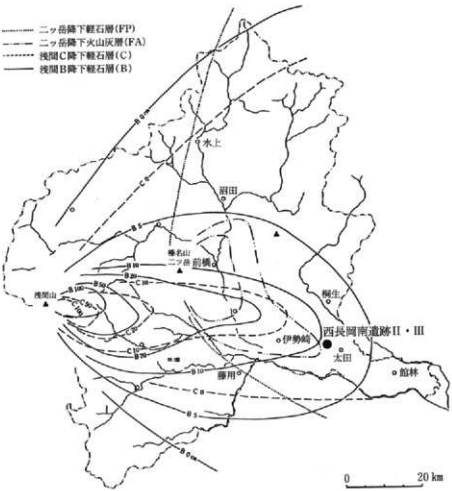


標準土層　Ｋ～Ｎ

Ⅰ、にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）。表土層。耕作土。
Ⅱ、褐灰(10ＹＲ５／１)。ざらっとしている。砂まじり。締まっている。
Ⅱ～Ⅳ、黒褐（10ＹＲ３／２)。ＦＡ・ＣＰを含む。
Ⅲ、褐灰(10ＹＲ４／１)。粘性のある土層。砂まじりだが、２層よりも砂は少ない。
Ⅳ、灰黄褐（10ＹＲ４／２)。φ１㎜～あずき大の小石混じりの硬い層。Ａｓ－Ｂ混じりかどうかわからず。
Ⅳ①、Ａｓ－Ｂの灰層。ややピンクかかっている。
Ⅳ②、Ａｓ－Ｂの純層。
Ⅲ～Ⅵ、暗褐（10ＹＲ３／３)。ＦＡが目立つ。
Ⅴ、黒（10ＹＲ1.7／1)。泥炭層。粘性あり。(水田の可能性)
ア、φ１～５㎜の小礫層。
Ⅵ、にぶい黄褐(10ＹＲ４／３)。粘性のある土層。Ⅴ層よりは、粘性弱い。
Ⅶ、褐(10ＹＲ４／６)。軟質。白色の微少パミスを含む。縄文包含層。
Ⅶa、黄褐(10ＹＲ５／６)。軟質。シルト質。全体に薄い色調の褐色斑紋がみられる。
Ⅶb、暗黄褐(2.5ＹＲ６／６)。シルト質で硬く締まる。下位に酸化鉄凝集斑紋あり。硬いローム。
Ⅸ、褐（10ＹＲ４／６)。軟質。シルト質。酸化鉄凝集斑紋が多い。
Ⅹ、礫層。φ５～２㎝の円礫、亜角礫が主体。砂層もラミナ状にはさまれる。

0　1：40　1 m

第２図　標準土層ほか土層断面図



第３図　完新世示標テフラ層の分布図（『考古学ジャーナル157』1979を加除筆）

名山二ツ岳FP）と説明された。噴出時期は、前者が６世紀初頭頃、後者が６世紀中頃である。Hr―FA・FPとの記述差は、26頁で説明したとおりであり、現実的には、両方の火山灰がおよんでいるとして考えた方が自然であろう。火山灰については第３図にテフラ層の分布図を示したが、この後、As―B（浅間山Ｂ軽石12世紀初頭頃、史料上天仁元年（1108）という）の降下がある。第１図土層注記５、第14図土層断面Ｂの４Ｂに、純層もしくは近い状態があり、直下に旧表土層が存在するが前記した旧表土とは、一般的に考えた表土層で、As-Ｂ直下のそれは、低地や凹地部分に推積した有機質の強い黒色土の旧表土で、その質感については、26頁のあたりで触れたい。その軽層の直下層から表土に至るまで、同軽石粒は含まれ、各層は粗質感を急増させている。軽石は耕作土直下層にもAs―Ａ（浅間山Ａ軽石、天明３年）を含んで時おり認められ、第１図Ａ～Ｅ断面にAs-Ａを含む記述がある。

これらの中で層位上意識されされていたのはAs-Ｂである。その降下時点は、考古学上12世紀初頭頃と考えられ、実質的には古代末期にあり、概念的には、古代と中世以降の土壌の質感の目安となっている。粗質との密との差である。

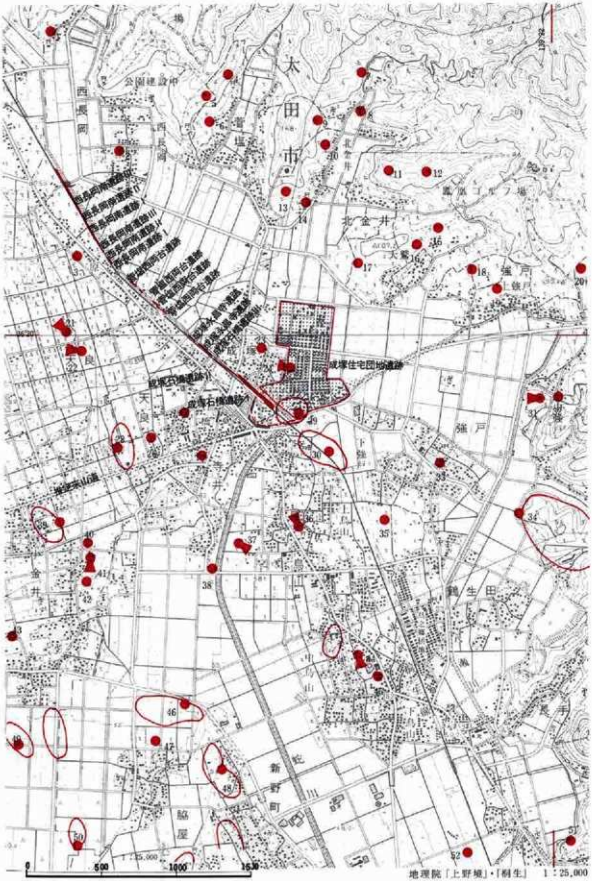
第3章 周辺遺跡

1、周辺遺構

今回の主要成果は、永昌寺遺跡、西長岡南遺跡では、古墳群の存在、菅塩西両台遺跡では平安時代後期の推定官衙、中世の鍛冶関連が明らかとなった。本章では、古墳時代以降を触れたい。

古墳時代以降の遺跡の性格を知るためには、まず農耕の生産基盤を考える必要がある。古墳時代水田遺構は現在までのところ、市内未見の状態という。奈良、平安時代水田跡は、教示[1]いただいた限りでは2遺跡に浅間山B軽石（As-B、12世紀初頭）順堆積層下に水田跡を示唆する面を認めたという例があり、地上には、古代の条里[2]区画の遺制をとどめる現水田の区画が、太田市南部や北東部に存在しているため、発見は時間の問題のようで、至近では南西約7.5kmの新田郡尾島町歌舞伎遺跡でAs-B下水田の発見がある。現在および近年までの灌漑状況に目を向けると、主要水路は東方と藪塚台地上を江戸時代寛文年間に開さくされた岡登用水が流水している。岡登用水は、岡登景能により寛文4年着手されたものの完流未成となり、明治5年に再掘削通流したものが現岡登用水である。現流路は、本遺跡の位置する藪塚台地と、東接の八王子丘陵、太田金山丘陵との間の低地帯を南流し、さらに金山丘陵西側の谷底平野中を八瀬川が南流し、この2つの水系が丘陵地帯に西接する水田地帯の主要水系となり、蛇川は岡登用水から引水した用水路である。太田市八幡遺跡西側の水田地帯は、八王子丘陵の東方から八王子丘陵と金山丘陵の間をへて、成塚、寺井の低台地を横切る水系によっている。近年の『太田市1：2500平面図10・11』（昭和58年8月調整）を見ると、その水系は八王子丘陵の南西端で八瀬川に分流しているか東武桐生線の東方約80mで分流するまでの間は「新田堀用水路」という名称が印字され、以南の分流は「蛇川」と「長堀用水路」とある。新田堀用水路については、新田庄をはじめ東国の中世史を研究されておられる峰岸純夫の「上野国新田庄の成立と展開」『中世の東国』（東京大学出版会）1989によれば「開削時期不明で戦国期には史料に出現する」とし、氏の作成された水系図は新田堀用水の末端を現新田郡[3]金井所在の水田地帯に置き、「戦国期以降の開穿」と補注を施し、開さく時期の明言をさけておられる。こうした用水路の必要性の状況は、八王子丘陵、金山丘陵中の奥行のある支谷中に溜池を見ることができ、両丘陵は第三紀層であり、県中央部の赤城山・榛名山を擁する地帯での扇状地末端にある湧水池とその恩恵を受ける流域を除くと多大な面積に伏流水および地表面上に貧水地帯が生じており、ち密な地質から生じる保水性と谷奥などから湧水する豊かな水量が得られる両丘陵に面する地帯との間に濯漑上の質差がある。したがって必要最小限の水量は常に確保されうる場所でありながら複数の用水が必要であった点は、西方に広がる藪塚台地末端の扇状地形中の支谷での開田や、周辺地域での大がかりな開田に伴なう必要性があったからと考えたい。その時期は、成塚、西長岡周辺に限って見れば、平安時代末期以降を考えておきたい。

八王子丘陵と、金山丘陵に接する低地帯は旧[4]綾[5]瀬川によって生じたとされており、大間々扇状地形中、最も大きな谷底平野となり、新田郡[6]笠懸町[7]阿[8]左[9]美沼のあたりまで達している。その低地帯を水田適地として開発したためか、規模の大きな古墳が5世紀後半頃から、この低地帯に面して築造されはじめ、古墳時代後期の階段には、大間々扇状地形中最も文化的な躍進を遂げ、その後の段階にも大きく影響をあたえている。次にそうした地域首長墓級を見ると5世紀代の前方後円墳に太田市[10]鳥山地内に鶴山古墳、[11]鳥[12]崇神社古墳、[13]亀山古墳がある。第7図のように本遺跡と近接してある。鶴山古墳は、墳丘全長約60m、周濠幅13～15mで、後円部径約30mを測ることができ従来の総長約100mをいく分下回る。主体部は昭和23年に群馬大学によって墳頂部から竪穴式石室が発見され、[14]頭[15]鎧付短甲はじめ短甲3、冑2、石製模造品、皮製盾などの出土があり、


太田市
西長岡
長岡
公園建設中
金井
強戸
鶴生田
脇屋
新野町
新野川
成塚住宅団地遺跡
成塚石棺遺跡
地理院「上野城」・「駒生」　1：25,000

第4図　周辺遺跡分布図

番号	名称と種別	時代
1	西長岡天神山遺跡　生活址	
2	西長岡宿古墳群　墳墓	古墳
3	西長岡横塚古墳群　墳墓	古墳
4	菅塩祝人古墳群　墳墓群	古墳
5	西長岡東山古墳群　墳墓群	古墳
6	菅塩西山古墳群　墳墓群	古墳
7	古墳　墳墓	古墳
8	古墳　墳墓	古墳
9	古墳　墳墓	古墳
10	古墳　墳墓	古墳
11	御嶽山古墳　墳墓	古墳
12	北金井東浦古墳群　墳墓群	古墳
13	菅塩山崎古墳群　墳墓群	古墳
14	駒形神社埴輪窯跡　窯跡	古墳
15	大鷲大平古墳群　墳墓群	古墳
16	大鷲鶴穴古墳群　墳墓群	古墳
17	成塚向山古墳群　墳墓群	古墳
18	大鷲向山古墳群　墳墓群	古墳
19	上強戸古墳群　墳墓群	古墳
20	萩原館跡　生活・城塞址	中世
21	二ツ山1号古墳　墳墓	古墳
22	二ツ山2号古墳　墳墓	古墳
23	成塚古墳群　墳墓群	古墳
24	成塚駒荊山古墳　墳墓	古墳
25	寺井廃寺跡　寺跡	奈良・平安
26	寺院跡又は城館跡　寺跡・城塞址	奈良平安～中世

番号	名称と種別	時代
27	寺井古墳群　墳墓	古墳
28	天良七堂遺跡　官衙	奈良・平安
29	集落　生活址	
30	寺裏遺跡　古墳　生活址・墳墓	古墳
31	寺山古墳　前方後円　墳墓	古墳
32	生産址・他　生産址	古墳
33	古墳　墳墓	古墳
34	製鉄址　生産址	平安・鎌倉
35	藤五郎塚古墳　墳墓	古墳
36	亀山古墳　前方後円　墳墓	古墳
37	鶴山古墳　前方後円　墳墓	古墳
38	太田市八幡遺跡　生活址	奈良・平安
39	笠松遺跡　生活址	縄文～奈・平
40	松尾神社古墳　墳墓	古墳
41	生品村第9号古墳　墳墓	古墳
42	上根遺跡　生活	古墳
43	上新井遺跡　生活	古墳
44	島崇神社古墳　墳墓	古墳
45	島山城跡　城・館	
46	堂原遺跡　生活	弥生～古墳
47	オクマン山古墳　墳墓	古墳
48	釣堂廃寺　寺跡	中世
49	中溝遺跡　生活址	古墳
50	深町遺跡　生活址	古墳
51	集落　生活址	縄文
52	三枚橋南遺跡　生活址	縄文～平安

5世紀代の遺物の組み合せを持つことで知られる。島崇神社古墳は、現在は後円部を残すのみで、前方部はまったく削平されてしまっている。昭和48年の墳丘の実測調査の際、くびれ部の左右に中島の存在が推定されるようになった。規模は墳丘推定全長約70m、後円部径約40mを測り、埴輪、葺石の存在が知られ、中島の祭祀的機能から5世紀代の築造が、主体部には竪穴式系石室が推定されている。中島について既に富岡牛松が「金山を囲む前方後円墳(上)」『上毛及上毛人第226号』1936に示しておられ、昭和11年時に指摘された点は重要である。亀山古墳は前方部が削平化されている。墳丘実測による規模は欠損部が多いものの墳丘全長58m前後が推定され、後円部は30.5mほどが測知されている。葺石と古様の埴輪の存在が知られる。6世紀から7世紀初頭頃までを見ると、新田町天良所在のニッ山古墳1号墳、2号墳、北接の藪塚本町に西山古墳が存在する。ニッ山古墳1号墳は慶応大学が昭和23年に墳丘の発掘を行ない、鞍・さしば・鞆などの器材、鳥・獣などの動物埴輪、人物、家形埴輪などと葺石の存在が知

市町村名	古墳数	前方後円	方墳	上方下円	円墳	陵墓参考地・他	計
新田郡							
太田町	九〇				八五		八三
尾島町	七七				六九		一三
沢田町	二〇				一七		一二
世良田町	五五	一			四九		一
木崎町	二	六			二	一	一
室奈村	九	一			五六	一	一
島之羅村	五	三			五七	一	一
強戸村	六六	八			一八〇		八
生品村	一四	三					三
藪塚本町	八	二			七		二
綿打村	一	一			三		一
薮塚本町	二七	二			二三	二五	二二
笠懸村	一	四			九		一
計	八三	五四	一	一	七三八	三八	七三

上表は昭和13年に実施された古墳一斉調査の報告である「上毛古墳綜覧」「群馬縣史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯」(群馬県)1935中の集約数値である。県下の総数8,423基を数え、調査期間内で未究地域の想定を加えると総数10,000基を上まわるとされている。当遺跡は旧強戸村にあり、西に旧島之羅村が、さらにその北延長に生品村が位置している。その三村を合ると計251基となり、多数の墳群があったことがわかり、さらに新田郡内でも、この周辺に古墳の集中があった点が窺える。藪塚本町に実数が多いのは7世紀代を主とする集中である。

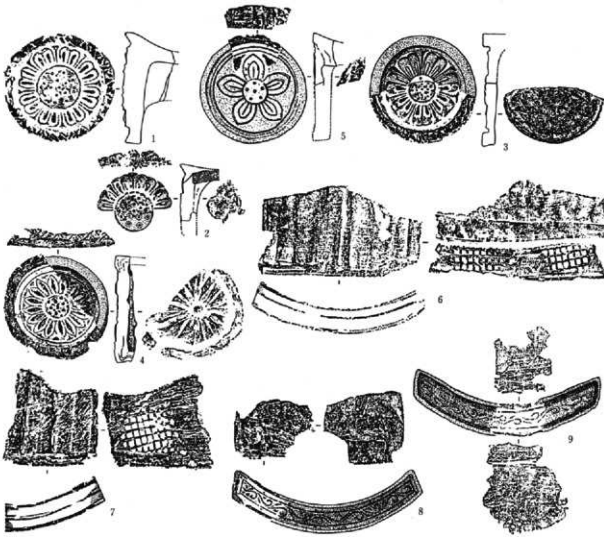
生産基盤との関係からは、それらは、八王子丘陵と金山丘陵の西側の低地に面した低台地上に主として分布があり、明治に岡登用水が通されるまで前代に耕地利用があったことを推測させる。

られる。規模は、墳丘全長74mに約18m幅の周堀が巡る。後円部中段には南に向けやや規模の大きい横穴式袖無形石室が開口する。二ツ山古墳2号墳は1号墳に近接し、規模は墳丘全長45m、後円部径32m、さらに約10m幅の周堀が巡る。『上毛古墳総覧』によれば明治21年に石室は開口され長21尺であったという。両墳とも6世紀終末から7世紀初頭と推定されているが、埴輪類は形象類も多く、埴輪造形表現が盛んであった6世紀終末以前を窺わせる。西山古墳は、丘陵利用の30m級前方後円墳で、後円部に長さ4.1mの横穴式両袖型石室が開口し、石室形態から最終期の前方後円墳と捉えられている。北山古墳も藪塚本町にあり、墳丘は丘陵利用の径約20mの円墳で、長さ6.3mの両袖型石室が開口している。石材は藪塚石と称される凝灰岩の切石積で、被葬者は小地域を管掌した首長級もしくは後代の郡司層級を生み出す背景と有縁であったのであろう。

これらの古墳についての総括を古墳研究の梅沢重昭は『群馬県史資料編3』「解説」1981の中で「蛇川上流の金山西方地区には、群馬県地方で最も古い様相を伝える前方後円墳の八幡山古墳、また少し位置が離れるが、東毛第二の規模を誇る5世紀前半期の前方後円墳宝泉茶臼山古墳がある。鳥山地区には鶴山古墳、亀山古墳、鳥崇神社古墳などの五世紀後半から6世紀前半にかけての前方後円墳が存在し、この地区の一部、上強戸には初期の様相をうかがわせる前方後円墳の寺山古墳、新田郡新田町天良に後期の前方後円墳の二ツ山古墳があって、東毛地域における有力場所であったことをうかがわせる。新田郡域でその最も北に位置する前方後円墳は新田郡藪塚本町西山古墳である。これは東毛地域における最終期の前方後円墳の1つであり、小地域圏を形成する古墳群の中核的性格をもって位置している。また、この地区の群集墳の発達は、大島から長手、鵜生田にかけての金山西麓の丘陵地や、大鷲、北金井から新田郡藪塚本町湯ノ入にかけての八王寺山塊の西南側から西側に連なる丘陵地帯、今の東武鉄道赤城線の通る成塚、街道横付近の大間々扇状地縁辺の高燥地帯に分布している。また、大間々扇状地末端に発達した沖積平野を背景に、その周辺の低台地上には由良、脇屋、藤岡久、細谷、下田島などの北に群集墳の分布が見られる。さらに新田郡新田町上田中にも、鈴鹿、馬具類を出土した兵庫塚（綜覧新田郡編打村十五号）を中核に、群集墳の分布が認められる。」と古墳研究の蘊蓄を注いだ解説を行っている。

7世紀後半頃から奈良時代の周辺遺跡の状況は、前代の小地域における内的発展を受け継ぎつつ律令制の時代に向け内的発展をとげる状況がみられる。その頃についてこの周辺地域の調査を多く手がけた須田茂「入谷遺跡Ⅲ」（群馬県新田町教育委員会）1987によると「**新田郡の領域と郷**　新田郡は、その領域としては北東を金山・八王子・鹿田山の低丘陵とを結んだ線、西を早川および岡上用水路、南を利根川で区画された南北17km、東西12kmほどの三角形状を呈す。郷は、新田・淨野・石西・祝人・淡甘・駅家の六郷である。その推定地は新田郷、駅家郷が郡中央部東寄り、淨野郷が郡南域、石西郷が郡南東域、祝人郷が郡北東域、淡甘郷が郡西域である。

寺院跡と官衙跡　新田郡における古墳寺院としては、まず、太田市天良・寺井に所在する寺井廃寺があげられよう。本寺院跡は伽藍配置は不明であるが、軒瓦として5ないし6種があり七世紀後半から10世紀に及ぶことが知られる。創建期瓦は川原寺式の複弁八弁文軒丸瓦である。群馬県東部域の最古期に位置づけられ、新田郡司クラスの豪族の氏寺に比定される。寺井廃寺以外の寺跡は6か所ほどがあげられる。そのうち新田郡新田町花香塚に所在する梨木遺跡は群馬県域でも類例の少ない特徴的な瓦を出土する。平瓦は凸面に斜格子叩きが重ね打ちされ凹面はナデ整形され、丸瓦の凸面凹面ともナデ整形され、八世紀前半から中頃にかけた年代でとらえている。梨木遺跡外の5遺跡は台ノ原遺跡（新田郡新田町藪塚本町杉塚）・釣堂遺跡（太田市脇屋・新野）・源六堰遺跡（新田郡新田町下田中）・中江田本郷遺跡（新田郡新田町中江田）である。この5



第5図　寺井廃寺跡既出土瓦　1：5（木暮仁一氏資料）

寺井廃寺遺跡

寺井廃寺は当遺跡の北西約500mの低台地上にある。現在、宅地化が進み、寺域ほか諸遺構の痕跡を追うことはできないが、遺構・遺物は地元で、同廃寺の保存に力を注がれた木暮仁一氏により「寺井廃寺について」「上州文化№50」1992で具体的に知らされ、瓦積基壇化粧を思わせる瓦構、化粧石材を思わせる凝灰岩の切石が強戸小学校の南接地に、既出瓦の集中個所も同地であることなどを指摘され、中軸諸堂位置の推定をしておられ、貴重な私見である。この寺井廃寺は、土塔木、金井、山王廃寺と並び諸堂を配した県内で数少ない大寺院としても知られる。その周辺は尾崎喜左雄「群馬県新田郡寺井廃寺址」「日本考古学年報２」1948があり、それ以降に、須田茂「寺井廃寺」「群馬県史資料編２」（群馬県）1987が新しい。その建立創意について、須田茂は「遺跡の性格」「入谷遺跡Ⅲ」（群馬県新田町教育委員会）1987の中で「新田郡司クラスの豪族の氏寺に比定される。」とし氏寺としての建立を、それに対して木津博明は「歴史的環境」「上野国分僧寺・尼寺中間地域８分冊中の第３分冊」（財群馬県埋蔵文化財調査事業団ほか）1988の中で「壬申の乱以後台頭した大野氏を通じて〝官寺〟としての性格を具備し建立されたことが類推される。」と特定されている。大野氏とは大野朝臣東人に係わる氏族をさしており「官寺としての性格を具備」という点は須田は古代新田郡の主体官舎にあてた近接の天良七堂遺跡（「昭和30年の発掘調査によって、六間三間の総柱式の礎石建物一棟が検出された。本遺跡は南東棟であって、多量の炭化米を伴なうことから官衙の正倉とみられている。」須田（前掲による）の位置関係や推定東山道が近接すること、さらに周辺に上野国分寺式瓦の既出遺跡が５遺跡以上も存在しており、８世紀代の周辺一帯は官の影響が極めて濃厚に存在する地域であったとすることができ、木津のいう官寺としての性格の具備はそうした地域の内的視点から見て妥当性がある。それらの位置関係は第３図を参照されたい。

既出瓦は強戸小学校保管資料（前掲「日本考古学年報」所載瓦）と木暮仁一氏が収集された平瓦20におよぶ資料とが主体を占める。鐙瓦には中房の大きさの異なる二笵種以上の創建段階面違鋸歯文鐙瓦（第５図１・２－７世紀後半）、複弁七葉蓮華文鐙瓦（第５図３－７世紀後半）、細弁菊花文鐙瓦（第５図４－８世紀前半）、上野国分寺式の単弁五葉鐙瓦（第５図５－８世紀中頃）などがあり、宇瓦には有段複三重弧文宇瓦（第５図６－７世紀後半）、曲線顎三重弧文宇瓦（７世紀後半）、二種の上野国分式銅行唐草文宇瓦（第５図７・８－８世紀中頃）などがある。当遺跡でも、第93図のとおり男瓦があり製作について回転力（自走能力）のある撫糸痕が見られ、それは面違鋸歯文鐙瓦の男瓦部と共通する手法のため７世紀後半の所産で寺井廃寺からの搬入物と考えられる。この薮塚台地の集落に起居した人々はおそらくそびえ立つ堂塔の偉容に日々接していたにちがいない。

寺院は軒瓦として上野国分寺式の単弁重五弁文軒丸瓦と右偏行唐草文軒平瓦をもち、瓦塔も保有するらしいことが知られつつある。このうち台ノ原遺跡は発掘調査によって集落内に営まれた瓦葺き掘立柱式の単一堂宇様の遺跡であって、その堂字内に瓦塔が安置されていたことが知見された。年代は八世紀後半頃である。梨木以下の6寺院は寺というよりむしろ草堂・仏堂というべきものであって郷長クラスの有力者層の氏寺的性格を有するものと見なされる。以上の寺跡を郷との関係でとらえると、寺井廃寺、上野井遺跡が新田郷、駅家郷、中江田本郷遺跡が滓野郷、釣堂遺跡が石西側、台ノ原遺跡が祝人郷、源六塚遺跡、梨廃木遺跡が淡甘郷となろう。これをまとめると、新田郡においては七世紀後半代に郡司クラスの豪族層によって寺が造られ、八世紀代に郷長クラスの有力者層によって小規模な寺（仏堂）が造営されたと推測される。

つぎに、官衙的遺跡をみたい。その事例は、入谷遺跡と天良七堂遺跡の二遺跡がある。ここでは後者にふれたい。天良七堂遺跡は太田市天良に所在する。昭和30年代の発掘調査によって、六間三間の総柱式の礎石建物一棟が検出された。本遺跡は南北棟であって、多量の炭化米を伴うことから官衙の正倉とみられている。なお、本遺構の礎石は八王子山系の凝灰岩の割石を石材とするが、白色凝灰岩の上面に柱座加工のある礎石が南方100mほどの地点から出土し他の礎石建物の存在も確実視されている。

東山道と新田駅　上野国は東山道に属し五駅がおかれたが、新田郡内には新田駅が設置されていた。東山道の径路は延喜式のそれは都から陸奥国へ達し新田駅はその通過地であった。しかし、宝亀二年（771年）以前は新田駅で茂蔵国へ向う支路が分岐していた。すなわち、新田駅は分岐路にあたる駅であるため自ずその所在地は限定されるものとみられる。

以上、新田郡の歴史地理環境をみてきた。この中からは入谷遺跡と天良七堂遺跡は新田郡衙あるいは新田駅家のいずれかにあたるであろうと思われる。そして郡衙と郡司の氏寺は近隣に並存することが多々あるとされていること、及び東山道との関連などから、現状では天良七堂遺跡を郡衙にあて、入谷遺跡を駅家にあてておくのが穏当と思われるのである。」と古代瓦に長じた須田の説明であった。この地点から以降、新田郡内で大形掘方を設けた掘立柱建物跡が発見される遺跡が増加している。特に新田町村田境ケ谷戸遺跡[6]からは建物跡のほか唐三彩陶枕・円面硯が、太田市天良七堂遺跡では礎石建物群・掘立柱建物跡や炭化米出土の大溝が発見され、新田町下新田遺跡[7]、同市曽通遺跡[8]、同村田境ケ谷戸遺跡[9]から古東山道に推定されさた道路跡ほか道路遺構が発見されている。こうした状況の中で、須田のいう入谷遺跡は東山道に至近のため駅としての推定があるが、藤原宮跡以前の段階の瓦や倉庫様の総柱基壇礎石建物、瓦塔の存在から寺跡と考えられ、7世紀後半から8世紀代にかけての新田郡の動向には県内でも注目すべき点がある。

生産址の調査は、太田市長手・太田蒿太郎Ⅰ遺跡[10]で須恵器窯跡が支郡単位で、太田字長手口山去須恵器窯址[11]においても同期の一支群単位の確認がなされ、太田金山窯跡群中の窯跡が金山丘陵北東～東域ばかりでなく、南西部の一角でも知られるようになった。埴輪窯跡は八王子丘陵の南側麓部にある駒形神社埴輪窯址[12]の集積場の調査が行なわれ、円筒埴輪、形象埴輪基部150以上の出土があった。製鉄遺構は、9～10世紀代の製鉄跡が金山丘陵裾側麓部で多くの発見例がある。その多さの現象は、現新田郡北部に上野国分二寺に対しての主体供給瓦屋であり、展開期を8世紀とする笠懸窯跡群[13]が存在している。この後古代における熱処理技術が製鉄へと移行したのかは不明ながら、9・10世紀に金山丘陵において製鉄が活発に行なわれ、県内において極所集中する数カ所のうちの一つであり、新田郡の性格の一側面も示していると考えたい。

奈良時代における情景を示す例に「萬葉集」東歌上野国二十五首中の三四〇八・三四三六がある。

「三四〇八　新田山ねにはつかなな吾によそりはしる見らしあやにかなしも

三四三八　しほとほふ小新田山のもる山のうち枯せななとこはにもがも」。とある。土屋文明『萬葉

集上野国歌私注」1944によれば新田山は新田郡地方の山とされ、その説明を「新田は、神の贄たる田、新田山はその山であるから神の山と云ふべきであろう。金山の連山は何處を見ても、例えば草山に松の疎らな一峯にしても神の山と感ぜられるのである。」とあり、神の山とされた点は、新田郡内の古代の郷名の一つに祝人郷の存在があり、関連の可能性として重要であろう。この後、中世には、新田氏、岩松氏などの展開があり、『新田町誌』[19]・『群馬県史』[06]・『太田市史』[03]など参照されたい。

(1) 富田敏氏（太田市教育委員会）に伺った。
(2) 岡田陽夫「新田郡の条里」『群馬県史通史編2　原始古代2』1991
(3)「岡登田水」『角川日本地名大辞典　10群馬県』1988によった。
(4)『群馬県史資料編3原始古代3』1981
(5) 尾崎喜左雄「群馬県太田市鶴山古墳」『日本考古学年報1昭和23年度』1951
(6) 清水潤三「群馬県新田郡二ツ山古墳」『日本考古学年報1昭和23年度』1951
(7) 天笠淳一「七堂遺跡」『太田市埋蔵文化財発掘調査年報3』（太田市教育委員会）1993
(8)「下新田遺跡」（下新田遺跡発掘調査団・新田町教育委員会）1992
(9)・(10)『境ケ谷戸・原宿・上野井II遺跡』（新田町教育委員会）1994
(11)「高太郎I遺跡」『年報13』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業系団）
(12)「長手谷遺跡群」『西内遺跡X』（太田市教育委員会）1994
(13)「駒形神神墳輪窯址」『年報7』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988
(14) 綿貫邦男・木津博明「新田郡笠懸町山際採集遺物」『研究紀要8』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1991
(15)『新田町誌第1巻　通史編』（新田町）1990
(16)『群馬県史通史編3　中世』（群馬県）1986、『群馬県史通史編1　原始古代1・2』1990
(17)『太田市歴史料編　中世』（太田市）1986

2、蛇川河川改修に伴なう既調査と関連遺跡調査

本項では、既発掘調査成果として蛇川河川改修に伴う発掘調査として『太田市八幡遺跡』・『成塚石橋遺跡』・『成塚石橋遺跡II』を、周辺既調査として『成塚住宅団地遺跡I～III』・『成塚稲荷神社古墳』について紹介しておきたい。

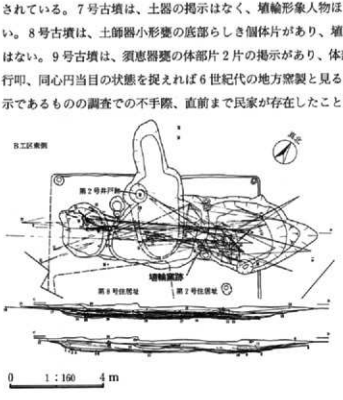
『太田市八幡遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会）1990は、本文146頁、挿入図104葉、写真図版38頁である。調査地は太田市大字鳥山（とりやま）字八幡にあり、蛇川河川改修工事により、昭和48年に3600㎡の対象範囲のうち600㎡の拡張が行なわれ、7世紀～9世紀の住居跡が総計24以上、掘立柱建物跡7、井戸跡3、長方形の穴跡12以上、蛇川前代の溝跡など溝6以上などがあった。特に、蛇川前代と推定された水路跡SD01は、上幅1.4m、深さ30～35cmを測り、自然河川を改修しての蛇川用水を遡ぼる前代の溝跡が推定された点は注目される。また、奈良時代頃の住居跡とその頃前後と推測される掘立柱建物群とは、集落の枢要部を思わせ、武井廃寺至近の場所の調査例として重要である。

『成塚石橋遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会）1988は、本文242頁、挿入図198葉、写真図版56頁である。調査地は太田市大字成塚字石橋にあり、蛇川河川改修工事により、昭和61年3月から昭和62年2月～同年6月に4000㎡が調査された。5世紀中頃から9世紀後半の住居跡105、穴跡72うち長方形約30、溝跡22、井戸跡5などの遺構が発見された。集落は断え間なく継続したらしく、北東側の成塚住宅団地遺跡に続き、特に住宅団地内で発見されているカマド未設の5世紀の環濠集落と同期の住居も分布し、カマド付設、直後の時期の住居が流路沿いに発見されている。整理担当であった小島敦子は、大間々扇状地の湧水を利用した農耕を生産基盤として推定している。調査された溝のうち1号溝は、最大部で20.8m、深さ0.9～0.4mを測り、堆土中に12世紀初頭頃に降下した浅間山B軽石（As－B）の順層が存在したという。堆土からの所見は侵食と堆積をくり返した自然流路とされた。17号溝も幅広の自然流路跡で、堆没土による過程の観察から1号溝の下流延長上の溝跡と推定された。As－B以前の自然流路跡の発見であるが、深さの規

模は平安時代頃であるらしいことが土層断面図から推される。以前の流路については、20m余の幅の中で、もしくはそれ以上であったようにも見える。いずれにせよ奈良・平安時代頃のこの流路跡は浅い点に特徴があり、太田金山・八王子丘陵の第三紀層の豊富な湧出水量が加っているとは思えないこと、金山石と称される角礫が写真中には見えないことから扇状地形で形成された藪塚台地側の貧水を思わせる流路跡である。

『成塚石橋遺跡Ⅱ』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会）1991は、本文252頁、挿入図167葉、写真図版66頁である。調査は昭和63年７月～10月の間に3800㎡、平成元年10月～12月の間に1200㎡、平成２年４月～５月の間に1600㎡が行われ、整理・報告は、成塚住宅団地の住宅促進区域内の蛇川河川改修工事個所について実施された。遺構量は、古墳９、そのうち円形は２・４・５・６号古墳が、やや楕円形は３・９号古墳が、帆立貝は１号古墳が、方形は８号古墳が、不明は７号古墳があり、さらに楕円形の掘方を持つ１号円筒棺遺構がある。その位置は、前出自然流路の右岸沿いに連なるように発見された。住居跡は10棟跡の発見があり、右岸沿いの南端に接近、重複の６棟の存在がある。古墳はいずれも道路等で削平され、主体部は失なわれ、さらに昭和13年に実施された一斉調査による『上毛古墳綜覧』所収の古墳ではないという。

１号古墳は６世紀前半頃の土師器を含み、周掘から埴輪形象人物・朝顔形円筒・円筒などが発掘され、樹立が推定されている。２号古墳は、６世紀前半頃に見える須恵器・土師器を含み、周掘から埴輪人物・大刀・馬などと朝顔形・円筒などが発掘され樹立が推定されている。３号古墳は、土器の掲示はなく、埴輪片少量の出土があるものの４号古墳の埴輪と接合できた個体もあるため、旧時において埴輪の樹立はなかったようである。４号古墳は、６世紀初頭前後に見える土師器を含み、周掘から埴輪形象人物・円筒が発掘されたものの小片約100点ほどであることから部分的な樹立と推定されている。５号古墳は、土器の掲示はなく、周掘より、埴輪形象・朝顔形・円筒が発掘され、特に朝顔形は９基中最も大きい。出土が部分多出のため部分樹立かという。６号古墳は、土器の掲示はなく、埴輪形象人物・盾・大刀・朝顔形・円筒があり、樹立が推定されている。７号古墳は、土器の掲示はなく、埴輪形象人物ほかが少量あることから樹立について明言はない。８号古墳は、土師器小形甕の底部らしき個体片があり、埴輪円筒がわずかに発掘されているものの明言はない。９号古墳は、須恵器甕の体部片２片の掲示があり、体部での６＋α条の回転カキ目加飾、内・外の平行叩、同心円当目の状態を捉えれば６世紀代の地方窯製と見ることができる。埴輪円筒ほか３点の埴輪の掲示であるものの調査での不手際、直前まで民家が存在したことなどの理由により本来は埴輪の樹立があった



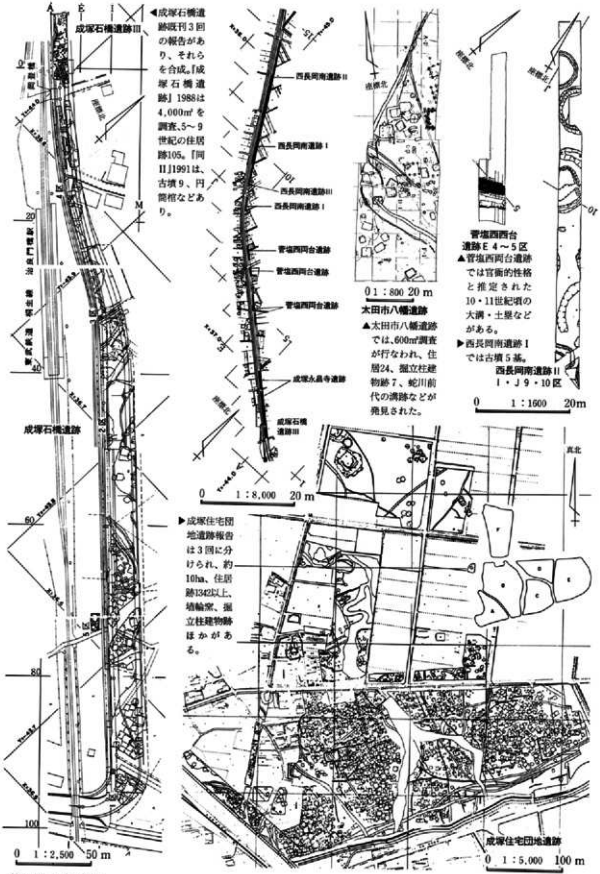
第６図　既調査図

左図は、『成塚住宅団地遺跡』（太田市教育委員会）1990により引用伺図した第１～３号埴輪窯跡図である。同報告によれば、調査面上で３号埴輪窯跡を確認し、その下層に第１・２号窯跡が存在したという。周辺の住居跡との関係は第２号住居跡を切り、第８号住居址、第２号井戸跡に切られるとある。

第１号埴輪窯跡は、全長11.9m、最大幅3.25m、焚口部不明、燃焼部隅丸方形、焼成部長円形、焼成部奥ほぼ円形とある。

第２・３号埴輪窯跡は、１号埴輪窯を切り、第２号井戸跡に切られる。全長5.8m、最大幅2.4m、焚口部不明。焼燃部延長3.5m、最大幅2.2mとある。

遺物類は後頁に示めすが、西長岡古墳群の展開は６世紀代前半にあり、埴輪使用古墳が多く含まれる。周辺地域の埴輪窯は第４図14駒形神社埴輪窯が知られ、太田金山古窯跡群の古墳時代須恵器窯跡群の展開期は６世紀後半にある。



◀成塚石橋遺跡既刊3回の報告があり、それらを合成。『成塚石橋遺跡』1988は4,000㎡を調査、5～9世紀の住居跡105。『岡II』1991は、古墳9、円墳などあり。

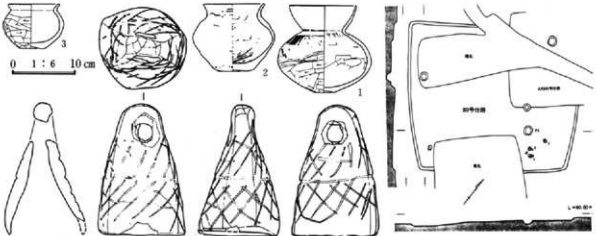
▲太田市八幡遺跡では、600㎡調査が行なわれ、住居24、掘立柱建物跡7、蛇川前代の溝跡などが発見された。

▲菅塩西岡台遺跡では官衙的性格と推定された10・11世紀頃の大溝・土塁などがある。

▶西長岡南遺跡Iでは古墳5基。

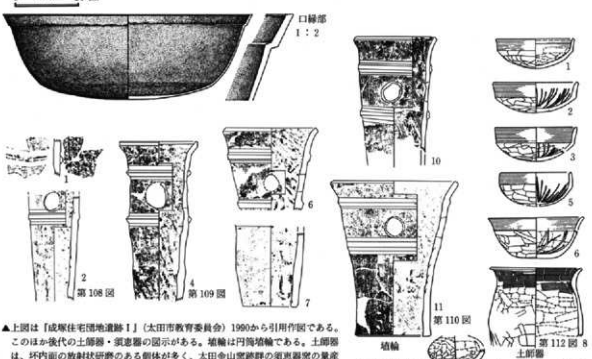
▶成塚住宅団地遺跡報告は3回に分けられ、約10ha、住居跡1342以上、埴輪窯、掘立柱建物跡ほかがある。

第7図　既調査図

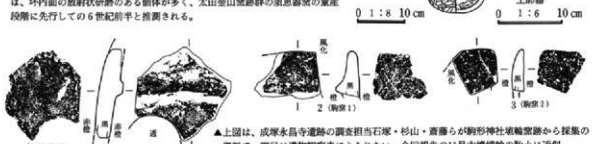


▼下図は『太田市八幡遺跡』1990による。鉄鍋5片の復元で出土遺構は浅い凹みか溝という。中世遺物か。

▲上図は『成塚石橋遺跡』（㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団）1988から引用作図。埴少遺物として土師の出土が89号住居からあった。同住居址は長辺5.3mの規模があり、床面直上から図示の土師器があり、5世紀前半という。土師は、堆積土中からの出土で叙格子の線刻があり、内面は削りが施され、雲母粒を含むとある。



▲上図は『成塚住宅団地遺跡Ⅰ』（太田市教育委員会）1990から引用作図である。このほか後代の土師器・須恵器の図示がある。埴輪は円筒埴輪である。土師器は、坏内面の放射状研磨のある個体が多く、太田金山窯跡群の須恵器窯の量産段階に先行しての6世紀前半と推測される。



▲上図は、成塚永昌寺遺跡の調査担当石塚・杉山・斎藤らが駒形神社埴輪窯跡から採集の資料で、題目は遺物観察表によられたい。今回報告の11号古墳埴輪の胎土に近似。

第8図　既遺物図

と推定されている。埴輪円筒棺は、円筒2本の口縁を合せ口とし、別個体の破片を、透しを除く小口部などの塞ぎの材料に用いていたという。溝跡は、前出の自然流路を旧河道と表現し、時期別に3区分の調査確認がされている。第1河道とされた段階は、As－Bで埋没最上面が覆われた以下を指すようで、8～10世紀前半までと見える土器類が掲示されている。第2河道は、それ以下の個所を指すようで、5世紀末頃～7世紀中頃までと見える土器類の掲示がある。第3河道は、それ以降の第1・2河道と若干、流路が異なるが重複個所も多く、5世紀～6世紀の遺物・縄文時代前～後期に見える遺物の掲示がある。こうして整理された状況から、前出の自然流路全体のおよその時期が示された点が重要である。このほか溝跡は16条が、穴跡は縄文時代から近世までの40穴が、井戸跡は4基が発見され、古代から新しいという井戸まであり、深さから上水用と考えられる。巻末には、パリノ・サーヴェイによる「成塚石橋遺跡鉱物分析報告」にAs－BP（浅間山一板鼻褐色軽石、約1.6～2.1万年填出）の存在の有無からみた基盤層上面成立時期に関しては、As－BPは発見されず、それ以上のテフラに由来する構成物が河川起源の土壌中に存在することが明らかとなった。「旧河道」については整理当であった中山茂樹・調査担当であった小島敦子が稿を寄せ、旧地形の復元に寄与している。周辺の「古墳について」は中山が労作の分布図を寄せる。出土した「馬形埴輪の成形について」は関邦一が、「群馬県における馬形埴輪の様相」と題して南雲芳昭が埴輪馬形の出土位置を県内例と比較しつつ「（前略）馬形輪埴自体が何んらかの意味を持つと考えざるを得ない。その一つは「権威の象徴」であったろう。」と結論づけ、蓋蓄の一端を示めす。

平成6年度調査の成果報告は、平成7年度に『西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡・成塚永昌寺遺跡・成塚石橋遺跡III』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)1996に刊行され、本文153頁、挿入図109葉、写真図版76である。そのうち西長岡南遺跡・菅塩西両台遺跡が平成6年度調査、成塚永昌寺遺跡は平成4年度調査、成塚石橋遺跡IIIは成塚石橋遺跡のうちの平成2年度に調査された河川改修部分で、住宅促進側所と異なる。西長岡南遺跡の調査は初年次で、主体部残存の良好な古墳の例はないものの、石室残欠を周堀の残存から6世紀前半頃の9基の古墳跡、溝跡、穴跡などが発見された。うち2基には、埴輪円筒・朝顔の囲繞が推定されている。「菅塩西両台遺跡」では、平安時代10世紀終末から11世紀に機能したと考えられる大溝跡（SD33）が調査された。北接して土塁跡と雨落状石組跡が調査され、平安時代後期の同種、同規模の遺構は、県内では、例数微弱であり、それらは官衙関連の遺構と推定された。その内郭部では、同期の遺構は発見されず、SD33に対応の大溝の発見も追求されたものの、発見されていない。そのほか鍛冶関連遺物、中世～近世の遺構、中世井戸跡の発見がなされている。「成塚永昌寺遺跡」では、旧蛇川用水の河道路、古墳跡4基、穴路、風倒木痕跡が調査された。古墳は、河川で流出し、周堀底の痕跡の状態であり、小規模墳であった。出土遺物中に永昌寺関連を示唆する陶磁器片、鐘片などの出土があった。蛇川乱流の一端が示めされている。「成塚石橋遺跡III」では旧河川際に、溝跡4条以上、穴跡11以上が発見され、近世以降の遺構跡が目立って存在し、遺跡IIから続く古墳の延長は認められていない。

『成塚住宅団地遺跡—成塚住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』（太田市教育委員会）1990・1991は、一冊の報告書が3分冊され、各々I～II-1・2の枝番名称が付されている。Iは10haのうち太田市教育委員会が実施した3.3（2.4）ha余りの報告で本文225頁、挿入図241葉、写真30頁である。IIは残りの6.7（7.6）haの成塚住宅団地遺跡発掘調査団の報告で群馬県企業局が委託した鵬シン航空写真が整理報告を行なっている。II-1は住居跡図およびその主要諸元内容を記載し、697頁中に1360葉余の挿入図があり、住居跡を除く別種遺構は18頁分である。II-2は遺構の写真図版編で423頁であり、これのみ1991年の刊行で、さらに後続の報告が予定されている。調査場所は、太田市大字成塚字又木・岩穴・明神東・明神前・諏訪・

下新田で、原因者は群馬県企業局で成塚住宅団地の造成に伴なう調査である。造成面積の24haの10haが文化財調査対象地となった。調査期間は、昭和61年４月14日～同年８月26日まで予備調査を実施し、引続き昭和62年３月31日までが太田市教育委員会調査分、残る7.6haについては群馬県教育委員会の指導により、群馬県企業局、太田市教育委員会が主体となって成塚住宅団地遺跡発掘調査団を発足させての調査分である。調査団分は群馬県企業業局から委託を受け、㈱シン航空写真が社員派遣から発掘調査報告までの業務を行なう。『成塚住宅団地遺跡Ⅱ－１』（群馬県企業局・太田市教育委員会）1990は、㈱シン航空写真による、本文編で697頁、挿入図約1360葉であり、大多数が住居跡で約40頁がそのほかである。『成塚住宅団地遺跡Ⅱ－２』（群馬県企業局・太田市教育委員会）1991は、写真図版編で423頁がある。次年以降、遺物編が予定されている。遺構跡140、円形周溝状遺構３、塚跡３、土壙797、古墳なし、埴輪窯なし、その他の遺構なしであった。『成塚住宅団地遺跡Ⅰ』にある太田市教育委員会調査分は、さらに住居跡74（縄文10を含む）、掘立柱建物跡２、周溝墓３、溝跡９、土壙未数量化、古墳１、埴輪３が加わる。古墳としては、市教育委員会調査遺構中に周溝墓があり、Ａ区第１号方形周溝墓は古墳時代初頭という。規模は、方台部長18.2～19.8mを測り、埋葬部は発見できなかったようである。Ｅ区第１号方形周溝墓は、４世紀頃の土師器甕片の出土が見え、方台部長11.5mを測る。Ａ区第１号円形周溝墓は、５世紀代に見える土師器鼓形の古出形状の個体の出土があり、径９～10.1mを測り、前出とともに埋葬部は発見できなかったようである。古墳はＡ区第１号墳のみの存在であった。同区１号円形周溝墓を切る。形状の明示はないが円形に見える弧成りで、推定径34mに周堀幅４mが測られている。小形土師器坏形・粗製同坏形・埴輪円筒の出土があり、坏類は５世紀末から６世紀初頭頃に見える。調査会分では、Ｂ区からＢＸ－１（円形周溝）とし、径4.33～4.14m、周溝内より坏の出土ありという。同区ＢＸ－２は、隅丸長方形気味に見え15.2～18.8mを測る。同区ＢＸ－４は隅丸方形気味に見え、径12.6m前後を測る。Ｄ区ではＤＸ－１は方形周溝に見え、１辺15.9mを測り、周溝南側埋没土より壺片出土とある。周区ＤＸ２は、歪んだ円形を呈し、長辺35.9mを測るという。以上、調査会分は、Ｂ区ＢＸ－１のみ円形周溝と遺構区分が示されていたが遺構種名の表現がないため、筆者が書中より抽出したもので、前出遺構数値とは不一致である。埴輪窯跡は、市教育委員会のＢ区より、３基が発見されている。第１号埴輪窯跡は全長11.9m、最大値3.2mを測る。第２・３号埴輪窯跡は、残存不良に見える。出土埴輪は、形象片を少しまじえ円筒を主とするようである。埴輪円筒の形状は、基部から突帯初段目までの長さのある個体、内面斜方向の刷毛目の個体・口縁端部外面での浅い凹みの存在など６世紀前半頃の埴輪に見える個体がある。用水との関連では、北北西から南南東に向け岡登用水が、南端を東北東から西南西に向け「改修される前の「新田堀」」も用地内に存在している。

「成塚稲荷神社古墳」『市内遺跡Ⅱ』（太田市教育委員会）1985は、成塚字岩沢788・789番地に存在し、昭和59年８月22日～同月28日まで調査が行なわれた。個人の宅地造成の際、トレンチ内で古墳周堀が発見され、それは、上毛古墳総覧強戸村146号成塚稲荷神社古墳の周溝であることが確認されたが墳丘規模を算出しうる調査面積ではなかった。出土遺物は６世紀前半頃に見える埴輪の口作である個体も含み、埴輪馬形を含むようである。なお同報告に岡部修一・猪越和彦による成塚古墳分布図の掲示があり、周辺古墳についての理解をより明らくしている。

第２篇　西長岡南遺跡Ⅱ

第１章　発掘と整理上の例言と凡例

発掘調査場所は、第９図のとおり、西長岡南遺跡・同Ⅱ・同Ⅲが入り乱れ、用地取得に係わる個所と年次計画個所による分断である。調査期日は平成６年９月１日～平成６年12月28日までの間、長さ430ｍ、4330㎡の面積を調査した。調査地区は、Ｈ８以北、K13区の間で、調査地番は、大字西長岡字南328･333･346・347・348・354・356・405・406・483地内で現状は桑園・畑を中心とする。調査担当は大木紳一郎（当団専門員）、斉藤英敏・黒沢照弘（当団調査研究員）である。主幹課は、当団調査研究部第４課・課長中束耕志である。

調査対象区は、Ｈ８以北から低地調査区までの240ｍの間は、古墳等の存在が予測されているため、現道と取得用地を含めた幅員約10ｍで調査を行ない、ほかK12･13区の低地調査区、Ｈ８区の13号古墳の調査区が、取得用地約５ｍ幅の調査であった。調査は、先ず試掘トレンチ（第１図）として第１～第４トレンチが設けられた。その結果、第１トレンチで12号古墳・溝が、第２トレンチでは、台地形成に係わる谷地、礫層と４号溝が、第３トレンチでは13・14号土坑の一部に相当する可能性のある穴跡が、第４トレンチでは遺構は、発見されていない。排土作業は土層を重機で排土し、ローム層上面が調査面とされた。

調査区名称は、成塚石橋遺跡Ⅲで使用された以前の座標ではなく、成塚永昌寺遺跡の平成４年度来の100ｍ毎の大座標を、その区画を20等分割、計400齣の小区からなる調査区呼称方法が用いられた。呼称法は、公共座標の100ｍ毎の数値と一致（第９図）東西にアルファベット（西に向けおくる）を、南北に数字（北に向い数字増える）を配し、小区の100ｍ毎の内を５ｍ区分した400齣の呼称は、大区の北東隅寄りを001とし、南西隅寄りに400が付されている。小座標の呼称点は５×５ｍの全体を表している。公共座標は第Ⅸ系中にあり、使用方位は座標北である、真北および緯度・経度と公共座標の関係は、第９図中の三角点下調査区中に点名－西長岡、種別－Ｃ、三等三角点があり、基準情報は次のようである。緯度36°20'20.986″、経度139°19'59.697″、Ｘ37742.54ｍ、Ｙ－44885.90ｍ、真北方向角０°17'46.8″（編者注座標北が東へ傾むく）、標高72.27ｍ、94年９月に移転があった既往歴をもつ。したがって本書の遺構図中の座標北より真北は約17'47″ほど右に傾むく。図中の水準値は標高値である。標高基準杭と座標杭との設置は測量業者委託で遺構図化についても多用されている。報告図版下は、現場記録保存図をコピー縮少したが合成の際は、縮少率に合せた基本方眼を作成し、それに誤差均等配分で作図し、正確により近い。しかし、全図としての扱いとなる１：300より縮少率の大きな図は整理の都合で、コピー縮少されたままの図を用いたため、補正しなかった図の方が多い。特に工事図１：500は経年変化と作成時のコピー合成が不正確であったため、太田市都市計画図１：2500を用い補正を計って作成してある。挿入図、版下は１：２で作成し、遺構トレース図は主として整理班が、遺物トレース図は、主として委託業者により作成してある。小縮尺図の平面・断面は整理担当のエンビットレースの再校訂をへて、インクトレースの工程を踏んだ。ただし現場図面の平面と断面の距離補正は行なっていない。それは、現場作図精度や作図態度が表現され、いわば精度指数を示めすためである。線表現は、遺構図の場合に実線は実態を、破線は、かくれ線・推定線を、細線は近・現代に近い遺構表現に、２点鎖線は調査区範囲境・トレンチ際に、１点鎖線は回転物や軸に相当する物件がないため土器中を除き使用していない。記号は、45°傾斜を意識し、それ以上急な場合にケバマークを、ゆるやかな場合に俗称ダラダラマークを用いたが、編者は調査参加していないため、現場写真を多用ながら、現場記入マークと照合した。土層断面図中の草マー

クは、畑地・桑園の上面を示めすべく記入した。等高線は、おおむね10cm間隔に主曲線・計曲線の区別なく用いた。間曲線（補助曲線）は、上・下高低値を知る必要から部分使用した。全図中の関係は、おおむね新・古の重さなりの表現としたかったのであるが、新・古記録のない場合も多かったので、土層断面中の掘り込み面位置や堆積土壌と火山灰から判断した場合も多かった。

遺物については、遺物観察の137頁で具体的に触れるが、遺構との係わりを含めて使用した番号は、挿入図版中の遺物番号、整理中の整理遺物番号、発掘現場での遺物取上げ番号の３種がある。各々は整合性を持たせて編集してある。挿入図版中の遺物番号は、図版中で用いた番号であり、各遺構単位で通番となっている。整理番号は、その通番々号脇に（整○○）と添記してある。現場の取り上げ番号は、整理番号との間に挟さむ形で表現してある。さらに遺構図中の番号は、現場取り上げ番号である。本書は、埴輪の出土状態から旧時の忌事や祭儀をうかがう可能性もあろうと考え、遺物の接合関係を遺物図脇に示めした。例えば、36頁第21図１は整理番号61で周堀№58に４片＋同№60に２片（中途略）＝46片と記入した。№58・60などは第13図の遺物番号中から探していただきたい。

遺構について、古墳平面は１：120、石室は１：20と１：40で、住居跡は１：60、溝跡は１：100で、穴跡は１：60、小穴跡１：80、風倒木痕跡は１：60、畑サク跡は１：100で表現した。図中で必要な凡例は図中になるべく記入するよう努めた。トーンの意味など図脇の添記を参照されたい。遺構図の縮尺は、正尺を作成しているので表現と異なる寸不足や過多は、印刷縮小が不正確な場合である。

土層断面図は、各遺構の掘り込み面や発見面となりうる個所が存在するためと土地利用状況の一端が示唆されるためである。土層注記は誤字を除き、なるべく原文のまま記載した。調査に参加していない編者にとって、現場所見に忠実でなければと考えるためである。標高で示めした水準値の基準ポイント位置は、標高値のmか0.5m単位で変更させて作成した場合が多い。断面図のうち、土層断面を除き、整理段階で新らしく作成した成り断面図は少なく、現場図化の成り断面図を重用した。ポイントマークは、５m座標交点を十字で、100m毎の大区も直線で表現し、その呼称法は大区はともかく、小区呼称は読者にとって理解困難と考えられるため各平面図中の５m座標交点脇に記入してある。断面図の水準マークは、現場図の位置を長くしたり、短くしたり、図版面の都合で変更してある。各断面の水準マーク上にある断面ポイント名称は、平面図と同一縮尺で作成した場合と、大縮尺で作成した場合とがあり、名称照合が困難と思えた場合には、平面図と同一縮尺で成り断面を作成し平面面図脇に添附した。ポイント名称は、平面図側にはA・A′と記入したが、断面図側にはAのみでA′の記入されるべき位置に、水準標高値を記入してある。そのポイント位置は、作図と版下作成の都合上A′・Aのようになっている場合があり、注意されたい。

縮尺標示は、遺構・遺物スケール上に記入してあり、遺構図は１：20の現場原図から起因する１：40、１：80のほかに１：100もあり、縮小率の高い場合は、都市計画図の１：2500を意識したため、奇異に感じられる縮尺もある。

遺構名称は、現場名称を尊重したが、遺物注記も接合関係の表現上、重要視したため遺物注記表現と遺構名称が誤なっている場合もある。例えば、11号古墳は、11号墳・11フンなどと注記では略され、本書中の注記表現もほぼそれに習って表現した。しかし、略し方で読者に判断できないと思われる場合は、152頁以降の遺物観察表中の出土欄で、その点を意識しながら補ないの表現をしてある。

遺構総数は、次章で一覧化してあり、略した例は、記録図不足の場合と、遺構名変更の欠番の場合である。

出土遺物は、編者が総てを実見し、それとともに139頁以下の一覧化を計った。遺跡中の潜在遺構や土地利用の変遷を知るための一助となれば幸いである。

第２章　発掘された遺構と遺物

以下の個別遺構説明は、古墳、住居跡については全数を扱い、溝跡、穴跡、風倒木痕のうち、近世以降と考えられる遺構については欠く場合もある。遺物は、出土の状態と遺物種を本章で扱い、遺物数量と観察は後章で扱いたい。なお遺構図仕様・凡例は18頁で触れたので略す。

このほかK13区において、旧地形の低地（開析谷）中に堆積した浅間山Ｂ軽石（As－Ｂ）層下の面、榛名山二ッ岳起源のHr－FAおよび浅間山Ｃ軽石（As－Ｃ）を目安とした面の調査が行われた。またK12区以南の台地上では、遺構は判然としなかったが、12号古墳以北西のＪ11区～Ｊ12区にかけ地山層であるローム層際において縄文時代前期の土器が出土し、５ｍ座標方格に則しての掘り下げ調査が行われた。それらを呼称するについて前出を低地側、後出を台地側として説明したい。

古墳（○号墳）　（第10～65図）

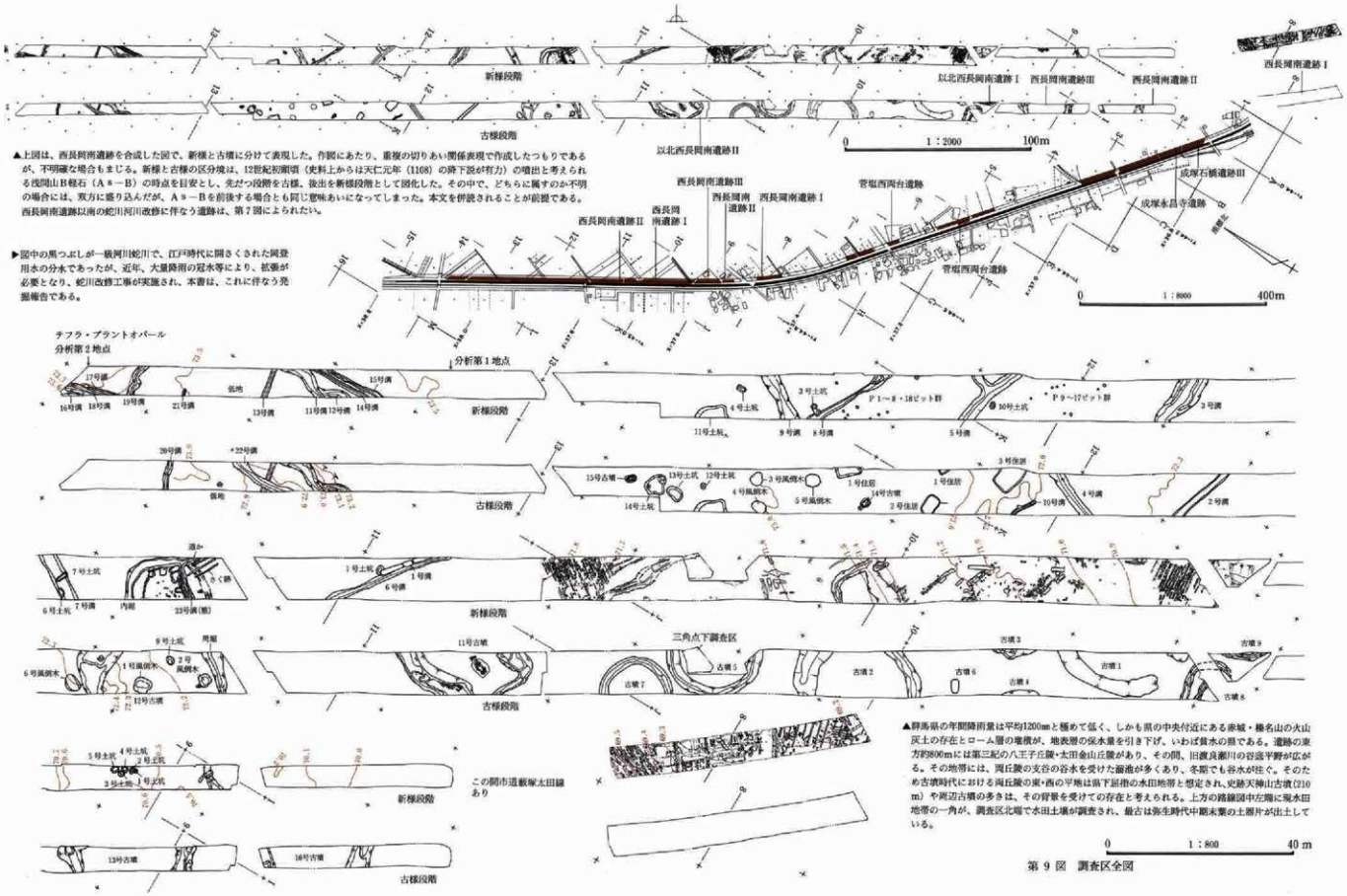
名称	位置	規模 長さ（長辺）	規模	規模 深さ	備考
11 号 古 墳	Ｊ10区	22.0。後円16.35。	4.1	1.08	帆立貝形前方後円墳。竪穴系石室。ガラス・鉄器。埴輪形象、朝顔、円筒使用。
12 号 古 墳	Ｊ11区	25.2。周堀含30.1。	4.4	0.86	円形か。葺石擬似あり。竪穴系石室か。埴輪少量使用か、朝顔・円筒あり。
13 号 古 墳	Ｈ８区	18.6。周堀含27.2。	4.32	0.34	円形か。大きく削平される。埴輪の使用は否定的。竪穴系石室か。
14 号 古 墳	K12区	石室1.47。	なし	なし	周堀発見されず。竪穴系石室。基部石材が残存。遺物の発見なし。
15 号 古 墳	K12区	石室1.13。	なし	なし	周堀発見されず。竪穴系石室。遺物の発見なし。

住居跡（○号住跡）　（第66～76図）

名称	位置	規模 長さ（長辺）と方向性	規模	規模 深さ	備考
1 号 住 居	K12区	4.83。	N39°30′W。	0.37	周溝、柱穴あり。焉瑞原材出土。土師器少量出土。４世紀。
2 号 住 居	K12区	4.32。	N85°E。	0.10	隅丸長方形。柱穴なし。出土遺物多量。土師器器台・高坏・壺・甕。４世紀。
3 号 住 居	Ｊ12区	6.05＋α。	N75°E。	0.17	隅丸長方形で削損り気味。柱穴なし。土師器高坏・甕・台付甕。４世紀。
4 号 住 居	Ｊ12区	2.20＋α。	N59°W。	0.26	隅丸気味。柱穴見えず。土師器器台・甕。遺物少ない。４世紀。

溝跡（○号溝）　（第77～88図）

名称	位置	規模 長さ（長辺）	規模	規模 幅	規模 深さ	備考
1 号 溝	Ｊ10区	28.7。	N53°W。	1.80	0.32	流水の痕跡判然とせず。出土遺物に鉄滓・土師器片あり、時期不明。
2 号 溝	Ｊ11区	14.0。	N83°W。	5.70	0.70	As-Ｂ純層の堆積。流水痕跡、推定水路跡。遺物なし。10～12世紀頃。
3 号 溝	Ｊ11区	15.2。	N71°W。	1.78	0.27	出土遺物に鉄製品あり。新しい時期の鉄製遺物多い。
4 号 溝	Ｊ12・13区	12.7。	N23°E。	2.40	0.33	滞水あるか。Hr-FA を含むとおり、古墳時代か。遺物に土師器片。
5 号 溝	Ｊ・K12区	16.9。	N76°W。	2.60	0.30	流水不明。遺物量やや多い。18世紀頃の陶器片を含み、近世溝か。
6 号 溝	Ｊ10区	6.65。	N49°W。	1.00	0.50	畑作に伴なう長方形穴跡の連続か。遺物量多く、昭和瓦を含む。20世紀。
7 号 溝	Ｊ11区	12.1。	N32°W。	3.4	0.45	滞水あるか。確認面に14・15世紀頃の軟陶鉢片があり、その頃の構築か。
8 号 溝	K12区	20.5。	N56°30′W。	2.35	0.35	滞水、流水不明。至近遺物はあるが直接遺物なし。近世含む以前か。
9 号 溝	K12区	11.4。	N40°E。	3.40	0.48	滞水、流水不明。遺物やや多く、近代土師質土器、磁器含む。明治以降。
10 号 溝	Ｊ12区	5.3。	N57°W。	0.64	0.10	滞水、流水不明。遺物やや多く、４、５世紀の土器を含み、古墳時代か。
11 号 溝	K13区	10.5。	N17°E。	2.43	0.22	低地側。水路か。As－Ｂ純層の堆積。土師器片の出土あり。12世紀前後の機能。
12 号 溝	K13区	7.1。	北西－南西	0.13	0.10	低地側。水路か。As－Ｂ純層。遺物なし。12世紀前後の機能。
13 号 溝	K13区	6.5。	N80°E。	1.10	0.10	低地側。水路か。遺物なし。近世を含む以前から12世紀頃。
14 号 溝	K13区	13.55。	N1°W。	0.90	0.35	低地側。水路か。遺物に近代軟質陶器が含まれ、19・20地紀。
15 号 溝	K13区	13.4。	N3°W。	1.00	0.30	低地側。水路か。遺物に近代軟質陶器が含まれ、19・20世紀。
16 号 溝	K13区	4.8。	N34°W。	未測	0.14	低地側。水路か。遺物なし。近世を含む以前から12世紀頃。
17 号 溝	K13区	10.02。	N16°W。	1.82	0.26	低地側。水路か。遺物なし。近世を含む以前から12世紀頃。
18 号 溝	K13区	6.8。	N17°W。	未測	0.21	低地側。水路か。遺物なし。近世を含む以前から12世紀頃。
19 号 溝	K13区	5.65。	N82°W。	1.82	0.38	低地側。想定水路。遺物なし。12世紀初頭前後～中世初頭。
20 号 溝	K13区	6.2。	N79°W。	1.18	0.15	低地側。想定水路。遺物なし。11世紀後半～12世紀初頭頃。
21 号 溝	K13区	1.65。	N80°W。	0.43	0.06	低地側。想定水路。遺物なし。近世を含む以前～中世か。
22 号 溝	K13区	15.2。	N6°30′W。	1.70	0.38	低地側。推定水路。土師器片多く漂白化。6世紀初頭頃。弥生土器細片出土。
23 号 溝	Ｊ11区	9.1。	南西－南東	1.30	0.16	平成８年整理で追加。近世以降か。



▲上図は、西長岡南遺跡を合成した図で、新様と古様に分けて表現した。作図にあたり、重複の切りあい関係表現で作成したつもりであるが、不明確な場合もまじる。新様と古様の区分境は、12世紀初頭頃（史料上からは天仁元年（1108）の降下説が有力）の噴出と考えられる浅間山B軽石（A s－B）の時点を目安とし、先だつ段階を古様、後出を新様段階として図化した。その中で、どちらに属すのか不明の場合には、双方に盛り込んだが、A s－Bを前後する場合とも同じ意味あいになってしまった。本文を併読されることが前提である。西長岡南遺跡以南の蛇川河川改修に伴なう遺跡は、第7図にふられたい。

▶図中の黒つぶしが一級河川蛇川で、江戸時代に開きくされた岡登用水の分水であったが、近年、大量降雨の冠水等により、拡張が必要となり、蛇川改修工事が実施され、本書は、これに伴なう発掘報告である。

▲群馬県の年間降雨量は平均1200mmと極めて低く、しかも県の中央付近にある赤城・榛名山の火山灰土の存在とローム層の堆積が、地表層の保水量を引き下げ、いわば貧水の県である。遺跡の東方約800mには第三紀の八王子丘陵・太田金山丘陵があり、その間、旧渡良瀬川の谷流平野が広がる。その地帯には、岡丘陵の支谷の谷水を受けた溜池が多くあり、冬期でも谷水が枯々。そのため古墳時代における岡丘陵の東・西の平地は第下層相の水田地帯と想定され、史跡天神山古墳（210m）や周辺古墳の多きは、その背景を受けての存在と考えられる。上方の路線図中左端に現水田地帯の一角が、調査区北端で水田土壌が調査され、最古は弥生時代中期末葉の土器片が出土している。

第 9 図　調査区全図

穴跡大形（○号土坑）　　（第93～97図）

名　称	位　置	規模 長さほか	規模 幅	規模 深さ	備　考
１号土坑	Ｊ10区	1.97。	1.27	0.31	６号溝より古い。耕作関連か。遺物少ないが近代軟質陶器あり、昭和か。
２号土坑	K12区	—	—	—	調査時に５号風倒木に改称。土師器片、縄文土器片あり。
３号土坑	K12区	2.38。	1.32	0.11	８号溝が古い。遺物なし。As－Bを混えるとあり、中世以降。
４号土坑	K12区	1.9。N0°30′W。	0.95	0.36	長方形穴跡。耕作関連か。遺物なし。時期不明。
５号土坑	Ｊ12区	0.55＋α。	0.72	0.38	遺物なし。掘り込みは耕作土直下層にあり、近世から中世を含む以降か。
６号土坑	Ｊ11区	1.56。 N71°W。	1.03	0.09	長方形穴跡。耕作関連か。遺物なし。近世から中世を含む以降か。
７号土坑	Ｊ11区	2.62。N25°30′W。	0.81	0.11	長方形穴跡。耕作関連か。遺物なし。近世から中世を含む以降か。
８号土坑	—	—	—	—	欠番。
９号土坑	Ｊ11区	1.93。	1.45	1.38	遺物は縄文土器片多く、縄文時代か。
10号土坑	Ｊ12区	1.38。 東―西。	1.02	0.23	遺物なし。時期不明。
11号土坑	K12区	7.15。北東―南西。	未調	0.52	上面As－Ｂを覆える埋土が上層にあり、埋土に５～９世紀の土師器片あり。
12号土坑	K12区	1.28。北東―南西。	0.84	0.12	土師器片少量あり。時期不明。
13号土坑	K12区	3.72。 北―南。	2.44	0.22	土師器片、埴輪片、縄文土器片あり。古墳時代か。
14号土坑	K12区	4.98。	3.78	0.23	土師器片多く、埴輪片はない。古墳時代か。

穴跡小形（Ｐ○・○号ピット）　　（第98～100図）

名　称	位　置	規模 長さ（長辺）	規模 幅	規模 深さ	備　考
Ｐ１	K12区	0.54。	0.52	0.24	底丸状。中世か。遺物なし。
Ｐ２	K12区	0.68。	0.44	0.40	底部分尖る。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ３	K12区	0.36。	0.34	0.10	底平ら。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ４	K12区	0.54。	0.52	0.44	底丸状。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ５	K12区	0.5。	0.46	0.40	底丸状。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ６	K12区	0.32。	0.30	0.28	底尖り。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ７	K12区	0.3。	0.28	0.32	底尖り。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ８	K12区	0.36。	0.3	0.30	底細り。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ９	Ｊ12区	0.4。	0.39	0.21	底平ら。土師器２片。標跡か。中世か。
Ｐ10	Ｊ12区	0.32。	0.30	0.21	底丸状。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ11	Ｊ12区	0.36。	0.32	0.35	底丸状。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ12	Ｊ12区	0.4。	0.32	0.46	底部分先細り。遺物なし。標跡か。中世か。
Ｐ13	Ｊ12区	0.33。	0.22	0.32	底細り。遺物なし。４号溝と重きなる。標跡か。中世か。
Ｐ14	Ｊ11区	0.26。	0.18	0.16	底細り。遺物なし。中世か。
Ｐ15	Ｊ11区	0.5。	0.36	0.18	底平ら。遺物なし。中世か。
Ｐ16	Ｊ11区	0.38。	0.35	0.30	底細り。土師器１片、中世軟質陶器鉢１片。14・15世紀か。
Ｐ17	Ｊ11区	0.62。	0.44	0.22	底平ら。遺物なし。中世か。

風倒木痕（○号風倒木）　　（第101～103図）

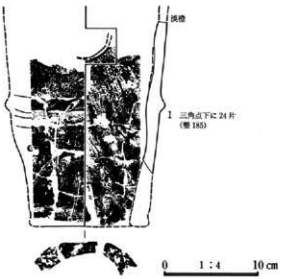
名　称	位　置	規模 長さ・倒木方向	規模 幅	規模 深さ	備　考
１号風倒木	Ｊ11区	3.8。 東	3.17＋	0.95	広葉樹か。遺物なし。
２号風倒木	Ｊ11区	2.76。 北東	2.36	1.05	広葉樹か。遺物なし。
３号風倒木	K12区	2.95。 北東	2.30	—	広葉樹か。土師器２片。
４号風倒木	K12区	3.25。 東	2.25	—	広葉樹か。遺物なし。
５号風倒木	K12区	3.15。 北東	2.80	—	広葉樹か。遺物なし。
６号風倒木	Ｊ11区	3.92。 南東	2.6	0.95	広葉樹か。土師器１片。縄文３片あり。

１、古　　墳

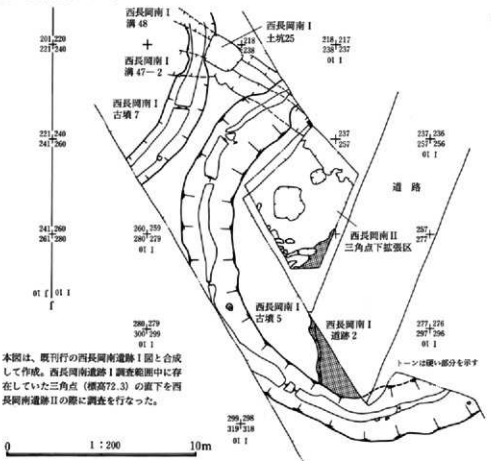
各古墳は、本来、同一台地上の古墳群として形成されたものの、蛇川河川改修事業の都合により、連続調査の行なわれたＪ10区以北西約375ｍまでの調査区とは別に、Ｊ10区より南西側約200ｍの場所でも調査が行なわれた。前者に11・12・14・15号古墳が、後者に13号古墳が存在する。さらにその間に位置する三角点下調査区では、平成６年度に調査された古墳５の一端の状況が知れた。台地端はK13区南半の15号溝を低位変換部とし、ゆるやかに立ち上った個所が北縁になるのに対し、南縁は市道藪塚一太田１号線を境に以南が下り、その下った個所にある平成６年度Ｈ７・８区の基面は水性堆積のローム層であった。

古墳５（第10・11図）

本墳は、平成６年度調査で蛇川河川改修拡幅員約10m中に西半分が発見され、概要は、墳形は円形と考えられ、東半の三角点を含む未調査地に墳形再考の余地があった。発見面での周堀を除く直径は18.0mで周堀幅は2.85～1.65m、深さ0.85～0.5mを測り、合計は径20.5m。埋葬施設は、発見されていないが、北接の古墳７の埋葬施設を含む関連の石材の可能性のある大石が穴跡SK25中に発見されている。遺物は埴輪類で、周堀中に集中していた。埴輪円筒や朝顔形を粗な状態で囲繞（いにょう）か、墳頂での囲繞が考えられ、復元程度は悪かった。築造の時代観は、周堀中位にHr－FPが入るため、６世紀前半の頃と思料された。こうした状況と結合する形で平成７年度調査に三角点下調査区の排土が行なわれた。調査は、2.5×2.5m、面積20m²弱である。その結果、主体部は発見されず、平成６年の西長岡南遺跡Ⅰの遺跡１、溝47－２の延長部分、近世以降と思える小穴跡などが発掘され、遺物に埴輪円筒がある。



第11図　古墳５遺物図



第10図　三角点下拡張区全図

11号古墳（第12～52図）

11号古墳は、発掘当初に設けた第1トレンチで周堀の一部が、拡幅員を含む約10m幅の全面拡張によりその広がりと規模等の確認に至っている。調査前は蛇川に沿う約4.5mの舗装道路部と東接に桑園が存在し、墳丘の痕跡すら窺えない状態であった。墳丘の削平化は、第二次世界大戦時を含む時期までの生品飛行場とその関連施設の設置に伴うとも東武鉄道建設によるとも聞いているが、古墳の個々では分からない。写真図版4の垂直写真には、周堀境の延長上に畑地と桑園との地境があり、墳丘痕のようにも見えるけれど、畑地化との因果は昭和30～40年代に行なわれた圃場整備事業の延長上に現耕作が行なわれており、必然性は薄い。

発掘調査は、舗装道路部、耕作土とその直下層まで重機掘削である。遺構の発見面高は、この段階で決定されてしまうが、耕作土直下層は除去されている。発見面は、耕作土上面より深さ約0.35mである。平面確認以下の掘り下げ作業は人力で行われている。作業過程は、平面確認など当初は周堀・竪穴系石室ともに同時進行で進められたが、最終的には、石室調査が後出している。

位置　J10－24～26・43～46・63～65・82～85・102～104・121～123・141～143、大字西長岡字南406と405－1の一部。標高は、桑園面上で約72.5m、調査面上で約71.15mである。

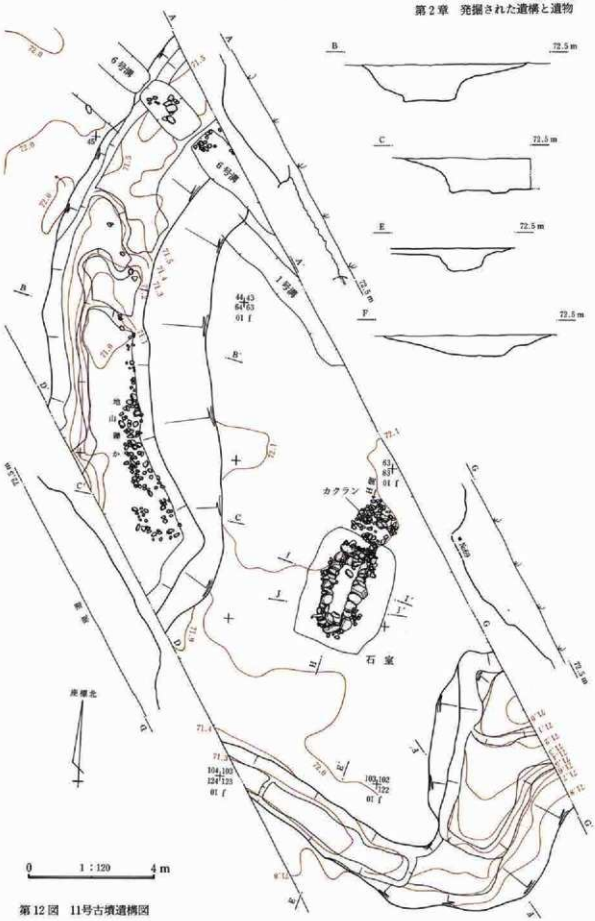
重複　墳丘側の北端に6号溝があり、土層断面により、6号溝が新しい。同溝に南西接して1号溝が存在し、新・古の確認はないが、6号溝に近接しつつ、方向性も共通であるため、耕作関連の溝と考えられ、11号古墳より後出の可能性が強い。竪穴系石室の北側に集石が接してあり、調査時にはカクランと称され、これも後出である。6号溝は、埋土中に集石のある個所と少ない個所があり、ことに墳丘側の南東壁面には多数の集石が記録写真にある。特に6号溝中からは、埴輪片が多く発見されている。カクラン個所にも埴輪片が多くあり、形象の破片が目立つ。

墳丘と規模　墳形は、帆立貝形を呈する前方部の短い前方後円墳で、上面は削平されている。規模は、北側周堀の墳丘側位置の捉え方によって数値に差を生ずるが、第14図、成り断面図B－B′間のB′より2.76mの位置にある周堀傾斜変換部を捉え、さらに主体部中軸とくびれ部との位置を併せ、最も近い正円形の円弧を求めると直径18.0～18.5mが最も近く、B′よりB′へ2.76mの位置が墳丘裾部と推測される。その裾部に対する考え方は、F－F′断面の墳丘側中段の変換部がそれに相当していると思料され、そのことにより、後円部には2.0m強の地山ローム層基段状面の削り出しが、前方部側部はF－F′断面に同様の変換部が、前方部前端部においてE－E′断面にそれがあり、各々墳丘側と直交しての測距からは0.7mがその幅として算出される。前方部規模は、前面幅推定10.2m内外、長さ5.65m、くびれ部間8.4mを測る。このように計測点を割り出し全長を算出すると、全長22.0m内外、後円部長16.35m内外、長方部長5.65m内外、中軸方位は座標北に対しN18°Eである。墳丘裾部の基段状平坦面の正確な規模は、旧表土である黒色土位置が問題の可能性があり、周堀中には、埋土として古出の黒色味の強い土壌の堆積があるものの、墳丘削平面上では、確認記録はない。墳丘築土削平の際、旧表土が残存していても、耕作により撹乱された可能性もさらに加わる。そのため先の、後円部で2.0m強、前方部側部と前方部前面の0.7m強の値は、旧状としてより大きな数値を加えて見込む必要があり、その数値を差し引いた数値が墳丘築土（厳密には旧表土の削り出しの法面を差し引く）に直結する値となろう。あえて確認されている墳丘裾部の基段状平坦面の数値を差し引いた規模は全長19.3m、後円部径16.0～16.5m、前方部前面幅8.8mである。周堀における墳土の崩落は、土層断面図によると土塊は少なく、土壌化しているため、幅広の基段部左証の一端と、墳丘はそれほど高くなかったと推測される。

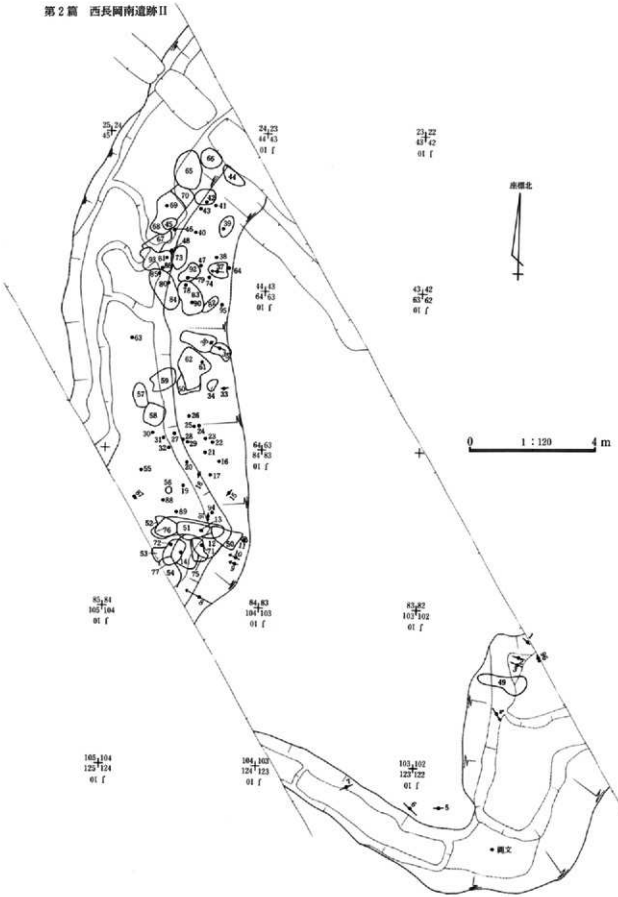
周堀ほか施設　周堀は、第12図の平面図を見るように、前方部前面で狭くなるものの前方部側部で幅広になっている。横断面形は、底側の形状が場所によって異なり、B断面では箱堀状を、E断面では底のやや角

ぱったU字状を、F断面では浅いU字状を呈し、作業所作の過程なり、ひいては計画から施行に至るまでを考える上で示唆的である。深さは第14図の横断面図を見るように、水準高72.5mを基にすると前方部両側部側で約−1.5m内外で、その深さに対する扱いを同じに計ろうとした意識が感じられ、前方部前面で約−1.1mとやや浅くなり、後円部側部中央付近の断面A−A′でも約１mと近似値である。このことは、採土量についてくびれ部が最大であり、前方部前面は少なく、後円部北東側もそれに次いで少ないことになる。周堀の埋土は、下位になるにしたがい墳丘側の急斜面を思わせる勾配であり、外界側は、よりなだらかである。埋土の最下位から下層にかけては、古墳の外的視覚観を失っていない段階であり、築造後の管理、修築が問われる段階でもある。その意味においては土層断面B−B′の埋土下方に不自然な形状が認められる。構築当初か直後という観点からは、土層注記番号10について、「粘質、ロームブロック主体。(一部地山)」とあるように、地山であるか判別に苦しんだ層のようである。それは、平成６年度調査の周堀の深い古墳２・５でも認められ、同墳では古墳の築造当初の整える形の、将しく整形の一端ではないかと思え、住居跡の床ほどではないが締りが少しあった。土層注記番号10は、土層断面B・C・D・Gに存在している。埋没土上層は、近世以降の土地利用の反映が示唆されるが、土層断面A−A′には右側に礫集積のある６号溝がかかり、As−A（浅間山A軽石−天明３年）と思われる土層を切る。土層断面B〜D・Gでも上層部には浅い掘り込みがあり、近世頃以降の土地利用の頻度の高さを思わせる。火山灰との係わりからは、土層注記中にAs−Aは前出のとおりであるが、As−B（浅間山B軽石−12世紀初頭頃）は、土層断面Aの注記番号３に順を少し欠いているようであるが「アッシュ小ユニット」とあり、土層断面B〜C・Dの注記番号４Bに「As−B純層に近い層。」とあり、土層断面Eの土層番号２に「やや砂質。層上部にAs−Bを含む。以下略」、土層断面下の土層番号１に「砂質。As−Bを含む。」とあり、往時にはAs−Bの整然とした堆積であったことが知れる。またその直下層は、多量の降下地帯である前橋・高崎市付近では黒味の強い粘性の土壌が存在し、この11号古墳の地においても、土層断面B・C〜Gの注記番号５に「黒。」、土層断面Eの注記番号３に「黒。」、土層断面Fの注記番号２に「黒。」とあり、共通の現象が認められる。Hr−FA（榛名山二ッ岳−６世紀初頭）は、土層断面B〜C・D・E・Fの土層注記に見える。この存在により、読者は、Hr−FAの堆積に先立って築造されたのでは、と思われるかもしれないが、各々純層で存在しているのではなく、パミス（軽石粒）の存在であり、下降前に周堀が掘られても、後に掘られても埋土中に混じる結果が生じ得るので、単純に築造年代には結びつかない。Hr−FA記入の意図について調査担当者の大木紳一郎に伺ったところ、Hr−FAは主体はシルト質の火山灰であるが、軽石粒をまじえており、それ以降に降下したHr−FP（６世紀中頃）の軽石粒とFAとの区別は困難でもあるため、後に築造年代に直接的な影響をあたえないよう名義FAを使用したという。そのため本書中の西長岡南遺跡Ⅱ記述ではFP粒を含む可能性もありとして考えられたい。また平成６年の西長岡南遺跡Ⅰでは、FP粒と表現し、周堀各層を全層に亘って検討した結果、埋土下層に至るまで多くの場合に認められたが、混入の量には粗密の差があり、多く含む個所を捉えてFPの存在ありと注記した。その層位は周堀埋土下層の中程であり、その所見は、ここ西長岡南遺跡Ⅱ11号古墳の場合にも共通性があって、土層断面B〜C・GのFAを含む層は土層注記５・６・７に、土層断面E・Fでは土層注記３にそれがあり、最下部は埋土下層中頃に相当している。

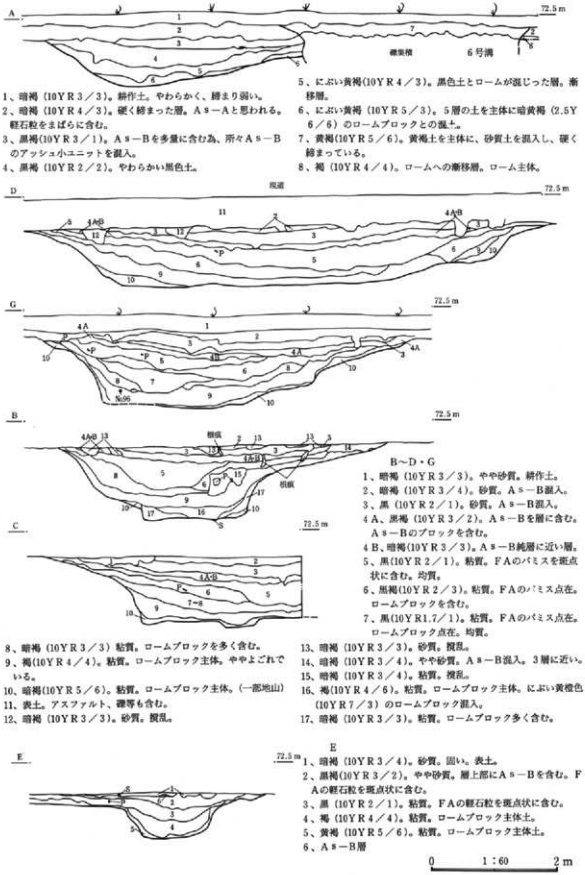
周堀の出土遺物は、埴輪、土器のほか、北側くびれ部の墳丘側に沿う形で多量の石が発見され、記録図中にも表現されていたが、記録写真を見ると、周堀の方向とは少しズレ、その延長の地山も、砂質が強いためか白ずんで写されていた。石の大きさも不揃いであり、人為を考えるには不自然な点が多かった。その疑問を大木紳一郎に伺ったところ、ローム層中に含まれた二次堆積の石類と砂質土の可能性が強いとの所見を聞



第12図　11号古墳遺構図



第13図　11号古墳遺構図

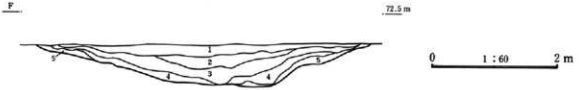


1、暗褐（10YR3／3）。耕作土。やわらかく、締まり弱い。
2、暗褐（10YR4／3）。硬く締まった層。As－Aと思われる。軽石粒をまばらに含む。
3、黒褐(10YR3／1)。As－Bを多量に含む為、所々As－Bのアッシュ小ユニットを混入。
4、黒褐（10YR2／2）。やわらかい黒色土。
5、にぶい黄褐(10YR4／3)。黒色土とロームが混じった層。漸移層。
6、にぶい黄褐（10YR5／3）。5層の土を主体に暗黄褐（2.5Y6／6）のロームブロックとの混土。
7、黄褐(10YR5／6)。黄褐土を主体に、砂質土を混入し、硬く締まっている。
8、褐（10YR4／4）。ロームへの漸移層。ローム主体。

B～D・G
1、暗褐（10YR3／3）。やや砂質。耕作土。
2、暗褐（10YR3／4）。砂質。As－B混入。
3、黒（10YR2／1）。砂質。As－B混入。
4A、黒褐（10YR3／2）。As－Bを層に含む。As－Bのブロックを含む。
4B、暗褐(10YR3／3)。As－B純層に近い層。
5、黒(10YR2／1)。粘質。FAのパミスを斑点状に含む。均質。
6、黒褐(10YR2／3)。粘質。FAのパミス点在。ロームブロックを含む。
7、黒(10YR1.7／1)。粘質。FAのパミス点在。ロームブロック点在。均質。
8、暗褐（10YR3／3）粘質。ロームブロックを多く含む。
9、褐(10YR4／4)。粘質。ロームブロック主体。ややよごれている。
10、暗褐(10YR5／6)。粘質。ロームブロック主体。(一部地山)
11、表土。アスファルト、礫等も含む。
12、暗褐（10YR3／3）。砂質。撹乱。
13、暗褐（10YR3／3）。砂質。撹乱。
14、暗褐（10YR3／4）。やや砂質。As－B混入。3層に近い。
15、暗褐（10YR3／4）。粘質。撹乱。
16、褐(10YR4／6)。粘質。ロームブロック主体。にぶい黄橙色(10YR7／3）のロームブロック混入。
17、暗褐（10YR3／3）。粘質。ロームブロック多く含む。

E
1、暗褐（10YR3／4）。砂質。固い。表土。
2、黒褐(10YR3／2)。やや砂質。層上部にAs－Bを含む。FAの軽石粒を斑点状に含む。
3、黒（10YR2／1）。粘質。FAの軽石粒を斑点状に含む。
4、褐（10YR4／4）。粘質。ロームブロック主体土。
5、黄褐（10YR5／6）。粘質。ロームブロック主体土。
6、As－B層

第14図　11号古墳土層断面図



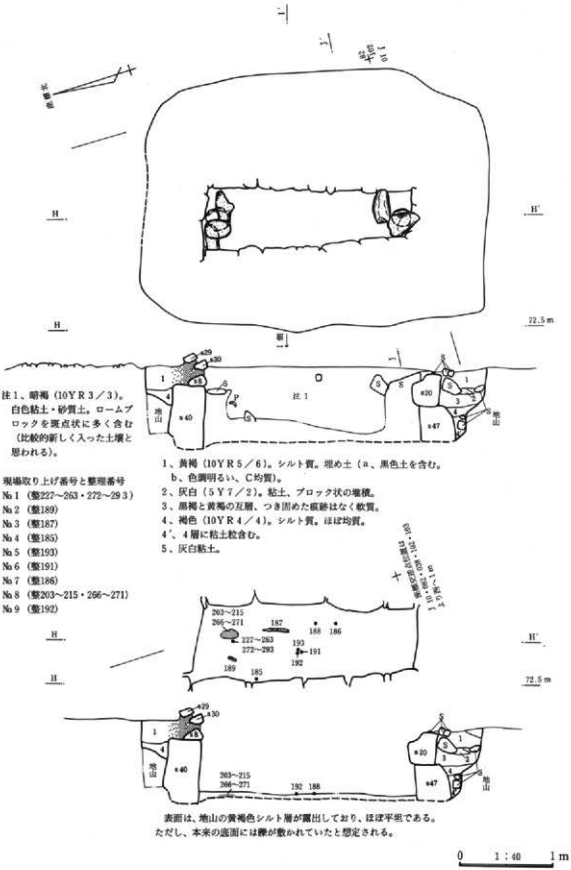
1、黒褐（10ＹＲ２／３）。砂質。Ａｓ－Ｂを含む。
2、黒（10ＹＲ２／１）。粘質。ＦＡの軽石粒を斑点状に少量含む。均質。
3、黒褐(10ＹＲ)。粘質。ＦＡの軽石粒を斑点状に含む。ロームブロック点在。
4、褐（10ＹＲ）。粘質。ロームブロック主体。
5、黄褐（10ＹＲ）。粘質。ロームブロック主体。

第15図　11号古墳土層断面図

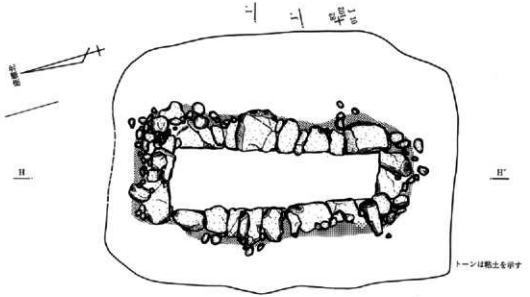
いた。その点は、写真図版を見る上で注意されたい。埴輪・土器類のうち埴輪は、写真図版を見るように多量で西長岡南遺跡Ⅰの古墳５に迫る量があったうえ、遺存は、さらに良かった。出土位置は第13図に示し、出土状態は、周堀に転落したらしき状況など記録写真によることとし、写真図版中に羅列した。出土位置は、層位上は埋土下層中位に多く、平面上は第13図では明瞭ではないが前方部前面周堀からも出土し、北面側周堀のくびれ部から後円部にかけ多く、南東側くびれ部から前方部前面にかけやや少なく、前方部南東端部の出土量が最も少ない。埴輪類は形象を含み、埴輪円筒を主体とする。埴輪樹立中、朝顔形を部分的に交えたらしく、少なくとも使用の可能性大の５個体以上がある。形象は、埴輪円筒よりも高所にあったらしく、さらに墳丘の削平化で失われたらしく、個体数量に見合う破片数量が絶対的に不足している。その点は、竪穴系石室に北接してあるカクランとされた近時の集石中に多くの埴輪形象片が含まれてあり、左証される。土器類は土師器の鉢形が形骸化したようにも見える広口壺（№96）が、南東くびれ部の周堀底面に近接して出土し、内面には赤色顔料が350ｇ以上（土壌混在もあるため）が納められている。このほか土器類は細片となり、各所から少数が得られている。それらは風化、消耗し、周辺古墳や種々の理由から古墳11号周堀におよんだと思われる個体も全て収録した。このほか、土地利用を考えるうえでの後世の遺物は任意抽出して掲げ、その実数は、遺物数量表中に示した。

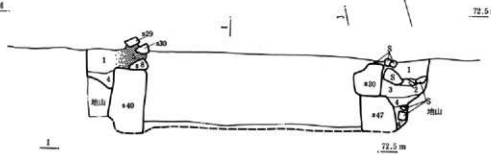
外部施設は、葺石など認められてはいない。

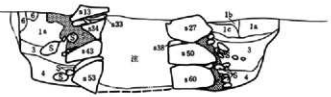
埋葬施設　耕作土層を除去しての遺構平面確認時に、既にくびれ部中央で地山掘り方を持つ地下式の竪穴式石室が発見されている。天井石材・同被覆などは失われ、Ｎ15°Ｅに主軸方向を持つ北小口の延長で、カクランと呼称された小集石があり、耕作などの不都合から寄せられたようである。石室形状図は、第16～20図を作成したが、調査はまず、石室内の埋土を、長軸断面Ｈ－Ｈ′に沿って半截し、堆積状況の確認が行なわれ、「白色粘土・砂質土。ロームブロックを斑点状に多く含む（比較的新しく入った土壌と思われる）。」と所見を述べ、天井開封が近時であったことを示唆している。その半截の底面は、埋土中位下方まである。この時点で既に石室上面の状態と掘り方平面の確認が行なわれている。石室上面は、石材間を灰白色粘土で詰め、掘り方上面もシルト質の黄褐色土で埋められ、天井被覆構成の一端が示唆される。掘り方と石室上面の関係は、平面的には隅丸長方形を呈する掘り方の北西側にやや寄せて石室上面が設けられ、断面的に考えると、調査所見に石室上面を粘土で覆い、この上面に天井の推定があること、石室上面の石材中に小石材が見られることと、上面の大石材の頂部が揃えられたかのように組まれている点から、失われた上方にあったのは天井石材および被覆構造であったと推定される。そのことは、かつての旧表土位置について先の第16図土層注記番号１であるシルト質土壌中に「黒色土を含む」とあり、旧表土位置が至近であったことを窺わせ、おそらくは、天井石上面か、被覆上面が、旧表土上面至近（古墳築造にあたり、除草や薄く表土を剥ぐ行為が行



第16図　11号古墳遺構図







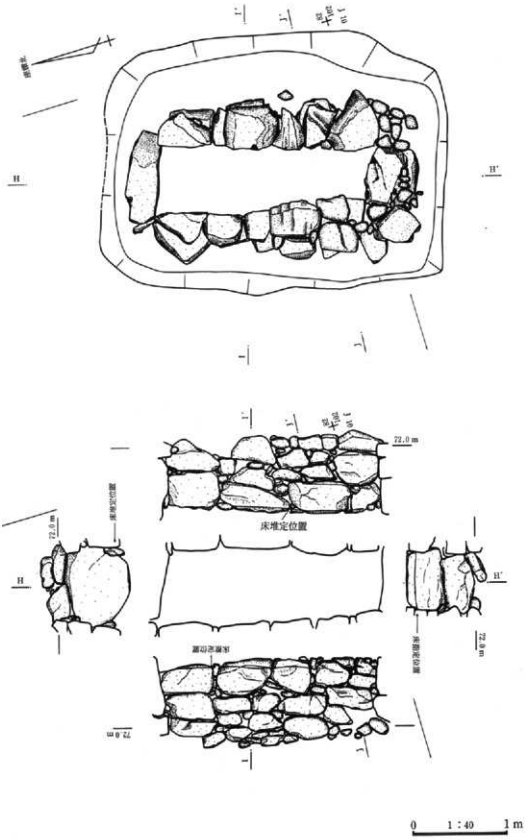
注１、暗褐(10ＹＲ３／３)。白色粘土・砂質土。ロームブロックを斑点状に多く含む（比較的新しく入った土壌と思われる）。

１、黄褐（10ＹＲ５／６）。シルト質。埋め土（ａ、馬色土を含む、ｂ、色調明るい、Ｃ、均質）。
２、灰白、（５Ｙ７／２）粘土、ブロック状の堆積
３、黒褐と黄褐の互層。つき固めた痕跡はなく軟質。
４、褐色（10ＹＲ４／４）。シルト質。ほぼ均質。
４'、４層に粘土粒含む。
５、灰白粘土。
６、来往記。

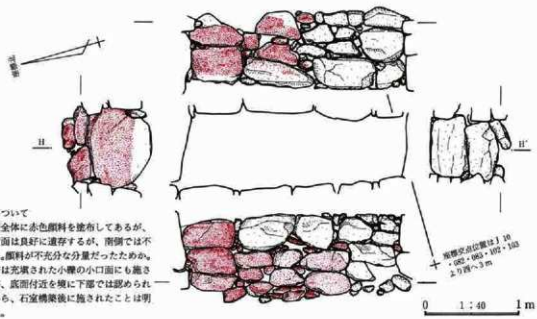
No.61は、No.17の内側への崩落を防ぐために上から押えた石であろう。

0　1：40　1 m

第17図　11号古墳遺構図



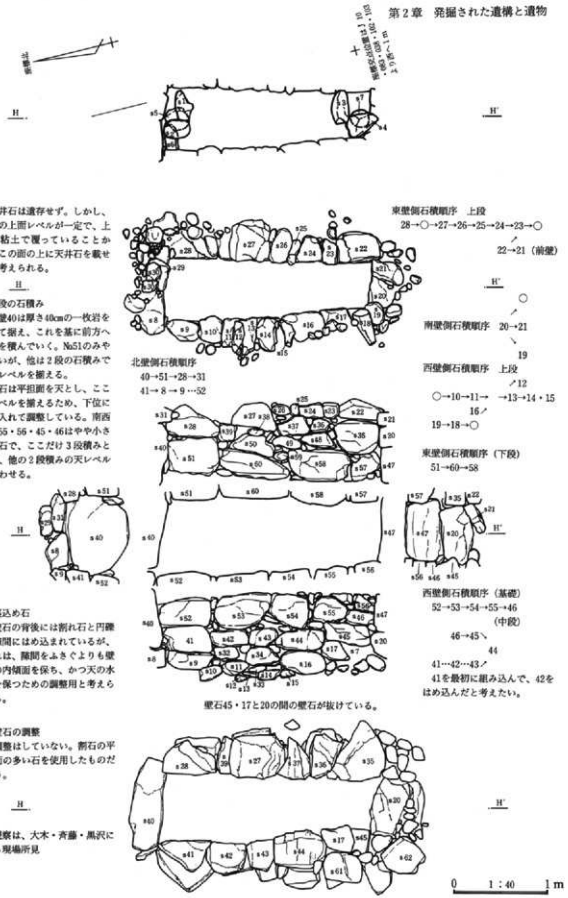
第 18 図　11号古墳遺構図



壁面彩形について
石室壁面全体に赤色顔料を塗布してあるが、北壁側の壁面は良好に遺存するが、南側では不明瞭である。顔料が不充分な分量だったためか。また、塗布は充填された小礫の小口面にも施されてあるが、底面付近を境に下部では認められないことから、石室構築後に施されたことは明らかである。

第19図　11号古墳遺構図

なわれたか圓者は知らないため）であったと推測したい。それ以下、石室掘り方基面に達するまでの作業工程は、石室内に流入した４～５石を含む埋土の除去と床出し、床遺物の確認、遺物の図化、壁面の図化、石室裏の断ち割りと図化、掘り方の掘り上げと石室床層の小砂利の除去と図化、石室の現場復元の順で行なわれたようである。石材については第20図と写真図版に示した。石材の組み上げについては、調査時の石材番号と観察所見をそのまま掲載してあるので概観として触れると、石材は、川原石と角ばりの取れた角礫気味の自然石が用いられ、赤色塗彩されている。壁面は、側壁・小口壁ともに内傾気味に留くか、少し迫り出し、結果的に天井側が小面積となっている。側壁は、石室上面と記録類を見る限りにおいて横組で面出し（つらだ）を行ない小口積で構かれているように見える。東壁側は３石積と部分的に多石を組み上げて埋めている。西壁も３石積を主に、部分的に多石を組み上げている。両壁の横の目筋で、１石・２石目ともに目筋が通る個所はなく、当地域の大材を用いて造られた横穴式石室とは基本的に異なって見える。北小口壁は、１m級大石（S40）を板で小口を塞ぐような形で据え、その上方に数石の小材を組む。南小口壁は２石（S20・47）の主材と小形の補助石材で間を詰めて構成される。特に北小口壁は大材を使用している点とその石材背面は掘り方壁面に接してあることから、S40は構築当初に係わり、現場所見でも、北小口壁の大石に接続する形で南側に側壁の大材の根石を組み上げる構築順の一端が示されてある。裏込めは、ひかえ積み上げのような形や、多量に小礫を詰める形ではなく、観察所見によれば、壁石の背面に嵌め込まれた小石材は「壁石の内傾角を保ち、かつ天の水平を保つための調節用と考えられる。」とあるように、最小限の所作法のようである。横断面を見ると小石材との空間は粘土材で詰められ、裏込め材の役割の一端が示される。粘土材の下端は、石室掘り方基部まで達してあり、上方は推定天井石下面まで続く。この粘土材は資料として5.81kg取り上げられている。色調は乾燥状態で、オリーブ黄5Y/4を呈し、夾雑鉱物は微量で、加えられていないと見える。粘土の脈理は、ほつれるように斜行がかり（×10・15観察）、クラック走行は、その反作用側に直角ではなく傾いて入るため、練りが行なわれているかもしれない。この粘土の堆積は、質的に重くはないため、新三紀以前の粘土ではなく、11号墳の立地する洪積の粘土に見える。石室床は、撹乱した状況があるが調査上の所見とし



天井石は遺存せず。しかし、側壁の上面レベルが一定で、上面を粘土で覆っていることから、この面の上に天井石を載せたと考えられる。

下段の石積み

奥壁40は厚さ40cmの一枚岩を立てて据え、これを基に前方へと石を積んでいく。No51のみやや高いが、他は2段の石積みでほぼレベルを据える。

礫石は平坦面を下とし、ここでレベルを据えるため、下位に礫を入れて調整している。南西隅の55・56・45・46はやや小さめの石で、ここだけ3段積みとして、他の2段積みの天レベルと合わせる。

裏込め石

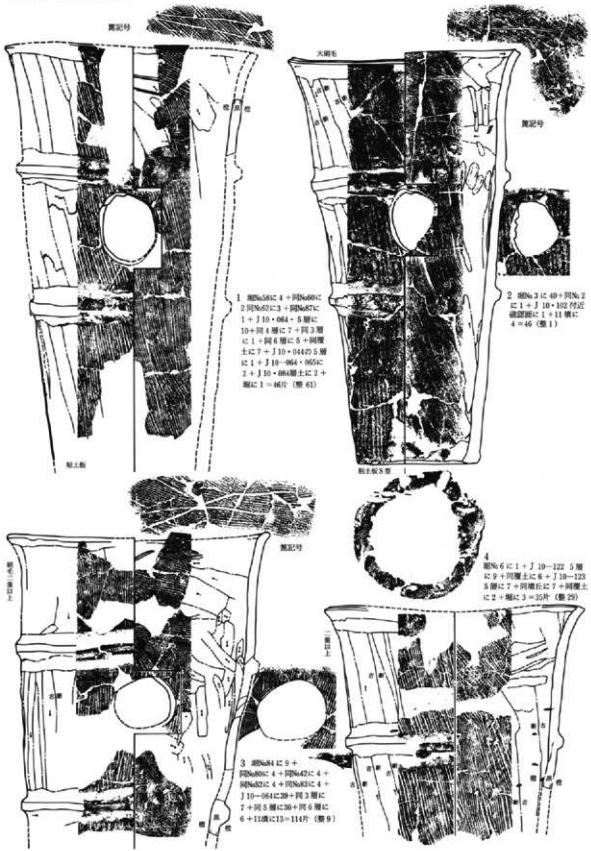
壁石の背後には割れ石と円礫が隙間にはめ込まれているが、これは、隙間をふさぐよりも壁石の内傾面を保ち、かつ天の水平を保つための調整用と考えられる。

壁石の調整

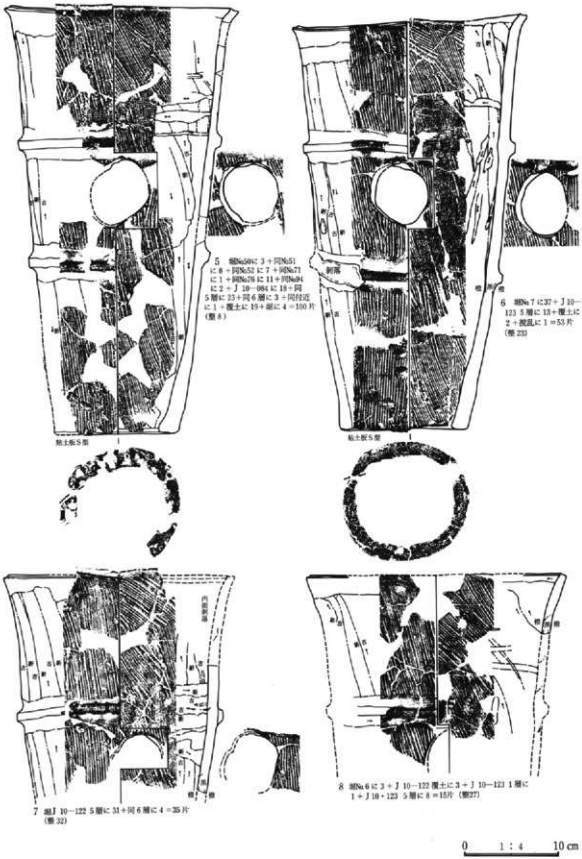
調整はしていない。割石の平坦面の多い石を使用したものだろう。

観察は、大木・斉藤・黒沢による現場所見

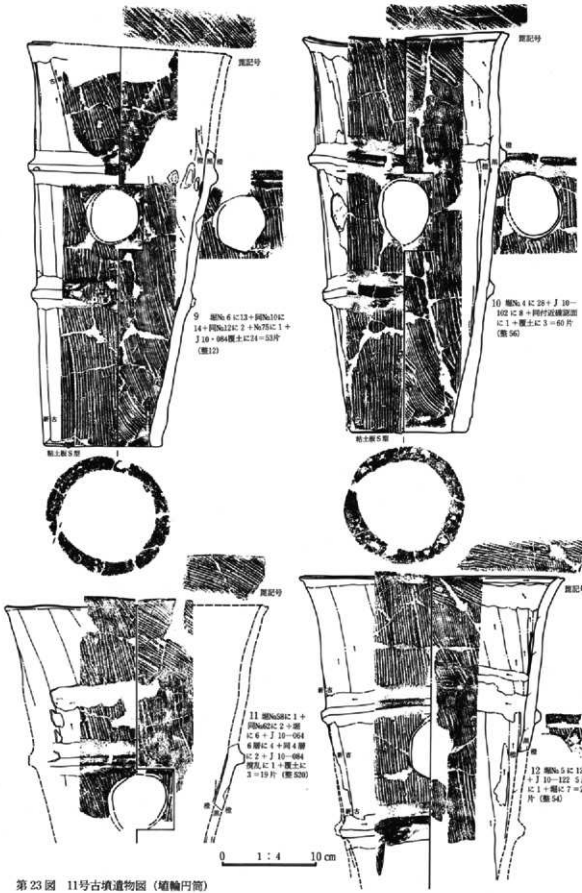
第20図　11号古墳遺構図



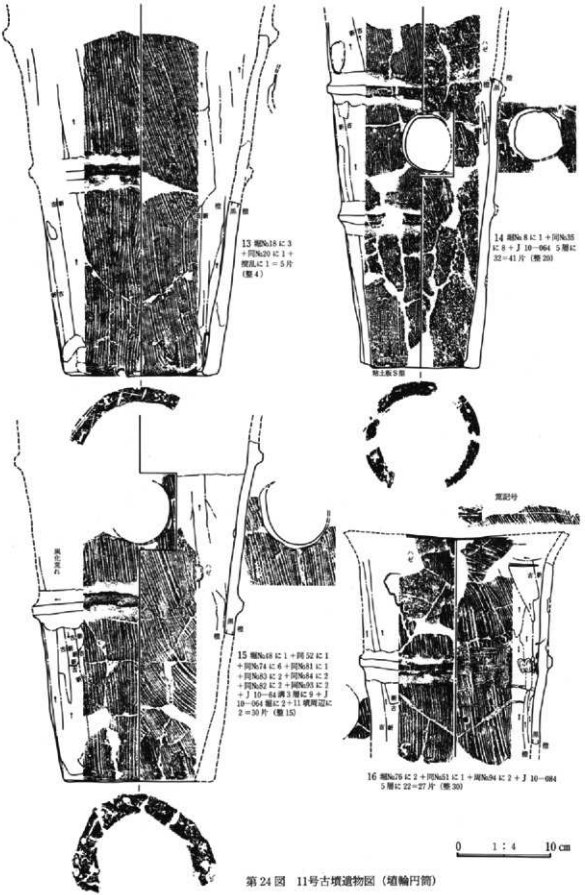
第21図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



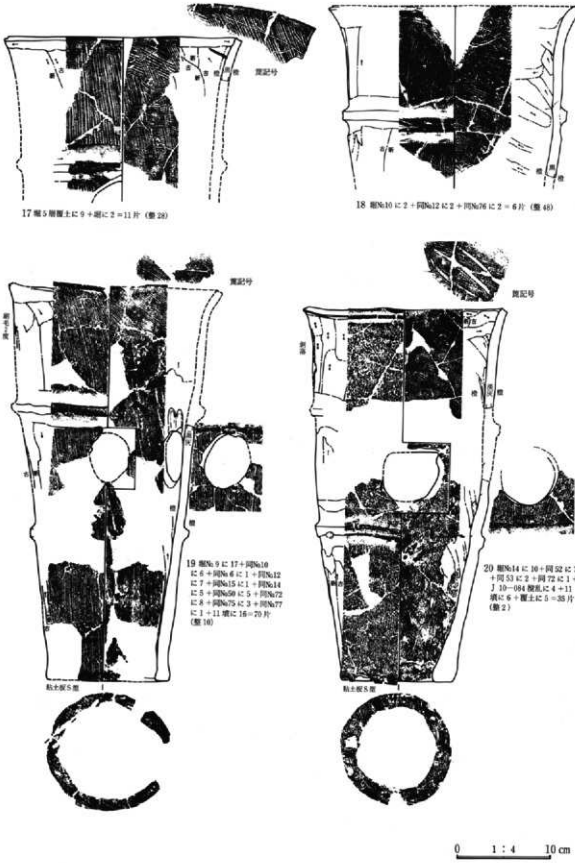
第 22 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



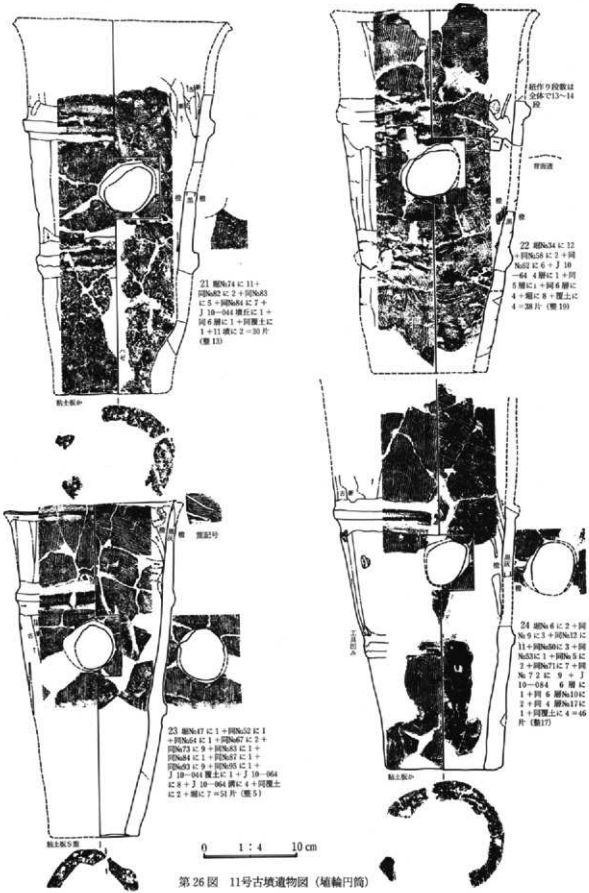
第23図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



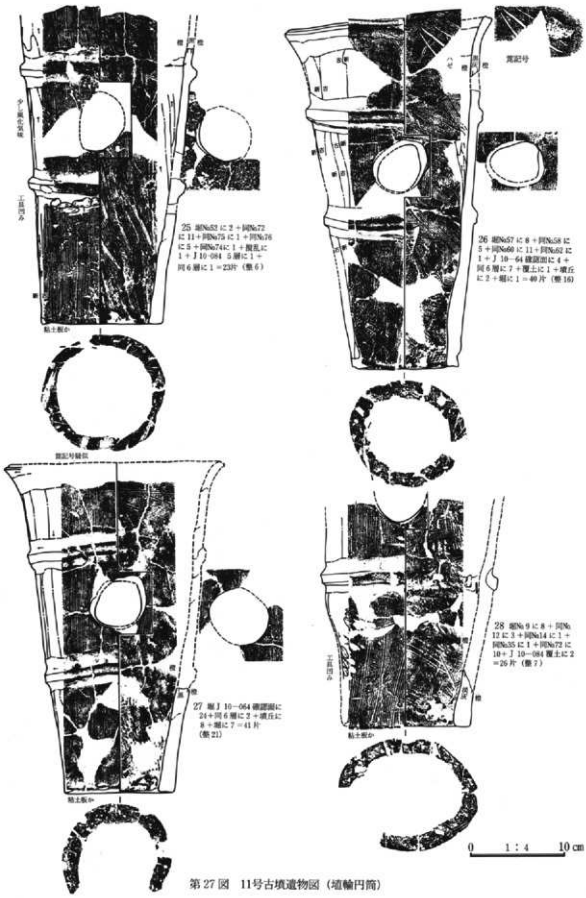
第 24 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



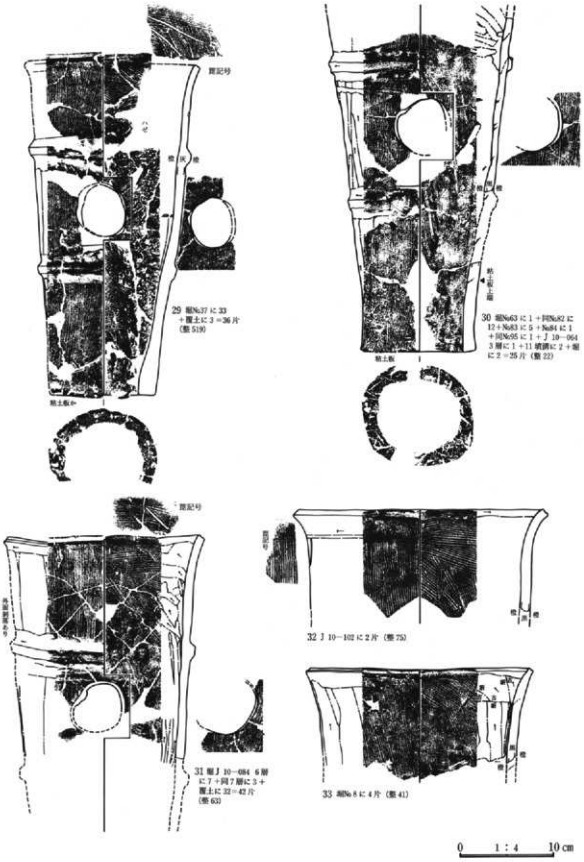
第25図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



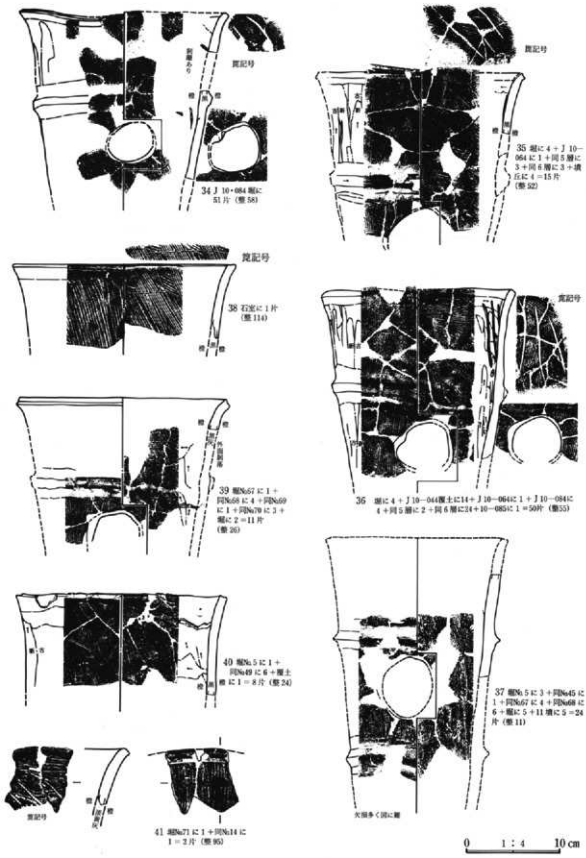
第 26 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



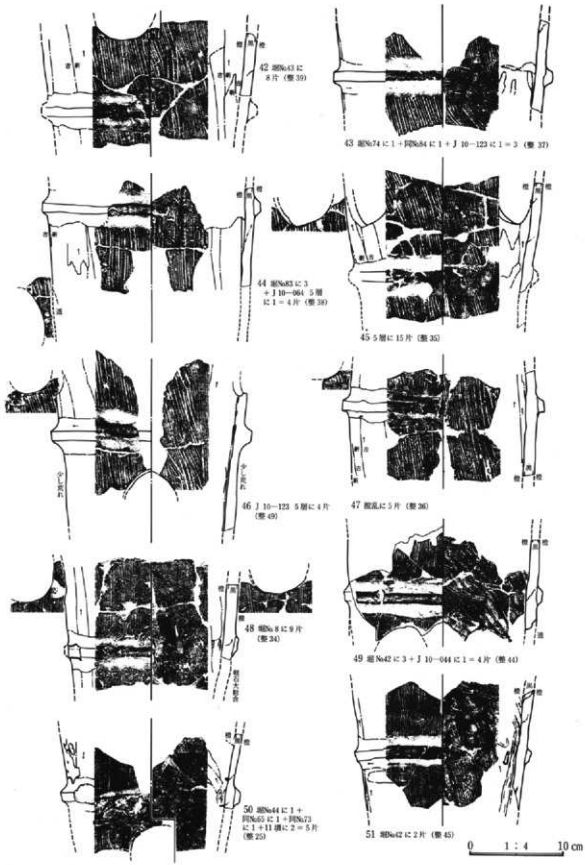
第 27 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



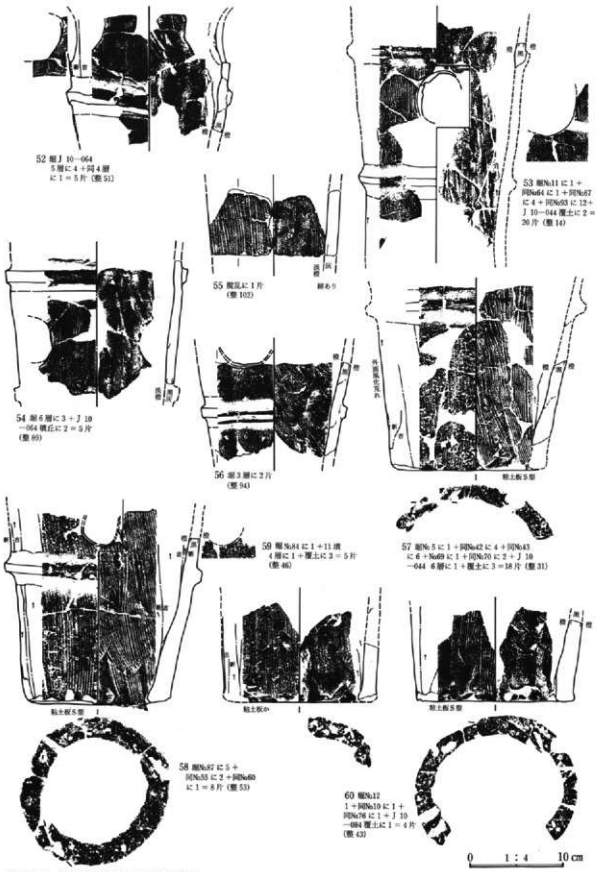
第28図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



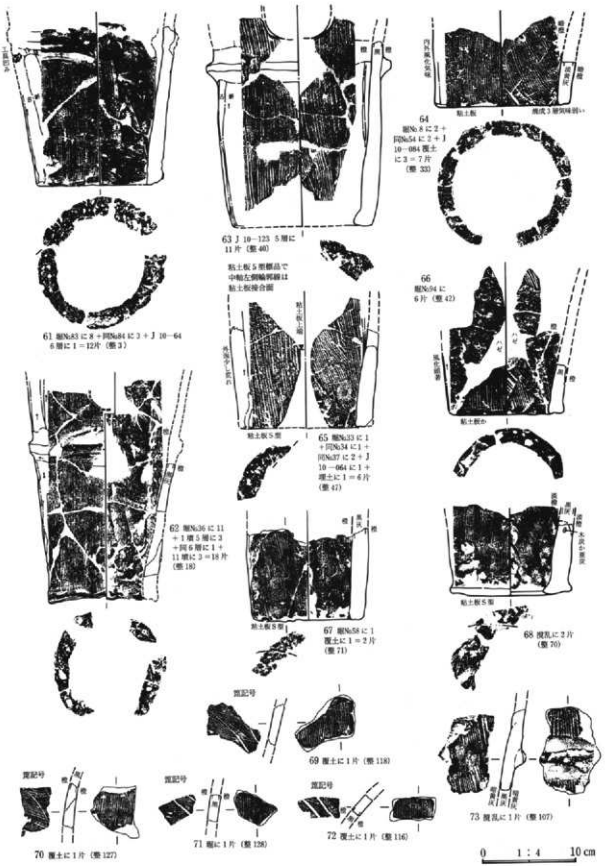
第 29 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



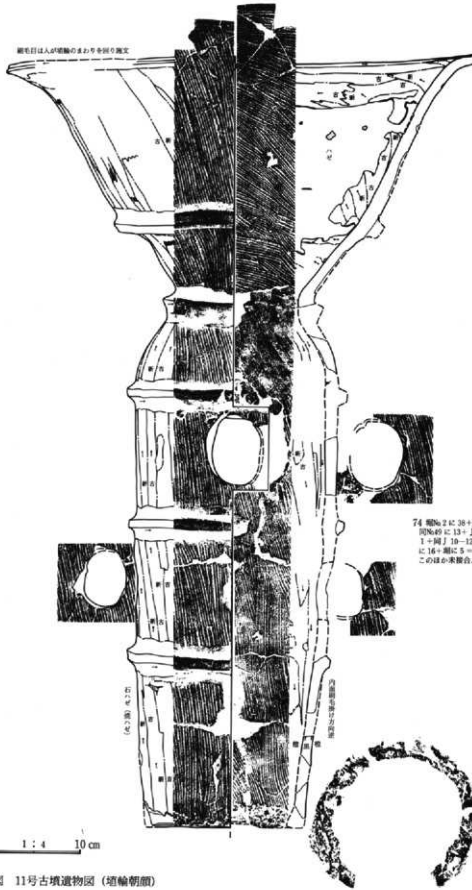
第30図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）



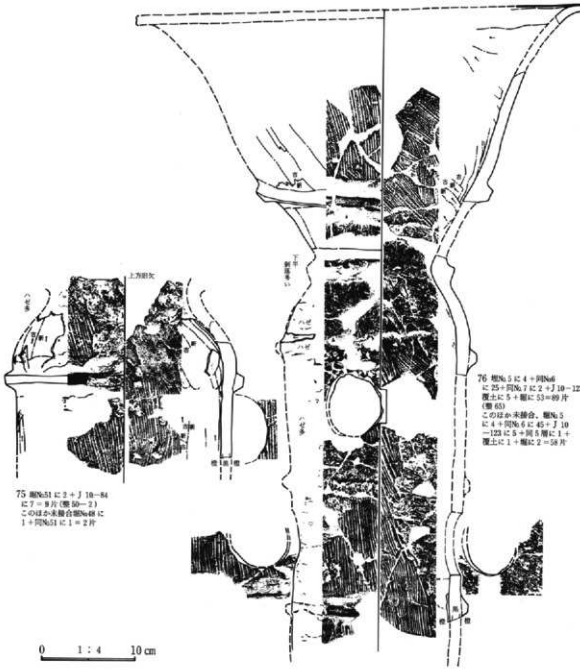
第31図　11号古墳遺物図（墳輪円筒）



第 32 図　11号古墳遺物図（埴輪円筒）

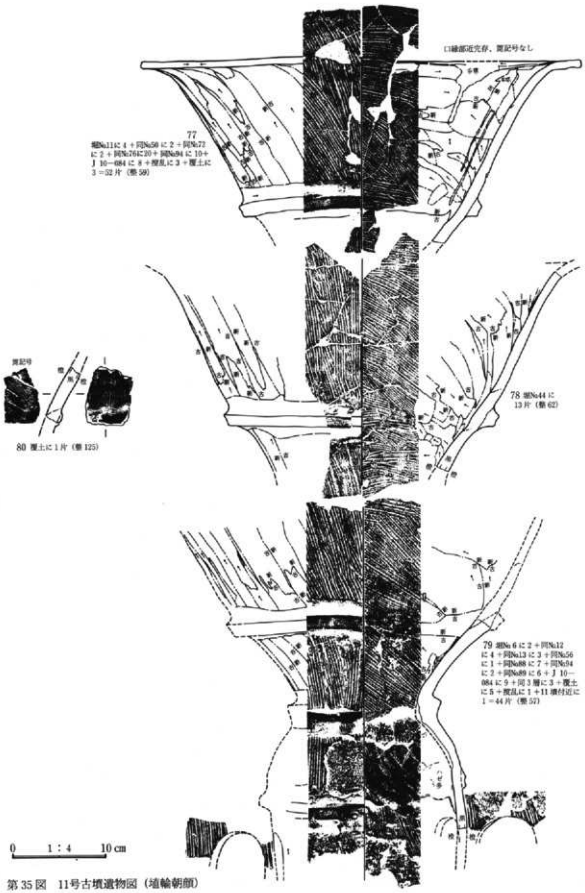


第33図　11号古墳遺物図（埴輪朝顔）

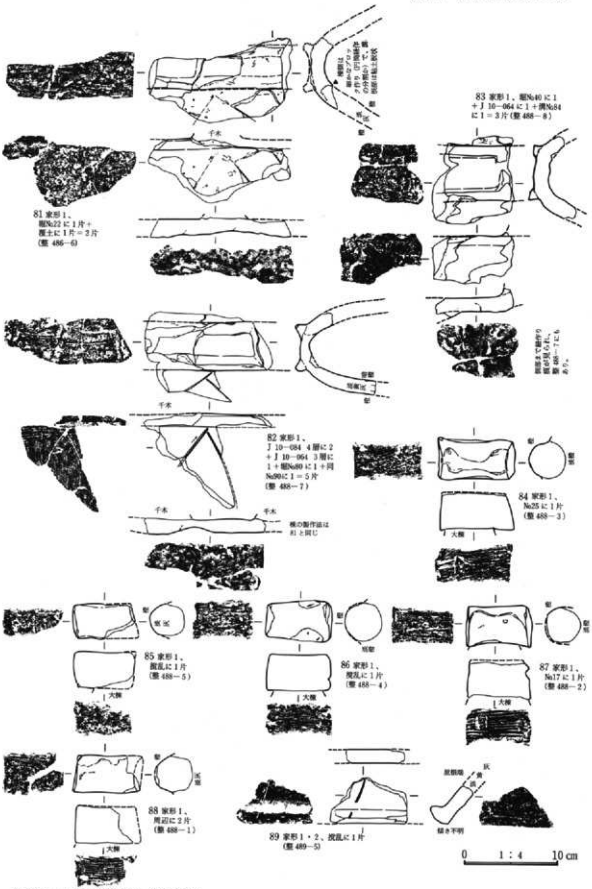


第 34 図　11号古墳遺物図（埴輪朝顔）

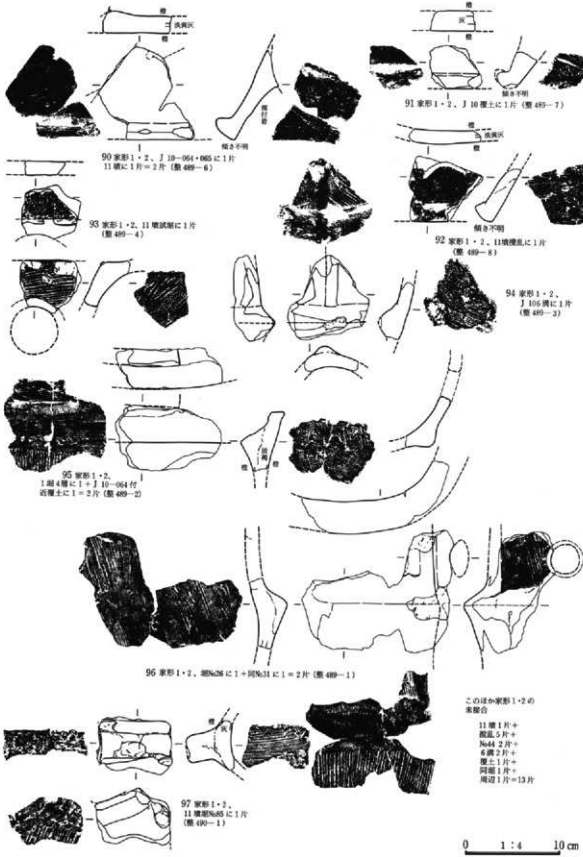
て、天井石が無いこと、土壌が石室上面まで達していたこと、鉄鏃付着の石材がありながら、その部分に鉄製遺物が存在しないこと、整理所見として大刀の茎片の出土ほか鉄製品の割れ口に調査時より古いが、旧時ではなく、強いて言えば近代頃に思える割れ口が目立って存在するためなどから既掘を受けたと判断された。床面上で明確な攪乱穴は生じていないばかりか、玉類はまとまって出土しているので、徹底して乱されるほどではなかったようである。石室壁面の赤色塗彩の状態は第19図に示した。図中左下に、調査時の調査担当による所見を掲げたが、文中「北壁側の壁面は良好に遺存するが南側は不明瞭である。」とあり、南半は色彩が薄く、（写真図版45）、彩色の必要度が北半にあった可能性が強いとの助言があった。



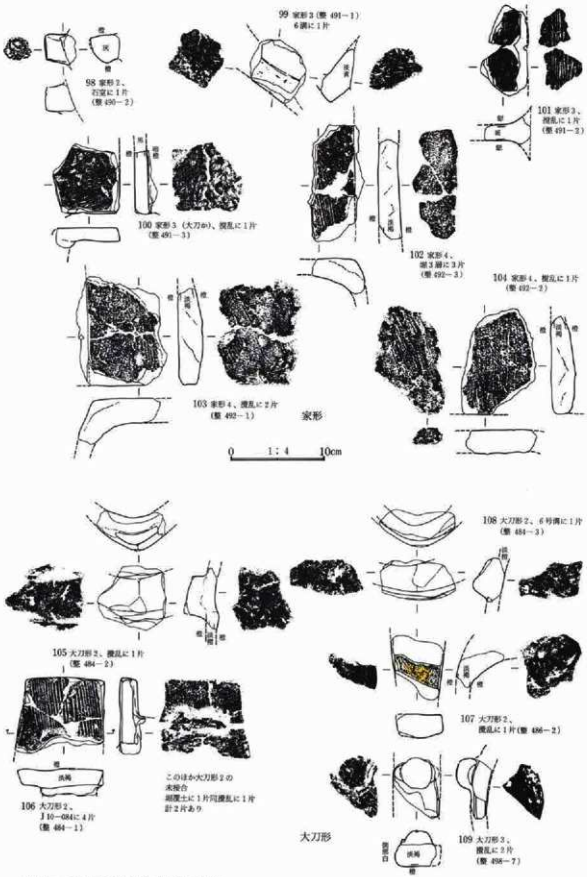
第35図　11号古墳遺物図（埴輪朝顔）



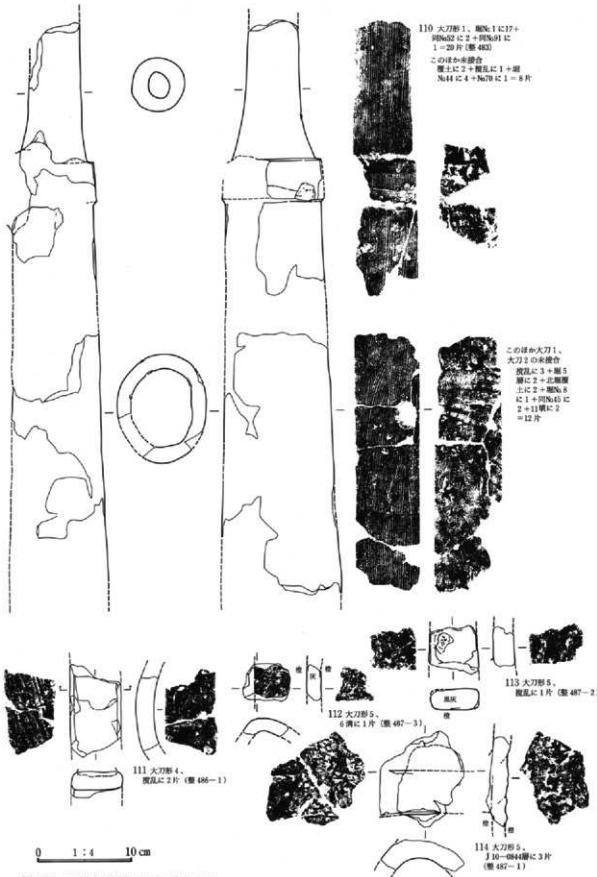
第 36 図　11号古墳遺物図（埴輪家形）



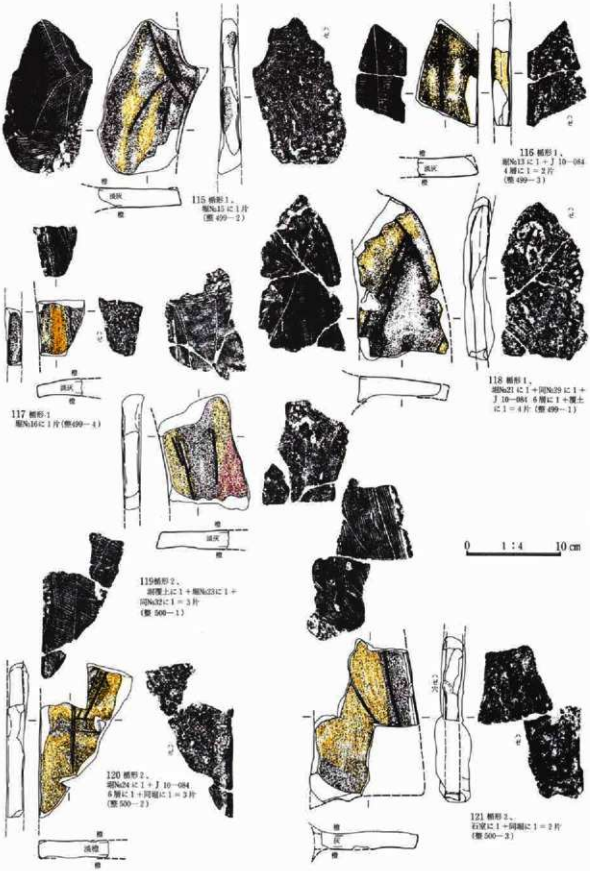
第37図　11号古墳遺物図（埴輪家形）



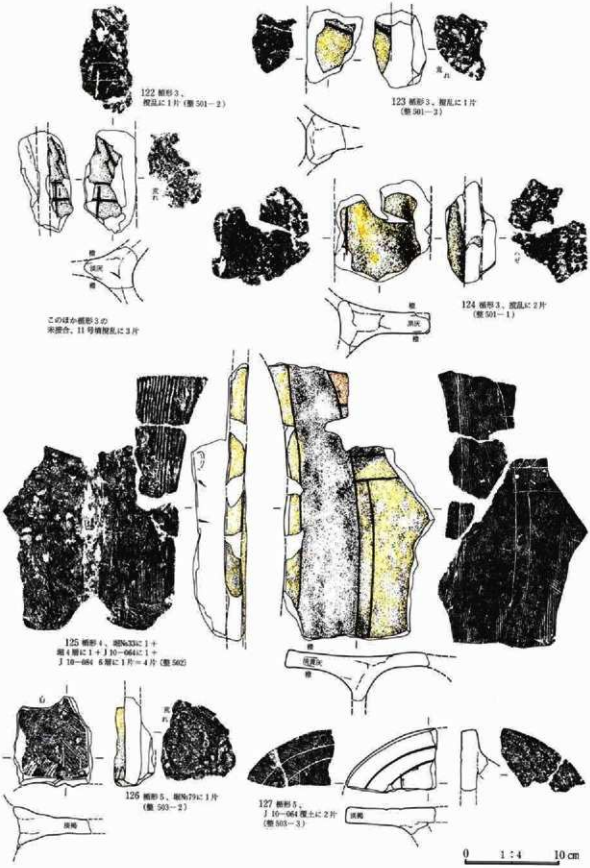
第38図　11号古墳遺物図（埴輪大刀形）



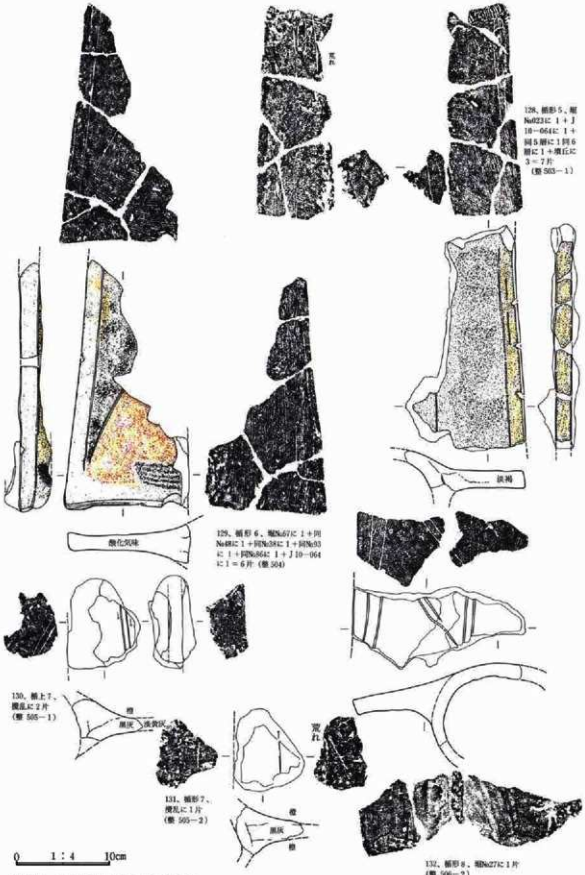
第39図　11号古墳遺物図（埴輪大刀形）



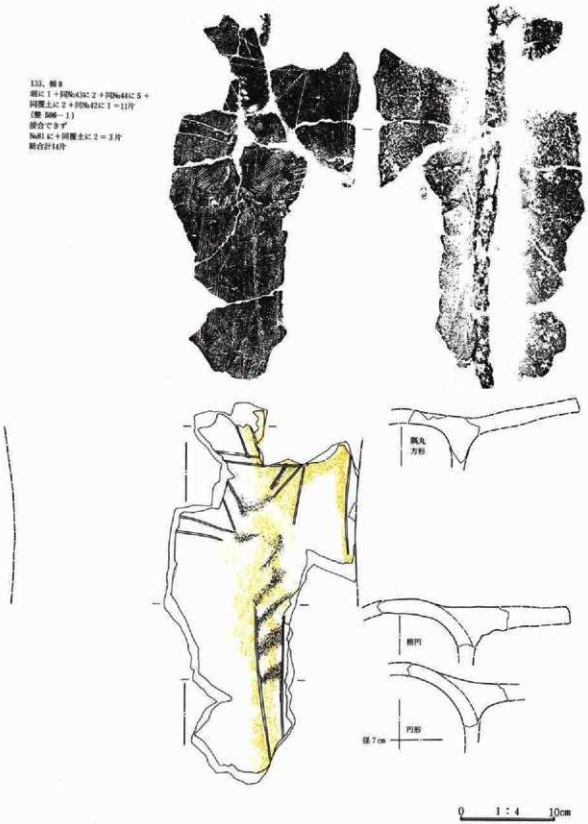
第40図　11号古墳遺物図（埴輪椀形）



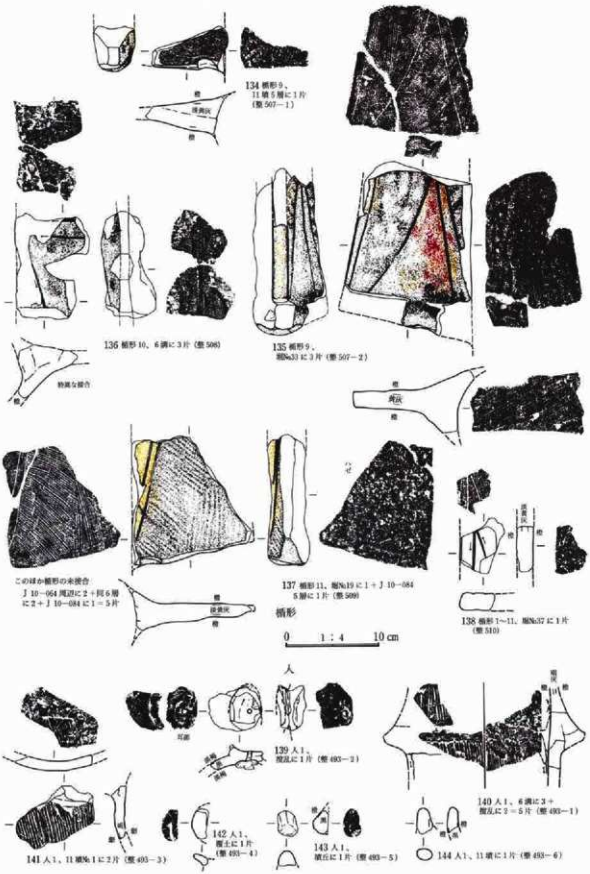
第41図　11号古墳遺物図（埴輪埴形）



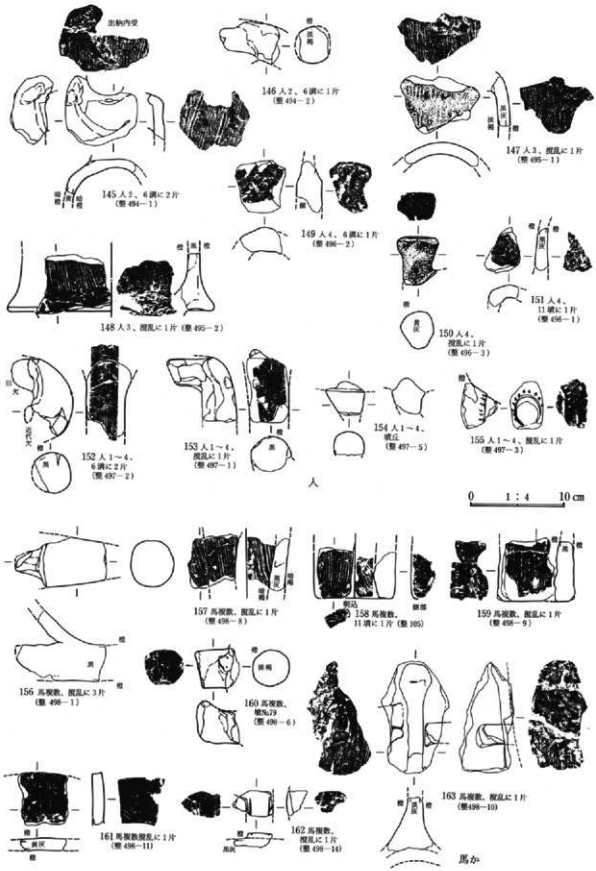
第42図　11号古墳遺物図（埴輪埴形）



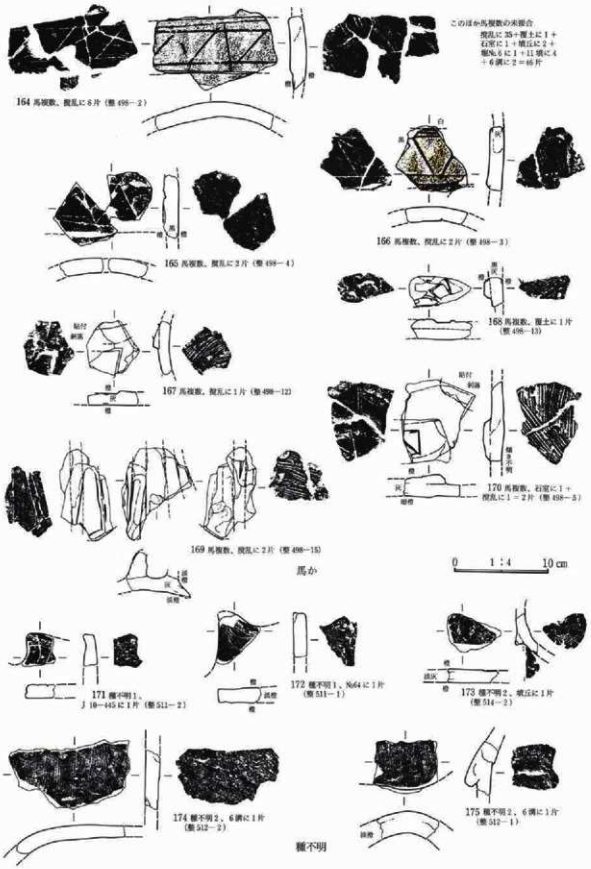
第43図　11号古墳遺物図（埴輪楯形）



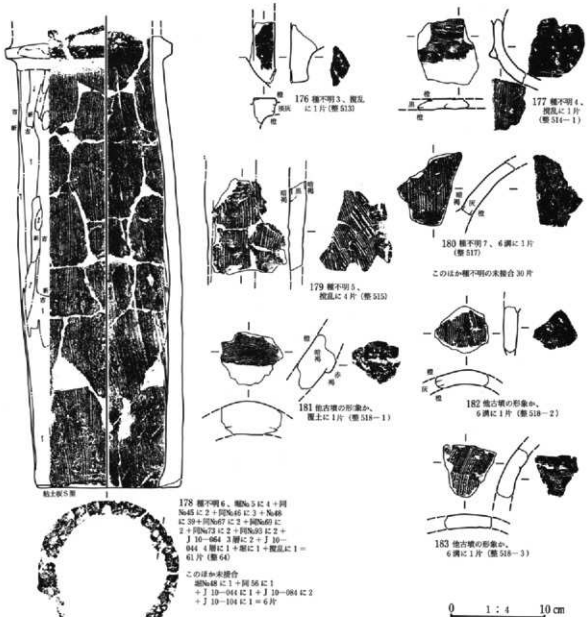
第44図　11号古墳遺物図（埴輪横形・人）



第45図　11号古墳遺物図（埴輪人・馬か）



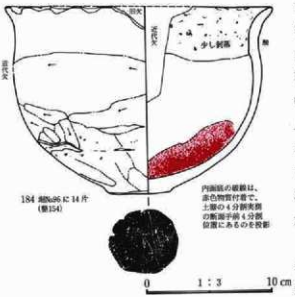
第46図　11号古墳遺物図（埴輪馬か・種不明）



第47図　11号古墳遺物図（埴輪種不明ほか）

掘り方は、上面で長辺3.65m、短辺2.75m、下面で長辺3.15m、短辺2.35〜2.51m、深さは最大で0.85mを測り、平面形は隅丸方形気味である。掘り方の埋め土は、第17図の横断面を見る限りにおいて、観察の意識によるのかもしれないが上面に達するまで３段階程の大きな単位で築土されたらしい土層表現があり、最下層をシルト質土とする点に石室基面における石材補強や耐水上の作為性を感じる。

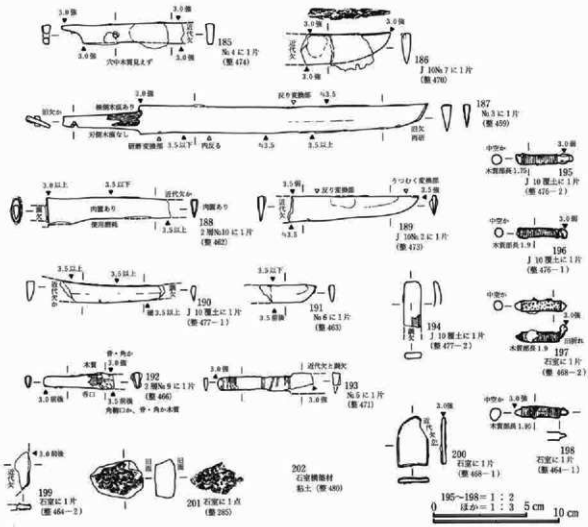
石室規模に触れる前に、竪穴系石室とした理由は、県内では、今のところ、長野県北信地方で見られる板石状の山石を小口積・横積とした狭長な古墳時代前期様式の本格的構造の竪穴式石室は発見されていない。やや後出時期の板石を用いる例は、箱形石棺状に板石を立て囲繞させている例があり、川原石を用いている場合でも側壁に２石以上を積み上げているのは、後出的様相であり竪穴式石室の本来的な形として扱う訳にはいかないと考え、本書では、この類を竪穴系石室と呼称したい。この頃、既に安中市簗瀬二子塚古墳、藤岡市御三社塚古墳、前橋市王山古墳・正円寺古墳など初期横穴式石室は存在していたか築造近しの頃と考え



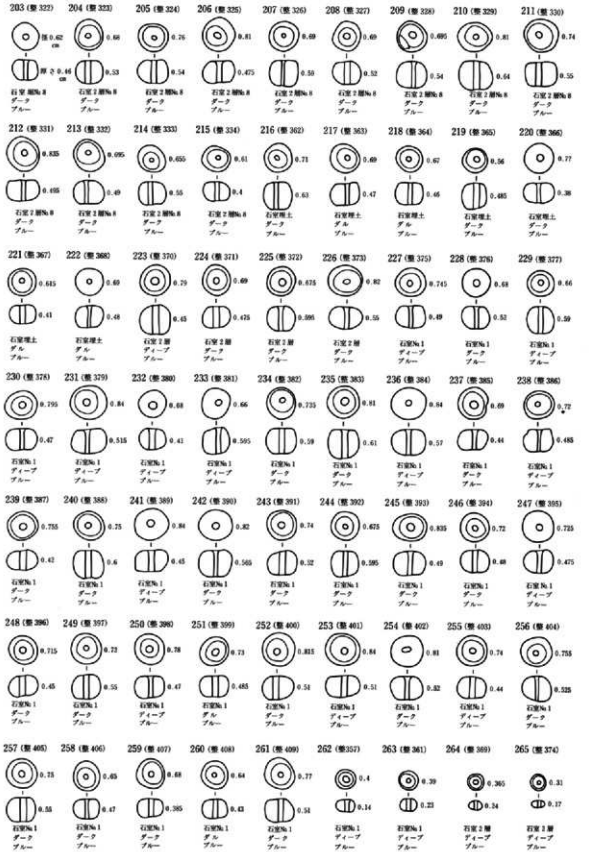
第48図　11号古墳遺物図

られ、11号古墳の石室構造を考えるうえで、その影響も加えて検討される必要がある。つぎに本墳の規模ほかを見たい。石室中軸方位は、N15°Eであり、墳形中軸と3°の差があり、石室がより北に近い。石室短軸の中点位置は、両くびれ部を結ぶ線上に極めて近く設計上の作為性を感じる。石室平面規模は、正確には捉えることが困難であり、床面を、赤色塗彩下端および小礫上面付近とした場所から求めると、中軸上の長さ2.31m、北小口壁下の幅0.81m、南小口壁下0.62m、最大の高さ0.82mを測る。

遺物　第21～52図に示した。石室内は第49～51図である。対応する遺物出土状態図は第16図下段である。遺物種には、鉄製大刀（185・186）・小刀（187）・大刀子（188・189）・刀子（190・191）・弓飾金具（195～198）・



第49図　11号古墳石室遺物図



第50図　11号古墳石室遺物図

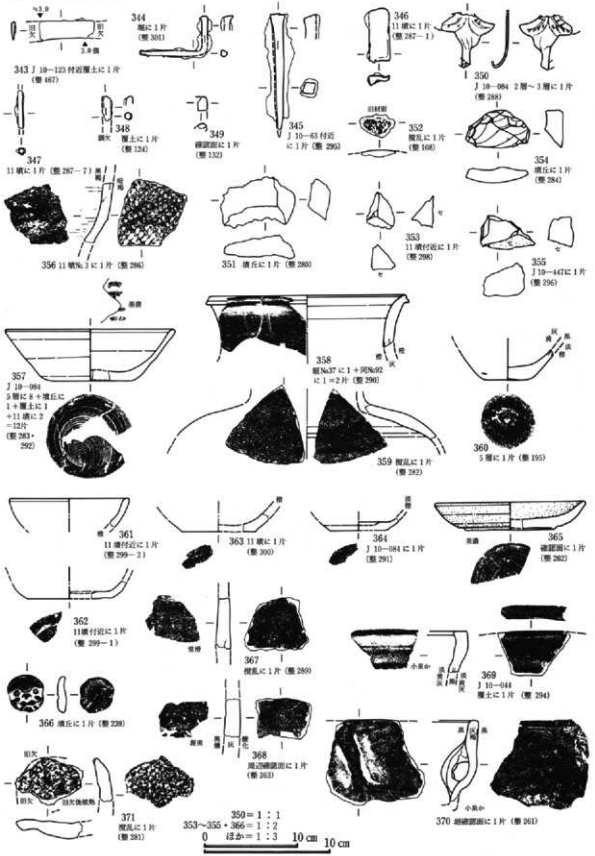
0　1：1　2.5cm

系統色名		P.C.C.S 記号	（ＪＩＳ記号）
ディープ	ブルー	18. B－2.4－8 s	(3.0 P B　2.4/11)
ダーク	ブルー	18. B－1.4－5 s	(3.0 P B　1.8/6)
ダル	ブルー	18. B－40－6 s	(3.0 P B　4.0/7.5)

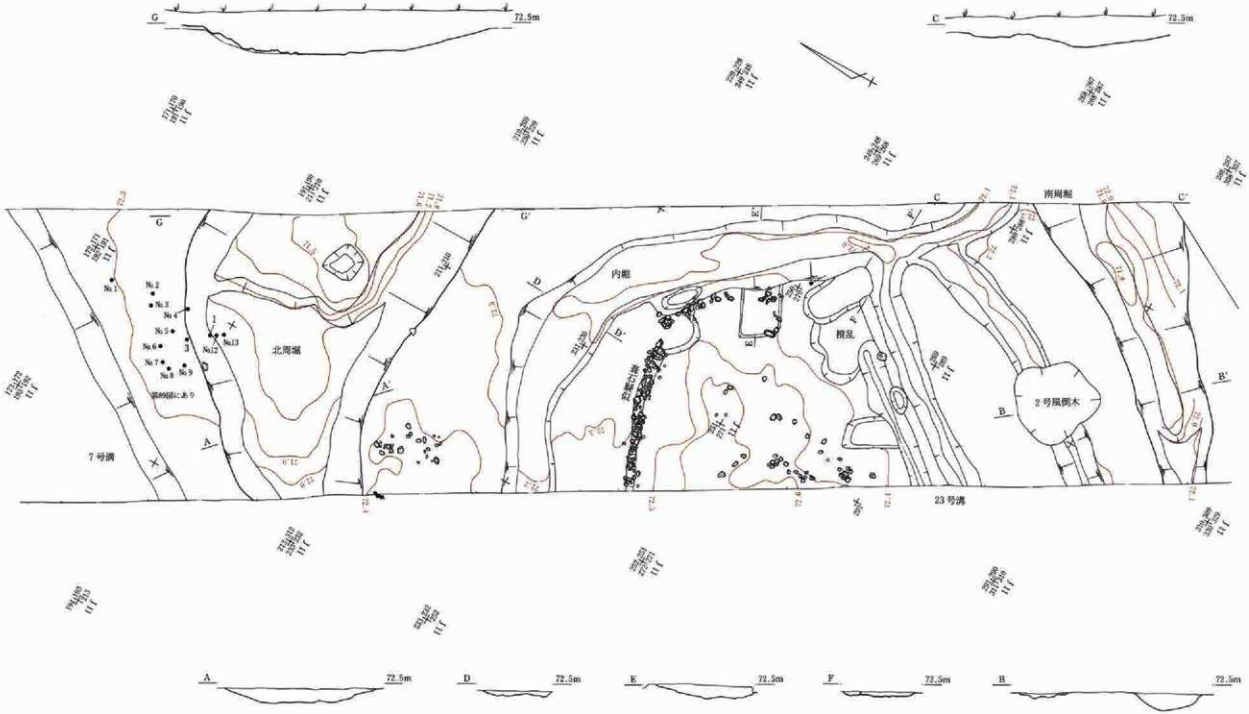
『新版ハーモニックカラーチャート』（財日本色彩研究所編）1972 を使用

第51図　11号古墳石室遺物図

0　1：1　2.5 cm



第52図　11号古墳補足遺物図



No付は、現場遺物番号、No
なしは図版遺物番号をあらわす

0　1：120　4m

第53図　12号古墳遺構図

不明（194・199・200）が、ガラス製品は臼玉（203～261）・小玉（262～342）がある。ガラス玉の出土位置は、第16図トーンに集中し、首飾とすれば、頭北側の埋葬が推定される。弓飾金具は、旧時折れの147の存在から、埋葬時に折られた可能性が示唆される。大刀の欠損部は、錆が割れ口に乗っていないので新しいが、調査時ほど新しくはない。鉄製遺物の硬さはモースの硬度計で試したが、大刀は3.0強であり、刀としての実用性はない。そのほか小刀、刀子類は刃部で3.5余りであり、しかも187小刀の切先や、188大刀子の物打ち部には二次研磨や、研磨消耗跡があり、旧時に実用された形跡が残る。このほか、石室関連では、第49図202の粘土材と１cm以下の小礫がある。粘土材は、科学分析を参照されたい。小礫は、写真図版11最下段に見える５cm前後の礫よりもさらに細かい礫で31.8kgが取り上げられている。石室床面の状態を考えるうえでは重要な資料で、担当の大木の説明では、調査時の質量はそう失われてはいない量とのこと。その小礫中には鉄製品の錆小片が含まれている。周堀部を中心として埴輪、土師器を第21～48図に示した。埴輪形象は、個体別の数量確認を行なうべく胎土ほか質感と整形具の差により行なったが絶対量不足であり、図中に示した個体識別番号の信頼度は弱く、目安と考えられたい。およそ家形は２個体以上が、大刀形は５個体以上が、楯形は11個体前後が、人は４個体前後が、馬は１個体以上が、そのほか種不明は７以上が、最小限で数えられる。このほか11号古墳関連遺物を第52図に示した。そのうち350は中世以降である。

12号古墳　（第53～57図）

12号古墳は、発掘当初に設けられた第１トレンチ周堀で一部が認められ、拡幅員約10mの全面拡張の段階で、その規模、形状などの確認に至っている。調査前は、蛇川に沿う4.5m幅の舗装道路と東接は桑園であった。調査前に、古墳としての存在は、平夷され窺えない状況であった。墳丘の削平化については、11号古墳の場合と同様であり、同項の冒頭を参照されたい。空中写真（写真図版３）中に隣接の桑園一面中に12号古墳は含まれ、南接の地境が水路であることを思うと、区画整備の際、なんらかの形で影響をあたえたのかもしれない。

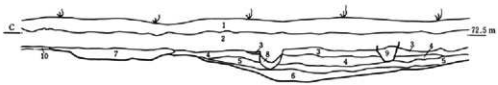
位置　Ｊ11－191・192・210～212・230～232・249～252・269～271・288～290・308・309、大字西長岡字南354・452－２。標高は、調査面で71.45m、北東桑園上面で72.85mである。

重複　周堀は、約10m幅の拡張区中、北西側周堀と南東側周堀とが発見され、その間、周堀内部に円弧状の深さ約20cmの浅い溝と、その南半弱の位置を横切り屈曲しながら南東方向に向かい、未調査区との南東壁に至る深さ約20cmの溝跡、さらに削平された墳丘中央付近に小穴、やや南に寄って２号風倒木痕などが発見された。円弧状の周堀内周の溝は、調査時図面に内堀、遺物注記に溝とある。その内堀と周堀の関係は、土層断面Ｃのみでしか重複接点がなく、それも薄い個所での重なりで、やや判定指標として不足するがそれによる限りにおいては内堀が後出しそうである。２号風倒木とは、内堀が新しい。内堀と複数の穴跡とが重なりを見せる土層断面Ｅ・Ｆのうち Ｅでは穴跡が後出し、Ｆは不明瞭である。内堀の質感は「全体に軟質」、「締りは弱い」と土層断面注記にあり、新しい時期の所産のように見える。内堀の内周の北辺に人頭大の石材による、現場時点で葺石と称された石組がある。その石組状況は、写真では、石組の状態は甘く、調査担当の大木紳一郎も、旧状を残しているのか判断が付きかねたと言っている。一つには耕作域に近い深さであることも一因していたようである。それらの石材と関連したかのように近似の川原石が付近に散在して記録図中に示されている。

墳丘と規模　墳丘は既に削平され、墳丘を知る手がかりは、周堀の状態から考えるのと、内堀と称された後世の所産らしき円弧を描く溝から推定する外はない。内堀がなぜ墳形を示唆するのかという点は、墳丘築

1、灰黄褐（10YR４／２）。As－Bの二次堆積軽石層。As－Bの灰は不明。
2、黒（10YR２／１）。黒色土で粘性ややある。やわらかく、掘りやすい土層。
3、黒褐（10YR３／１）。黒色土と４層の混土。
4、にぶい黄褐（10YR５／３）。ロームへの漸移層。ざらっとしている。
5、黄褐（10YR５／６）。ロームへの漸移層。ロームに近似するが４層の土を混入する。きらっとしていて粘性やや弱い。

1、黒褐(10YR３／１)。φ１～５cmの軽石粒を斑点状に含む。粘性普通。
2、灰黄褐（10YR４／２）。粘性は普通。１層と同じ軽石粒をわずかに混入。
3、褐（10YR４／４）。ローム質の粘性の若干弱い土層。
4、灰黄褐（10YR４／２）。２層と近似するが、硬くしまっており粘土質のブロック（硬い）を混入。ロームの小ブロックもわずかにあり。
5、明黄褐（2.5Y６／６）。ローム地山。



1、褐（10YR４／４）。表土。
2、にぶい黄褐(10YR４／３)。硬く締まっている。φ１ｍ～米粒大の軽石粒を斑点状に含む。
3、灰黄褐（10YR４／２）。As－B軽石の二次堆積と思われる。
4、黒褐(10YR３／１)。黒褐土を主体に、φ１～５mmの軽石粒(FA)をまばらに混入。
5、灰黄褐（10YR５／２）、にぶい黄褐（10YR５／４）と４層の混土。
6、にぶい黄褐（10YR５／４）。きらってしており、黄褐色土を主体とする土層。
7、灰黄褐（10YR４／２）。硬く締まった土層。黄褐色小ブロックφ１～３mmほどの軽石粒含む。
8、灰黄褐（10YR４／２）。擾乱。
9、灰黄褐（10YR４／２）。擾乱。
10、にぶい黄褐（10YR５／３）。にぶい黄褐色を主体に、黄褐（10YR５／６）の小ブロック含む。

1、灰黄褐(10YR４／２)。さらっとしていて、締まりは弱い。φ１mmほどの軽石粒含む。
2、明黄褐(10YR６／６)。やわらかいローム主体に、１層のブロック含む。

E・F
1、暗褐(10YR３／４)。細礫、FAパミス、炭化物を少量含む。締まり良好だが粘性はない。
2、暗褐（10YR３／４）。土粒は１層と同質で、細礫等は１層より少なく、全体に軟質。
3、褐(10YR４／５)。シルト質で粘性少ない。均質で鉄維物なし。
4、褐（10YR４／６）。３層の二次的堆積土。
☆　礫は茸石の二次堆積か。

0　1：60　2 m

第54図　12号古墳土層断面図

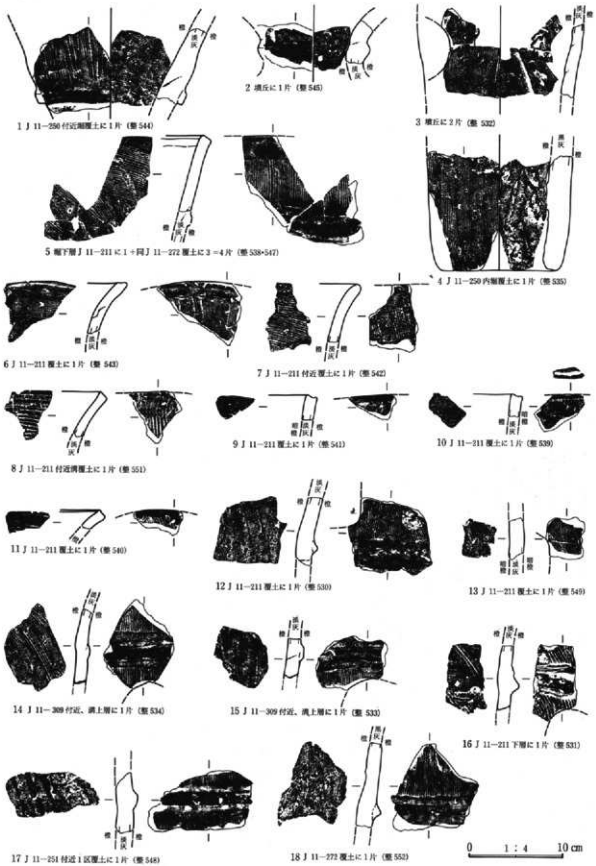
第55図　12号古墳土層断面図

土が経年変化して失われた場合、築土直径が狭められてゆくことは充分考えられ、まして台地上の小溝の機能目的は、地界区分としての意味があり、内堀は、ある時点での12号古墳の墳丘残存状況を示唆すると考えられる。そうした場合、12号古墳の北東半の墳丘形状は円形であると想像したい。南北の両周堀の平面形状は幅・深さとも一律でなく、距離差もあることから東半部の墳形が円形であるとの推定は困難である。

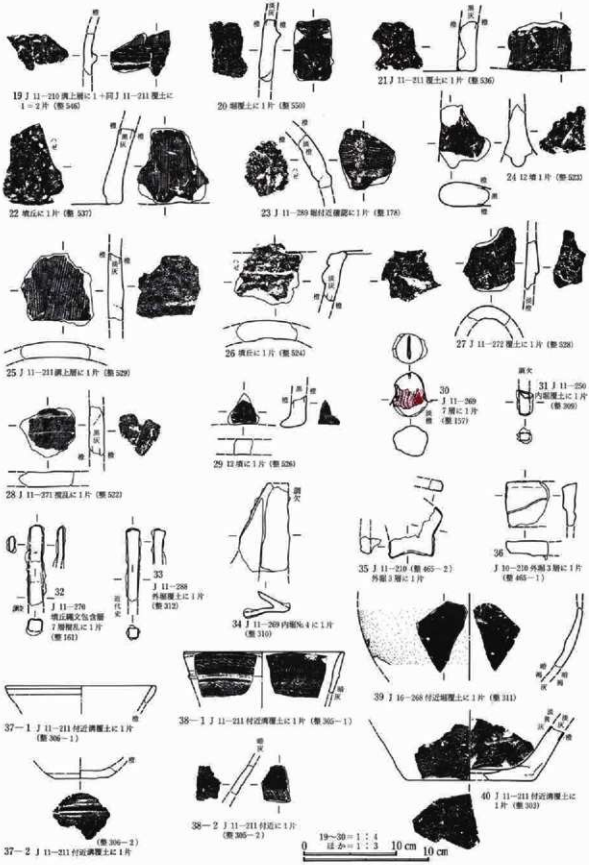
規模は、調査区南西壁下で25.2mの長径をとり、周堀を含むと30.1mを測る。墳丘裾部における基段面の有無は、周堀に深さがあり、かつ墳丘側にゆるやかに立ち上る個所をもって見れば、土層断面Ｇにおいて窺うと、墳丘内側に中段らしき痕跡は弱く、基段なしにより可能性が見出される。

周堀ほか施設　周堀幅は、直交横断の形で測ったとして、最大幅の土層断面Ｇ付近で7.8m、同Ａ付近で4.4m、南東側の同Ｃ付近で4.0m、同Ｂ付近で2.2m、その延長の西壁下で最小の1.38mを測り、横断面浅い皿状を呈す。深さは、土層断面Ｇで86cm、同Ａで48cm、同Ｃで50cm、同Ｂで56cmで、やや均衡に欠ける。調査で露呈させた面が不揃いということではなく底面の深さの差である。周堀中の埋土は、土層断面Ａ・ＣにAs－Ｂの記述があり、埋土の最上層から上層にかけてである。以下周堀中に榛名山噴出物の所見は得られていない。土層断面から考える旧時の墳丘は、土層断面の墳丘側の立ち上り直上に堆積した土層の立ち上りが急勾配でないこと、墳丘築土が崩落したとし得る土塊が埋土中に多く見られない点などから、そう高い墳丘ではなかったと想像され、周堀は掘り上げの土壌によっての築成ではなかったろうか。施設としては、葺石と基段面について、前出のとおりであるが、葺石の有無という点からは、石組が旧時の状態でなくとも、石材量と同級の大きさの石材が揃い過ぎている感があるため、部分的に存在した可能性もある。しかし、周堀中の石材出土記録は、図中に１点もなく、それらの石材が部分葺きの葺石でなく、埋葬施設石材である可能性も考えておく必要もあろう。

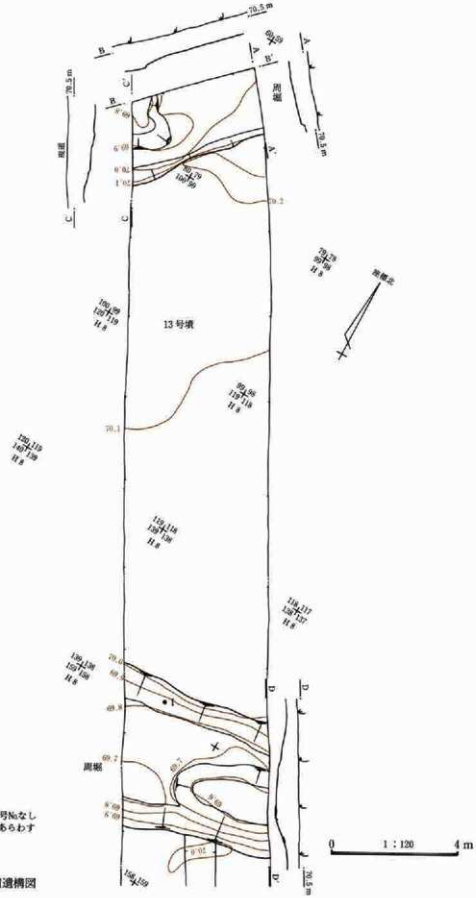
埋葬施設　発見されていない。削平された墳丘部上



第56図　12号古墳遺物図

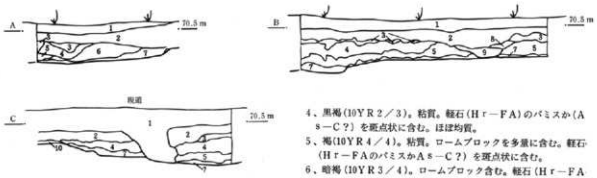


第57図　12号古墳遺物図

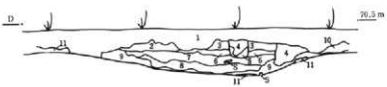


Noが付は現場遺物番号No.なし
は図版遺物番号をあらわす

第58図　13号古墳遺構図



A－C
1、表土。（腐を多く含む）
2、暗褐（10ＹＲ３／３）。砂質。腐を含む。
3、黒褐（10ＹＲ３／２）。砂質。Ａｓ－Ｂ（？）混入土。
4、黒褐（10ＹＲ２／３）。粘質。軽石（Ｈｒ－ＦＡ）のパミスかＡｓ－Ｃ？）を斑点状に含む。ほぼ均質。
5、褐（10ＹＲ４／４）。粘質。ロームブロックを多量に含む。軽石（Ｈｒ－ＦＡのパミスかＡｓ－Ｃ？）を斑点状に含む。
6、暗褐（10ＹＲ３／４）。ロームブロック含む。軽石（Ｈｒ－ＦＡのパミスかＡｓ－Ｃ？）点在。7、黄褐（10ＹＲ５／６）。粘質。ロームブロック主体土。
8、暗褐（10ＹＲ３／４）。砂質。
9、褐（10ＹＲ４／４）。粘質。ロームブロックを多く含む。
10、地山。ローム。



1、表土。
2、暗褐（10ＹＲ３／４）。砂質。
3、黒褐（10ＹＲ２／２）。砂質。Ａｓ－Ｂ？混入土。
4、暗褐（10ＹＲ３／４）。砂質。１層と３層の混土。
5、黒褐（10ＹＲ２／３）。砂質。３層と６層の混土。
6、暗褐（10ＹＲ３／４）。砂質。Ａｓ－Ｂ混入土。ほぼ均質。
7、暗褐（10ＹＲ３／４）。粘質。軽石（Ｈｒ－ＦＡのパミスかＡｓ－Ｃ）点在。ロームブロック点在。
8、黒褐（10ＹＲ３／２）。粘質。軽石。ロームブロックを多く含む。
9、褐（10ＹＲ４／４）。粘質。ロームブロック主体土。
10、褐（10ＹＲ４／４）。やや粘質。腐を含む。ロームブロック含む。
11、地山。ローム。

0　1：60　2 m

第59図　13号古墳土層断面図

第60図　13号古墳遺物図

面の石材に関しては前出のとおりである。

遺物　遺物量と種は、数量表（143頁）のように1503片の遺物があり、埴輪片1280片、土師器58片、須恵器10片ほかであった。埴輪類は、周堀中からの個体は極めて少なく、大半が削平された墳丘部、内堀と呼称された溝などからの出土で、使用されていたとすれば墳丘の中心に近い個所のみであったことを思わせ、周堀への落下は微弱と推測される。また個体のまとまりも極めて悪い。朝顔（１～２）、円筒（３～22）、形象（23～30）がある。そのほか古様の鉄製品が31・32・33にあり、石室遺物か。須恵器では、６世紀初頭頃の西毛製に見える大形甕か直口壺片があり、一個体か、同一焼造の個体で、本墳の時期が示唆される。おそらくは古墳時代の太田金山窯跡群の量産当初を遡る頃の製品であり、地方窯の製品としては、初期の大形化の個体と推測され、竪穴系石室の展開末期に存在しても疑問は生じないであろう。

13号古墳（第58～60図）

13号古墳は、用地取得の関連で、連続した個所ではなく、最南端のH8区の一角を調査し発見された古墳である。旧民家の庭中である。調査は、試掘トレンチにおいて周堀が発見され、さらに拡幅用地約4m幅で拡張が行なわれた。13号古墳は、長さ約41mのH8区の北半に位置している。

位置　H8－79・80・98～100・118・119・137～139・156～158に位置する。行政区分は大字西長岡字南483である。標高は調査で露呈させた面上で約70.0mで、庭地上面で70.4～70.6mにある。

重複　周堀に直接重さなる遺構はない。墳丘の削平化の経緯は、前出の11号古墳の項に同じである。

墳丘と規模　小調査区で、南北2個所の溝跡が古墳の周堀であると認められた理由は、埋土による共通性があったためと思われる。墳形は面積少なく判然としない。規模は、周堀を含まない南東壁下の内法で18.6m、北側周堀幅を、南側周堀幅と同級とした場合、27.2mを測る。周堀幅を4.32mとした場合である。

周堀ほか施設　周堀は、土層断面A、Dが、墳丘側に対し、ほぼ直交してあり、浅い皿状を呈する。同Dは、墳丘側が急勾配にならず、外側が急となり、ローム・ブロックを主体土とする注記番号9に本来性があるのではとも思われる。周堀の幅は、土層断面Aで幅2.15＋αm、深さ約20cm、同Dで幅4.32m、深さ34cmを測る。施設として墳裾の基段は、土層断面Aは浅過ぎ、同Dでは相当の個所に上層からの掘り込みがおよび判然としない。葺石に関する記録はないが、記録写真等からなしと判断される。

埋葬施設　発見されていない。周堀の浅い状態の残存は、低い墳丘と墳丘削平の顕しさとが示唆され、埋葬部は失われた可能性があるとしておきたい。

遺物　遺物数量と種は143頁のように82片あり、うち埴輪片65片、土師器4片、須恵器2片ほかである。埴輪片は消耗が顕著で本墳に使用されたとは考え難い。土師器は小片で図示に耐えず、全量9g である。須恵器は後代の資料である。第60図1・2は、埴輪形象である。

14号古墳（第61・62図）

14号古墳は、拡幅用地と現道の全面拡張の際、現道直下で発見された。以南東の12号古墳までは110mの距離があり、12号古墳から45mの位置に11号古墳があり、さらに以南東には連続した形で古墳が続いている。丁度、粗な密度からさらに外れた位置関係の場所にある。北西の台地上端縁辺からは約70mの位置である。隣接は畑地である。

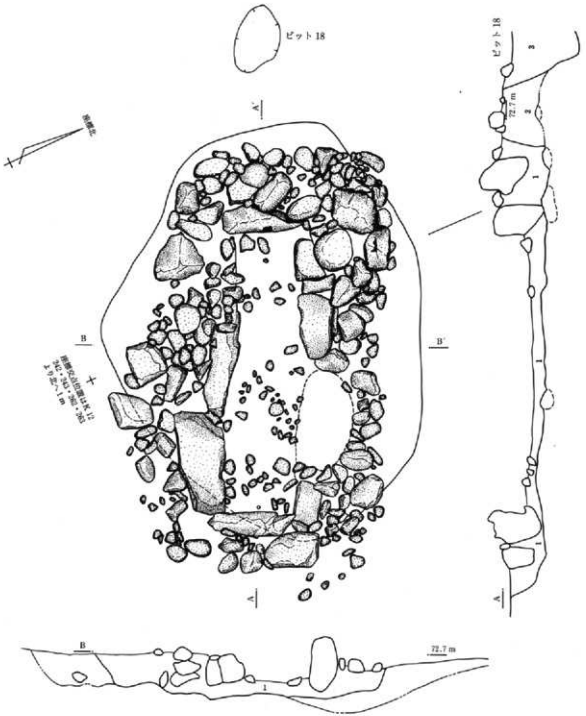
位置　K12－242・243にあり、行政区分では大字西長岡字南346に位置する。標高は、調査で露呈された面上で72.7m前後である。

重複　周堀が発見されていないため、直接の重さなりはない。北東に後世と思われる8号溝が、周辺に柱穴様の小穴群が存在する。

墳丘と規模　竪穴系石室のみの発見で、低位の墳丘であったのか判然としない。

周堀ほか施設　発見されていない。

埋葬施設　小形の竪穴系石室で、主軸は座標北からN67°Wをとり、石室規模は、記録保存図の石室内面底の細線の位置で、長さ1.47m、東小口壁幅0.35m、西小口壁0.36m、高さは、最大壁高で0.22mである。石室の石積みは、石材の多くが、小口面を石室に並行させ、最大面を横組にしているように見え、50～60cm級の大材が2石、同抜き取られ1石があり、南側壁の西端、北側壁の両端に小形石材を用い部分的に2石積が見える。天井石は既に失われている。裏込めもしくは控えの石材は、石室内端から幅約50cm前後で築かれたらしく、後世の攪乱が少なかったように思える西小口背側から北側壁、東小口壁背面にかけては、石室の長



1、黒褐(10ＹＲ３／１)。やわらかな黒褐色土を主体とし、礫を多く含む。地山に礫が多く、石室用の礫なのか、地山の礫なのか、細くは判別不能。

2、黄褐(10ＹＲ４／４)。黄褐色土と、砂礫の混土。この礫を切り込んで、石室は作られた。

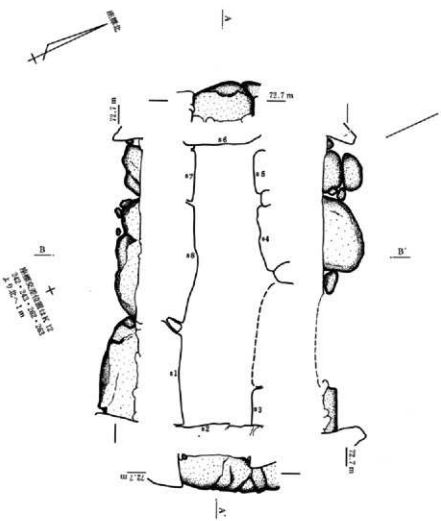
3、黒褐(10ＹＲ２／２)。小礫混じりの黒褐色土。さらっとしていて、粘性弱い。

0　1：20　1 m

第61図　14号古墳遺構図

軸に直行および平行させた石材が見られ、土層断面Ｂでは、平面が攪乱されているのではとの心配の念は残るが、南側壁の控積とおぼしき状況がある。それら、裏込め、控えの形態は、石室の外周を隅丸長方形気味に、長さ2.22m、幅1.30m前後で巡って施されて見える。石室掘り方と石室床面に関し、土層断面注記１に「やわらかな黒褐色土を主体とし、礫を多く含む。地山に礫が多く、石室用の礫なのか地山の礫なのか、細くは判別不能。」とあり、苦慮しながらの調査であったことが窺える。その点は土層注記１が石室内底面と掘り方間および石室裏まで共通土層とし、石室外面の石材の範囲と掘り方範囲の不一致などの点にあらわれている。そのため石室床に関し、内容は不明であり、石室掘り方はあったにちがいないが、平面形、規模は推奨できる状態にない。

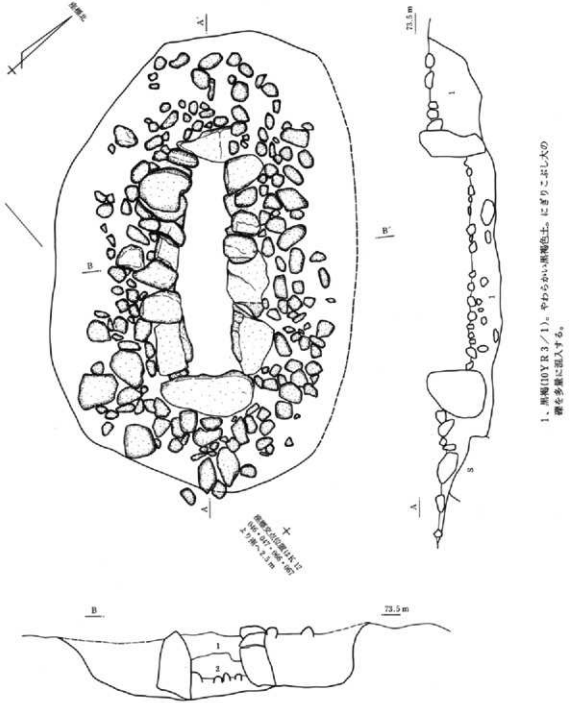
遺物　遺物数量と種は、143頁のように礫が２袋、9.5kgがある。小礫である。このほか出土遺物はないため、遺物から時期は知れない。



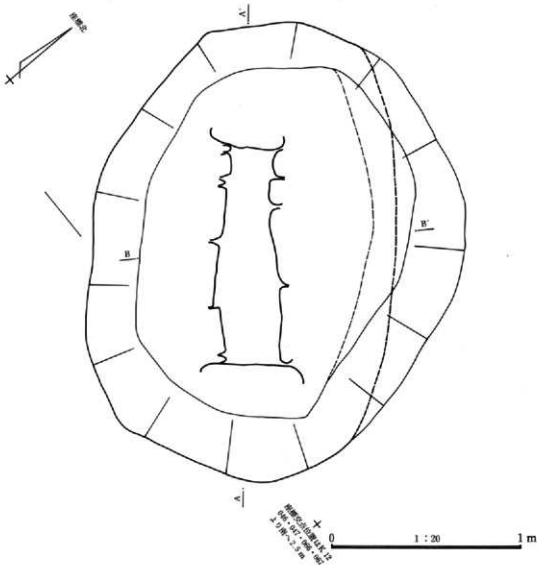
石材の種類
- #１、溶結凝灰岩。別称（金山石）。
- #２、溶結凝灰岩。
- #３、溶結凝灰岩。
- #４、安山岩。別称（河原礫：亜円礫）。
- #５、安山岩。別称（河原礫：亜円礫）。
- #６、溶結凝灰岩。別称（金山石）。
- #７、溶結凝灰岩。別称（金山石）。
- #８、溶結凝灰岩。別称（金山石）。
- ※　以上現場観察

0　1：20　1 m

第62図　14号古墳遺構図



第63図　15号古墳遺構図



第64図　15号古墳遺構図

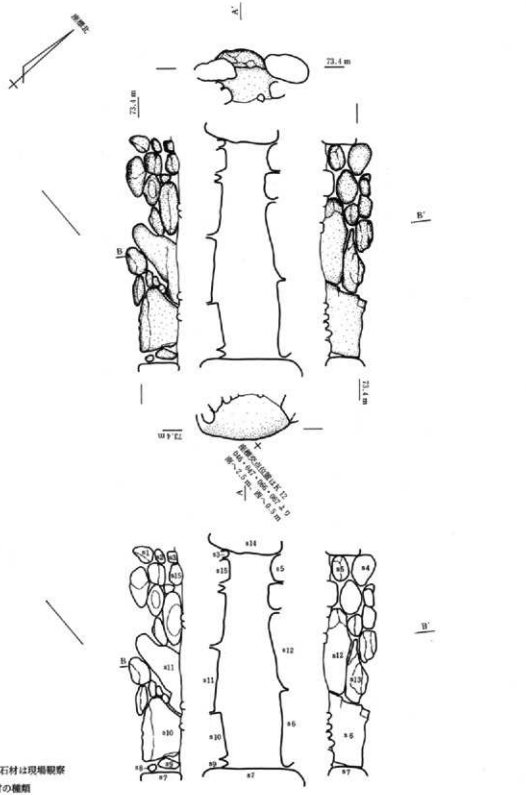
15号古墳（第63～65図）

15号古墳は、拡幅用地、現道の全面拡張の際、拡幅用地側から発見された。そこは台地縁辺の場所で、古墳群の北縁の一角にも相当する。前出14号古墳から60m離れる。立地は台地上ではあるものの調査で知れた台地縁辺上端より20m弱、台地側に入る占地である。

位置　K12―67にあり、行政上は、大字西長岡字南346に位置する。標高は、調査で露呈させた面で72.45m前後である。

重複　石室のみの範囲では重複はない。南側3m離れて形態上、機能の判然としない14号土坑がある。

墳丘と規模　墳丘は痕跡すらも記録されていない。低位の墳丘であったのかも不明で、周堀の発見もない。ただ気にかかる点は、写真図版23に示めしたように、発見の当初は、試掘の段階で、周囲に多量の河原石が存在して写されている。その中には旧石室材とも見える大きさや、拳大に見える小石も存在し、乱雑な感は認められる。そして石室周囲に至るにつれその量は多いように見える。それらの石頻について調査担当の大



※石材は現場観察

石材の種類

ｓ１～ｓ５・ｓ８・ｓ９は川原石転石。

ｓ７は川原石転石（安山岩）。

ｓ６・Ｓ10～Ｓ14は金山石。

ｓ15はやわらかく砕けた石。φ１～５㎜の砂状となる。

第65図　15号古墳遺構図

木紳一郎にたずねたところ、古墳関連か地山石か判然とせず、しかも石組状態を呈していなかったので除去したとのことである。結論的には、墳丘関連であったのか、明確でない。

周堀ほか施設　前述のとおりである。

埋葬施設　小形の竪穴系石室であり、主軸は座標北より51°Wを指し、規模は、石室内面底で1.13m、北東小口壁下の幅0.23m、南東小口壁下の幅0.28m、最大の壁高で0.27mを測る。石室の石積みは、記録写真や石室図を見ると30cm以上の石材は、最大面を石室内面に揃えた横組に用いられ、北に近い側につれ小材を多石に積み上げ、多い個所は３石積みとなる。石室上面と、両小口壁上面とほぼ同じ高さで上面が揃うため、この高さで天井石が存在した可能性は、考えうる。石材は角ばりのとれた山石と丸みのある河原石からなる。石室上面の状態は、石室に平行か直角に配されて組まれた状態は薄く、むしろ上面に敷かれてあるように見え、その敷かれたようにある石材端部と、掘り方上法との間に整然とした石材境があるようには見えない。石室床面は、記録図には５cm弱の円礫が石室底面上に存在し、その直下構造について土層断面Ａの注記１には「やわらかい黒褐色土。にぎりこぶし大の礫を多量に混入する。」とあり、以下にもそうした礫が続いている。石室埋土について、土層断面Ｂがあり、礫の表現がないため、石の混入は少ないらしい。そうした点からすれば、石室床面はこの拳大もしくは５cm弱の石材で構かれたと考えられ、上面に砂が敷かれていたか否かまでは分からない。石室掘り方は、その礫石直下15cm弱のところに基面があり、上面からは35cmの深さがある。平面形は楕円形を呈し、長径2.42m、短径1.58mを測る。この掘り方築土に礫が含まれていたかは、記録写真には写されて見え、それは石室上面の周囲に写されて見えるのと似た状態である。また、掘り上げられた掘り方の写真には、地山に含まれた石材が写されて見え、それは15cm程度が最大で、大多数がその２分の１か３分の１程度の大きさに思える。

遺物　57片の総量のうち、埴輪片５、土師器片45ほかであるが、本墳との関連は薄い個体である。

２、住 居 跡

住居跡は、調査で明らかとなった古墳の主体時期である６世紀前半頃と年代上ひらきのある古墳時代前期およそ４世紀頃の生活址で、４棟址が発見されている。住居跡は、連続的に調査されたＪ10～Ｋ13区の375mの間の北半にあり、相互では、北寄りの１号住居跡から南寄りの３号住居跡まで40mの間に存在する。調査地内の台地縁辺から最も遠い３号住居跡まで約100mの位置であり、おおむね、台地縁辺の存在として良い位置でもある。以南、成塚石橋遺跡Ⅱの古墳時代～平安時代の住居跡の北端から数え、その間住居跡が発見されなかった個所は1.7kmにもおよんでいる。

住居跡ではないものの、縄文時代前期の土器の出土が、12号古墳のあたりから点々と粗密はあるものの出土しており、その中には、被熱の底部欠損の深鉢（第89図１）の存在があり、縄文時代住居跡は至近の場所に存在したか、調査地内に存在したものの、住居跡として発掘可能な土壌になかったと解釈される。また縄文時代土器の器面や割れ口が風化消耗しているのかと云うと、そうでもなく、やはり台地縁辺付近を利用した縄文時代の生活址域に調査区域は、およんでいたと見た方が良いと考えられる。

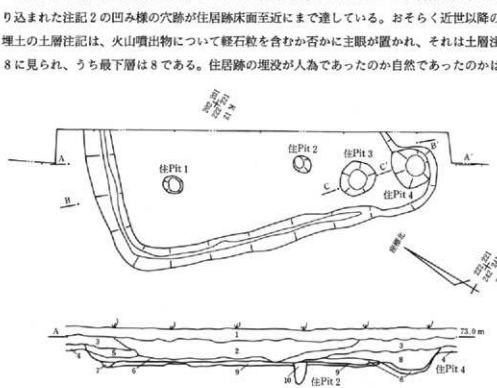
古墳時代前期の一群を除く土師器・須恵器の出土は、６世紀頃の個体が複数であり、各々古墳周堀などからの出土傾向が高いため、存在の主因は古墳関連と考えられるが、７世紀から10世紀頃までの個体は、極めて少ないながら古墳周堀や現耕作土などから出土している。その頃の遺物は生活関連であれば、量的な出土があるため、調査地内での生活は考え難い。

１号住居跡（第66・67図）

１号住居跡は、調査区際にあり、過半が未調査地外に延びるが、現地表面との関係が知れる住居跡でもある。調査中に調査対象域ぎりぎりまで約50cm拡げての調査努力が行なわれている。そのため土層断面は、拡張前に図化されたものである。

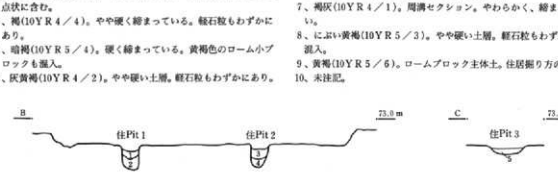
位置　K12−202・221・222にあり、行政区は大字西長岡字346に位置する。標高は、調査で露呈された面上で72.8m前後。地上の畑面で73.2m弱である。

重複と埋土　平面図の重複遺構は、住居跡南西隅部の穴跡ピット４について「部分拡張なのか、または別時代のものなのか、はっきりとはわからなかった。しかし部分拡張、あるいは極めて近い土坑の可能性が高いと思われる。」と現場所見がある。このほか土層断面を見るとAにおいて、耕作土直下の土層注記３から掘り込まれた注記２の凹み様の穴跡が住居跡床面至近にまで達している。おそらく近世以降の重複であろう。埋土の土層注記は、火山噴出物について軽石粒を含むか否かに主眼が置かれ、それは土層注記２・３・５・８に見られ、うち最下層は８である。住居跡の埋没が人為であったのか自然であったのかは、ローム層のブ



左図のＰｉｔ４は、部分拡張なのか、または別時代のものなのか、はっきりとはわからなかった。しかし、部分拡張、あるいは極めて近い時期の土坑の可能性が強いと思われる。

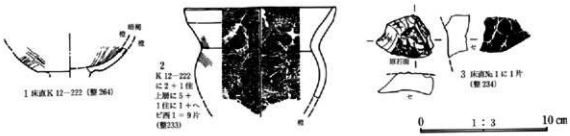
1、にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）。表土。
2、黒褐（10ＹＲ３／１）。やわらかい。φ１～５mm程の軽石粒を斑点状に含む。
3、褐（10ＹＲ４／４）。やや硬く締まっている。軽石粒もわずかにあり。
4、暗褐（10ＹＲ５／４）。硬く締まっている。黄褐色のローム小ブロックも混入。
5、灰黄褐（10ＹＲ４／２）。やや硬い土層。軽石粒もわずかにあり。
6、にぶい黄褐（10ＹＲ５／４）。にぶい黄褐色土を主体に、明黄褐ローム小ブロックや、２層の小ブロックも含む。
7、褐灰（10ＹＲ４／１）。周溝セクション。やわらかく、締まり弱い。
8、にぶい黄褐（10ＹＲ５／３）。やや硬い土層。軽石粒もわずかに混入。
9、黄褐（10ＹＲ５／６）。ロームブロック主体土。住居掘り方の土。
10、未注記。



1、灰黄褐（10ＹＲ４／２）。さらっとした土を主体に、小礫を混入。
2、褐（10ＹＲ４／４）。さらっとした土を主体に、小礫を混入。
3、灰黄褐（10ＹＲ４／２）。さらっとした土を主体に、小礫を混入。
4、褐（10ＹＲ４／４）。さらっとした土を主体に、小礫を混入。
5、黒褐（10ＹＲ３／１）。さらっとした土を主体に、小礫を混入。黄褐色の小ブロックもわずかにあり。

0　1：60　2 m

第66図　１号住居跡遺構図



第67図　１号住居跡遺物図

ロックが土層観察のうえでは目立つ存在であるので、それを見ると土層断面６に小ブロックの記述があるが、人為とするには、土層記述の接極性に欠け、判断困難である。

形態と規模　発掘された平面は、隅丸方形の南西隅部を持ち、周壁が外側に膨む傾向を持つ。長辺で4,83m、深さは床面までで0.30m、周溝までで0.37m。柱穴の深さと直径はピット１で直径0.33m、深さ0.38m、ピット２で長径0.30m、深さ0.37mを測り、両穴の柱間2.05m前後で方向性はN39°30′Wである。このほか、ピット３は直径0.51m、深さ0.11m、ピット４は直径0.75m、床面側からの深さ0.13mを測る。

床面は土層断面注記９の上面であったらしく、同９は掘り方埋土でロームブロックを主体としているとある。その直上に土層断面注記６が載るが、床面の最上面がこの中に存在したのかは記述がなく、床面そのものの硬化に触れるところがない。したがって周溝埋没上面に床が存在したのかも明らかでない。ピット３と周溝の関係は、周溝がピット３の付近で止まるので、本住居跡との因果はあった可能性があり、埋土は土層断面注記５の「さらっとした」とあるので住居廃棄後の埋没のようだ。ピット４は住居域から張り出した構造の穴跡で、土層断面注記６が下方に堆積して見える。このピット４に関しては前述と、第66図右上に現場所見を加えておいた。住居との同時性の可能性が触れられ、調査時に貯蔵穴かとの指摘がある。

遺物　第67図に示した。写真では、図示の２点が床面に至近に、その他が床から離なれての存在で、住居跡北西隅部側では、最上面から住居跡内側へ流れ込むかのような傾向に見えた。瑪瑙原材が注目される。

２号住居跡（第68〜70図）

２号住居跡は、北端の１号住居跡と南端の３号住居跡との間にあり、現道直下で発見され、未掘地延長は舗装部分であり、拡張困難のようである。

位置　K12−281・282・301・302に位置し、大字西長岡字南347にある。標高は、発掘で露呈させた面上で72.65m前後である。

重複と埋土　重複は平面上ではない。埋土は、住居跡の残存が浅く、埋土そのものの傾向を知るためには弱い。土層断面Ａは埋土というよりも住居跡床面を含む下部構造のようである。火山軽石の関係においては、As−Ｃが入ることを土層断面注記１は触れている。注記１を写真で見ると、礫・土器が多量に含まれてあり、床面は、同１の基面であったらしい。床の硬化は記録がない。

形態と規模　平面は、隅丸の長方形を呈し。N85°E。長辺で4.32m、短辺で2.78mを測る。土層断面１の最下面まで、調査上面より0.1mである。柱穴はじめ諸施設は、基底層である土層断面注記２に「礫を多量に含む」とあり、柱穴などが存在していれば、発見されうる条件は整っていたように思える。そのため、本来的に存在しない可能性が強い。

遺物　第69・70図のように多い。写真を見ると、住居跡中央から北壁中央にかけ、10cm前後の河原石を大

とし、それ以下の礫が多くある中で、土器の大形片が一括まとまってではなく、かと言って散在というほどでもなく、粗な状態で出土している様子が窺える。この遺物の出土状態で奇異なのは、この住居跡の生活に伴なう廃棄は遺物の周囲に多量の礫が入る点から疑問に感じられる。少なくとも礫に方向性は薄く、大きさの片寄る傾向も薄く、住居跡廃棄とは別の行為の所産に見える。

遺物は、数量表と種について、143頁のように662片があり、うち土師器656片、取り上げ混入の可能性のある陶器１片、弥生土器１片（第70図15）がある。土師器は器台（１）、高坏（２・３）、風化気味で胎土が共通の２個体以上ありそうな壺（４～６）、甕（７～14）がある。９には焼成後の穿孔がある。このほか土師器片の中で埴輪疑似の16があるが消耗顕著で、後世の時期の疑念もある。

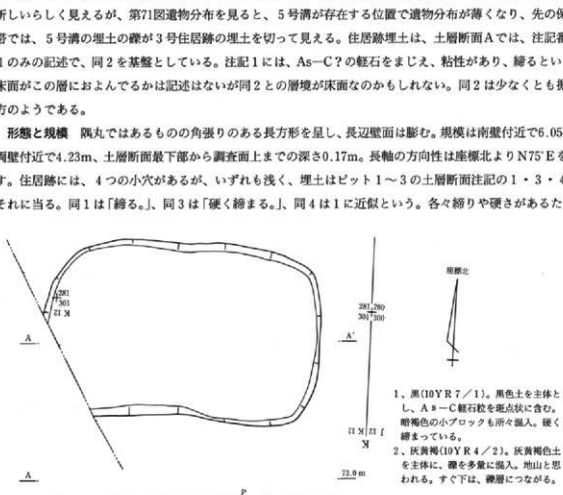
３号住居跡（第71・74図）

用地拡幅側所から発見され、未掘の延長部に現道の舗装が存在していた。第71図の東半の調査界下の70m幅の未掘は、現道に対する保安部らしい。

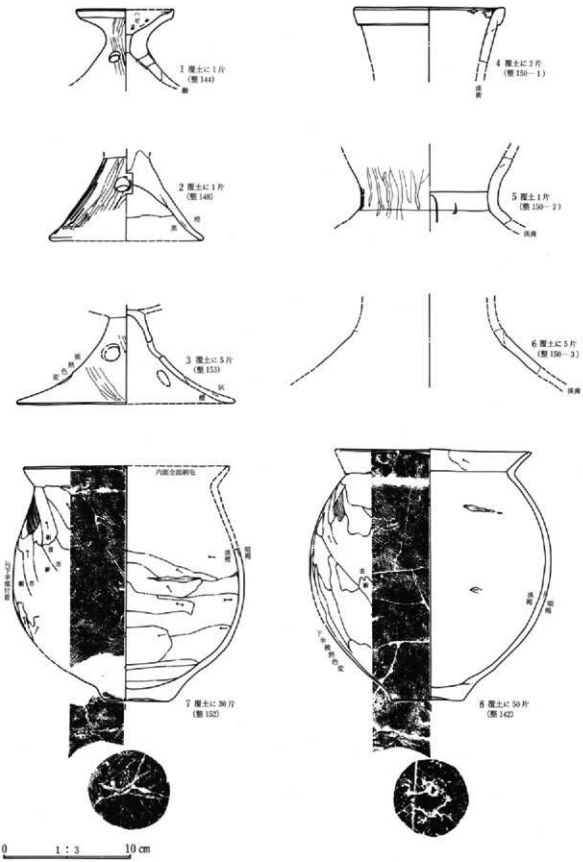
位置　J12－338・339・358・359に位置し、大字西長岡字南347・348にまたがっている。標高は、調査で露呈させた面上で72.38m前後である。

重複と埋土　５号溝と重複しており、平面調査順では５号溝が後出して調査されているので、住居跡が、新しいらしく見えるが、第71図遺物分布を見ると、５号溝が存在する位置で遺物分布が薄くなり、先の保安帯では、５号溝の埋土の礫が３号住居跡の埋土を切って見える。住居跡埋土は、土層断面Ａでは、注記番号１のみの記述で、同２を基盤としている。注記１には、As－Ｃ？の軽石をまじえ、粘性があり、締るという。床面がこの層におよんでるかは記述はないが同２との層境が床面なのかもしれない。同２は少なくとも掘り方のようである。

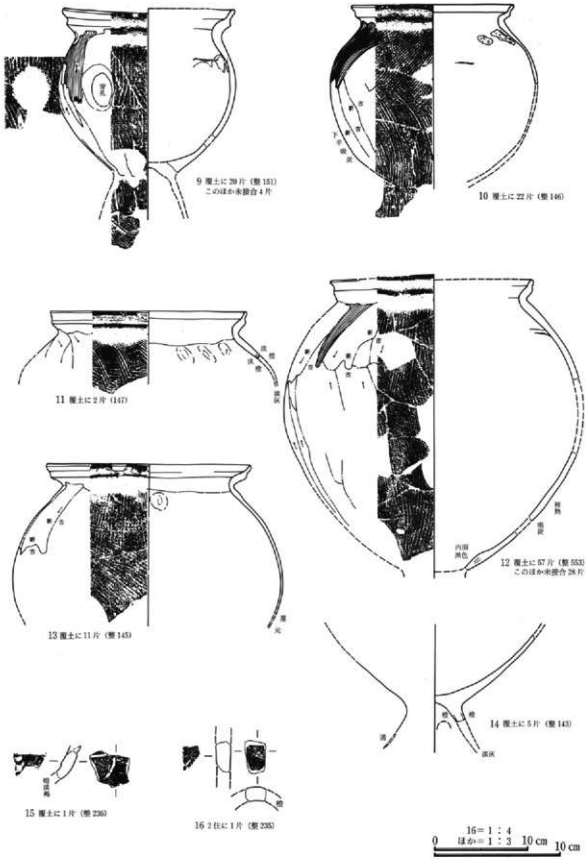
形態と規模　隅丸ではあるものの角張りのある長方形を呈し、長辺壁面は膨む。規模は南壁付近で6.05m、両壁付近で4.23m、土層断面最下部から調査面上までの深さ0.17m。長軸の方向性は座標北よりＮ75°Ｅを指す。住居跡には、４つの小穴があるが、いずれも浅く、埋土はピット１～３の土層断面注記の１・３・４がそれに当る。同１は「締る。」、同３は「硬く締まる。」、同４は１に近似という。各々締りや硬さがあるため、



第68図　２号住居跡遺構図



第69図　２号住居跡遺物図



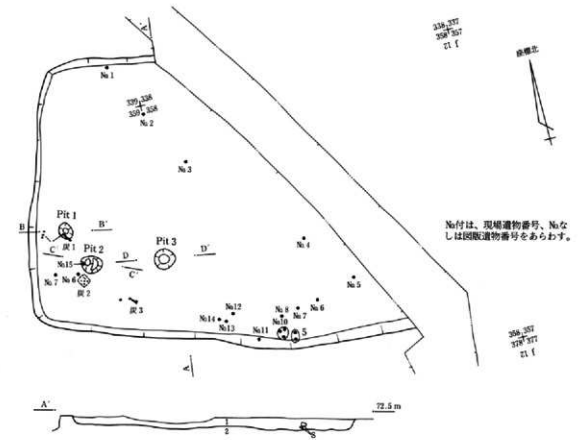
第70図　2号住居跡遺物図

住居跡と関連があるのかもしれない。

遺物　写真図版を見るように、住居跡基底面上の遺物は少なく、仮りにそれを床面としたら、伴なう遺物は少ない。遺物の集中は、南側壁付近に多く、壁面付近では高位に、住居内につれ、低位となる遺物の存在傾向があるため、それらは埋没過程の遺物と推定される。遺物は、数量と種について143頁のように全量236片であった。うち土師器片230、埴輪疑似２片、木炭４点であった。土師器は１～４に高坏、５に甕、６に台付甕がある。破片量の割りに復元可能な個体は少ない、５の甕は破片不足で、図不良の感がある。高坏２の坏欠損部は、旧時の破損後の削磨により、再整形されている。

４号住居跡（第73・74図）

東側は、調査地外で、住居跡の西隅部のみの発見で、用地端まで拡張しての調査であった。東接は桑園である。調査地は、拡幅用地内である。土層断面は地上面まであり、遺構埋没の状況と、現在までの土層堆積

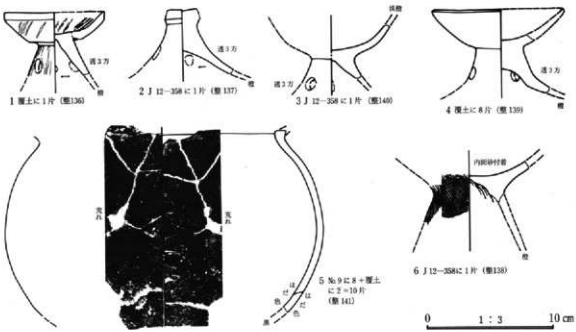


1、灰黄褐（10ＹＲ４／２）。φ１～５mmの軽石粒（Ａｓ－Ｃか）を斑点状に含む。
2、にぶい黄褐(10ＹＲ５／４)。粘性があり、締まった層。小礫を含む。

1、褐灰（10ＹＲ４／１）。粘性のある土層。枝豆大の小石を混入。硬く締まっている。
2、にぶい黄褐(10ＹＲ５／３)。地山。粘性があり、硬く締まっている。
3、褐灰（10ＹＲ４／１）。１層に近似。φ３cm程の小石を混入。硬く締まっている。
4、灰黄褐（10ＹＲ４／２）。１層に近似。

第71図　３号住居跡遺構図

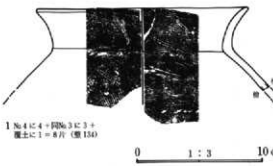
0　1：60　2 m



第72図　３号住居跡遺物図

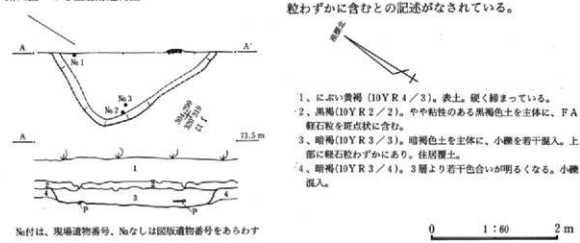
状態の一端が知れる。

位置　J 12−299・300に位置し、大字西長岡字南346・347にある。標高は調査面で72.7m付近である。



第74図　４号住居跡遺物図

重複と埋土　平面上の重複はない。土層断面において耕作土直下の土層断面注記２が失なわれず、水平気味に堆積している。住居跡の掘り込みは、土層断面注記４の上面からである。同４は、旧表土としての黒色味はなく、暗褐色を呈しており、旧黒色土位置は、さらに高かったようである。埋土としての土層断面注記３は、ローム層などのブロックの記述がなく、埋没に関しての人為性は薄いようである。なお同３には軽石粒わずかに含むとの記述がなされている。

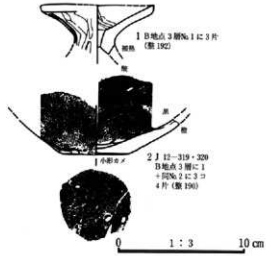


№付は、現場遺物番号、№なしは図版遺物番号をあらわす

1、にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）。表土。硬く締まっている。
2、黒褐(10ＹＲ２／２)。やや粘性のある黒褐色土を主体に、ＦＡ軽石粒を斑点状に含む。
3、暗褐(10ＹＲ３／３)。暗褐色土を主体に、小礫を若干混入。上部に軽石粒わずかにあり。住居覆土。
4、暗褐(10ＹＲ３／４)。３層より若干色合いが明るくなる。小礫混入。

第73図　４号住居跡遺構図

第75図　グリッド遺物出土位置図



第76図　B地点遺物図

形能と規模　南西隅部の形は、隅丸方形の一端を示めすが、住居跡の短、長辺の規模は不明である。南側壁大で2.2＋αm、掘り込み面からの深さは0.26m。方向性は南壁を基とすると、座標北よりN59°Wを測る。床面は、土層断面注記３の下方と考えられるが、硬化の状態や、床面との所見が判然としない。同４の下方、つまり同３の直下は、自然礫を主とする層である。

遺物　極めて少ない。記録写真類に写されている量も少ない。遺物量と種は、144頁のとおり、全量で31片があり、総て土師器である。第74図１は甕である。各住居跡の中で最少量であるのは、調査面積量によるためと考えられる。

A～C地点（第75・76図）

J 12—319・320・339・340にある。住居跡の発見には至らなかったものの、４世紀頃の土師器片が、ある程度、まとまって出土した個所である。A～C地点で呼称され、235片のうち後世の陶器１、縄文土器１、石１点がある。第76図はB地点の器台１、甕２を掲げた。

３、溝　跡

溝跡は、K13区以北にある12号溝～23号溝までを低地側として、それを除く溝跡を台地側として、分けて記述したい。注意点として、高低の走行は、急に深くなったり、溝幅が広がってゆく場合にはある程度判別可能であるが、台北上の小溝は、調査時点であっても高低の走行判断は困難な場合が多く、本書では、無理をしないで考える範囲にとどめた。溝の方向性は、おおむねである。なお末尾に無番として扱われた溝跡について若干触れておきたい。

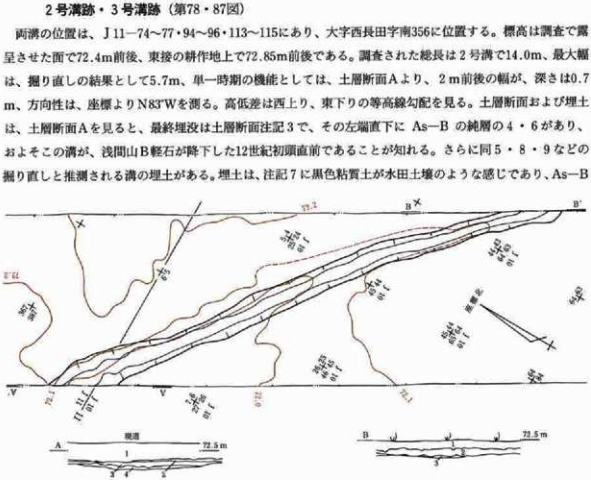
台地側

１号溝跡（第77・87図）

位置は、Ｊ10－５～７・24～26・43・44・63、Ｊ11－386・387にあり、大字西長岡字南405－１・406に相当し、標高は調査で露呈させた面で71.8m前後であり、東接の耕作地面上で72.5m前後である。調査された総長28.7m、最大幅1.80m、深さ0.32m。方向性は座標北よりN53°Wを測る。高低差は、東南壁側より北西壁側が15cm低く設けられる。字南405－１・406との地境とは、位置は近いものの、20°弱の方向性に差があり、関連は直接的でない。埋土は、主体が粗質な砂質であるもののロームブロックが各層に点在し、早くから埋没したようで、明瞭な掘り直しは図中に見えない。流水があったか否かは、土層断面Ｂの土層注記３に「粘性」とあり、流れたこともあったのかもしれない。遺物は、数量、種について144頁のように４片がある。いずれも土師器片で小片である。至近位置から第87図１の鉄滓がある。それは少し茶紫がかった鉄滓で、片面に炉底面が印象された椀形であり、極めて小形である。

２号溝跡・３号溝跡（第78・87図）

両溝の位置は、Ｊ11－74～77・94～96・113～115にあり、大字西長田字南356に位置する。標高は調査で露呈させた面で72.4m前後、東接の耕作地上で72.85m前後である。調査された総長は２号溝で14.0m、最大幅は、掘り直しの結果として5.7m、単一時期の機能としては、土層断面Ａより、２m前後の幅が、深さは0.7m、方向性は、座標よりN83°Wを測る。高低差は西上り、東下りの等高線勾配を見る。土層断面および埋土は、土層断面Ａを見ると、最終埋没は土層断面注記３で、その左端直下に As－B の純層の４・６が有り、およそこの溝が、浅間山Ｂ軽石が降下した12世紀初頭直前であることが知れる。さらに同５・８・９などの掘り直しと推測される溝の埋土がある。埋土は、注記７に黒色粘質土が水田土壌のような感じであり、As－B

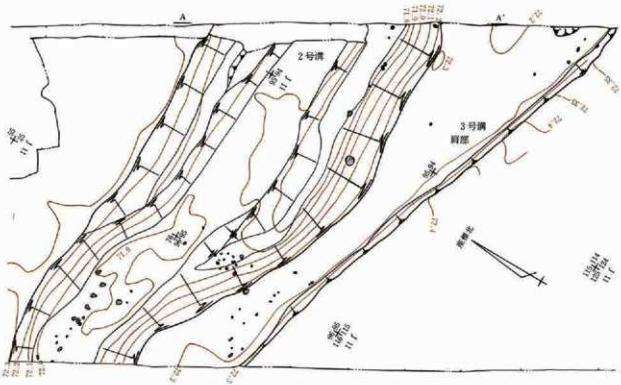


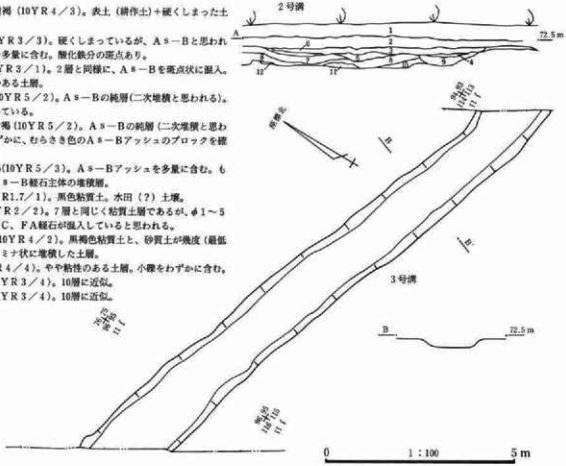
1、表土。（アスファルト等も含む）。
2、暗褐(10ＹＲ３／３)。やや砂質。３層と１層（ロームブロック）との混土。
3、黒褐(10ＹＲ２／３)。砂質。ロームブロック点在。軽石粒含む。１号溝覆土。
4、にぶい黄褐(10ＹＲ４／３)。ロームブロック主体土。１号溝覆土。

1、表土。
2、黒褐(10ＹＲ２／３)。砂質。ロームブロック点在。軽石粒含む。１号溝覆土。
3、褐(10ＹＲ４／４)。粘質。ロームブロック主体土。１号溝覆土。

0　1：200　10m

第77図　１号溝跡遺構図





1、にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）。表土（耕作土）＋硬くしまった土層。
2、暗褐(10ＹＲ３／３)。硬くしまっているが、Ａｓ－Ｂと思われる軽石粒を多量に含む。酸化鉄分の斑点あり。
3、黒褐(10ＹＲ３／１)。２層と同様に、Ａｓ－Ｂを斑点状に混入。やや粘性のある土層。
4、灰黄褐(10ＹＲ５／２)。Ａｓ－Ｂの純層(二次堆積と思われる)。さらっとしている。
5、にぶい黄褐（10ＹＲ５／２）。Ａｓ－Ｂの純層（二次堆積と思われる)。わずかに、むらさき色のＡｓ－Ｂアッシュのブロックを確認できる。
6、にぶい褐(10ＹＲ５／３)。Ａｓ－Ｂアッシュを多量に含む。もちろん、Ａｓ－Ｂ軽石主体の堆積層。
7、黒（10ＹＲ1.7／1)。黒色粘質土。水田（？）土壌。
8、黒褐(10ＹＲ２／２)。７層と同じく粘質土層であるが、φ１～５mmのＡｓ－Ｃ、ＦＡ軽石が混入していると思われる。
9、灰黄褐（10ＹＲ４／２)。黒褐色粘質土と、砂質土が幾度（最低５回）もラミナ状に堆積した土層。
10、褐(10ＹＲ４／４)。やや粘性のある土層。小礫をわずかに含む。
11、暗褐（10ＹＲ３／４)。10層に近似。
12、暗褐（10ＹＲ３／４)。10層に近似。

第78図　２号・３号溝跡遺構図

直下に通有に見られる現象でここにも共通し、おそらく滞水があったのであろう。同８も粘性の状態があり、同９には「ラミナ状」に砂質土が堆積したとあり、明らかに通水の状況を示めす。以下の同10～12も粘性傾向があるという。以上の機能の主体は、通水していた形跡を示めす土壌の埋没から用水路を推定したい。

３号溝は、２号溝に南接してあり、規模は、調査総長15.2m、最大幅1.78m、深さ0.27mを、方向性は座標北よりN71°Wを測り、現地境の方向性に近い。埋土、土層断面記録はない。２号溝の掘り直しであるのか時期のまったく異なる段階の溝なのか判然としない。

両溝の遺物は、数量、種とも144頁に示したように、３号溝付近として鉄製遺物が１点ある。２号溝については確認面および付近で各１点鉄製遺物がある。第87図３・４は２号溝付近の出土で、３は古代鉄疑似であり、４は古代鉄に見えた。５は３号溝付近で洋鉄製に見え、被熱のためか錆色に白ら気がある。

４号溝跡（第79・87図）

位置は、Ｊ11―17・18・38、Ｊ12―377・397・398に位置し、大字西長岡字南348・356の地境にあり、標高は、溝跡の掘り込み面上で72.5m前後であり、北東壁の耕作地上で72.8m前後である。規模は、調査総長12.7m、最大幅2.4m、深さは掘り込み面より0.33mを測り、方向性は座標北よりN23°Eを指向し、極めて直線的な走行である。高低は、最深部が東に下る傾向がある。埋土および掘り込みは、土層断面Ａによれば、土層注記４から掘り込まれる。同４に「水田が確認された土層」とは、この土層の個所ではなく、K13区以北の低地で見た土質感を言っているのであろう。FAパミスとはHr―FAのことであり、古墳時代の土層のようである。同６に「粘性のある」とあり、滞水していたようにも思えるが、流水を説明する砂の記述がなく明確でない。

遺物は、数量・種とも144頁に示したように土師器片２があるに過ぎない。第87図６は４世紀頃の土師器甕片で、内面に磨耗痕と凍ハゼの剝落がある。

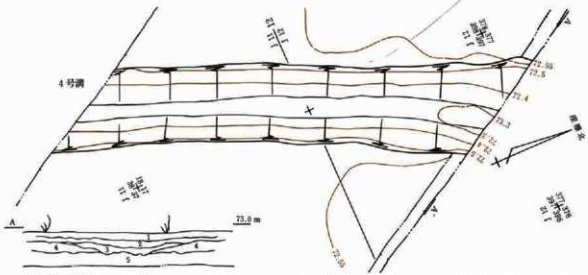
５号溝跡（第79・87図）

位置は、Ｊ12―319・338～340・358・359にあり、大字西長岡字南347・348に位置する。標高は掘り込み位置で72.75m前後である。形態は90°北方向に分岐する溝があり、横断面形は浅いＵ字状を呈す。規模は、調査した総長で16.9m、分岐部分4.4m、最大幅2.6m、深さは、土層断面位置で掘り込み面より0.3m前後を測る。方向性は蛇行気味であるので、西寄りで座標北よりN76°Wを指向している。底面の勾配は、やや東下りの傾向がある。埋土は、土層断面Ａによれば、埋土である土層注記２・３には砂質とあるが流水と関連づくのかは、説明不足でわからない。図中に見られる小礫は、地山に含まれた可能性があり、そのいくつかは地山に喰い込んで見える。構築時期は、遺物から18世紀以降であろう。

遺物は、156片あり、土師器139片のほか近世以降の陶・磁器片４を含む。第87図９・10はそのうちの陶器片で、10は18世紀頃、９は、15・16世紀の舶載と見られる中世陶器片である。

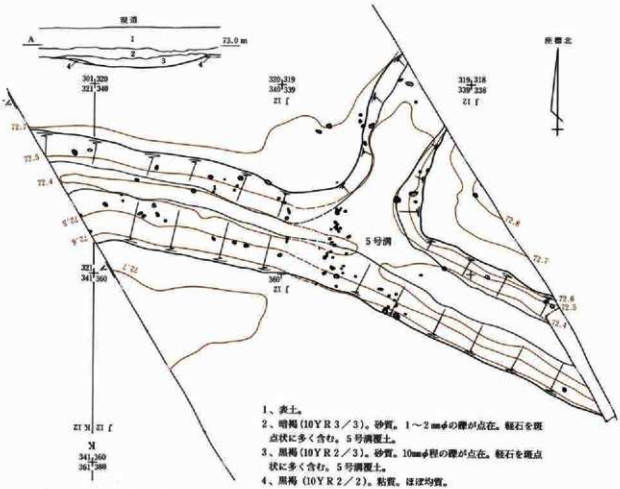
６号溝（第80・87図）

位置は、Ｊ10―５・24・25・43・44にあり、大字西長岡字南405―１・406に位置し、標高は、掘り込み面上で、72.4m前後である。形態は、畑作に伴なう長方形の穴跡に近似し、３穴が縦列に並んだため溝跡として扱かわれたようである。深さは記入がなく、最南西にある穴跡が、壁面の図示により、掘り込み面から0.5m以上の深さであることが知れる。幅は1.0m前後あり、壁面は、垂直気味に下がる。方向性は座標北より



1、にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）。表土。
2、灰黄褐(10ＹＲ４／２)。硬く締まっている。φ1～5㎜の軽石粒を含む。
3、黒褐(10ＹＲ３／１)。粘性のややある土層。φ１～５㎜の軽石粒を含む。
4、黒（10ＹＲ1.7／１)。粘質土層。水田が確認された土層。ＦＡパミスを混入。
5、にぶい黄褐(10ＹＲ４／３)。粘性のある土層。こぶし大の礫が所々混入する。

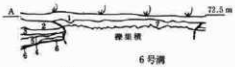
0　1：100　5 m

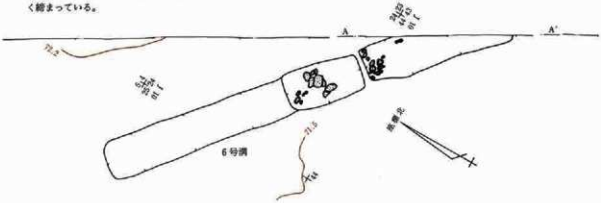


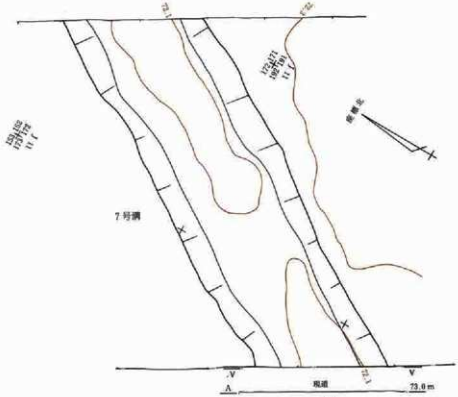
1、表土。
2、暗褐(10ＹＲ３／３)。砂質。１～２㎜φの礫が点在。軽石を斑点状に多く含む。５号溝覆土。
3、黒褐(10ＹＲ２／３)。砂質。10㎜φ程の礫が点在。軽石を斑点状に多く含む。５号溝覆土。
4、黒褐（10ＹＲ２／２)。粘質。ほぼ均質。

第79図　４号・５号溝跡遺構図

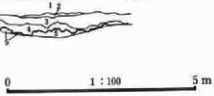
1、暗褐（10ＹＲ３／３）。耕作土。やわらかく、縛り弱い。
2、暗褐（10ＹＲ３／４）。硬く締まった層。Ａｓ－Ａと思われる。
　軽石粒をまばらに含む。
3、黒褐(10ＹＲ３／１)。Ａｓ－Ｂを多量に含む層。所々Ｂのアッ
　シュ小ユニットで混入。
4、黒褐（10ＹＲ２／２）。やわらかい黒色土。
5、にぶい黄褐（10ＹＲ４／３）。黒色土と、ロームが混じった層。
　断移層。
6、にぶい黄褐（10ＹＲ５／３）。５層の土を主体に明黄褐（2.5Ｙ
　６／６）のロームブロックとの混土。
7、黄褐(10ＹＲ５／６)。黄褐色土を主体に、砂質土を混入し、硬
　く締まっている。







1、表土。
2、黒褐（10ＹＲ２／３）。砂質。固い。ほぼ均質。
3、暗褐（10ＹＲ３／３）。砂質。固い。ほぼ均質。
4、暗褐（10ＹＲ３／４）。粘質。ロームブロックを多く含む。
5、地山ローム？（多少混土しているようにも見える）→混土脱を
　とって７溝として処理。



第80図　６号・７号溝跡遺構図

N49°Wを指向する。南西側に接する1号溝とほぼ平行の関係にある。掘り込み位置から、近世以降の所産で、最東の穴跡埋土には、11号古墳の石室材らしき石が多く見える。遺物は、数量・種とも144頁のように、519片と多量である。その多くが埴輪片で11号古墳に起因する個体である。第87図11～20に示したうち20に近代の十能瓦（地方瓦名称）が含まれ、昭和の所産が最も新しい。中世資料も含まれ、付近での生活か。

7号溝跡（第80・88図）

位置は、J11―171～173・192・193・212・213にあり、大字西長岡字南354・356にまたがる。標高は掘り込み上面付近で72.5m前後である。重複は6号土坑、7号土坑・6号風倒木痕と重さなり、新古の関係は不明である。

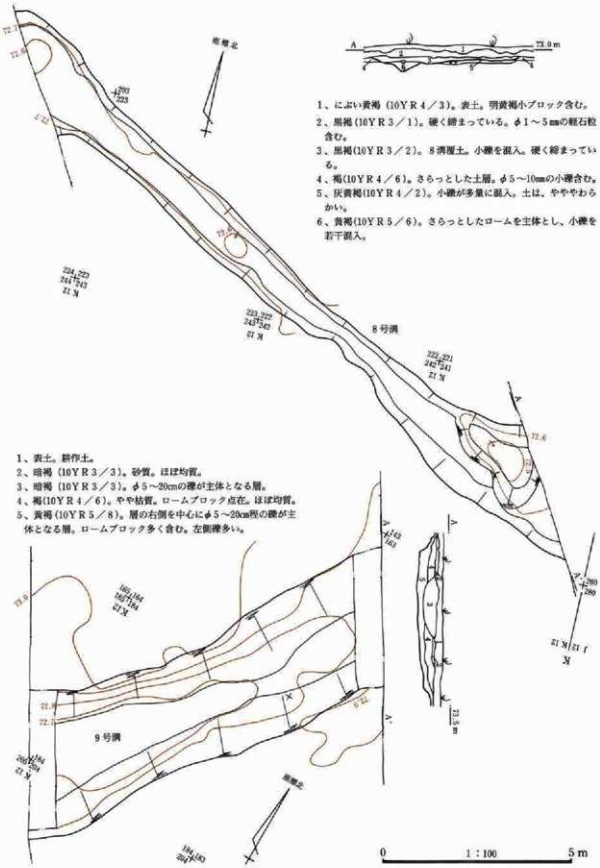
規模は、調査の総長12.1m、最大幅3.4m、深さ0.45mである。方向性は、座標北よりN32°Eを指向する。底の勾配は、北に低いようにも見えるがはっきりしない。埋土は、土層断面Aを見ると浅いU字状の横断面形の端は、3の下層の端から掘り込まれているらしく、土層断面注記4が直接の埋土のようである。同4は砂質とあるが、流水か、滞水によるものか自然埋没の土壌なのか明確でない。同5に「混土層をとって7溝として処理。」現場所見があるが、おそらく、底面凹凸が著しいことによる混土で、それは7号溝の掘り方側に含めるか、埋土の一端に含めたらよいのか迷い、担当者間で、湿潤に伴なう踏み込みとか旧時の溝掘りの工具によるとかなどに伴なう混土説であったのであろう。記録写真で、その状態を見ると粘性の強い土に見える。構築の時期は、掘り込み上面が耕作土直下層よりさらに下方にあるので近世以前であろう。遺物は、数量・種とも144頁のとおり、取り上げがないが、至近の場所から、第88図21に示した中世軟質陶器鉢片があり、14・15世紀頃の遺物である。これが7号溝の構築に直結したとすれば中世であろう。

8号溝跡（第81・88図）

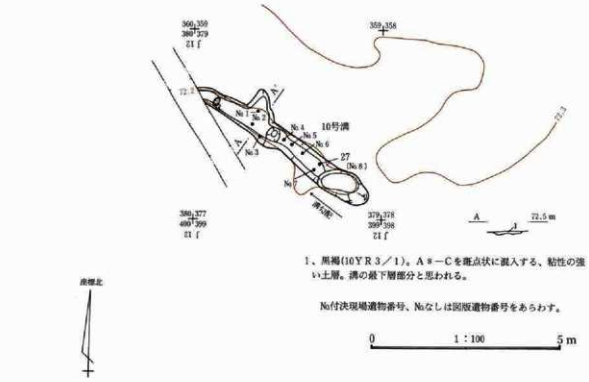
位置は、K12―204・222・224・241・242にあり、大字西長岡字南346に存在する。標高は、土層断面Aの掘り込み面らしき位置で72.8m前後である。横断面は、全体に浅い掘り込みで部分的にV字状を呈する個所がある。規模は、調査の総長で20.5m、最大の幅で2.35m、深さ0.35mを測る。方向性は、座標北よりN56°30′Wを指向する。埋土の状況は、土層断面Aによれば、掘り込み位置は、耕作土直下層より下であるので近世以前の所産であろう。土層断面注記3が埋土上方で、「硬く締まる」とあり、直上に道などがあったためだろうか。同4は「さらっと」とあり粗質のようであり、同5もそれを受け「やわらかい」とある。同6に至っても「さらっと」と粗な感じが表現されている。この溝跡に流水があったのが土層注記では判然としないため記録写真を見ると、同3より下方は砂質の感じがあり軟らかそうではあるが、風性、水性かは判読できない。遺物は、数量・種とも、144頁のように、出土はない。至近の遺物として第88図22の種不明鉄製遺物と古代の灰釉陶器様の23とがある。ともに直接資料ではない。

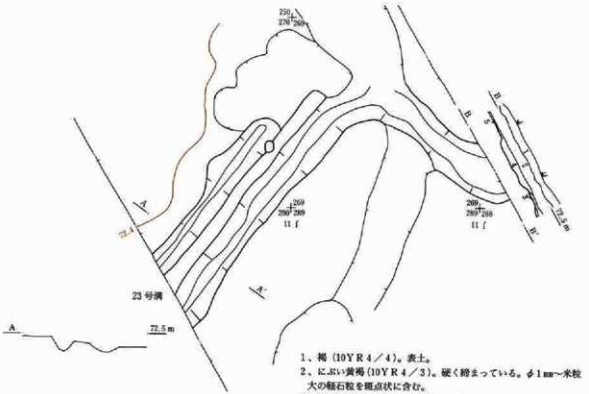
9号溝跡（第81・88図）

位置は、K12―163・164・183～185・204にあり、大字西長岡字南346に存在する。標高は、土層断面Aの掘り込み位置で73.2m前後である。横断面形は浅いU字状である。規模は、調査の総長11.4m、最大幅3.4m、土層断面Aでの深さ0.48m、方向性は座標北よりN40°Eを指向する。重複遺構は平面上ない。埋土は、土層断面Aを見ると注記3に浅いU字状の凹みが見え、ずっと後出時期の掘り込みで、直接の関係はないであろう。注記4・5に埋土記述があるが、溝の機能を示唆する内容は少ない。同注記層を写真で見ると、風性埋



第81図　８号・９号溝跡遺構図





第82図　10号・23号溝跡遺構図

没としうるほど粗質には見えないが、水性とも云い難い感じであり、何んとも云えない。遺物は、数量・種ともに144頁のように82片がある。そのうち、第88図24が最も新しく昭和の所産である。

10号溝跡（第82・88図）

位置は、Ｊ12―379・380にある。大字西長岡字南348に存在した。標高は、調査面上で72.3m前後である。土層断面Ａによれば、横断面形は、浅いＵ字状を呈している。重複遺構はない。規模は調査総長で5.3m、溝状を呈する部分の最大幅0.64m、横断面形Ａでの深さ0.1m前後。方向性は座標北よりN57°Wを指向。理土は、土層断面注記１に、As―Ｃを含む記述があり、また古墳時代前期の土器を伴なうため、構築は古墳時代らしい。遺物は、数量・種ともに144頁のように24片がある。近世陶・磁器の出土はなく、石を除き、すべて土師器片である。第88図は、４世紀頃の器台、27は小形甕なしの壺で丁寧な作調である。

23号溝跡（整）（第82図）

位置はＪ11―268～270・290にあり、大字西長岡字南354－２・405－２にまたがる。標高は掘り込み上端で71.2m前後である。この溝跡は調査時点では、遺構名称はなく、11号古墳の溝として扱われていた。しかし、土層断面Ｃの掘り込み位置は、耕作土直下の土層断面注記２より下方にあり、少なくとも近世を含む以前と思えること、土層注記４に「硬く締っている。」とあり、道状の硬化らしき記述があり、さらに溝の凹みが、近世の道遺構などに多い扁平な浅いＵ字状を呈していることから、道跡に有機的につながると考えられるので溝の扱いで、整理時に新番号を加えた。規模は、調査時の総長で9.1m、土層断面Ｃ下での幅1.3m、深さ0.16mを測る。方向は南西側の直線的部分で座標北よりN37°Ｅを測る。出土遺物は、遺構名称が付されていなかったので周辺まとめての取り上げであろう。その中に第88図32の鋳鉄製鋤先片が存在する。

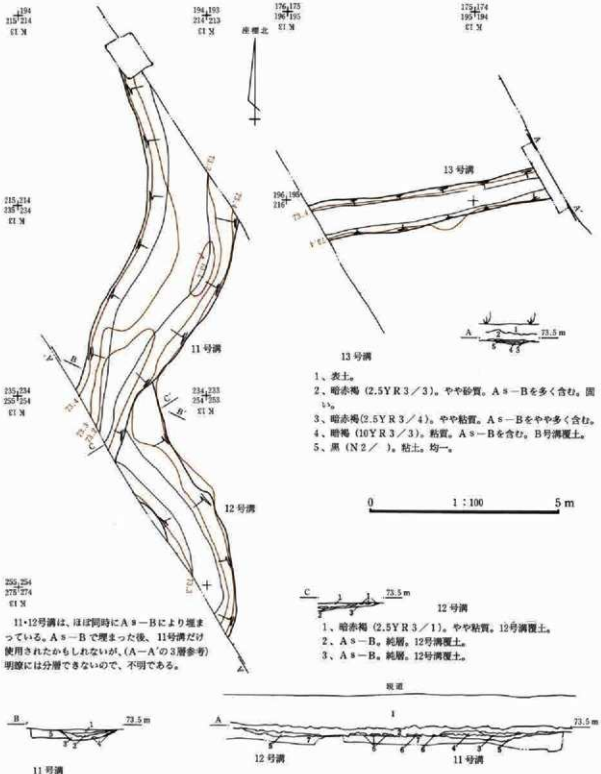
低地側

11・12号溝跡（第83・88図）

位置は、K13―213・233・234・253・254・273・274、大字西長岡字南328－２の桑園中である。標高は、掘り込み面上で72.3～72.4mである。規模は、11号溝跡で、調査総長10.5m、最大幅2.43m、深さ0.22m、方向性は、座標北からN17°Ｅの前後、12号溝跡は、調査総長7.1m、幅0.13m、深さ0.1m前後、方向性は、およそ北西に傾ひくが蛇行気味である。両溝別々の機能ではなく、12号溝が接続した形の平面である。両溝の掘り込み面は、土層断面Ａが、現道から示されてあり、土層注記１は、表土で約70cmあり、写真を見ると大半が盛土で、道路のためか礫を多く含む。同２は、かつての表土もしくは、耕作土下の土層で、その直下に両溝があり、As―Ｂを多量にまじえるとあることからすると、同２の厚さが20cm弱であるのは、層厚に不足が感じられ、既に除去されたか流出していたようである。同２の直下層から両溝は掘り込まれ、接してある同６に As―Ｂ純層とあることから、両溝は、12世紀初頭前後には存在していたようであるがそうは測らない。基部である同７は黒色粘土という。機能は、水路であろう。傾きは、11号溝が南下り、12号溝は水平気味である。遺物は、数量・種とも144頁のとおり。11号溝から土師器７片があり、12号溝からの遺物はない。第88図28・29は消耗しており、他の破片と同様に漂白化が顕著である。29は５世紀頃の高坏に見える。

13号溝跡（第83図）

位置は、K13―194・195・214・215、大字西長岡字南328―2の桑園中である。標高は、掘り込み面上で73.



11・12号溝は、ほぼ同時にＡｓ－Ｂにより埋まっている。Ａｓ－Ｂで埋まった後、11号溝だけ使用されたかもしれないが、(Ａ－Ａ′の３層参考)明瞭には分層できないので、不明である。

13号溝

1、表土。
2、暗赤褐（2.5ＹＲ３／３）。やや砂質。Ａｓ－Ｂを多く含む。固い。
3、暗赤褐(2.5ＹＲ３／４)。やや粘質。Ａｓ－Ｂをやや多く含む。
4、暗褐（10ＹＲ３／３）。粘質。Ａｓ－Ｂを含む。Ｂ号溝覆土。
5、黒（Ｎ２／　）。粘土。均一。

12号溝

1、暗赤褐（2.5ＹＲ３／１）。やや粘質。12号溝覆土。
2、Ａｓ－Ｂ。純層。12号溝覆土。
3、Ａｓ－Ｂ。純層。12号溝覆土。

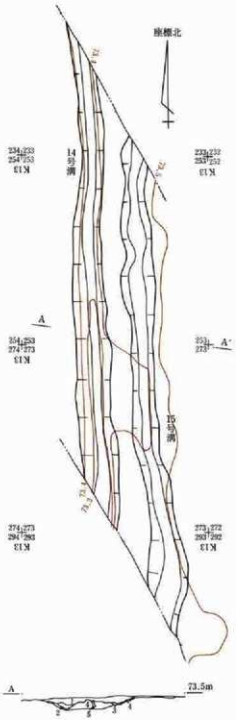
11号溝

1、暗赤灰（2.5ＹＲ３／１）。やや粘質。Ａｓ－Ｂを多く含む。11号溝覆土。
2、暗赤褐(2.5ＹＲ３／２)。粘質。Ａｓ－Ｂを含む。11号溝覆土。
3、Ａｓ－Ｂ。純層。11号溝覆土。
4、黒（Ｎ２／　）。粘土。均一。
5、極暗赤褐（2.5ＹＲ２／４）。

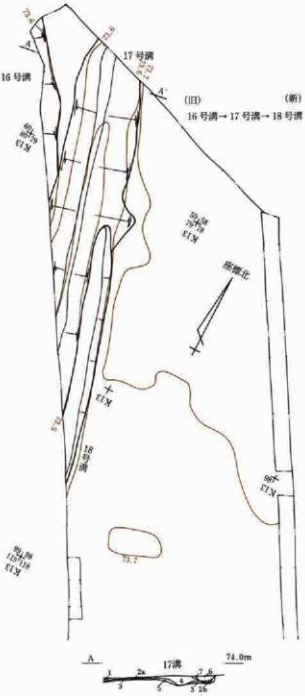
12号溝　11号溝

1、表土。
2、暗赤褐（５ＹＲ３／２）。砂質。Ａｓ－Ｂが多量に混土。
3、黒褐（10ＹＲ３／１）。やや粘質。Ａｓ－Ｂ混土。
4、暗褐（10ＹＲ３／３）。やや粘質。Ａｓ－Ｂ混土。
5、Ａｓ－Ｂ、純層。11・12号溝覆土。
6、Ａｓ－Ｂ、ほぼ純層。
7、黒（10ＹＲ1.7／１）。粘土。

第83図　11号・12号・13号溝跡遺構図



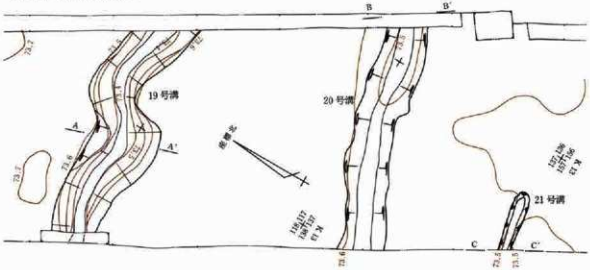
1、暗赤褐（2.5ＹＲ３／２）。砂質。Ａｓ－Ｂ混土。硬い。
2、黒褐(10ＹＲ２／３)。やや粘質。Ａｓ－Ｂ含む。硬い。14号溝覆土。
3、黒褐(10ＹＲ２／３)。Ａｓ－Ｂをやや多く含む。硬い。15号溝覆土。
4、極暗赤褐（2.5ＹＲ２／２）。粘質。軽石粒を多く含む。硬い。
5、根痕。



1、暗赤褐(2.5ＹＲ３／２)。粘質。Ａｓ－Ｂが少量混土している。16号溝覆土。
2ａ、Ａｓ－Ｂ主体層。16号溝覆土。
2ｂ、黒褐(10ＹＲ３／１)。砂質。Ａｓ－Ｂを多く含む。18号溝覆土。
3、黒褐（10ＹＲ２／２）。粘土。均質。
4、暗赤褐（2.5ＹＲ３／３）。砂質。Ａｓ－Ｂ混土。硬い。17号溝覆土。
5、極暗赤褐（2.5ＹＲ２／２）。やや粘質。Ａｓ－Ｂ混土。17号溝覆土。
6、暗赤褐（2.5ＹＲ３／２）。砂質。Ａｓ－Ｂ混土。18号溝覆土。
7、根痕

0　1：100　5 m

第84図　14号・15号・16号・17号・18号溝跡遺構図



19号溝

1、暗赤褐(5YR3／2)。粘質。As－B含。明黄褐(10YR6／8)粘質土を多く混入。19号溝覆土。
2a、As－B層。純層に近いが多少混土している。
2b、As－B純層。
3、黒褐(10YR3／1)。As－Bを少量含む。明黄褐(10YR6／8)粘質土を混入。19号溝覆土。

20号溝

1、暗褐(10YR3／3)。As－Bを多く含む。パサパサ。
2、暗褐(10YR3／3)。1層よりAs－B少ない。
3、As－B純層。
4、黒褐(10YR2／2)。粘性強く。FAを少量含む。

21号溝

1、暗褐(10YR2／4)。表土層。
2、暗褐(10YR2／4)。下位にAs－Bを多く含むが、純層ではない。
3、As－B。
4、黒褐(10YR2／2)。FAパミスを少量含む。
5、黒(10YR2／1)。4層に近く、FAパミスを含む。
6、黒褐(10YR2／2)。砂と粘質土の互層。FAパミスを少量含む。
7、黒(10YR2／1)。粘粒強く、均質。上位ではAs－Cを少量含む。

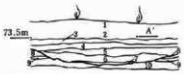
0　1：100　5m

第85図　19号・20号・21号溝跡遺構図

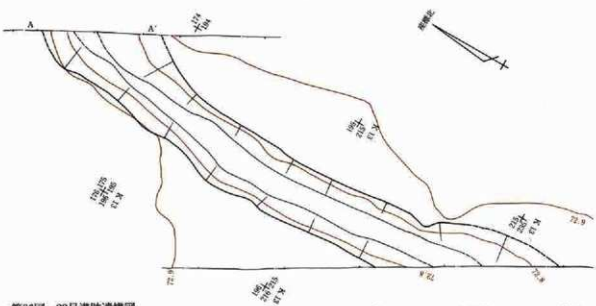
4m前後である。規模は、調査総長で6.5m、最大幅1.1m、深さ0.1m前後を測り、方向性は、座標北よりN80°Eを指す。土層断面Aによると掘り込み面は、土層注記2の下の層である。同2には、As—Bを多く含むとあり、さらに溝埋土同3も多いという。基部は、前出11・12号溝のそれに似て黒色粘土とある。同2は耕作土直下であり、さらにその下にある溝であるので構築の時期は、近世を含む以前から、12世紀頃までが考え得て、機能は水路であろうか。遺物は、数量・種とも144頁のように、ないが、11号溝に結ばれるため、11号溝として取り上げられた可能性はある。

14・15号溝跡（第84・88図）

位置は、K13—233・253・273・293にあり、大字西長岡字南328—2の桑園中に位置する。標高は、調査で露呈させた面上で73.4m前後である。規模は、14号溝で、調査総長13.55m、幅0.9m、深さは、調査上面から35cm、方向は座標北よりN1°Wである。15号溝は、調査総長13.4m、幅1.0m、深さは、調査上面から、30cm、方向は座標北よりN3°Wである。方向性は、数字で表わせば角度差で生じるが、平面上は平行する。両溝は横断面形浅いU字状を呈する。埋土には As—B をまじえ、およそ近世を含む以前から12世紀頃までが考えられ、機能は水路であろうか。南に向って14号溝は下る。特に両溝が北を指向し、直線的であるのは、



1、暗褐（10ＹＲ２／４）。表土層。
2、暗褐（10ＹＲ２／４）。下位にＡｓ－Ｂが多いが純層ではない。
3、黒褐（10ＹＲ２／２）。粘性を帯び、均質。パミスは含まない。
4、黒褐(10ＹＲ２／２)。３層より色調がやや暗く、ＦＡパミスを少量含む。
5、黒（10ＹＲ２／１）。４層に近く、ＦＡパミスを含む。
6、黒褐(10ＹＲ２／２)。砂と粘質土の互層。ＦＡパミスを少量含む。
7、黒褐（10ＹＲ２／３）。粘質土でパミスを含まず。
8、黒褐(10ＹＲ２／２)。φ１～５mmのＦＡパミスを含み、全体に網目様の酸化鉄斑紋がみられる。
9、黒褐（10ＹＲ２／２）。ＦＡパミス・ブッシュ（10ＹＲ６／４）を多く含む。ブロック状の純層部分もある。
10、黒(10ＹＲ２／１)。粘性強く、均質。上位ではＡｓ－Ｃを少量含む。

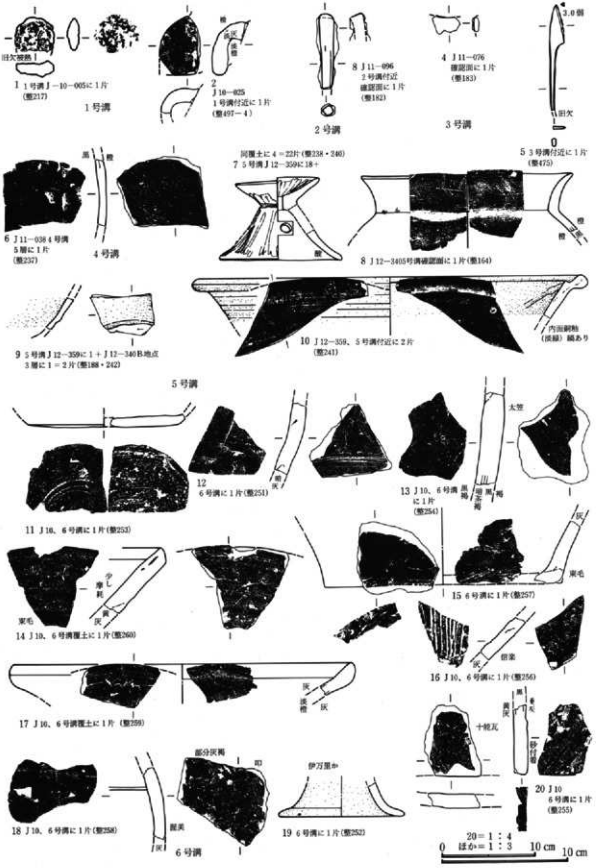


第86図　22号溝跡遺構図

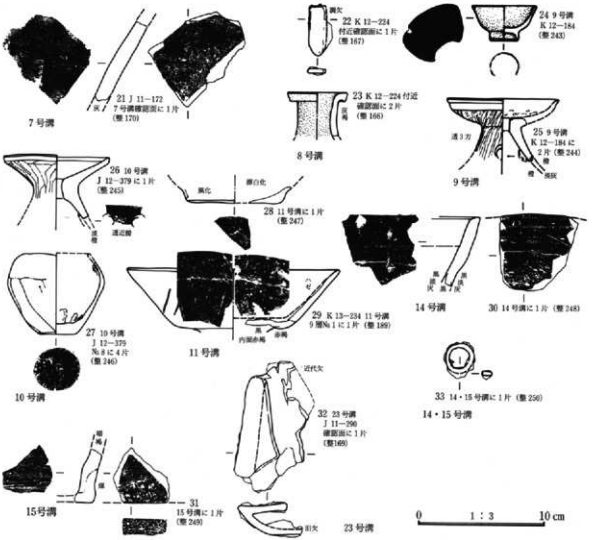
耕作に係わる可能性が強いであろう。なぜならば、区画設定を行なった個所ほど直線的である必要性は増すからである。遺物は、数量・種とも144頁のとおり、14号溝として５片があり、第88図30の近代軟質陶器が最も新しい。15号溝は23片があり、第88図31の近代軟質陶器が最も新しい。

16・17・18号溝跡（第84図）

位置は、K13―59・60・79・98・99にあり、大字西長岡字南328－１・333（桑園）に位置する。３条の溝は平行してあり、それらの高所の調査面は、標高73.68m、低所は73.60mほどである。規模は、調査面上で、16号溝跡の総長4.8m、幅0.52＋αm。深さ0.14m、方向性は、座標北よりおよそN34°W。17号溝跡は調査面上で、総長10.02m、幅1.82m、深さ0.26m、方向性は座標北よりN16°W。18号溝跡は、調査面上で、総長6.8m、深さ0.21m、方向性は座標北よりN17°Wである。各々全体の成り行の勾配は、南に下る。埋土は土層断面Ａによれば、As―Ｂが少なからず混入しており、地上から、溝までの深さを記録写真で見ると、字南328－１の低位の面まで30cm前後の厚さに見え、それは、上方からの後世の混入が、そうおよばないであろうと考えられる深さであるため、これらの溝の構築は、近世を含む以前から12世紀頃までの間と考えたい。３条の溝跡は、相互が重なりあい、本来、１条の溝の掘り直しの結果なのかは不明確ながら、おそらくは共通の目的、つまり、水路として機能したのではないだろうか。各々出土遺物はないが、群馬県地域では、12・13世紀に地方窯業不毛に近い時期があり、土器の出土は稀れである。そのため、３条の溝の時期は、この段階に相当しているのかもしれない。



第87図　溝跡遺物図



第88図　溝跡遺物図

19・20・21号溝跡（第85図）

位置は、K13−97・98・117・118・136・137・138・157にあり、大字西長岡字南328−１の桑園下に存在する。それらの溝跡は、重複はないものの２〜３m離れた近接の関係にある。19号溝跡は、調査総長5.65m、最大幅1.82m、深さ0.38m、方向性は座標北よりN82°Wの。20号溝跡は、総長6.2m、最大幅1.18m、深さ0.15m、方向性は座標北よりN79°Wを測り、直線的である。21号溝跡は、総長1.65m、最大幅0.43m、深さ0.06m、方向性は座標北よりN80°Wを測る。19号溝跡の埋土は、土層断面Ａによれば、埋土低位に土層断面注記２ｂに As−B 純層とあり、同層による直接埋没を示めしている。さらにその後の使用があったらしく、土層断面Ａの左半に中段があり、掘り直しが行なわれ、As−B の降下時である12世紀初頭以降も使用されていたようである。構築の当初は、降下時を、どのくらい遡ぼりうるのか、以下の断ち割り図がなく不明である。掘り込み位置は、溝跡の上方が大きく開き出しているので、調査面からそう高くない位置であったと推測される。20号溝跡は、全体断ち割られた土層断面Ｂがある。その中で土層番号３は As−B の純層とあり、機能の時期は12世紀初頭であったことが知れる。さらに上方に掘り返しの痕跡が薄いことから As−B の堆積により機能の停止があったとも考えられる。構築の時期は、その直下に土層断面番号３があり、それは、As

—B の堆積した溝成りに近い形状を呈し、深さも極めて浅いため、構築当初は12世紀初頭を、そう遡った時期ではなく、11世紀中頃までだろうか。機能は先の19号溝と合わせ、水路と想像されるが、As—B の降下の頃に、両溝は機能していたと推測され、19号溝跡は降下後に掘り直しが、20号溝は、As—B の降下からそう遡ぼらない時期の構築である。以上を通じ、水路として考えると、溝水位の少ない、水田面水位との落差の少ない、低落差の灌漑水路を用いた水田が付近に想定される。この同溝は、水田地帯中の存在であれば、太畦の両側の溝や、耕作地境など大きな区分に相当していると思え、両溝の距離差は5～6mである。

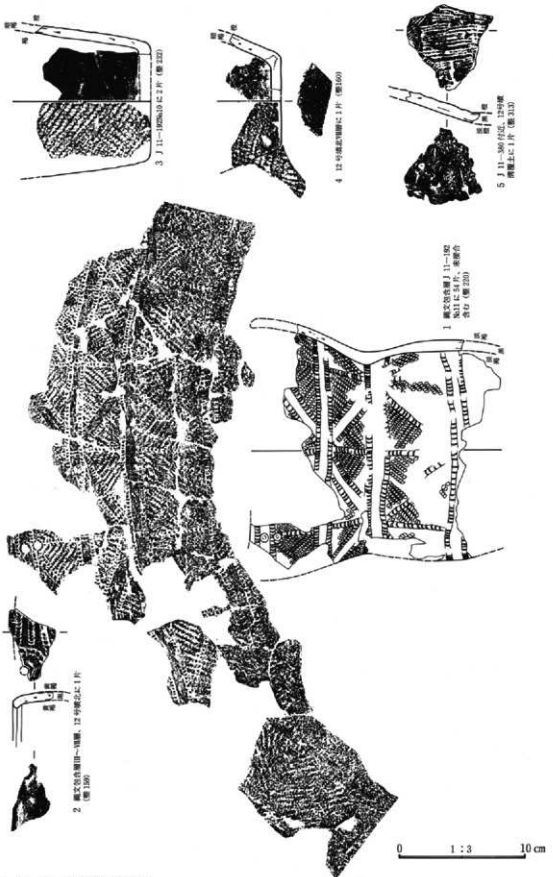
21号溝跡の埋土は、土層断面Cの土層注記3に As—B とあり純層か、混っていたのかは明確でないが、溝の掘り込み位置が土層断面2の下の層であることも合せると、近世を含む以前である可能性が生じる。各々の溝の遺物はないが、群馬県地域の12・13世紀に地方窯業不毛に近い時期があり、遺物の出土は稀である。19・20号溝は、As—B の純層が堆積し、その点と一致をみる。21号溝には、同火山灰が混り合う状態で確認されており、12世紀初頭より後出して機能した可能性がある。

22号溝跡（第86図）

位置は、K13—175・195・215・235にあり、大字西長岡字南328—1・328—2の桑園下に存在していた。発見は、先の As—B を埋土中に混えたか堆積した溝を調査した面より20～30cm下方の Hr—FA に伴なう軽石粒と見られる軽石を含む面での発見である。規模は、調査総長15.2m、幅1.7m強、深さは、土層断面Aで、掘り込み上端から0.38m、方位は、直線的な南半部分でN 6°30′Wである。底面は南下り傾向がある。土層断面を見ると基面である土層断面注記10に「上位では As—C を少量含む」とあり、およそ As—C の堆積した4世紀頃以降、土の堆積が厚くなる前に軽石が撒乱され、さらに同8・9が堆積し、直上の同9には6世紀初頭前後に噴出した Hr—FA の軽石と火山灰が、多く含まれ、純層部もあったという。その上層の同8にも、Hr—FA は含まれてある。22号溝は、同8から掘り込まれてあり、Fr—FA の純層を含む同9より上層のため、掘り込み時期は、6世紀代でも初頭以降と考えられる。埋土中には、同6が低位にあり、砂と粘質土の互層とあることから流水があったようで、機能は水路と推定される。同5で埋没が終る。遺物はない。

4、調査結果から見た地勢

古墳群が形成された、低台地は、東面する八王子丘陵と金山丘陵の間の開析谷（現水田地帯）の西岸でもある。大間々扇状地の中では最長の開析谷で、幅も最大級の一つである。この谷奥は、現在の笠懸町阿左美沼を湧水溜池とし、以南、江戸時代に開きくされた、岡登用水ほかで水田灌漑が行われている。二つの丘陵は、新第三紀層を基盤とし、谷奥には、豊富な水を受けた溜池が設けられ、さらにそれらの水は谷地田以下の水田にも供給されていた。この西長岡古墳群が存在する場所は、両側の低台地上であるが、この台地は、開析谷にしたがい、太田市街西方に至っては網状に分断状態もあるものの以南に続いてゆくが、遺跡地近辺での現況は、畑、桑園として続き、あたかも台地に連続性を思わせるものがある。しかし、南1.25kmの成塚石橋遺跡では、調査地を北北西から南南東に向け、流下した古墳時代から平安時代の水系跡が発見され、南0.8kmの菅塩西両台遺跡では、調査上面は、二次堆積の水性のローム層に覆われ、表面では変化の少ない状態であっても、発掘を行なった結果、種々の旧地形の様子が知れた。ここでは、そうした状況を汲みとるため、1台地上について、2台地上の縄文時代遺構の調査、3低地の浅間山B軽石を含む面下の調査、4低地での榛名山 Hr—FA を含む層前後の調査の4題を以下に説明したい。



第89図　縄文土器包含層遺物図

台地上について

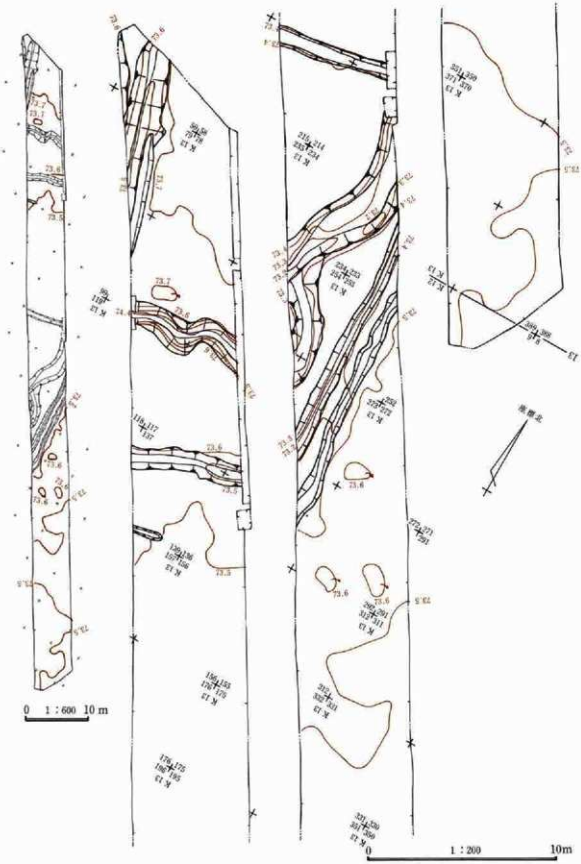
調査区で、礫層が連続して存在する場所が2個所存在している。1つ目は、第1図の試掘トレンチ図中に12区ライン南側に「礫層面」、南端に「谷地」とあり、溺谷(おぼれだに)らし記述があるが、台地形成の一端を示唆するものとして重要である。礫層のはじまりの位置は、J12区の4号溝のあたりであり、記録写真で4号溝跡を見ると、調査面から溝底に礫層は見えないが溝の掘り方以下は、小礫を含む礫層が見え、標集72.3m付近である。その続きは、その南にある3号溝跡底の標高71.7m付近では明瞭な形での連続性は窺えないものの、さらに南側5～6mの72.4m前後の調査面上で礫を含む層が5～6mの幅で現われる。その南側に存在する7号溝跡では明瞭ではない。そうした点からすると、谷地として明瞭であったのか疑問が持たれ、礫の堆積は台地形成の一端であろうことも加えておく必要があろう。J12ラインから7号溝跡まで50m強があり、その間遺構量が少なく、地中の礫の存在と必ずしも無関係ではなく、周堀を有する古墳の存在なども、7号溝跡直前の12号古墳が北端で終わる。北側は、2号住居跡が存在するK12－301付近より以北、調査面上から以下にも多くあり、以北の遺構構築にも影響があったものと想像できる。こうした礫の存在は、前年度調査の西長岡南遺跡Iでは、部分的に小礫を含む層が存在したが、II遺跡ほど大規模ではなかった。II遺跡側では、H7・8区で、旧地形中の台地端もしくは浅い谷地形の端部が想定されており、その谷地形の中央付近では多量の大形円礫の存在が知れている。古墳群の存在はこの台地端を意識しての占地であったらしい。

台地上の縄文遺構の調査

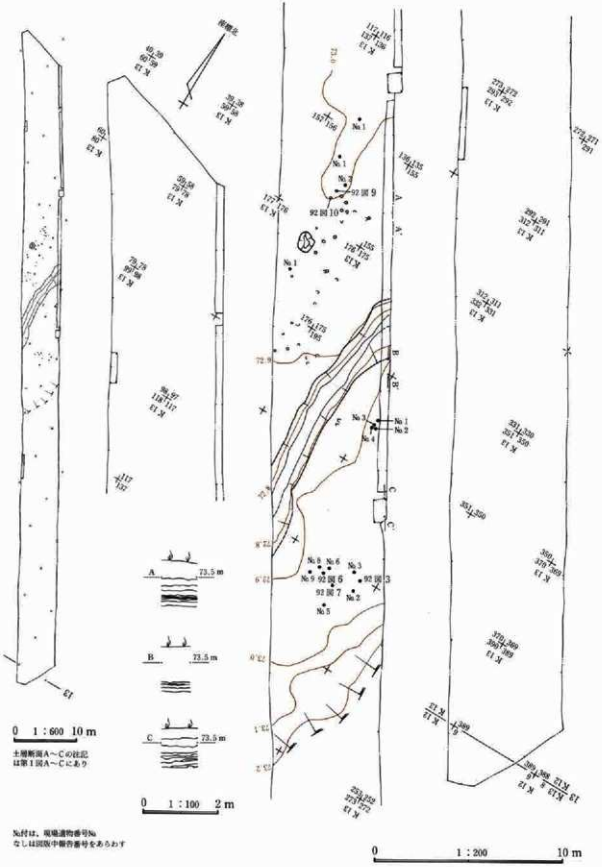
12号古墳の北西周堀と7号溝のローム層と黒色との間に生じた漸移層的な調査面上付近から、散在的に縄文時代前期の土器が以北J12－320、J12－301付近まで粗密はあるものの発見された。そのため調査の便宜で設けた5m座標方格を基に遺構確認の掘り下げが行なわれたが住居跡は発見されなかった。その中で第89図1の黒浜期の新段階、0段3条 RL－R 縄文と、米字状竹管文の深鉢の存在があった。同深鉢は、下半を欠く2分1個体で、被熱変色と、器面の浅い被熱剥落に見える状態が窺え、あたかも炉内の堆殷土器を思わせた。そのことなどから縄文時代前期の住居跡が至近の場所に存在したか、調査地内に存在したものの発掘可能な土壌になかったと解釈された。また他の縄文土器片の割れ口や器面は風化・消耗が顕著でもないので、やはり調査地は、台地縁辺を利用した縄文時代の生活域におよんでいたと考えることに妥当性があろう。

低地での浅間山B軽石（As－B）を含む面の調査（第90図）

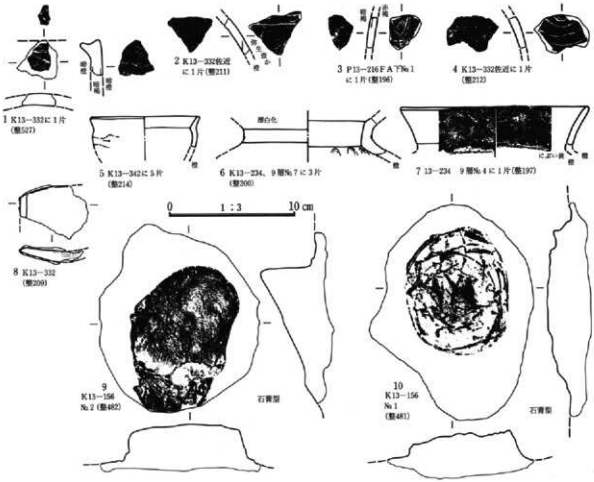
低地の状態は、現地形上では、調査地最北に接する大字西長岡字南333－2が二毛作の乾田であり、調査地北端の同328－1は桑園で30cmほど高く、以南は畑地・桑園となり、近代の圃場整備での結果でもある。この地形の変換は調査上も意識され、前年度の西長岡南遺跡Iの調査段階でも、現状の地形変換は、圃場整備によるもので、現水田部分も調査要であるとされていた。西長岡南遺跡IIでは、当初の試掘第4トレンチ土層断面Dにおいて、第1図土層断面注記2に見るように「ざらっとしており、As－B混じりの可能性あり。」、さらに同注記3「泥炭層」とあり、水田土壌と直上に As－B を含む耕作土の存在が示唆されている。この土層状態は、同図土層断面Eでも、黒色土が薄くなるものの続いていた。調査拡張の段階では、以北について前出土層断面注記3の下方まで重機掘削し、水田跡発見のための面調査が実施された。その結果、水田としての畦は発見されなかったものの、As－B の純層も埋土の一部に存在する11号溝跡（および12号溝跡）、純層に近い層のある19号溝跡、純層のある20号溝、As－B と注記のある21号溝が発見され、各々機能は水路と推測される。明瞭な畦の発見がなされなかったことについては、水田は発見されなかったということでは



第90図　As－Ｂ下面遺構図



第91図　Hr—FA 下面遺構図



第92図　低地調査区遺物図

なく、あったとしても発見しづらい状態であったということに外ならず、例えば、As−B 降下後、二たび畦などの修築を行なえば、畦中に As−B は混入したと推測しうるし、それを長期に恒り行なえば、当初の畦の状態など判別できなくなるであろう。水田の可能性は、As−B の純層の入った19・20号溝跡は、東西を指向し、11号溝の蛇行気味である点は、水田として可能な個所との間に、自然地形に則して設けられた水路と考えられ、19号溝跡もその傾向があるため、20号溝跡と19号溝跡に爽まれた間に水田が設けられていた可能性はあるものと考えたい。これら３条の溝跡は、東へ12〜13m、11号溝跡の北延長21〜30mで交わっていたであろう。この推定水田跡の上限は、19号溝跡土層断面Ａの注記２ｂに As−B の前代に存在した同溝掘り方が発見されており、As−B 降下の12世紀初頭をそう遡ぼらない時期と推定され開田の時期を知る上でも重要である。平面図上における等高線から見る台地の旧縁辺の状態は、第84図の15号溝跡の南側沿いに73.5mの等高線が入り、北は、19号溝中にその等高線が入り、およそ73.5mの線域が下端の個所であろう。

この推定水田跡の下限は、中世にまで至ると思われるが、低地の溝に掘り直しの形跡が弱し、今後、周辺域の調査に譲りたい。なお水田土壌分析の結果は後章によられたい。

低地での榛名山 Hr−FA を含む層前後の調査（第91・92図）

Hr−FA を含む層前後と称した理由は、第91図の中央にある22号溝跡の調査面、FA パミス・アッシュ（火

山軽石、火山砂、火山灰）が自然や動物や人間によると思われる力に起因し、乱れた状態の層中の中で、良好と思えるFA遺存の部分を露呈させての面であったためで、場合によっては、下り過ぎ、上り過ぎた個所も調査中にはあったであろう。整然とした火山灰層分離ではないからである。22号溝跡の項でも触れたように、As—Bの直下を目安とした面より20～30cm下方である。この面の中央にある22号溝跡の構築は、基面に第86図土層断面Aの注記10に「As—Cを少量含む」とあり、さらにその上面に注記９「FAパミス・アッシュを多く含む。ブロック状の純層部分もある。」とあり、同注記８に「FAパミスを含み、全体に網目状の酸化鉄斑がみられる。」とあり、地下水の上、下昇に伴ない植物の養分吸収や細菌・バクテリアなどの作用により生じた酸化があったようで、稲作よりも根の発達したケイ酸分の強い単子葉植物の生育が示唆される。22号溝はこれらを掘り方の基盤として、埋土下方に同注記６に「FAパミスを少量含む。」とあり、22号溝跡の存在は、Fr—FAの降下からしばらく後の溝であったようである。しかし調査では、22号溝の周辺の連続した面の調査を、FAアッツシュの黄色味のある10YR6/4を目安としたらしいので、面出し調査の方がFAの降下時期である６世紀初頭前後の頃を、22号溝跡は、６世紀でも時期の下った頃の所産と考えられ、時期上、若干異なる同一面の調査であったらしい。22号溝跡の北西側に多く、南東側には少数であったが合計30個弱の蹄類動物の足痕跡が発見され、うちNo.１・２が型取りされ資料化されてあり、鑑定結果は、後章、172頁によられたい。出土遺物と蹄足痕跡の分布は、第91図のとおりである。この低地部分と台地部分との関係は、第91図の標高73.2mの等高線から73.0mまでの間が密となり、記録写真でも勾配が写されて見えたので加筆し、縁辺部も推定した。北側は、73.0mの等高線がK13・136・137付近にあり、以北は高低記録に明確さを欠くので判然としないが、上層のAs—Bを含む面の調査ではもう10m強北東に進むと台地縁辺と考えられるので、直下のこの調査であっても、その内湾状の旧地形は前代でも存在していたと思えるのである。

遺物は、漂白化し、脱色した色調の土器類が多く、割れ口の消耗も目立っている。層位、出土地点、遺存量から撰択抽出した個体を第92図３・６・７に掲げた。その中には４・５世紀頃の土師器に混り、弥生後期に思える３が含まれてあり、そのほか座標取り上げを行なった中にも第92図４のようにさらに遡ぼる弥生時代土器片も存在している。第92図８は、和鉄製作に見える層状剣落の多い種不明鉄製遺物などもあり、上層遺物であろう。このほか、蹄の足痕跡２点の石膏型がある。

５、穴　　跡

穴跡は、調査では、○号土坑と呼ばれている。もともと土坑と云う字義は存在しないのでここでは項目名を穴跡とする。調査では、小形の穴跡で、柱穴様の形状の場合に pit もしくはピット呼称され区分し、それらについては、小項目６小形穴跡として扱う。

１号土坑（第93・97図）

位置は、J10～５・25にある。６号溝跡と重複し、６号溝跡が新しい。掘り込み面位置の記録はない。埋土は、土層断面Aを見ると、凹状に堆積している。規模は、長辺1.97m、深さは、調査面上から0.31mを測る。遺物は、第97図１に示した近代軟質陶器片の出土１点のみである。

２号土坑（第97図）

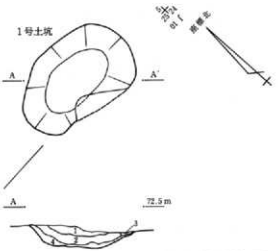
調査中に５号風倒木痕に改称。位置はK12—183・203にある。

３号土坑（第93図）

位置は、K12—203・204にある。８号溝跡と重複し、８号溝跡が古い。掘り込み面位置の記録はなく、時期不明。土層断面は、「As—B 混じりと思われる」は、中世以降を示唆する。規模は長辺で2.38m、短辺1.32m、深さは調査面から0.11mを測る。遺物はない。

４号土坑（第93図）

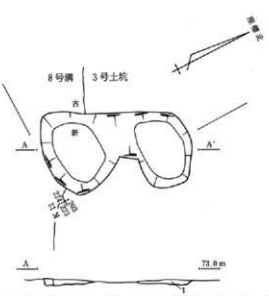
位置はK12—144・145にある。重複はない。遺構の掘り込み面位置は記録がなく、時期不明である。埋土



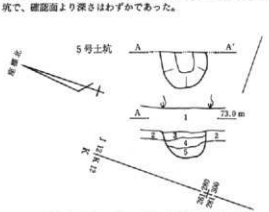
1、暗褐(10YR３／３)。φ１～５mmの軽石粒を少量斑点状に混入。さらっとした土。
2、黒褐(10YR３／2)。さらっとした土層。φ１mmの軽石粒を１層よりわずかに多く混入。
3、褐(10YR４／６)。２層と似ているが、ロームを含む分、黄色が強い。
4、にぶい黄褐(10YR５／３)。さらっとしており、粘性は弱いが、にぶい黄橙色のロームブロックを混入。

1、暗褐(10YR３／３)。さらっとしていて粘性やや弱い。小礫混じりの土層。(遺物がないため、時代不明。)

第93図　１号・３号・４号・５号土坑遺構図



1、黒褐(10YR３／１)。さらっとした粒性の弱い土層。As—B混じりと思われる。(３号土坑覆土。粘構新しそうな土壌の入る土坑で、確認面より深さはわずかであった。



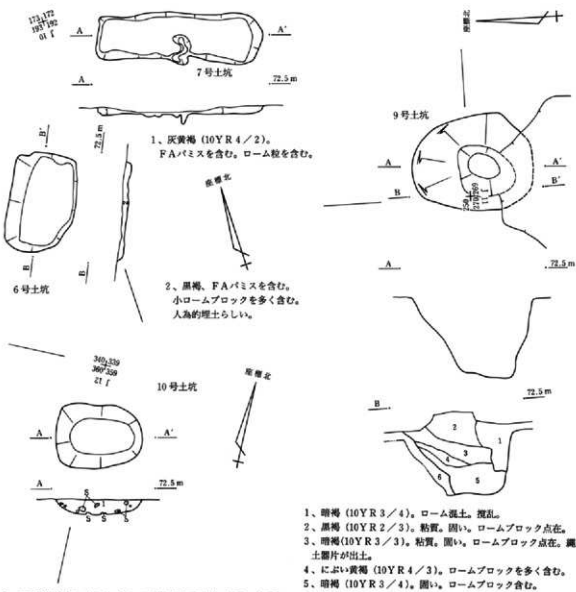
1、にぶい黄褐(10YR５／３)。表土。黄褐(10YR５／８)のローム小ブロックを混入。
2、黒褐(10YR３／１)。褐色のローム混土。φ１～５cmの小礫を含む。
3、灰黄褐（10YR４／２)。粘粒ややあり。小礫をわずかに含む。
4、黄灰（2.5Y４／２)。粘性ややあり、小礫をわずかに含む。
5、黒褐(2.5Y３／１)。φ１～10cmの礫を多量に含む。黒褐色土主体。

0　1：60　2m

は、「さらっとしている。」との形容があり、新しそうに思う。平面形は、長方形気味で、横断面Ａは、直立気味の壁面である。規模は、長辺1.90m、短辺0.95m、深さは、調査面上0.36m、主軸方位は座標北よりＮ０°30′Ｗを指向する。遺物の出土はない。

５号土坑（第93図）

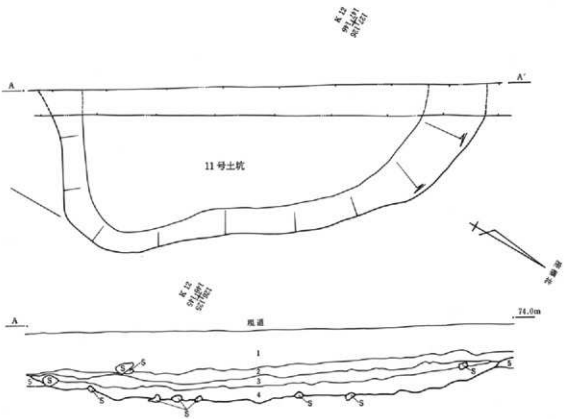
位置はＪ12—280にある。重複はないが、調査区外にかかる。遺構の掘り込み位置は、幸いにして、調査区壁面にかかり、土層断面Ａ注記２を切って設けられているためそう古い時期の所産ではないが、土層断面注記１は、約35cmあり、耕作土直下層も含むと考えられるので近世も含む以前で中世を含む以降の間と想像される。埋土は上・中層に注記３・４があり、ともに粘性ありと形容されている点は締まりもありそうであり、人為埋没かの。規模は、長辺0.55＋αm、短辺0.72m、深さは掘り込み面から0.38mを測る。出土遺物はない。



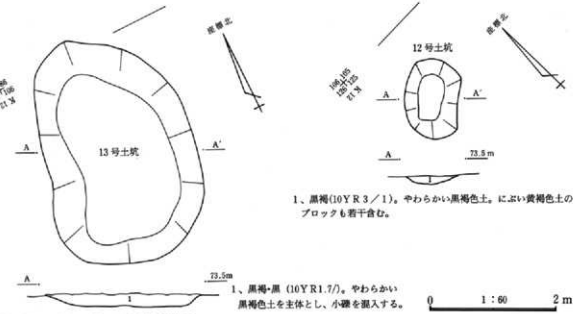
第94図　６号・７号・９号・10号土坑遺構図

６・７号土坑（第94・97図）

位置はＪ11－192・193にある。ともに７号溝と重複するが新古は不明。掘り込み位置は記録がなく不明。



1、暗褐(10ＹＲ３／３)。硬くひき締まっている。道路整備時の掘り返し土層。
2、褐(10ＹＲ４／４)。硬くひき締まっている。大小の礫を多量に含む。
3、灰黄褐(10ＹＲ４／２)。Ａ＊－Ｂ軽石を主体とし、さらっとした土層。純層ではない。
4、黒褐(10ＹＲ２／２)。やわらかい黒褐色土を主体とし、φ１～３cm程の小礫を混入する。
5、黄褐(10ＹＲ５／８)。黄褐砂質土を主体とし、大小礫を多量に混入。地山（旧渡良瀬川の扇状地の礫層）。



1、黒褐(10ＹＲ３／１)。やわらかい黒褐色土。にぶい黄褐色土のブロックも若干含む。

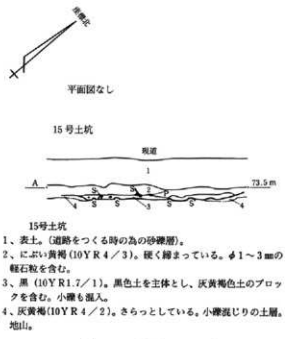
1、黒褐・黒（10ＹＲ1.7/）。やわらかい黒褐色土を主体とし、小礫を混入する。

0　1：60　2 m

第95図　11号・12号・13号土坑遺構図

14号土坑
1、青黒（10BG1.7／1）。青黒色のやわらかい土を主体に、わずかに小礫を混入。
2、暗褐（10YR3／3）。小礫を混入する暗褐色土層。
3、暗褐(10YR3／4)。小礫を混入する暗褐色土層。2層より若干黒色が濃く明るい感じの土層。

第96図　14号・15号土坑遺構図



15号土坑
1、表土。(道路をつくる時の為の砂礫層)。
2、にぶい黄褐(10YR4／3)。硬く締まっている。φ1～3mmの軽石粒を含む。
3、黒（10YR1.7／1)。黒色土を主体とし、灰黄褐色土のブロックを含む。小礫も混入。
4、灰黄褐(10YR4／2)。さらっとしている。小礫混じりの土層。地山。

0　1：60　2m

土層断面の埋土は、6号土坑注記2に「ロームブロックを多量に含む。」、7号土坑注記1に灰黄褐色との色調と「ローム粒を含む。」とある点から人為埋役が示唆。相互は、近接、ほぼ直交の関係にあるため共通の機能に思える。規模は、6号土坑の長辺で1.56m、短辺で1.03m、調査面上から深さ0.09m、方向はN71°30′Wを指す。7号土坑は、長辺で2.62m、短辺で0.81m、深さ0.11m、方向はN25°30′Eを測る。遺物はない。

9号土坑（第94・97図）

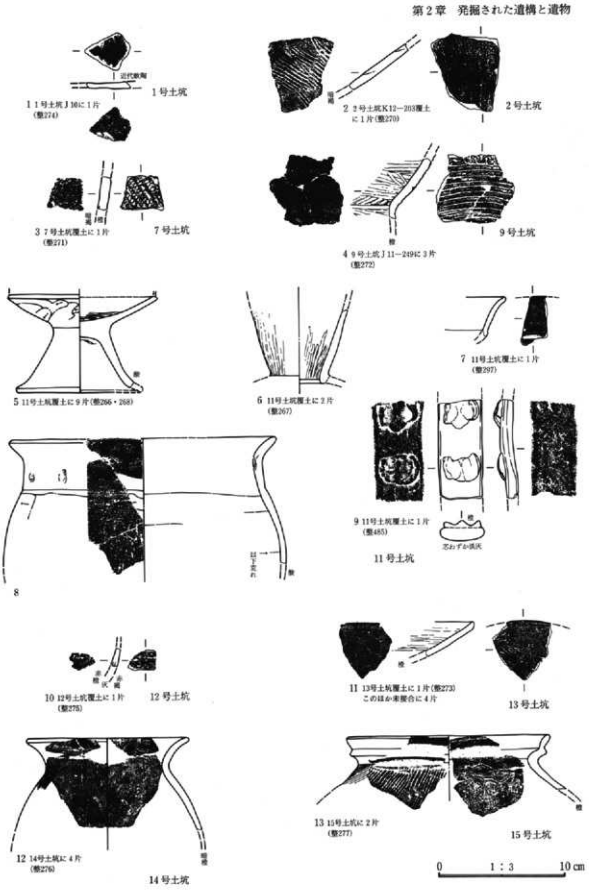
位置は、J11−249・250・269・270にある。11号古墳の内掘と別の穴跡と重さなるが、新古の関係は記録がない。規模は、長径1.93m、短径1.45m、深さ1.38mを測る。埋土はローム層ブロックを多く含み、特に土層断面注記1には「ローム混土」とあり、さらに同2・3・5には「固い。」とあり、人為埋役であろうか。遺物は、第97図4に図示した縄文土器のほか4点の同破片がある。

10号土坑（第94図）

位置は、J12−359・360にある。重複はない。規模は、長辺で1.38m、短辺で1.02m、深さは、調査面上より0.23mを測る。形状は、隅丸長方形～楕円形を呈し、底面は浅い鉢状を呈す。埋土は、「硬く締まっている。」とあり、人為埋役か。遺物はない。

11号土坑（第95・97図）

位置は、K12−126・146にある。掘り込み面の位置は、土層断面A注記5の上面と考えられ、その直上に同2が乗る。同2は上方の道路の影響を受けてか「硬くひき締まっている。大・小の礫を多量に含む。」とある。しかし直下の同3に至ると「やわらかい」とあり、これが本来の埋土を示しているらしい。穴跡の機能


近代瓦列
1 1号土坑J 16に1片
(整274)
1号土坑
2 2号土坑K 12−203覆土
に1片(整270)
2号土坑
3 7号土坑覆土に1片
(整271)
7号土坑
4 9号土坑J 11−249に3片
(整272)
9号土坑
5 11号土坑覆土に9片(整266・268)
6 11号土坑覆土に2片
(整267)
7 11号土坑覆土に1片
(整297)
9 11号土坑覆土に1片
(整485)
11号土坑
8
10 12号土坑覆土に1片
(整275)
12号土坑
11 13号土坑覆土に1片(整273)
この様か来接合に4片
13号土坑
12 14号土坑に4片
(整276)
14号土坑
13 15号土坑に2片
(整277)
15号土坑
0　1：3　10cm

第97図　土坑遺物図

は不明である。規模は、最長部で7.15m、深さは、深り込み面より、0.52mを測る。遺物は、54片があり、土師器48片、埴輪片１片ほかである。土師器は第97図５～８があり、６世紀と９世紀の個体である。

12号土坑（第95・97図）

位置は、K12―125・126にある。規模は、長辺で1.28m、深さは調査面上から0.12mを測る。埋土は「やわらかい。」とあり、ローム層のブロックの混入は少ないらしい。人為所作の穴跡であることは、記録写真を見ると、調査面上は、自然の礫を多く伴う状態を見ることができ、12号土坑の埋土中には、そうした礫はなく、掘り方は歴然としている。よって人為である。機能は不明である。遺物は、第97図10ほか土師器片２がある。

13号土坑（第95・97図）

位置は、K12―86・106・107にある。平面楕円形を呈し、浅い凹状の底面である。規模は、長辺で3.72m、短辺で2.44m、深さは、調査面上から、0.22mを測る。埋土は、「やわらかい。」とあり、周囲に自然礫が多かったためか「小礫を混入する。」ともある。人為の所作だろうか。機能は不明である。遺物は、第97図11に示したほか土師器片27、縄文土器片３がある。

14号土坑（第96・97図）

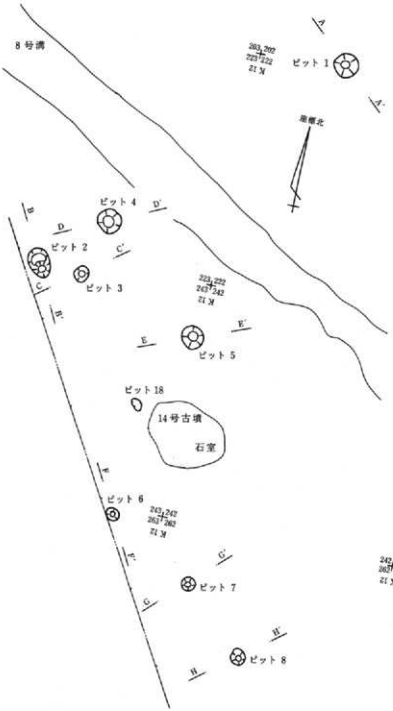
位置は、K12―86・87にある。不整形を呈す。重複はない。規模は、長辺で4.98m、系さは、土層断面Aで0.23mを測る。埋土は、上層に軟かい上層が存在しているようである下層は、調査地周辺に礫が多いためか小礫を混入するとある。記録写真を見ると土層断面A注記１の青黒色とある土層は明瞭であるが、同２・３との層境いは、やや不明瞭である。機能は不明である。遺物は、第97図12のほか109片の土師器片がある。

15号土坑（第96・97図・写真図版37）

調査開始時は、土坑で扱われたが、調査中途で地山の落込み扱いとされた。出土遺物は確認面出土遺物として理解したいと調査担当の斉藤英敏から聞いた。

６、小穴跡

柱穴様の小穴跡群が２個所で発見された。１群目は、１～８号ピットの存在するK12―242・262付近、もう１群は９～17号ピットの存在するJ11―378・398付近である。もとに、掘り込み面位置の認定が行なわれておらず、時代観が不明である。各ピットを柱穴とした場合、掘立柱の根腐れ柱痕や柱の抜き取り跡らしき表現が記録図中にない、記録図の求め方は、調査担当の意識の問題によるところ大であり、柱穴としての可能性も考えておく必要がある。掘立柱建物の当地域での多用は、古代では、10世紀頃まで、中世以降では、14世紀から18世紀頃まで続いて用いられる。この遺跡の遺物の傾向と照合すると、４・６世紀に、住居跡、古墳出土遺物があり、９世紀代が少しあり、続いては、15・16世紀頃に多用の段階があり、139～151頁の一表は、そのことが表われ、これらのピットが掘立柱建物に関連するとすれば、第100図２の軟質陶器鉢片の時代である。15・16世紀頃に可能性がある。柵列の一端とした場合は、掘立柱建物の機能とは異なり、特別な盛行期を考える必要性は薄く、現代でも必要があれば用いられるのである。次に、具体的に遺構を見たい。



A　ピット1　73.0m

1、灰黄褐(10YR４／２)。さらっとしていて粘性弱い。小礫をわずかに混入。
2、にぶい黄褐(10YR４／３)。さらっとしてい粘性弱い。小礫をわずかに混入。

B　ピット2　73.0m

1、黒褐(10YR３／1)。さらっとしている
褐色土層。
2、灰黄褐（10YR４／２）さらっとしている褐色土層。

C　ピット3　73.0m

1、黒褐(10YR３／1)。さらっとしている土層。

D　ピット4　73.0m

1、黒褐(10YR３／1)。さらっとしていて、粘性弱い。
2、灰黄褐(10YR４／２)。さらっとしていて、粘性弱い。小礫混入。

E　ピット5　73.0m

1、黒褐(10YR２／1)。黒褐色土を主体に、小礫混入。
2、黒褐(10YR３／２)。黒褐色土を主体に、小礫混入。

F　ピット6　73.0m

1、黒褐(10YR３／1)。さらっとしている。
2、黒褐(10YR３／２)。さらっとしている。小礫混入。

G　ピット7　73.0m

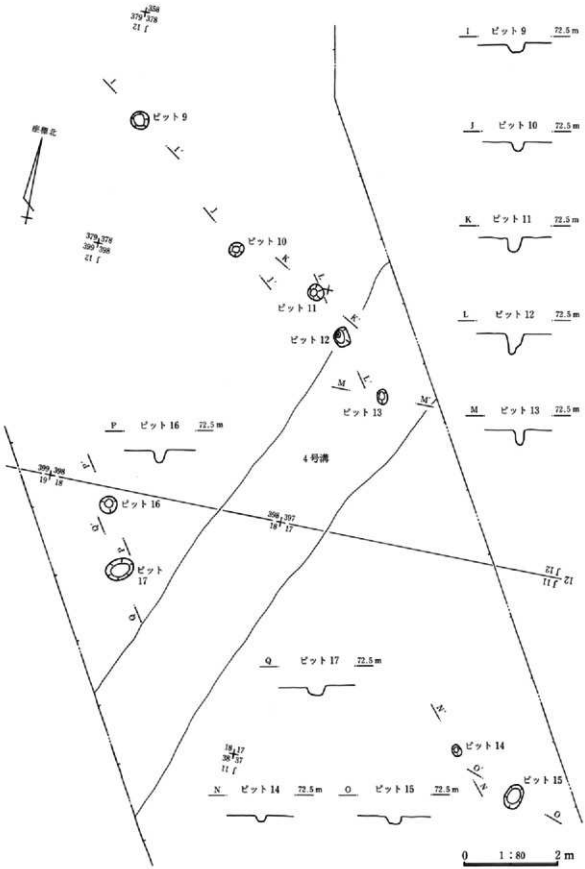
1、黒褐(10YR３／２)。さらっとしている。小礫混入。

H　ピット8　73.0m

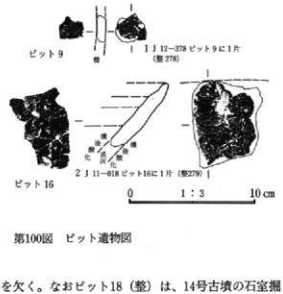
1、黒褐(10YR３／２)。さらっとしていて粘性弱い。小礫混入。

0　1：80　2m

第98図　1～8号ピット遺構図



第99図　9～17号ピット遺物図



第100図　ピット遺物図

ピット１～８・18（第98・100図）

位置は、K12−202・222・223・242・243・262・263にあり、後に整理で追加したピット18（整）を加えて９穴が接近した関係にある。径0.5m前後がピット１・２・４・５・18に、0.3m前後が他の４穴で、２つの規模差がある。深さも、前群が深く、ピット４が最大で41cmを測る。位置関係は、ピット１とピット４・５の間に８号溝跡が入るため、欠失したか、溝跡の埋土中で発見できなかった穴跡もあると考えられたが、建物跡として考えた場合に柱筋目の個所が得られず、柵列とすると同規模のピット６・７・８が並ぶ可能性がある。埋土に締りの記述がなく、柱穴として検討観点を欠く。なおピット18（整）は、14号古墳の石室掘り方調査の際に発見され、無番号であったので、追加した。遺物はピット９に土師器２片がある。

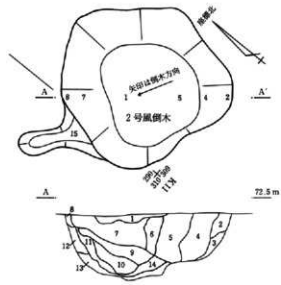
ピット９～17（第99・100図）

位置は、Ｊ11−17・18、Ｊ12−378・397・398にある。９穴が存在する。第99図の空白帯には４号溝跡が存在しピット12・13が溝内に入る。位置関係は、ピット９・10・11・12・13が並ぶように近接し、それと並行するかのようにピット16・17が存在して見える。４号溝跡は、土層注記にFAパミスを含むとあり、古墳時代の土層のようでもあり、相互が関連していたとすれば、溝跡と近接の時期の所産にも思えるがピットの埋土に関しては記録がなく不明である。遺物から見ると、第100図２の軟質陶器鉢片があり、製作時期は15世紀頃であり、遺構関連と見た場合、至当な時期である。

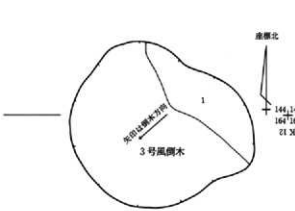
７、風倒木痕

群馬県の中央部は、第四紀以降の火山である赤城山、榛名山の広大な火山灰土壌地帯が広がり、このほか妙義、白根、浅間山など多くの火山を有する県である。こうした火山灰土に覆われた地域や、遺跡地のある扇状地形成のなされた場所では、雨水が伏流水となり流下しやす条件にあり、年間降雨量は、1800㎜を越える場所は極めて限られ、本州各地の中でも降雨水量の少ない地帯に属することが、地表面での保水条件を低める結果となり、火山裾野の各台地上は貧水の場所でもあった。樹木の植相は、スギ・ヒノキなど近世～現代の高板建築材の斜葉樹は、年間降雨1800㎜を越える地帯に植林帯が見られ、特に低気圧のぶつかる山の西から北東方向の、いわば山の裏側に多くがあり、それも、第四紀より古い地質の地帯に多く、第四紀では水系沿いの場所を中心とする。照葉樹は、第三紀以前の土壌化の進んだ日当りが良く、保水性のありそうな場所に多いが、ヤブツバキ、ミラカシなどの群落が残る場所は今日では少ない。落葉広葉樹は、火山灰土、扇状地形の台地上に多く、二次林と呼ばれる人為の力が多くおよんだ状態で、クヌギ、ナラなどを主に成育がある。遺跡地の台地上では、こうした落葉広葉樹の広がりが、八王子丘陵では、照葉樹が優位な条件にあったと想像される。

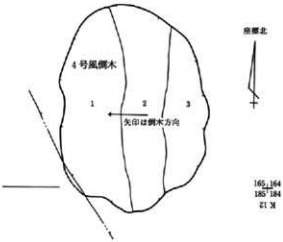
1、灰黄褐(10Ｙ Ｒ ４／２)。黄褐色の小ロームブロックを含む。上からの混入土。
2、褐(10Ｙ Ｒ ４／４)。やや、色の濃いローム。下から、上がったものと思われる。
3、黄褐 (10Ｙ Ｒ ５／６)。ローム。やわらかい。
4、にぶい黄褐(10Ｙ Ｒ ４／３)。にぶい黄褐色土を主体に、にぶい黄褐 (10Ｙ Ｒ ５／４) の小ブロックを含む。
5、黒褐(10Ｙ Ｒ ３／１)。黒褐色土を主体とし、にぶい黄褐色土のブロックを含む。
6、褐 (10Ｙ Ｒ ４／４)。２層に近いロームだが、やや赤味おびる。



1、灰黄褐 (10Ｙ Ｒ ４／２)。内堀りのセクション。
2、褐 (10Ｙ Ｒ ５／６)。ローム主体に、灰黄褐小ブロック混じり。
3、にぶい黄褐(10Ｙ Ｒ ４／３)。ローム主体に、小ブロック混じり。
4、にぶい黄橙 (10Ｙ Ｒ ６／３)。ローム。
5、黄褐 (10Ｙ Ｒ ５／６)。ローム。
6、にぶい黄褐 (10Ｙ Ｒ ５／４)。ローム。
7、にぶい黄褐 (10Ｙ Ｒ ４／３)。ロームと灰黄褐色土の混土。
8、にぶい黄褐(10Ｙ Ｒ ５／３)。ローム主体に、灰黄褐小ブロック含む。
9、灰黄褐(10Ｙ Ｒ ４／２)。灰黄褐色土主体に、ロームブロック含む。
10、黒褐 (10Ｙ Ｒ ３／１)。黄褐ローム小ブロックを混入。
11、黄褐 (10Ｙ Ｒ ５／６)。ロームと黒褐色土の混土。
12、黄褐(10Ｙ Ｒ ５／６)。ロームを主体に、黒褐色小ブロック含む。
13、にぶい黄褐(10Ｙ Ｒ ５／４)。ロームを主体に、灰黄褐小ブロック含む。
14、灰黄褐(10Ｙ Ｒ ４／２)。灰黄褐土主体に、黄褐ローム小ブロック含む。
15、黒褐色土。根株かも。



1、砂利、小礫層が持ち上った部分。

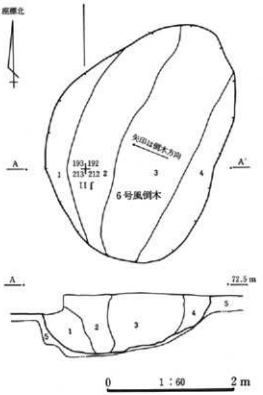


1、暗褐色土。
2、礫、砂利層。
3、小礫、砂利層。

0　1：60　2 m

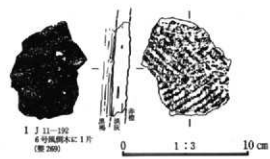
第101図　１号・２号・３号・４号風倒木痕遺構図

1、小礫、砂利層。　2、黒褐色土。
3、明黄褐（2.5ＹＲ６／６）。さらさらローム。



1、黒褐(10ＹＲ３／２)。粘質強い。Ⅶ、Ⅷ層のブロックを斑点状に含む。
2、褐（10ＹＲ４／４）。Ⅶ、Ⅷ層のブロックを斑点状に含む。（Ⅷ～Ⅷａに相当）。
3、黄褐（2.5ＹＲ５／４）。Ⅶ、Ⅷ層のブロックを斑点状に含む。（Ⅸ層に相当）。
4、オリーブ褐（2.5ＹＲ４／３）。Ⅶ、Ⅷ層のブロックを斑点状に含む。（Ⅹ層に相当）。
5、地山ローム。Ⅶ、Ⅷ層のブロックを斑点状に含む。

第102図　5号・6号風倒木痕遺構図



第103図　風倒木痕遺物図

１～６号風倒木痕（第101～103図）

調査では６基の風倒木痕が確認された。Ｊ11区に１・２・６号風倒木痕がやや近接して、Ｋ12区に３・４・５号風倒木痕が近接して存在している。遺構ならば掘り込み面に相当する位置の確認例はない。おおむね倒木面の確認は、実際に樹木として存在していた面より上層である場合が多く、中央から倒れた側に寄った個所が発見され、徐々に周辺を掘り下げることにより平面形が見えてくるのであり、土層断面図の３例のうち１号風倒木痕は、土層が浅く、倒木面は、もっと上層であったと察せられる。各々同時期であるかは不明であるが、近接しての存在は、倒木しやすい土壌であったことや強風の発生が同時期であったことも考えたくなる。残念ながら土層断面注記に時期を示唆する火山軽石の記述は見られない。倒木方向は、東からであり、低気圧の風向と近似し、北西寄りの冬の季節風が起因してではないようである。樹種は、根痕の残存がなく明確にはし難いが、照葉樹が地中深くから水分・養分を吸収するように長く直根で発達すること、広葉樹が広く、浅い位置に水分・養分吸収するよう浅根に発達することを思えば、おおむね広葉樹の倒木痕の可能性があると類推され、そのことは、火山灰土を主とし、降水量の少ない風土観からも逆説的に類推される。また倒木の一因も成したであろう、上記ローム層中の粘性の強い、漂白化した層は、県内で広く見ることができ、粘性化の成因を探ぐる必要性を感ずる。

遺物の出土は、数量、種は103頁のように３・６号風倒木から土師器・縄文式土器が出土しており、およそ古墳時代を含む頃までの風倒木痕である。

８、畑 遺 構

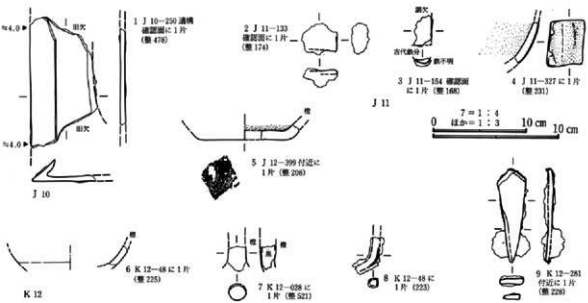
平成５年度調査の西長岡南遺跡Ⅰの Ⅰ・J 10区古墳７の以南については、畑耕作関連の溝跡が多数調査（第９図）され、上限は18世紀頃であった。西長岡南遺跡Ⅱでは、連続地帯でありながら、第104図に示めした３条の小溝が畑サク跡を思わせる平行の関係で見つかったほか例はない。そのことは古墳７以北が一段高く、後に圃場整備で削平されたのか、調査面が低いことに因るのか明確ではない。出土遺物はない。

９、補足遺物（第105図）

第105図に、補足に９点の遺物を掲げた。１は鉄製鋳鉄に見える鋤先片で、書中の他に２例とは接合できない。４は中国青磁で、舶載陶磁２点中の１点であり、13世紀頃の生活の一端を示唆している。５・６も中世土師質土器皿と考えられ、この一帯に、薄いが中世の痕跡を認める。９は種不明の鉄製遺物がある。

補足遺物は、当遺跡の主体遺構である古墳・住居跡の時期を除く時期の遺物類を多く図示し、土地利用の変遷など潜在的にしか明らかにできない事項に寄与すべく作成しなければならなかったが、時間的な都合で、小数にとどまった。抽出の力点は中世遺物に注がれたが、中世そのものの遺物は、篇末の遺物数量一覧表を見るようにそう多くはないが全体に亘ってある。古代の下限は、竪穴住居跡の最終期の段階に思える10世紀最末期か11世紀初頭頃もしくは、近世土師質土器皿とも思える個体が小数見られた。

第104図　サク跡遺構図



第105図　各調査区補足遺物図

第３篇　西長岡南遺跡Ⅲ

第１章　発掘概要と例言・凡例

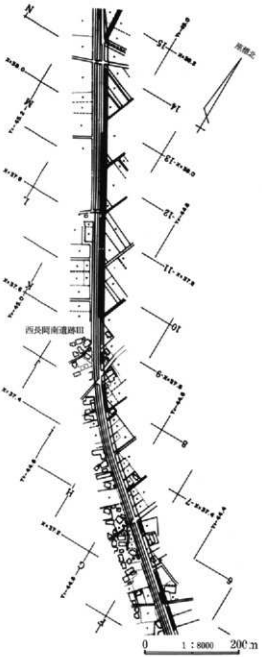
発掘調査場所は、Ｈ・Ｉ８・９区の一角にある太田市大字西長岡字南463－１において調査が行なわれた。調査期間は、平成８年４月15日～同年５月９日までの間、調査が実施された。調査担当は、女屋和志雄（当団主幹兼専門員）・内田敬之（当団調査研究員）で、主幹課は、当団調査研究部第６課・課長右島和夫である。調査面積は、320㎡である。

調査対象地は、蛇川に沿う現道と拡幅予定地を含めた10m示りの幅員であったが、現道調査の場合は舗装截断除去と交通止めが必要なため、発見遺構の状況に合せて拡張を行なう計画で、52m×５m強の買収済用地内調査が先ず行なわれることとなった。この調査地は、古室新吉氏宅の前庭と車庫として前年度まで使用されていた一角である。

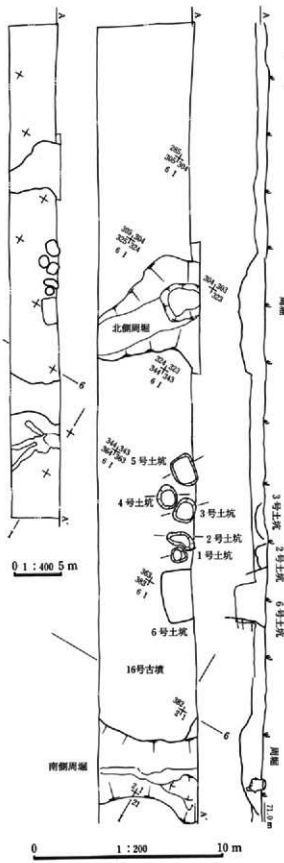
調査は、上層を重機で除去し、後に人力排土がなされ、第108図の長尺土層断面図がその基面である。基面は、分解が進みや粘気のあるローム層で、順堆積か二次堆積層か判然としないローム層である。その直上には、第108図の土層注記10があり、軟らかく、黄味強く、順堆積の上部ローム層を思わせる。その上層は、一率に存在はしていないがローム層と有機質との漸移を思わせる土層注記６が存在する。さらに正堆積ではなく概念上であるが浅間山を噴源とするAs－B（12世紀初頭頃）の順堆層が存在する。土層注記３である。この上方は旧耕作地としての耕作関連、その後の古室氏宅関連の土層に至る。

現場記録は、遺構全図および遺構番号記入図が１：200、遺構平面・断面が１：20を基本に図化が行なわれ、測図は平板実測である。基準値との係わりは、公共座標と調査座標の方向性一致で、成塚永昌寺遺跡以来の座標を踏襲し、呼称されている。公共座標系は第Ⅷ系に属す。水準値は標高である。写真撮影は、６cm判・35mm白黒と35mmカラー・スライドが撮影されている。

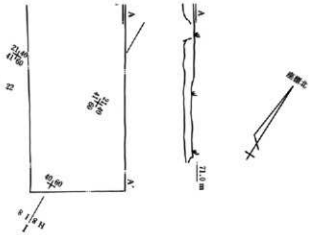
本書のための図化とその凡例・例言は、18頁と共通であるが、現場図に大きく手を加える点はさけた。



第106図　調査区位置図



第107図　Ｈ・Ｉ８・９区遺構図



第２章　発見された遺構と遺物

左図に遺構名称、全体概観を示めした。個別遺構説明は全数を扱い、遺物観察は164・165頁に示めした。遺構・遺物凡例は18頁で触れるので略す。遺構名称は整理担当大江の伝達の不手際により古墳名称に重複が生じたため、整理時に改称した。すなわち現場名称10号古墳を16号墳に改めた。そのほか現場名称を使用した。

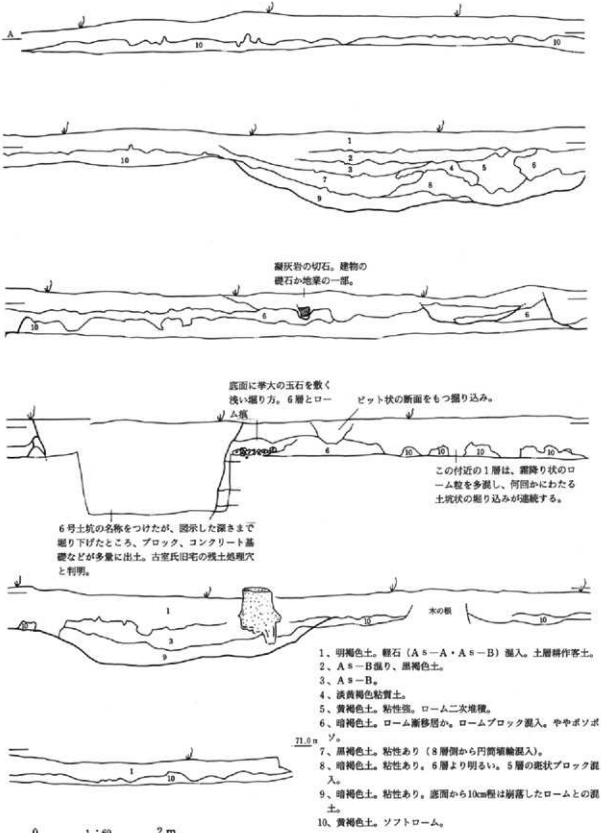
古墳（○号墳）　（第108～113図）

名　称	位　置	規　模			備　考
		長さ(長辺)	墹幅	深さ	
16号古墳	Ｉ８・９区	20.8	4.16	1.02	埴輪あり

穴跡（○号土杭）　（第114・115図）

名　称	位　置	規　模			備　考
		長さ(長辺)	幅	深さ	
１号土杭	Ｉ９区	0.90　N53°W	0.84	0.36	近代以降
２号土杭	Ｉ９区	1.59	0.78	0.42	近代以降
３号土杭	Ｉ９区	1.08	0.96	0.51	近代以降
４号土杭	Ｉ９区	1.26	1.08	0.39	近代以降
５号土杭	Ｉ９区	1.68	1.23	0.66	近代以降
６号土杭	Ｉ９区	2.72　N50°W	1.60	1.26	現代

このほか、西長岡南遺跡Ⅲ調査区の南端で、第109図下方に見える、耕作の痕跡を思わせる浅い溝状の遺構が存在していた。うち、南北走行の２条は浅い凹み様を呈し双方類似の形態であり、北側の東西走の小溝跡は、掘り込みの角度は急である。土地利用の一端を思わせる遺構である。



1、明褐色土。軽石（Ａｓ－Ａ・Ａｓ－Ｂ）混入。土層耕作客土。
2、Ａｓ－Ｂ強り、黒褐色土。
3、Ａｓ－Ｂ。
4、淡黄褐色粘質土。
5、黄褐色土。粘性強。ローム二次堆積。
6、暗褐色土。ローム断移居か。ロームブロック混入。ややボソボソ。
7、黒褐色土。粘性あり（８層側から円筒埴輪混入）。
8、暗褐色土。粘性あり。６層より明るい。５層の粒状ブロック混入。
9、暗褐色土。粘性あり。底面から10cm程は崩落したロームとの混土。
10、黄褐色土。ソフトローム。

第108図　10号古墳土層断面図

１、古　　墳

発見された古墳は、16号古墳１基のみである。南側に西長岡南遺跡Ⅱの13号古墳が存在し、周堀まで約14.5mの位置にあり、北側約11.2m離れて西長岡南遺跡Ⅰの古墳９が存在している。各々と重複はない。

16号古墳（第108～113図）

調査　用地取得された長さ53m、幅約５ｍの中で実施され、そのうちほぼ中央で16号古墳が発見された。調査前は、古室氏宅の前庭と車庫の一部であった。

位置　Ⅰ８－１・２、Ⅰ９－304・305・323・324・343・344・363・364・381～383にある。大字西長岡字南463－１。標高は調査面で70.3m前後である。

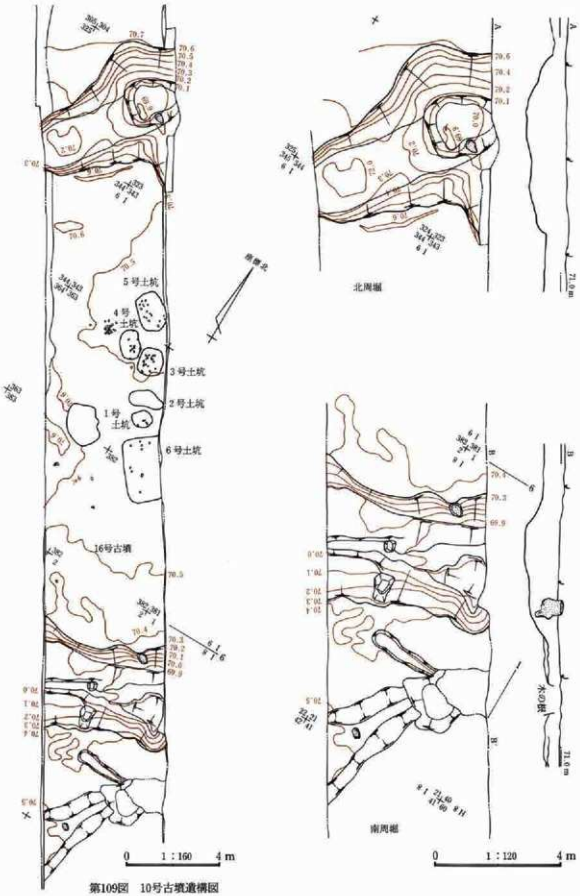
重複　墳丘は、古室氏が宅地とした昭和○年には平夷されていたという。平夷された墳丘側に１～６号土坑が重さになるが、土坑出土遺物から見て、土坑群が後出する。６号土坑との重さなりは第108図の土層断面のとおりである。墳丘平夷の状態は、第108図の土層注記６に「ローム漸移層か。ロームブロック混入。ややボソボソ。」とあり、その上面に表土層が乗ることから既に墳丘築土の痕跡する残さないくらいの削平化であったようである。

墳丘と規模　前述のとおり、墳丘築土の痕跡もなかったようで、周堀から墳丘形態を見ると、北側周堀と南側周堀の墳丘側の平面形状は弧を成し、円形が推測される。しかし、未調査個所も多く、帆立貝型や周堀造り出しの渡り個所を設けた場合など、一沫の不安が残る。規模は、最長径で約21mを測る。墳丘と周堀間の基段の存在は、第108図の北周堀の堀丘側立ち上り、南周堀の墳丘側立ち上りが外縁より急な斜面となること、周堀の掘り上げ土量が墳丘築土であり、埴輪円筒樹立古墳であったことを考慮すれば、基段部存在の可能性はあると推測される。

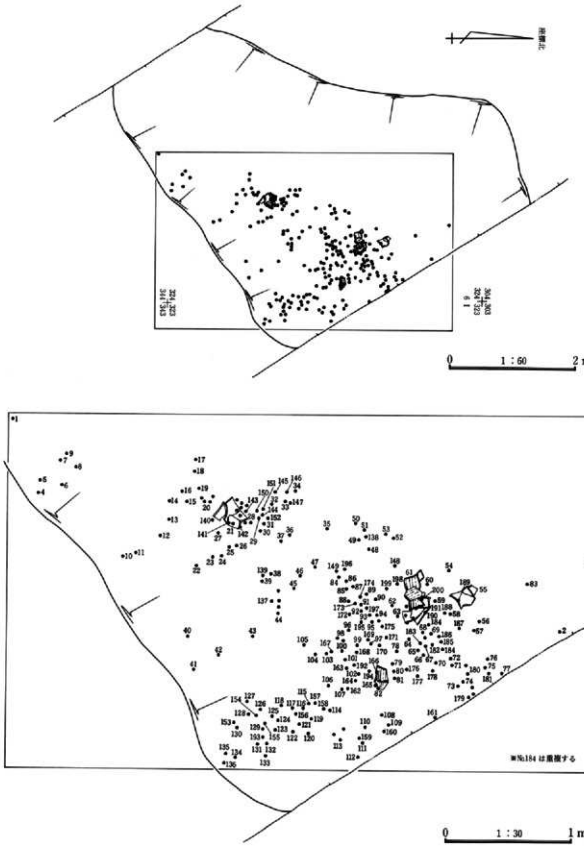
周堀ほか施設　周堀は、第108図の土層注記３にAs－B層層があり、周堀埋土上層を覆っている。同層は南側周堀に厚く、北側周堀ではやや薄い堆積であり、同層の堆積した12世紀初頭頃まで周堀の凹みはしっかり存在したことがわかる。墳丘築土崩落の状況は、土層注記９に「底面から10cm程は崩落したロームとの混土。」とあり、早くから崩落が生じていたようである。埴輪片の存在は、北周堀に集中しているのであるが出土層は、土層注記４～６・８が中心であり、土層注記７では少なく、むしろ土層注記７を埋土注記７を埋土とする溝らしき凹みが、埴輪片群存在個所を切っているかのように写真（写真図版43下段）に見え、As－B降下の前段階に周堀を利用した人為所作があったように思える。その一方で土層断面注記4～６・８は、土層形状が自然成りの形状にしては乱れているので、それも人為所作らしく、倒木など土層が乱れる要因が働いているかのように思える。周堀の規模は、北周堀で最大幅4.98m、最小幅2.46m、深さ1.02mである。南周堀で最大幅4.45m、深さ0.60mを測る。この規模は、南接の13号古墳を上まわり、墳域規模も上まわる。

埋葬施設　平夷されていることから、墳丘上に石室が設けられていた場合は、失なわれていると推測される。旧表土上に設けられた場合は、存在の余地があるが、墳域中央部に掘られた土坑群中の埋土に10cm前後の河原石が多く見られ、周堀中には円礫が少ない点から石室材の一部とも推測されるが破壊されている可能性が強い。それら河原石は竪穴式石室用材を思わせる大きさである。旧表土位置は、第108図土層注記10に黄褐色土、ソフトロームとあり、上部ローム層の一部に相当すると思えること、ローム層と旧表土間の漸移層が残されていないことから。ある程度、高い位置に存在していたと推測される。

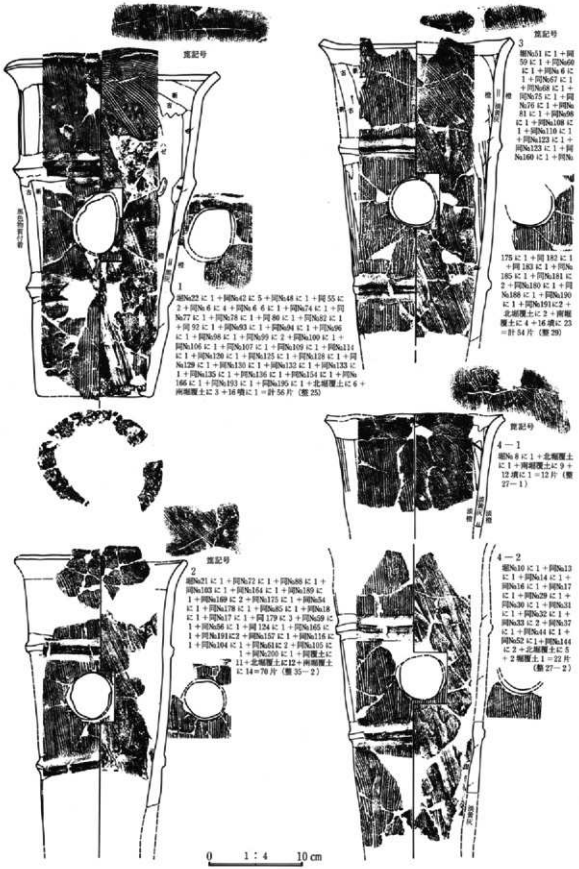
遺物　第111～113図に示めした。円筒埴輪を主とするが、周堀中などから、埋葬施設中に納置された可能性もある第113図21などもある。埴輪の出土は、北側周堀の南東部に集中してり、第110図の分布の範囲が



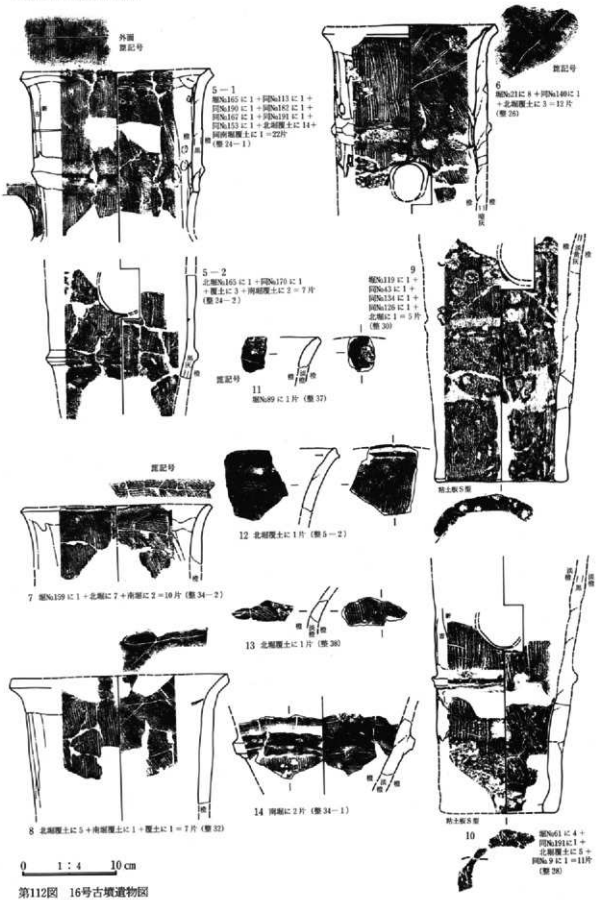
第109図　10号古墳遺構図



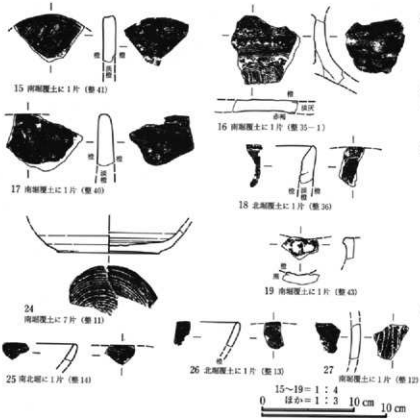
第110図　10号古墳北側周堀の遺物出土状態図



第111図　16号古墳遺物図



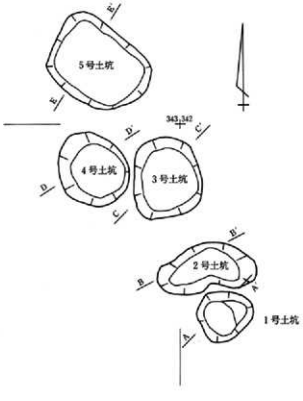
第112図　16号古墳遺物図



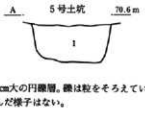
第113図　16号古墳遺物図

それである。前述したように記録写真を見るとAs－B降下に先立ち、人為と思える溝が埴輪片群を切っているかのように写され、その一群の埴輪片を除く場所からの出土は極めて少ない。しかし皆無ではなく、第111図４－２の出土位置には南堀覆土とあり、存在している。第110図の埴輪出土状態図中の遺物番号は、現場番号であり、第111・112図の埴輪接合注記の番号に一致する。埴輪の種は円筒および朝顔で、埴輪円筒は第111図の４個体の遺存が良く、第112図５・６・９・10にまとまりがあり、６・８の口縁部は一周できなかった。朝顔は少なくとも３個体以上があり、第112図14はそのうちの１点である。復元状況は良く、現場取り上げ後、接合可能で整理班に運ばれた点は、調査担当女屋・内田の努力に外ならない。接合後の結果から樹立量を推考すれば、分布の長3.6m、最大幅2.55mの範囲中に、最少限で８個体の円筒と３個体の朝顔が存在したと胎土・焼成から推測される。このほか埴輪形象を第113図15～18に示したが全体的には少量であり、さらに第113図15のように割れ口を含め全体消耗があり、本墳に使用されたか疑わしい個体を含む。埴輪形象使用については、明言はできないが、同一個体に見える複数点数があるので少数使用の可能性はあると考えられる。埴輪形象の種は、第113図16が家形の棟位置を思わせる形状であるほか不明である。補足的に掲げた同図19～27中、25・26は中世土師質土器で15・16世紀頃の人々の活動の一端が示めされ、出土位置が北堀であってもAs－Bの順堆積層より上方であろう。同図24は、８世紀終末頃の須恵器杯で、太田金山か笠懸窯跡群（現笠懸町）の胎土の質感を呈するが、至近の八王子丘陵中の窯跡など太田金山窯跡群製に供給上の可能性がある。同期の遺物は薄く、生活関連とは捉え難い。同図20～23は、古代鉄に見える質感の鉄製遺物で、特に20・22は鉄鏃の形態である。20は箆被部が長く、古代鏃である。鉄製遺物は北側周堀からの出土であるが、埴輪片群に近接するものの外れる。

次に調査担当女屋和志雄・内田敬久による遺物出土所見ほかを加えておきたい。「まず埴輪の出土は、北側周堀に集中してあり、南側周堀および第110図北西部分の余白にかけてこの分布は、ばらばらという粗な状態であった。北側周堀の埴輪片を多く含め土壌とそれ以下の土壌についての該当層は第108図土層注記４・５であり、それは下方が墳丘旧盛土を思わせる質感にあり、埴輪片は、上部に集中の傾向があった。その間の層境は埴輪片も多く含む土層に黒色味が強いものの不明瞭であった。埴輪の出土状態は第110図に示めされている。同図は周堀以下の図化が、形状表現を最小としたドット図としたため、どのように埴輪が出土したのか、ひいては転落したのか、飛散したのかなどを判別することは困難である。補足すると第110図中の140～146、190・200のあたりでは、重さなり合うように集中し、墳丘側から周堀側に向け転倒気味の状態にあり、第111図４－１・２は、140～146付近に主体があり、小片は飛散していることが読図され、第111図１～３は190・200付近の集中が最も密であった個所から出土である。その中で第111図１は墳丘寄りから周堀中央に、同３は出土範囲の外側付近にあり、同２はその中程に破片の分布がある。このような状態から同１は墳丘からの崩落状態をうかがうことができる。同４－１・２も墳丘から外に向けての分布が認められるので同様のことが推察できる。その点は出土のあり様が一率でなく、集中度に粗密があったことがわかるのと同時に、第111・



第114図　土坑遺構図

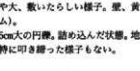


1、φ３～10cm大の円礫層。礫は粒をそろえているが、敷いたり組んだ様子はない。

1、ロームと暗褐色の互層の下に拳大の礫層。

1、円礫層、下部拳大。下部の石は敷いた状態か。上層卵大。

1、拳大の円礫。隙間は、わずかに暗褐色土が充填。礫は底面やや大、敷いたらしい様子。壁、黄褐色土（ソフトローム）。
2、φ10～15cm大の円礫。詰め込んだ状態。地業の可能性もあるが特に叩き締った様子もない。



1、拳大の円礫、隙間は、わずかに暗褐色土が充填。礫は底面やや大。敷いたらしい様子。壁、黄褐色土（ソフトローム）。

112図の大半が北側周堀の小域から出土し、その集中度は、整理担当大江によれば、西長岡南遺跡中、最も顕著と説明があり、墳丘での樹立密度が濃ったと推定できそうである。さらに墳丘盛土の流出が示めされた場所も唯一とのことであり、その点は墳丘基段が狭まく、墳丘盛土が周堀際至近にあり、埴輪円筒の樹立が周堀に近い位置であったことが示唆される」。と教示を得た。

２、穴　　跡

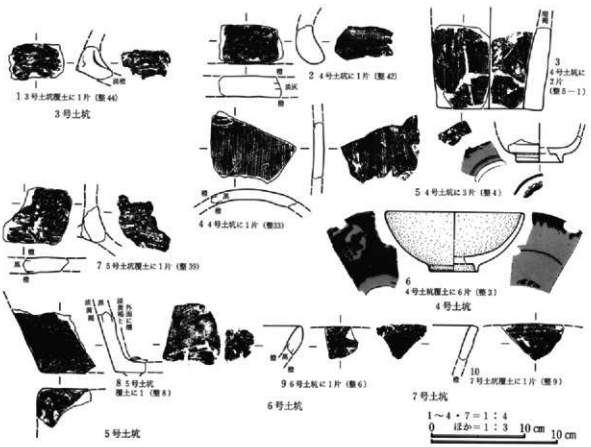
調査では大規模な穴跡が６穴調査され、１～６号土坑と名称があたえられた。そのうち６号土坑と名称があたえられた土坑は第108図のとおり、地表面から掘り込みで現代であることが証されているので個別図を略した７号土坑も現代のため略す。平面形は第109図に示してある。

１号土坑（第114図）

１号土坑はＩ９－362に位置している。底面は第114図のように先細りであり、埋土中に円礫が入いるという。出土遺物は、遺物数量表151頁のとおり皆無である。規模は、127頁一覧のとおりである。近接関係にある他の土坑と同じ集石機能であれば近代以降の掘り込みと考えられる。

２号土坑（第114図）

２号土坑はＩ９－362・363にある。底面は２つに分かれる。埋土中に拳大の礫が入るという。遺物数量表のように遺物は少ない。近接の土坑と同じ機能であれば近代以降の掘り込みと考えられる。



第115図　土坑遺物図

３号土坑（第114・115図）

３号土坑はＩ９－362・363にある。平面は近円形を呈し、底は深さに差は少ないが２つに分かれる。埋土中に拳大の礫が入り集石らしい。出土遺物は第115図１の埴輪馬らしき個体ほか14片の埴輪片、磁器片がある。

４号土坑（第114・115図）

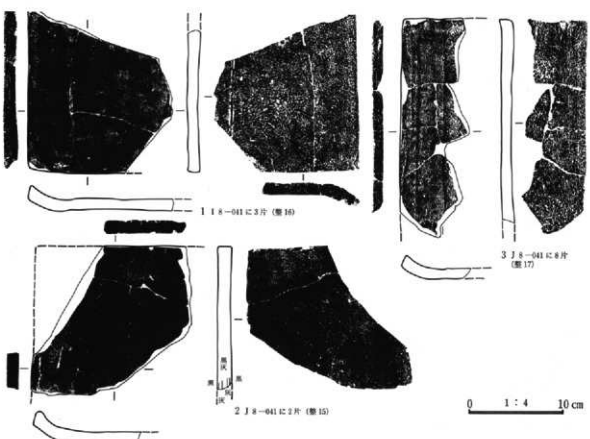
４号土坑はＩ９～362にある。近円形を呈し、底は平らである。規模は127頁一覧にある。埋土中は集石であり，第115図２～６の遺物などがある。最も新しい遺物に同図５・６があり、明治時代以降の所産である。

５号土坑（第114・115図）

５号土坑はＩ９－343にある。規模は127頁一覧にある。埋土中は小円礫の集石であり、第115図７・８などがあり、最も新しい同図８は近代を考えられ、他の土坑と同様に集石機能の穴跡と推定される。

３．補足遺物

太田市の隣接町に大泉町があり、昭和50年代まで現代軟質陶器小泉焼が生産されていた。その製品種の中に十能先の形に似た独得な十能瓦が生産され、ここ西長岡の地でも使用されたらしく、複数個体が得られている。地域性のある消費地遺物の一証として第116図に掲げた。



第116図　補足遺物図

第４篇　遺物量と遺物観察

第１章　遺物量と遺物観察の凡例と例言

発掘調査で得られた、遺物総量や遺物種はどのくらいあったのか示されない場合が多く、そのため、整理者や報告者が図示した遺物図や遺物表現が、ある種にどの程度、片寄ってあるのか、あるいは、表現されなかった時代の個体がどのくらいあるのかなど多くの疑問が生じる。特に広大な遺跡や長大な路線の調査では、遺構の掘り込みが浅い様式の時代や在地における土器生産微弱の時代、具体的に言えば遺構の掘り込みが浅いのは11～14世紀、土器生産の微弱は11～13世紀であり、それらの時代も人々の生活はあったはずでありながら、調査面積の広大さや路線の長大さに伴ない、発掘時点から、掘り込みの浅い遺構の除外や、少量しか出土しない時代の遺物の点在面など除外され、報告に至っては、報告内容からまったく外されることも多い。ここでは、遺物数量値が縄文～近代に至るまで多目的に活用されるよう作成したつもりである。

次の数量表は、発掘時に取り上げられたビニールの遺物袋に付された遺物出土地記入された荷札を出土単位別に集約して、縦軸の項欄の最初に掲げた。出土単位とは、出土場所が同じであれば、それを纏めて一項扱いとし、出土層位が異なれば別扱いとした。配列は、おおむね報告遺構順である。横列の項目欄は、縄文時代から始まる時代順にするべきであったかもしれないが、埴輪量が最も多かったため、それを最初に欄立てし、続いて古墳時代の遺物種の一つである土師器と須恵器の欄を設けた。土師器は、４世紀頃の古式土師器から始まり、９・10世紀頃までを土師器に扱い、中世の同質は土師質土器と称し、次欄とした。須恵器は古代の無釉陶器を指し、古代の灰釉陶器は、陶器欄に灰と添記して、それを示した。土師質土器は、古代から現代までの糸切り底の素焼・赤焼の小皿と平安時代後期の甕を含むつもりでいたが、その甕片は、古代か中世か判然としないものもあり、また、中世軟質陶器にも見え、現実の扱いは、中世軟質陶器に含めた場合があった。軟質陶器は、中世から現代焙烙に使用された在地産を主とする軟質陶器から素焼、黒物を含んで扱った。磁器は、中国製中世磁器から現代磁器までを含み、陶器との差は、透明感のあるガラス質の差である。焼締陶器は中世から近世までの無釉で締りのある陶器を指し、もしくは締りのない無釉陶器であっても備前・常滑などのように焼締陶器を製作意図としたように思える個体も含めた。陶器との区別は施釉されているか否かである。縄文式土器は、縄文であり、弥生式土器は、弥生である。瓦は、古代瓦、中世瓦、近・現代瓦があり、さらに在地の近代以降に量産されたとみられる在地軟質陶器製素焼の十能瓦が加わる。十能瓦は136頁で触れたように、地方産業を左証する資料でもある。現代瓦は主として桟瓦である。鉄製遺物は古墳時代から現代までも含む。石類は、石造品から小礫までを含む。その他は、１回の発掘調査を行なえば、必らず不用意な種が生じ、遺物でない資料類もこれに加わり、粘土材とか石膏型などがある。

表中では、添記に各様の略記を行なった。例記すれば、現―現代、近代―近代、近世―近世、中―中世、中近―中・近世、明現―明治～現代、大―大正、明―明治、昭―第二次世界大戦前の昭和、９Ｃ－９世紀、910Ｃ－９・10世紀、1718Ｃ－17・18世紀、18Ｃ－18世紀、1819Ｃ－18・19世紀、19Ｃ－19世紀、19Ｃ後－19世紀後半、1820Ｃ－18～20世紀、1920Ｃ－19～20世紀などが時代、時期表現である。焼物種の関連とすれば、須－須恵質埴輪(還元と焼締りあり)、青－青磁、灰－灰釉、緑－緑釉、施－施釉、半磁－半磁器、常－常滑、煉－煉瓦、管－土管、十－十能瓦、鉄－鉄製遺物、淬－鉄淬、銅－銅主材遺物、石－礫など、硅－硅化木、凝－凝灰岩、花－花崗岩、礫－礫、石器－石器、鏃－石鏃、瑪－瑪瑙、被－被熱の石、滑－滑石、貴－陰陽

石状の小河原石、粘一粘土材、炭一木炭、土一土壌サンプル、ガーガラス、赤一赤色物質など略称として用いた、さらに注1・同2の意味は調査区域内に該当個所がないことをあらわす。

全体数量と、個別数量との関係は、整合性は薄く、完全ではない。分別も、数え上げるまでの工程の中には土師器に思えたものが、良く見ると埴輪小片であったり、種判別困難な個体も少なからず存在していたし、個体数も、1度目と2度目とでは数の不一致も生じた。重量は、西長岡南遺跡II、全体の埴輪重量をあらかじめ測定しておいた既数が約300kgであったので、さらに各所からの追加が加わり、約330kgとなり、至当な重量であるので大幅な誤りはないと考えられる。2遺跡の合計の遺物数は約17800片で、『史跡十三宝塚遺跡』(財群馬県埋蔵文化財調査事業団)1992の約51000点の約3分の1に相当する。なおこの一表化と算出は、特定補助員の多大な努力に基づくものである。

次に遺物観察に関する凡例と例言である。

遺物の観察は、実測図の描写に整合性を持せ、観察表内容とも一致している。実測図は土器類を1：3で埴輪類を1：4で表現し、それを除く、変則的な縮尺は、縮尺値の数字、または縮尺の傍に示した。実測は、復元し、直立しうる個体を三次元電子実測機（機械名称スリー・スペース）班と整理班による手実測との併用による。実測図は、補助員と整理担当（編者）とが作成し、トレース下図を整理担当が作成し、続いてインクトレース（浄書）を業者委託とし、統一的仕上りとなるよう心がけた。

遺物実測の表現方法は、実測中軸は直接、四分割法を行ない得る個体を実線で、回転して側面・断面を同一個所から求める必要性のある個体の中軸線を1点鎖線で示した。割れ口延長の破線は通常の場合、想定であるので破線2単位で、それ以上、延びている場合の分割位置とは異なる部分をあてた断面・側面も破線延長である。線の太い細いの用法は、主体を実線で、補助を細称で表現してある。器壁断面中には、焼成時の色調の変化を、製作時の接合痕、製作時に生じたとみられる粘土走行とを加えた。色調の変化は、窯を用いての焼造を意識したつもりで、見た目の色調も加えたが、観察表の色調とそれは異なる。接合痕や粘土走行は、明瞭な接合部は細線で、走行は点描で表わした。多くの場合は、その併用であり、明瞭な接合部は少ない。また土師器中に型成形時の型肩を認めた場合は、接合線や粘土走行の線表現があっても、紐作りとは限らず粘土塊の接合面の時もある。瓦断面の側部のケバ線は篦削りによる面取り端を表わし、須恵器坏のケバは、水挽成形時の挽出し部である。土器々面の表現は、横撫については線に途切れを設け、幟幅目も一種の撫が加わるので同様に用いたが、定規使用が轆轤成形個体である。篦削や埴輪内面の指による掻落しや接合強化の指の平滑化は、粘土の移動を伴なうので共通して一点鎖線状の線で示し、刷毛目単位も一点鎖線である。刷毛目や篦削目の走行は矢印で示した。矢印の基は砂粒の移動を8倍ルーペで観察し、その状況を捉えた。状況には3種があり、砂粒が喰い込んで胎土中に残る場合、砂粒が製作時の篦削りなどで抜ける場合、土器の使用中から発掘調査後の整理・実測作業までの間に抜ける場合である。以上、3種の中の総合をもって判別した。矢印は砂粒の移動方向、篦の進行方向を示めす。点描表現は、造形上、必要な場合と、各種トーンを用いて表現を最小とするため点描とした。光源は左光源45°を意識した。

拓本については、二つの意味あいから貼付した。一つは文様・技法痕などであり、いま一つは、整形状態や自然のハゼなど、滑沢面などの質感をとらえ、表現するためである。

観察表項目は、既報告の『史跡十三宝塚遺跡』1992などとも共通するため参照されたい。

西長岡南遺跡II

遺構名・取り上げ場所	総数	総重	須恵器		須恵器		土師器		土師器		軟陶		硬質		陶器		陶器		焼締陶		縄文		弥生		瓦		鉄製		石製		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
5 墳 三角点下	154	3230	152	3480	2	45	—	—	—	—	近代 5	55	18C 1	40	18世 4	90	—	—	4	20	—	—	—	—	—	—	—	—	石 1	5	—	—
	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	近世 1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5 墳　小　計	155	3235	152	3480	2	45	0	0	0	0	6	55	1	40	4	90	0	0	4	20	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0
21 墳周辺No. 1	24	1170	23	1160	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 2	229	5023	229	5023	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 3	84	7410	81	7392	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 4	26	3661	26	3661	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 5	130	2137	129	2731	—	—	—	—	—	—	近世 1	1	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	近代 1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 6	106	3177	106	3177	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 7	65	3740	65	3740	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 8	33	2099	33	2099	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 9	47	1540	47	1540	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 10	45	1732	45	1732	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 11	6	340	6	340	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 12	42	2254	42	2254	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 13	3	190	3	190	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 14	65	2443	65	2443	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 15	2	401	2	401	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 16	1	50	1	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 17	2	75	2	75	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 18	5	880	5	880	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 19	3	473	3	473	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 20	1	270	1	270	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 21	1	180	1	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 22	1	220	1	220	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 23	6	470	6	470	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 24	1	140	1	140	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 25	2	220	2	220	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 26	1	270	1	270	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 27	2	294	2	294	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 31	1	230	1	230	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 32	1	180	1	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 33	4	1704	4	1704	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 34	18	947	18	947	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 35	13	822	13	822	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 36	54	1948	54	1948	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 37	96	3203	95	3183	—	—	—	—	—	—	近代 1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 38	1	210	1	210	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 39	4	291	4	291	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 40	1	150	1	150	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 41	1	50	1	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 42	20	1004	20	1004	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 43	54	1961	54	1961	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 44	27	2275	27	2275	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 45	13	389	13	389	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 46	10	552	10	552	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 47	5	155	5	155	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 48	60	3899	60	3899	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No. 49	31	2084	31	2084	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

遺構名・取り上げ場所	横穴総数	遺物総数	埴輪		土師器		須恵器		土師質		軟陶		硬質		陶器		磁器		鉄釉陶		縄文		弥生		瓦		鉄製		石製		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
11遺周縁No.50	40	1469	40	1469	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.51	16	632	16	632	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.52	28	2064	28	2064	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.53	36	703	36	703	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.54	34	1318	34	1318	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.55	3	715	3	715	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.56	5	169	5	169	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.57	18	949	18	949	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.58	25	986	25	986	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.59	22	191	22	191	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.60	35	1912	35	1912	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.61	1	74	1	74	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.62	47	1797	47	1797	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.63	3	114	3	114	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.64	3	94	3	94	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.65	26	673	26	673	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.66	12	562	12	562	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.67	32	1246	32	1246	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.68	21	476	21	476	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.69	17	647	17	647	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.70	14	492	14	492	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.71	17	541	17	541	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.72	114	3669	114	3669	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.73	23	828	23	828	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.74	50	2003	50	2003	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.75	18	267	18	267	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.76	71	3215	71	3215	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.77	4	71	3	61	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.78	2	130	2	130	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.79	1	220	1	220	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.80	5	113	5	113	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.81	2	233	2	233	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.82	18	1090	18	1090	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.83	43	2678	43	2678	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.84	78	2854	78	2854	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.86	2	250	2	250	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.87	7	1831	7	1831	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.88	7	444	7	444	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.89	6	381	6	381	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.90	1	150	1	150	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.91	1	720	1	720	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.92	15	510	14	499	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.93	57	1771	57	1771	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.94	76	2505	76	2505	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.95	2	103	2	103	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.96	14	900	—	—	14	900	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2袋	562	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	赤2袋	562
〃 周縁	716	25375	631	14332	28	95	4	66	—	須代3	70	4	30	石1	石C15	—	—	11	165	—	—	十2	75	1	10	石13	375	—	—			
			—	—	—	—	—	—	中3	11	中1	20	—	10	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　J 10—102周縁	3	50	—	—	2	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

遺構名・取り上げ場所	総計 総数	総計 g	須恵器 数	須恵器 g	土師器 数	土師器 g	須恵器 数	須恵器 g	土師質 数	土師質 g	軟陶 数	軟陶 g	硬質 数	硬質 g	陶器 数	陶器 g	瓷器陶 数	瓷器陶 g	磁文 数	磁文 g	弥生 数	弥生 g	瓦 数	瓦 g	鉄製 数	鉄製 g	石器 数	石器 g	その他 数	その他 g
11層 J 10－084周堀	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	銅 1	1
〃 J 10－064～065周堀	2	41	－	－	－	－	－	－	－	－	近代 1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	40	－	－
周堀小計	3265	7488	3150	12823	42	1856	4	66	3	13	14	122	4	30	11	115	0	0	16	190	0	0	7	75	1	10	12	415	1	1
	23袋	562	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	赤 1袋	562
11層石室No.1	50	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	ガ 19	21
〃 〃 No.2	1	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	20	－	－	－	－
〃 〃 No.3	1	100	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	100	－	－	－	－
	1袋	290	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	土 1袋	290
〃 〃 No.4	1	30	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	30	－	－	－	－
〃 〃 No.5	2	60	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	10	銅 1	50	－	－
〃 〃 No.6	2	555	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	5	1	550	－	－
〃 〃 No.7	1	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	20	－	－	－	－
〃 石室2層No.8	19	8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	ガ 19	8
〃 〃 〃 No.9	1	10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	10	－	－	－	－
〃 〃 〃 No.10	1	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	20	－	－	－	－
	1袋	50	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	土 1袋	50
〃 石室2層	6	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	玉 6	2
〃 石室	73	3605	66	3500	－	－	－	－	－	－	近代 2	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	近代 1	40	3	25	鞍 1	5810	－	－
	3袋	1060	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	鐙 2袋	1060	－	－
			－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	鞍 1	20	－	－
〃 石室埋土	32	6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	ガ 57	6
〃 石室内アク土	2	90	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	20	鞍 1	40	－	－
石室小計	226	4547	66	3500	0	0	0	0	0	0	2	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	40	12	260	4	6860	141	32
	5袋	1650	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3袋	1650	7袋	340
〃 墳丘	736	9540	685	9950	4	13	2	10	近代 1	1	近代 11	135	5	31	15	75	－	－	7	40	－	－	近代 3	50	－	－	剣 1	1	－	－
			－	－	－	－	－	－	鉄 1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	十 1	20	－	－	石 19	210	－	－
			－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	鞍 1	10	－	－
〃 J 10－123墳丘	2	192	7	192	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－064 〃	14	635	13	630	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	石 1	5	－	－
〃 J 10－044 〃	1	23	1	23	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
墳丘小計	753	10440	706	10945	4	13	2	10	2	2	11	135	5	31	15	75	0	0	7	40	0	0	4	70	0	0	22	226	0	0
11層盛土民	1061	3260	1040	3028	3	40	－	－	－	－	近代 1	120	－	－	4	80	中 1	30	3	85	－	－	近代 1	130	－	－	鐙 2袋	4930	－	－
	2袋	4930	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	石 2	280	－	－
〃 J 10－123盛土民	1	93	1	93	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－104 〃	5	160	5	160	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－084 〃	9	665	9	665	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－044 〃	1	100	1	100	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
盛土民小計	1077	3973	1056	3546	3	40	0	0	0	0	4	120	0	0	4	80	1	30	3	85	0	0	4	130	0	0	2	280	0	0
	2袋	4930	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2袋	4930	－	－
11層 J 10－123	81	2970	81	2970	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－123墳土	145	1730	145	1730	4	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－123付近 〃	10	75	－	－	4	20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	35	－	－	－	－	－	－	1	10	石 10	－
〃 J 10－122	50	2829	49	2804	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	25	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－122墳土	99	1324	99	1324	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－104	1	66	1	66	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－104付近	31	341	17	280	8	20	－	－	－	－	近代 1	1	－	－	1819 C 1	10	－	－	3	20	－	－	－	－	－	－	石 1	10	－	－
〃 J 10－102	5	744	4	743	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	鐙 1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－102墳土	225	3150	225	3150	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－102付近遺構	1	93	1	93	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
〃 J 10－085	5	82	1	27	2	20	－	－	－	－	－	－	1	5	1	30	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

遺構名・取り上げ場所	総出土総数	竪穴	竪穴	土師器		須恵器		上師器		軟陶		硬質		陶器		焼締陶		鍋	文	弥生		瓦		鉄製		石製		その他	
		数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
11號Ｊ10～085覆土	40	460	40	460		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～084	230	6141	209	5980	1	1	9	105	中 2	5	–	–	3	20	3	20	–	–	2	20	–	–	–	–	–	石 1	90	–	–
〃　Ｊ10～084覆土	283	4460	283	4460	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～085 〃	45	470	45	470	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～083付近	5	53	–	–	1	1	–	–	–	–	近世 1	1	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	50	–	–	–	–
〃　Ｊ10～085	13	253	9	210	2	1	–	–	–	–	中 2	40	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～084・085	2	84	2	84	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10-084・085覆土	90	1190	90	1190	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～084	146	1869	146	1869	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～084覆土	1386	15571	1386	15571	–	–	2	2	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～045	22	254	14	200	1	1	–	–	中 1	1	近代 1	30	–	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	石 1	1	–	–
〃　Ｊ10～044	14	527	9	493	–	–	–	–	–	–	中 1	20	–	–	–	–	–	–	1	40	–	–	–	–	–	石 2	20	–	–
		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黄 1	5	–	–
〃　Ｊ10～044覆土	332	4639	332	4639	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ10～024	14	160	7	120	5	10	–	–	–	–	近代 1	10	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	石 1	20	–	–
〃　覆　土	852	8393	278	2265	23	80	4	90	–	–	近代 1	45	3	12	4	20	–	–	9	161	–	–	近代 1	235	摩 1	30	凝 1	20	–
			–	–	–	–	–	–	中 3	2	近世 2	160	18C 1	20	4	30	–	–	–	–	–	–	–	–	–	石 2	45	–	–
			–	–	–	–	–	–	–	–	中 2	160	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	砥 1	230	–	–
			–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	石 6	35	–	–
			–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	黄 1	1	–	–
11號グリッド小計	4739	94323	4573	92143	49	184	13	197	6	8	23	487	10	39	16	122	0	0	19	201	0	0	5	235	4	90	19	497	0	0
11　堺	329	5202	314	4192	7	71	3	5	–	–	近代 3	15	4	10	2	2	–	–	17	260	–	–	近代 1	5	1	5	石 132	345	–	–
		–	–	–	–	–	–	–	–	–	近世 1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	凝 43	380	–	–
		–	1	–	–	–	–	–	–	–	中 1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　確認溝	83	950	83	950	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
11構小計	412	6252	397	5142	7	71	3	5	0	0	5	17	4	10	2	2	0	0	17	260	0	0	1	5	1	5	175	725	0	0
11　堺周　辺	43	541	9	366	15	54	1	1	–	–	近代 4	70	2	1	–	–	–	–	1	5	–	–	十 1	20	–	–	石 4	1	–	–
		–	–	–	–	–	–	–	中 4	11	中 1	15	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　周辺確認溝	32	1200	–	–	4	10	1	15	–	–	近世 3	160	16C 3	65	戦期 14	630	中 1	30	–	–	–	–	近代 1	160	–	–	–	–	–	–
		–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	近世 2	200	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
11構周辺小計	75	1741	9	366	19	64	2	16	4	11	12	245	5	66	14	630	6	230	1	5	0	0	2	120	0	0	1	1	0	0
11構合計	1034	2800	8732	2580	129	1414	36	294	15	32	71	1151	18	196	62	1124	7	250	43	881	0	0	19	665	18	375	335	2724	142	38
	9	2182	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	5	2696	4	96
12號橋丘	127	2835	109	2240	6	20	–	–	中 2	20	近代 1	15	–	–	3	35	–	–	5	35	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11～309	19	420	17	400	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	20	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11～308覆土	13	136	7	60	–	–	–	–	–	–	近代 1	10	–	–	–	–	–	–	5	66	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11～308付近	18	401	17	400	1	1	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11～289No.1	2	50	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	50	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　〃　No.2	1	20	1	20	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11～289	100	2320	90	1800	2	20	–	–	中 2	10	近代 4	65	–	–	18C 1	5	–	–	–	–	–	–	–	–	–	石 1	220	–	–
〃　Ｊ11-289内覆土	17	320	11	270	2	10	–	–	中 1	10	近代 1	10	–	–	–	–	–	–	1	10	–	–	–	–	–	石 1	10	–	–
〃　Ｊ11-289外覆土	20	261	11	210	6	20	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	2	20	–	–	–	–	1	11	–	–	–
〃　Ｊ11-251内覆土	68	2295	60	2210	–	–	–	–	中 1	5	近代 2	20	1	10	2	20	–	–	1	20	–	–	–	–	–	石 1	10	–	–
〃　Ｊ11～270	3	110	3	110	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11～269No.3	1	220	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	石 1	220	–	–
〃　〃　No.4	1	90	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	90	–	–	–
〃　Ｊ11-250内覆土	8	345	4	300	–	–	–	–	–	–	近世 1	30	–	–	1	15	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11-251付近 〃	14	490	11	480	3	10	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–
〃　Ｊ11-250確認溝	1	110	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1	110	–	–	–
〃　〃　内覆土	41	1450	30	1250	–	–	–	–	中 2	20	–	–	–	–	–	–	–	–	6	60	–	–	–	–	1	20	石 2	90	–	–

遺構名・取り上げ場所	横穴総数	遺存	埴輪		土師器		須恵器		土師質		軟陶		硬陶		瓦器		陶器		磁器陶		織文		弥生		瓦		鉄		石類		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
13溝 J 11－250付近	65	1283	53	1200	3	20	—	—	—	—	近代 2	20	—	—	16DC 2	50	—	—	4	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 J 11－240付近覆土	35	676	27	600	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—	1	15	—	—	—	—	—	—	—	—	石 4	30	縄 1	1
〃 J 11－231	8	61	1	20	—	—	—	—	—	—	近代 1	1	—	—	—	—	—	—	6	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 J 11－231付近覆土	6	120	6	120	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 J 11－232 〃 〃	98	1791	94	1721	3	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	石 1	20	—	—
〃 J 11－211付近	569	1054	565	9420	21	141	3	30	中 2	20	近代 2	20	18C 1	10	—	—	中 1	20	17	162	—	—	—	—	—	—	—	—	縄 1	1	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 16	180	—	—
〃 J 11－211付近覆土	139	1615	117	1785	6	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	35	—	—	—	—	—	—	—	—	石 1	5	—	—
〃 J 11－211 Aa-B下	19	405	18	400	—	—	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 J 11－210	49	1480	35	1230	1	5	5	10	—	—	中 1	45	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 5	160	—	—
〃 J 11－210 Aa-B上	1	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	70	—	—	—	—
〃 J 11－192	57	900	51	845	3	15	1	10	—	—	近代 3	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	10	—	—
	12	91	—	—	—	—	—	—	縄 1	1	中 1	20	—	—	—	—	—	—	10	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 外縁 Aa-B上	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	5	—	—	—	—
12 溝　小　計	1563	8008	1380	7930	58	372	10	55	12	86	19	296	1	20	12	120	1	20	68	634	0	0	0	0	0	0	6	306	35	956	縄 1	1
13溝周縁No 1	2	35	2	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 H8－158周縁撹乱	37	529	34	310	4	9	2	20	—	—	3	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	5	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	近代 1	20	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	十 1	5	—	—	—	—	—	—
〃 H 8－119	7	90	7	90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 H 8－100周縁	35	506	31	455	—	—	—	—	中 1	10	近代 1	10	—	—	18C 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	近世 1	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13 溝　小　計	82	1160	65	890	4	9	2	20	1	10	5	140	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	75	0	0	2	5	0	0
14墳石室	2 袋	8500	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	縄 2 袋	8500	0	0
15墳石室	3 袋	1250	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	縄 3 袋	1250	—	—
〃 K 12－067	57	521	5	80	45	380	—	—	—	—	1	10	18C 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 5	50	—	—
15 墳　小　計	57	521	5	80	45	380	0	0	0	0	1	10	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	50	—	—
	3 袋	1250	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3 袋	1250	—	—
古　墳　合　計	1599	8698	1324	8040	247	2221	38	379	24	117	102	1652	31	257	29	1235	8	270	135	1535	0	0	21	240	24	681	278	4540	142	389
	14袋	4941	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20袋	3540	4袋	982
1 住	43	531	0	0	41	480	1	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	縄 1	20	0	0
2 住	1	20	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 覆 土	661	4296	—	—	656	4300	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	1	5	—	—	—	—	—	—	石 3	90	—	—
2 住　小　計	662	4416	1	20	656	4300	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0	3	90	0	0
3住No 1	1	20	—	—	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 2	1	5	—	—	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 3	1	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 4	4	60	—	—	4	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 5	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 6	1	60	—	—	1	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 7	3	60	—	—	3	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 8	1	3	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No 9	14	180	—	—	14	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No10	15	150	—	—	15	150	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No12	1	5	—	—	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No13	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No14	2	10	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No15	3	10	—	—	3	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No16	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No17	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

遺構名・取り上げ場所	総出土総数	総石器	磨輪		土製品		須恵器		土師質		軟陶		硬質		陶器		磁器陶		銅文		骨生		瓦		鉄製		石類		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
3　住	63	1375	—	—	10	205	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	深 4	670
〃　J 12－330	14	100	—	—	14	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　J 12－358	10	250	—	—	10	250	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　覆　土	99	700	2	120	96	580	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3　住　小　計	186	3025	2	120	230	2135	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	670
4 住No 2	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No. 3	3	60	—	—	3	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No. 4	5	60	—	—	5	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	2	30	—	—	2	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　覆　土	20	180	—	—	20	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
4　住　小　計	31	360	0	0	31	360	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
J 12－320A 地点	18	270	—	—	18	270	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 12-340 B地点No. 1	19	100	—	—	10	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No.2	8	170	—	—	8	170	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 3	15	90	—	—	15	90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 4	4	40	—	—	4	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 5	3	135	—	—	3	135	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃	48	301	—	—	48	300	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 12－320 C 地点	128	611	—	—	125	570	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	40	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—
A ～ C 小　計	230	1717	0	0	231	1675	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	40	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
住　居　自　計	1285	10810	3	140	1149	9063	1	12	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2	40	1	5	0	0	0	0	5	121	4	670
1 溝 J 10－087	4	60	0	0	4	60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3 溝住宅	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0
4 溝 J 12－287 住宅	2	10	0	0	2	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5 溝 J 12－350 〃	50	668	5	112	49	504	—	—	—	—	—	明 1	9	3	58	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 1	5	—	—
〃　J 12－340 〃	97	610	4	70	90	530	—	—	中 3	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5　溝　小　計	156	1290	9	182	139	1034	0	0	3	10	0	0	1	9	3	58	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0
6　溝	376	1190	213 8580		117 1360		4	230	近世 2	10	近代 17	275	青 1	30	2	25	近世 2	10	—	—	—	—	十 2	100	—	—	石 2	190	—	—
〃　覆　土	143	7515	125	6995	4	90	2	18 C 135	18 C 1	10	近代 5	90	18 C 2	30	1	10	無陶 1	60	2	110	—	—	—	—	—	—	石 2	190	—	—
											中 3	155															磨 2	190		
6　溝　小　計	519	8705	338 9095		121 1360		6	365	6	30	26	585	3	60	3	95	4	120	0	0	0	0	2	100	0	0	3	330	0	0
9　溝　K 12－204 住宅	1	171	1	80	4	90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	41	—	—
〃　J 12－184	50	770	16	540	29	190	—	—	—	—	近代 1	10	1	20	2	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	30	—	—
〃　J 12－164	8	260	1	10	7	250	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　J 12－164 住宅	17	81	2	30	14	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 1	1	—	—
9　溝　小　計	82	1282	20	590	54	580	0	0	0	0	1	10	1	20	2	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	72	0	0
10 溝 J 12－379No. 1	3	130	—	—	3	130	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 2	1	5	—	—	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 3	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 1	20	—	—
〃　〃　No. 4	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 5	1	20	—	—	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 6	3	20	—	—	3	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 7	1	110	—	—	1	110	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　No. 8	4	90	—	—	4	90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　覆　土	9	60	—	—	9	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10　溝　小　計	24	475	0	0	23	455	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	20	0	0
11　溝	7	20	0	0	7	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14　溝	5	70	0	0	4	30	0	0	0	0	近代 1	40	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0
14・16溝	41	290	1	40	34	140	0	0	0	0	近代 1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0

遺構名・取り上げ場所	総掘起数	総量g	須恵器		土師器		須恵器		土師器		軟質陶器		硬質陶器		陶器		磁器陶器		織文		弥生		瓦		鉄製		石製		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
15 溝	23	141	0	0	19	80	0	0	0	0	0	0	中1	20	0	0	0	0	0	0	1	20	0	0	0	0	0	0	石2	21	0	0
23 溝	2	139	2	139	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
溝　合　計	866	2391	370	6517	411	4054	6	365	9	40	30	465	5	89	9	163	4	130	1	20	0	0	2	180	3	20	17	488	0	0
1 坑	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	近代1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2 坑 K12−380	3	36	0	0	2	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0
9 坑 J11−240	5	65	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	65	0	0	0	0	0	0	0	0
11 坑	54	1175	1	100	49	575	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	石1	500	0	0
12 坑	3	5	0	0	3	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
13 坑	32	176	1	1	28	116	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
14 坑	110	630	0	0	110	600	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
15 坑	6	81	3	56	3	31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
坑　合　計	214	2113	5	157	194	1357	0	0	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	9	90	0	0	0	0	0	0	5	500	0	0
9 P　J12−379	2	10	0	0	2	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16 P　J11−418	2	70	0	0	1	10	0	0	0	0	中1	60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
P　合　計	4	80	0	0	3	20	0	0	0	0	1	60	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3 側木	2	5	0	0	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4 側木　J11−192	4	130	0	0	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	110	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
側　木　合　計	6	135	0	0	3	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	110	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
縄西田−V期	37	670	16	435	1	20	1	5	—	—	近代1	40	—	—	—	—	—	18	200	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　J11−290	8	600	8	600	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　VII期 J11−271	6	190	5	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　J11−271	7	421	2	120	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	弥1	90	—	—	石器1	60	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鉄2	150	—	—	—	—
〃　VIII期 J11−288	22	560	10	430	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	80	—	—	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—
〃　〃　J11−289	3	80	3	80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　J11−231	1	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　III−VIII期 J11−230	14	330	4	220	—	—	—	—	—	—	1	50	—	—	—	—	9	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　VIII期 J11−249	4	50	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　J11−231	24	731	16	630	—	—	1	40	—	—	—	—	—	—	—	—	6	60	—	—	—	—	—	—	鉄1	1	—	—	—	—
〃　〃　J11−230	16	507	6	50	1	1	—	—	—	—	—	—	平安2	30	—	—	6	70	—	—	—	—	—	—	鉄1	1	—	—	—	—
〃　III−VIII期 J11−212	3	25	1	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　VII期　〃	3	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　J11−192Sa.2	2	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.3	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.4	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.5	2	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.6	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.8	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.9	1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.10	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃　Sa.11	62	755	3	6	2	4	—	—	—	—	—	—	—	—	1	5	54	720	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　VIII−VIII期 J11−191	8	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　VIII期 J11−174	3	25	—	—	1	5	—	—	—	—	近代1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	鉄1	10	—	—	—	—
〃　〃　J11−173	28	264	17	239	8	20	—	—	近世1	1	—	—	—	—	—	—	4	20	—	—	—	—	—	—	石1	7	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	中1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　III−VIII期 J11−171	4	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	20	—	—	—	—	—	—	鉄1	1	—	—	—	—
〃　J11−150柱穴	14	141	3	60	4	30	—	—	—	—	—	—	平安2	10	大1	20	—	3	20	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—
〃　J11−150柱穴	16	460	24	310	8	30	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	10	80	—	—	—	—	—	—	—	石1	30	—	—
〃　III−VIII期 J11−152	2	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	鉄1	10	—	—	—	—

遺構名・取り上げ場所	縄文起数	縄文時代	埴輪		土師器		須恵器		土師質		軟陶		硬質		陶器		磁器		瓦		鉄製		石製		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
＃　　Ⅲ～Ⅵ層 J 11-133	10	280	2	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	230	—	—	—	—	—	—
竪　面　　J 11－13付近	111	1255	34	370	23	160	1	10	中 2	5	近代 4	40	明治 2	90	4	15	—	—	32	620	—	—	煙 2	80	鉄 1	10	石 2	40	管 1	5
調　査　合　計	445	7079	156	2237	44	250	3	55	6	17	7	140	7	130	8	60	0	0	192	2569	0	0	3	120	4	21	14	305	1	5
A S－B F K 13-253-254	4	70	—	—	3	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—
＃　K 13-152・137	9	155	—	—	3	35	—	—	—	—	近代 1	50	19C 4	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	矛 1	30
Br－F A F K 13-194No.1	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　＃　No.2	1	10	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　K 13-234No.1	2	5	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　K 13－203	12	60	—	—	12	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　K 13－273	15	41	2	10	12	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	斧 1	1
＃　K 13－272	3	20	—	—	2	10	9 C 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
C F 最下層 K 13-234No.5	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　＃　No.1～4	20	230	—	—	20	230	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　＃　No.6	2	20	—	—	2	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　＃　No.7	7	61	—	—	6	60	—	—	—	—	—	—	—	—	18C 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　＃　No.8	1	20	—	—	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　＃　No.9	1	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
低　地　合　計	29	661	2	10	65	487	1	10	6	6	1	50	4	60	1	1	0	0	2	1	1	1	0	0	0	0	1	10	2	31
試掘J 11地 1トレ	25	331	14	230	3	10	—	—	近代 1	1	近代 2	20	1	10	—	—	—	—	1	10	—	—	十 2	50	—	—	—	—	—	—
＃　J 12-300地 2トレ	3	10	—	—	3	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　K 12地 3トレ	123	1061	6	20	99	770	—	—	中 2	10	近世 1	20	18C 10	20	18C 5	100	—	—	1	1	1	10	+ 1	20	—	—	石 4	50	—	—
＃　土壌採取地点No.2	4	40	—	—	3	30	—	—	—	—	—	—	18C 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　K 13－253トレ	17	160	—	—	10	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	100	—	—	—	—	—	—	環 1	10	—	—
＃　K 13－253・254	2	20	—	—	—	—	—	—	—	—	近代 2	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
＃　土壌採取地点No.3	11	70	1	10	10	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
試掘地点No.23	5	50	—	—	—	—	—	—	中近 2	10	近代 2	30	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2	30	—	—	—	—	—	—	—	—	近世 2	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
試掘合計	192	1792	21	330	128	950	0	0	6	21	9	120	3	20	6	110	0	0	8	111	1	10	3	20	0	0	3	60	0	0
H 8	11	172	9	170	—	—	—	—	—	—	近代 1	1	—	—	18DAC 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
H 8－177	5	130	5	130	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 10－025	9	191	5	130	1	1	—	—	—	—	近代 1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	40	—	—
J 10－006	13	140	6	100	5	10	—	—	—	—	近代 1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	焜 1	10	—	—	—	—
J 10－005	8	60	4	40	4	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11-366・367確認面	35	197	16	130	12	35	2	20	中 1	1	近代 1	10	—	—	18DAC 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	10	—	—
J 11－386	3	20	—	—	2	10	—	—	—	—	中 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－385	11	72	3	50	4	20	1	1	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	1	—	—
J 11－367	13	72	3	20	5	30	—	—	—	—	近代 1	10	環 1	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	10	—	—
J 11－366	12	61	6	50	5	10	—	—	—	—	—	—	—	—	18DAC 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－348	2	2	1	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－347	1	20	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－340	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	明 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－327	6	60	5	50	—	—	—	—	—	—	—	—	骨 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－290確認面	26	695	17	650	1	5	2	30	—	—	近代 1	50	近世 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	150	—	—	—
J 11－213	8	92	5	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	2	31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11-174付近確認面	8	20	—	—	6	10	—	—	—	—	近代 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11-172　＃　＃	67	1240	57	1170	3	10	—	—	—	—	近代 1	20	—	—	—	—	—	—	4	50	—	—	—	—	—	—	石 1	20	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	中 1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11-096　＃　＃	16	181	6	80	1	1	—	—	—	—	近代 1	10	—	—	—	骨 1	70	—	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—	—	—
J 11-076　＃　＃	47	415	13	185	10	80	2	15	鍛 2	30	近代 5	50	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	1	5	石 6	40	—	—

遺構名・取り上げ場所	縄文総数	縄文g	磨製		土錘器		須恵器		土師器		軟質		硬質		陶器		磁器		鉄製		鋼		文		弥生		瓦		鉄製		石製		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
J 11－027付近	17	120	—	—	17	120	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－056 〃	17	142	2	31	14	110	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－038	8	30	—	—	8	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－037付近	38	253	2	50	35	200	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
J 11－018	3	100	—	—	2	80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—
J 12－399付近	36	180	—	—	20	160	—	—	中 2	30	—	—	—	—	—	—	中 1	20	—	—	—	—	—	—	2	20	—	—	1	30	—	—	—	—
J 12－398 〃	27	181	—	—	26	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石錘 2	1	—	—
J 12－380 〃	8	50	—	—	7	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 12－379 〃	4	11	—	—	3	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—
J 12－360	7	180	4	130	2	10	—	—	—	—	中 1	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 12－339	2	410	—	—	1	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石錘	270	—	—
J 12－340	11	60	1	40	10	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12-301付近遺構面	68	336	6	90	53	200	—	—	中 1	10	—	—	須 1	10	6	31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18C 3	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12－281付近	4	110	3	70	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	30	—	—	—	—
K12－243 〃	3	40	—	—	1	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12-244付近遺構面	25	310	3	30	9	70	2	100	—	—	—	—	—	—	灰 2	20	—	—	—	6	50	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18C 2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12－223付近	69	381	5	100	41	250	—	—	—	—	近代 2	20	18C 1	5	18C 1	40	—	—	10	101	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	4	40	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	中 1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12-184付近遺構面	90	936	5	60	72	730	2	30	中 2	80	近代 2	10	18C 1	1	18世C 2	5	—	—	3	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石錘	20	—	—
K12－165	2	40	—	—	—	—	—	—	—	—	中近 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	中 1	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12－164	53	560	3	60	44	320	—	—	—	—	近代 2	20	—	—	—	—	—	—	3	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨 1	100	—	—
K12－126	1	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12－068	17	90	6	50	10	30	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12－048	49	251	4	60	37	120	—	—	中 2	10	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	石 2	20	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	20	—	—
K12－019	16	63	2	11	12	50	—	—	中 1	1	近代 1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K12－027	17	132	2	30	10	30	—	—	—	—	近代 2	20	—	—	18世C 2	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 2	2	—	—
K13－232	144	1152	3	60	125	790	—	—	—	—	近代 2	40	—	—	1	1	1	130	3	41	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	石 1	30	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18C 3	80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K13－312	212	1222	1	30	199	1030	—	—	—	—	縄 1	1	—	—	—	—	—	—	7	80	2	31	—	—	—	—	—	—	—	—	石 1	30	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	近代 1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K13－274No.1	3	10	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃 No.2	1	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K13－274	1	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K13－190No.1	1	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K13－150	2	680	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	磨 2	680
J 12-359遺構面(北1)	3	11	—	—	2	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K13-342・343(北2)	118	901	3	50	103	710	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	8	120	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	石 3	30	—	—
G　合　計	1382	1316	216	2700	939	8804	12	296	12	72	35	310	11	54	29	210	3	250	51	545	6	62	0	0	12	237	34	835	2	680
表　採	183	1437	24	500	58	250	2	50	中 1	1	近代 2	20	18世C 3	50	1 1		中 1	30	1	5	—	—	1	50	—	—	石 6	160	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	中 1	20	18世C 1	10	17世C 1	10	—	—	—	—	—	—	+ 1	30	—	—	磨 1	130	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	天正 1	80			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18C 1	40			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17世C 1	10			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
表　採　合　計	183	1437	24	500	58	250	2	50	1	1	4	50	9	190	2	11	1	30	1	5	0	0	2	80	0	0	7	330	0	0
遺　構　総　計	1565	2753	2302	2938	1264	3642	63	1077	63	284	196	1360	72	810	136	1433	16	470	613	6626	0	78	31	1590	42	979	368	6399	151	1420
	1450	4342	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10袋	4540	4袋	902

西長岡南遺跡III

遺構名・取り上げ場所		掘立柱建物	埴輪		土師器		須恵器		土師質		軟陶		磁器		陶器		硬質陶		縄文		弥生		瓦		鉄製		石製		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
16　溝	北端No.1	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10	—	—	—	—
〃	〃 No.2	1	25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	25	—	—	—	—
〃	〃 No.3	1	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	50	—	—	—	—
〃	〃 No.4	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.5	2	30	2	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.6	1	14	1	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.7	1	14	1	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.8	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.9	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.10	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.11	1	16	1	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.12	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.13	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.14	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.15	1	90	1	90	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.16	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.17	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.19	1	16	1	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.20	4	70	4	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.21	14	682	14	682	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.22	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.23	1	24	1	24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.24	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.25	1	20	1	20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.26	1	30	1	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.28	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.29	2	58	2	58	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.30	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.31	2	47	2	47	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.32	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.33	2	68	2	68	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.34	2	31	2	31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.35	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.36	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.37	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.38	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.39	1	24	1	24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.40	1	40	1	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.41	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.42	6	264	6	264	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.43	1	141	1	141	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.44	4	93	4	93	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.45	1	58	1	58	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.46	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.47	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.48	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.49	1	12	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

遺構名・取り上げ場所		鍵穴数	鍵穴g	須恵器		土師器		須恵器		土師質		軟質陶器		瓦器		陶器		焼締陶器		縄文		弥生		瓦		鉄製		石器		その他	
				数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
14　溝	北端側No.50	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.51	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.52	1	34	1	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.53	1	14	1	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.54	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.55	3	120	3	120	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.56	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.58	1	22	1	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.59	2	67	2	67	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.60	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.61	14	812	14	812	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.62	1	10	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.65	1	15	1	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.66	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.67	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.68	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.69	1	120	1	120	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.70	1	19	1	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.71	1	5	1	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.72	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.73	1	40	1	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.74	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.75	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.76	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.77	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.78	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.79	1	19	1	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.80	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.81	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.82	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.84	2	33	2	33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.85	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.86	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.87	1	22	1	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.88	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.90	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.91	1	10	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.92	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.93	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.94	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.96	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.98	2	93	2	93	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.99	2	98	2	98	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.100	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.101	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.102	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.104	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.105	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.106	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.107	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

遺構名・取り上げ場所		竪穴総数	総重量kg	弓		土師器		須恵器		土師質		軟	陶	磁	器	陶	器	焼締陶		縄	文	弥	生	瓦		鉄	製	石	製	その他	
				数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
16　横	北周囲No.109	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.110	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.111	1	19	1	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.112	2	27	2	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.113	3	73	3	73	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.114	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.115	1	14	1	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.116	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.119	1	141	1	141	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.120	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.122	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.123	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.124	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.125	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.126	1	141	1	141	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.129	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.129	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.130	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.131	1	19	1	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.132	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.133	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.134	1	141	1	141	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.135	2	98	2	98	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.136	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.137	1	11	1	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.138	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.139	1	10	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.140	1	72	1	72	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.142	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.143	7	50	7	50	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.144	2	68	2	68	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.145	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.146	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.147	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.148	1	40	1	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.150	1	10	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.151	1	8	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.152	3	22	3	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.153	2	54	2	54	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.154	2	57	2	57	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.156	1	40	1	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.157	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.158	1	11	1	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.159	1	22	1	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.160	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.161	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.162	1	11	1	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.163	1	10	1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.164	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	〃 No.165	2	63	2	63	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

遺構名・取り上げ場所	竪穴総数	竪穴	埴輪		土師器		須恵器		土師質		鉄製		鉄滓		銅製		陶器		磁器類		縄文		弥生		瓦		鉄製		石器		その他	
			数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g	数	g
16 墳　北周溝No.166	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.167	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.169	2	86	2	86	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.170	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.171	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.172	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.173	2	35	2	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.174	1	29	1	29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.175	2	67	2	67	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.176	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.177	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.178	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.179	3	79	3	79	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.180	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.181	2	88	2	88	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.182	2	84	2	84	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.183	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.185	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.186	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.187	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.188	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.189	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.190	1	44	1	44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.191	6	294	6	294	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.192	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.193	2	69	2	69	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.194	2	35	2	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.195	1	49	1	49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.198	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.199	1	17	1	17	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　〃 No.200	1	23	1	23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　北周溝	266	7549	前 2 371	100 7407	6	32	—	—	—	—	近代 1	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　南周溝	103	2203	前 1 92	50 2053	2	10	6	80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃	82	1353	82	1353	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
〃　Ⅰ5－383	1	300	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	弥 1	300	—	—
〃　不　明	1	72	1	72	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16 墳　合　計	827	26246	前 9 818	150 26296	8	42	6	80	0	0	1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	85	1	300	0	0
3 杭	19	530	16 —	470 —	0	0	0	0	0	0	0	0	平安 1 —	30 —	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
													2	20																		
4 杭	33	1190	前 1 21	130 870	0	0	0	0	0	0	近代 1	40	現 3 近代 6	30 40	1	15	0	0	0	0	0	0	近代 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5 杭	19	625	16	430	0	0	0	0	0	0	近代 2	110	0	0	現 1	45																
6 杭	11	330	10	330	0	0	0	0	0	0	中 1	10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7 杭	5	115	前 1 2	40 60	0	0	0	0	近代 1	10	0	0	1	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
土 杭 合 計	89	2790	60	2310	0	0	0	0	1	10	4	160	13	125	2	100	0	0	0	0	0	0	0	0	1	80	0	0	0	0	0	0
Ⅰ8－041	105	4145	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	60	0	0	0	0	0	0	0	0	102	4085	0	0	0	0	0	0
遺 跡 総 計	1021	31186	838 —	28936 —	8	42	6	80	1	10	5	170	13	125	5	160	0	0	0	0	0	0	0	0	103 4085	3	85	1	300	0	0	0

第２章　遺物観察

次に西長岡南遺跡Ⅱ・Ⅲの本文中で使用した周辺遺跡出土遺物を除く遺物観察を行なう。遺物観察に供された個体は、全量の中から限られた個体であるため、前章の総量表と併読されたい。

西長岡南遺跡Ⅲ

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目（cm） 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第８図 写本掲載	埴輪 円筒	朝形神社窯表採。	突帯部径（13.5）。	粘・陶、含、軟。 明赤褐５Ｙ Ｒ⅚。	大形円筒。消耗大。割れ口も被熱透あり。焼成３層。	割れ口被熱酸化。透近円形。
同図 写本掲載	埴輪 形象	朝形神社窯表採。	貼附部。	粘・陶、含、軟。 明黄褐10Ｙ Ｒ⅚。	極不明。図右側は割れ口が旧部か不明。消耗大。焼成３層。	
同図 写本掲載	埴輪 形象	朝形神社窯表採。	不詳。	粘、含、軟。軽い。	極不明。片面に刻線あり。２面側部か２次被熱か不明。消耗大。焼３層。	
第11図 写真図版47	埴輪 円筒	５号墳。	基部径（12.7）。 高さ21.7＋α。	粘・陶、微、硬。 に ぶい黄橙10Ｙ Ｒ⅚。	内面指擦痕。外面刷毛目。外面ハゼあり。器面風化。焼成酸化気味。	
第21図 1 写真図版47	埴輪 円筒	11号墳周堀No.58 ほか。	口径26.8。 高さ44.6＋α。	粘・陶、微、硬。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	内面風化気味。内外刷毛目。透１対近円形。焼成は３層。	透。筒記号。 粘土板不明。
同図 2 写一47	埴輪 円筒	11号墳周堀No.3 ほか。	口径24.8。 高さ43.5。	粘・陶、含、硬。 に ぶい黄橙10Ｙ Ｒ⅚。	内・外面に刷毛目あり。口縁部周辺横撫。透１対、楕円形。焼成３層。	透。基部粘土板Ｓ型。
同図 3 写一47	埴輪 円筒	11号墳周堀No.84 ほか。	口径28.1。 高さ32.2＋α。	粘・陶、含、硬。 橙２.５Ｙ Ｒ⅚。	内・外面全面刷毛目あり。口縁部周辺横撫。内面に筒記号。焼成３層。	筒記号。透。
同図 4 写一47	埴輪 円筒	11号墳Ｊ10－122 フク土。	口径（27.6）。 高さ24.3＋α。	粘・陶、含、並。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	内外刷毛目。口縁部周辺横撫。透あり。内面紐作り痕。焼成３層。	透。筒記号。
第22図 5 写真図版47	埴輪円 円筒	11号墳周堀No.51 ・76ほか。	口径25.0。 高さ45.3。	粘・陶、含、硬。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	内・外面に刷毛目あり。口縁部周辺横撫。透１対、近円形。焼成３層。	透。基部粘土板Ｓ型。
同図 6 写一48	埴輪円 筒大型	11号墳周堀No.7 ほか。	口径25.0。 高さ43.7。	陶・粘、含、硬。 明赤褐５Ｙ Ｒ⅚。	内外全面刷毛。内面筒記号。透１対、楕円形。基部接合Ｓ型。焼成３層。	透。筒記号。 粘土板Ｓ型。
同図 7 写一47	埴輪円 筒大形	11号墳Ｊ10－64 ほか。	口径（24.6）。 高さ23.8＋α。	粘・陶、含、硬。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	固化内面部の周辺を除き全面刷毛目。刷毛目荒く大まか。	透円形。基部粘土板Ｓ型。
同図 8 写一47	埴輪円 筒大形	11号墳Ｊ10－122 ほか。	口径（27.6）。 高さ20.2＋α。	粘・陶、含、並。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	内外全面刷毛目。口縁部周辺横撫。透あり。焼成３層。	透。筒記号。
第23図 9 写真図版47	埴輪 円筒	11号墳フク土。 周堀No10ほか。	口径（21.6）。 高さ42.8。	粘・陶、含、硬。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	内外刷毛目。口縁部周辺横撫。透１対円形。基部粘土板。焼成３層。	透。筒記号。 粘土板Ｓ型。
同図 10 写一48	埴輪 円筒	11号墳周堀No.4 ほか。	口径22.0。 高さ41.6。	粘・陶、含、硬。 に ぶい橙５Ｙ Ｒ⅚。	内外面刷毛目。透１対、楕円。紐作。焼成３層。	透楕円。基部粘土板Ｓ型。
同図 11 写一48	埴輪 円筒	11号墳周堀No10 ・61ほか。	口径（21.6）。 高さ42.4。	粘・陶、含、硬。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	内外面にく大まかな刷毛目。内面に筒記号あり。透し１対２穴。	透円。基部粘土板Ｓ型。
同図 12 写一48	埴輪円 筒大形	11号墳周堀No５ ほか。	口径（28.0）。 高さ32.1＋α。	粘・陶、含、硬。 に ぶい橙２.５Ｙ Ｒ⅚。	内外全面刷毛目。透１対、円形か。紐作。焼成３層。	透円形か。筒記号。
第24図 13 写真図版48	埴輪円 筒大形	11号墳周堀No18 ほか。	最大径（29.4）。 高さ36.7。	粘・陶、含、硬。 橙２.５Ｙ Ｒ⅚。	内外全面刷毛目。透あり。外面に布痕付着。作調丁寧。焼成３層。	大形円筒。透。布目付着。
同図 14 写一48	埴輪 円筒	11号墳Ｊ10の５ 層ほか。	最大径（19.2）。 高さ35.8。	粘・陶、含、並。 橙２.５Ｙ Ｒ⅚。	内面凹ハゼ多い。内外刷毛目。透１対、円形。焼成３層。	透。基部粘土板Ｓ型。
同図 15 写一48	埴輪円 筒大形	11号墳周堀３ 層。No74ほか。	最大径（26.4）。 高さ37.1＋α。	粘・陶、含、硬。 橙２.５Ｙ Ｒ⅚。	器面風化荒れ。内外面刷毛。透１対、円形か。焼成３層。	透。
同図 16 写一48	埴輪 円筒	11号墳Ｊ10－84 ほか。	口径（23.8）。 高さ23.4。	粘・陶、含、並。 橙２.５Ｙ Ｒ⅚。	内外面刷毛目。口縁部周辺横撫。透あり。内面紐作痕。焼成３層。	透。筒記号。
第25図 17 写真図版48	埴輪 円筒	11号墳５層フク 土ほか。	口径（25.7）。 高さ16.1＋α。	粘・陶、含、並。 橙５Ｙ Ｒ⅚。	内外刷毛目。口縁部周辺横撫。透あり。内面に筒記号。焼成３層。	透。筒記号。
同図 18 写一48	埴輪 円筒	11号 墳No12ほか。	口径（26.6）。 高さ17.5＋α。	粘・陶、含、硬。 に ぶい橙２.５Ｙ Ｒ⅚。	内外刷毛目。透あり。紐作。内面下方撫多い。焼成３層。	
同図 19 写一49	埴輪 円筒	11号墳周堀No９ 72ほか。	口径（22.8）。 高さ41.6。	粘・陶、含、硬。 に ぶい橙５Ｙ Ｒ⅚。	内・外面に刷毛目。口縁部周辺横撫。内面に筒記号。透楕円。焼成３層。	透。筒記号。 粘土板Ｓ型。
同図 20 写一49	埴輪 円筒	11号墳周堀No14 ・52ほか。	口径21.7。 高さ39.1。	粘・陶、含、硬。 に ぶい黄橙10Ｙ Ｒ⅚。	外面少し風化。内外刷毛目。口縁周辺横撫。透１対。焼成３層。	筒書。透。基部粘土板。

図版番号 写真図版番号	種類 器形	出土位置	最長(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
第26図 21 写真図版49	埴輪 円筒	11号墳周堀№74 ・84ほか	口径（23.4）。 高さ39.3。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙５Ｙ Ｒ7/6。	器面風化荒れ。内外刷毛目。口縁周辺横撫。透１対窓円形。焼成３層。	透。基部粘土板不明。
図版49 22 写49	埴輪 円筒	11号墳周堀№34 ほか	口径（22.0）。 高さ37.7。	粘・陶、含、並。 橙7.5Ｙ Ｒ7/6。	凹ハゲ多い。透１対、楕円形。組作痕多い。内面中位横刷毛気味。	透。組作。
図版49 23 写49	埴輪円筒小形	11号墳周堀№73 ・93ほか。	口径19.2。 高さ35.1。	粘・陶、微、軟、軽。 にぶい橙５Ｙ Ｒ7/4。	内外面細刷毛目。口縁周辺横撫。透１対、円形。作業丁寧。焼成３層。	小形円筒。透。粘土板Ｓ型。
図版49 24 写49	埴輪 円筒	11号墳周堀№12 ・72ほか	最大径（19.6）。 高さ39.9＋α	粘・陶、黄、硬。 にぶい橙５Ｙ Ｒ7/4。	内外面刷毛目。透１対、円形。基部接合不明瞭。焼成３層。	透。基部粘土板不明。
第27図 25 写49	埴輪 円筒	11号墳周堀№72 ・76ほか	基部径13.1。 高さ32.7＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙7.5Ｙ Ｒ7/6。	内・外面に刷毛目あり。口縁部周辺横撫。透１対、辺円形。焼成２層。	透。基部粘土板Ｓ型。
図版49 26 写49	埴輪円筒小形	11号墳周堀№60 ほか	口径22.1。 高さ36.6。	粘・微、軟、軽い。 淡赤橙2.5Ｙ Ｒ7/4。	内外面浅い細刷毛目。透１対、円形。基部接合不明瞭。焼成３層。	透。筒足付。基部接合不明。
図版49 27 写49	埴輪 円筒	11号墳礎跡・墳丘ほか	口径（23.3）。 高さ34.6。	粘・陶、含、硬。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内外刷毛目。内面組作痕。透１対、円形。焼成３層。筒足形疑似あり。	透。筒足形疑似。
図版49 28 写50	埴輪 円筒	11号墳周堀№72 ・91ほか	基部径13.6。 高さ23.8＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙５Ｙ Ｒ7/6。	内・外面に刷毛目あり。透１対。近円形か。焼成３層。基部粘土板不明。	透。
第28図 29 写真図版50	埴輪 円筒	11号墳周堀№37 ほか。	口径（18.7）。 高さ35.7。	粘、含、軟。軽い。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	外面と内面上方にハギ剥落多い。基部粘土板。透２穴。焼成３層。	筒足付。基部粘土板。透。
図版50 30 写50	埴輪 円筒	11号墳周堀№82 ・83ほか。	最大径（19.6）。 高さ37.1＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙7.5Ｙ Ｒ7/4。	内外刷毛目。内面組作痕。透１対、円形。焼成３層。筒足付あり。	透。筒足付。基部粘土板。
図版50 31 写50	埴輪 円筒	11号墳フク土、6層ほか。	口径21.4。 高さ28.6＋α。	粘・微、並、軽い。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内外面刷毛目。透１対、楕円気味。筒足形疑似あり。焼成は３層。	透。筒足形。
図版50 32 写50	埴輪 円筒	11号墳Ｊ10-102。	口径（27.1）。	粘・陶、含、硬。 橙7.5Ｙ Ｒ5/6。	内外の刷毛目丁寧。口縁部周辺に横撫。焼成３層。	外面に筒足形。
図版50 33 写50	埴輪円筒小形	11号墳周堀№8。	口径（24.1）。 高さ11.8＋α。	粘、含、軟、軽い。 橙7.5Ｙ Ｒ5/6。	内外全面刷毛目。組作。１cm前後の小礫含む。焼成３層。	透。
第29図 34 写真図版50	埴輪円筒小形	11号墳Ｊ10－84ほか。	口径22.2。 高さ20.8＋α。	粘、微、軟。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内面少し剥落。刷毛目内面少ない。透１対、楕円形。焼成３層。	透。筒足形。
図版50 35 写50	埴輪円筒小形	11号墳丘、周堀ほか。	口径（22.2）。 高さ17.1＋α。	粘、含、硬。 橙7.5Ｙ Ｒ7/6。	内面下方刷毛目少ない。内外面刷毛目。口縁部周辺横撫。焼成３層。	透。筒足形。
図版50 36 写50	埴輪円筒小形	11号墳フク土、周堀ほか。	口径20.6。 高さ20.4＋α。	粘、微、軟。軽い。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内外刷毛目。口縁周辺横撫。透１対、円～楕円。組作。焼成３層。	筒足付。
図版50 37 写50	埴輪 円筒	11号墳周堀№68 ・67ほか。	口径（19.4）。 高さ29.0＋α。	粘、微、硬、軽い。 にぶい橙7.5Ｙ Ｒ7/6。	内面刷毛少。細刷毛目。口縁部周辺横撫。風化気味。透円形。焼成３層。	透。
図版50 38 写50	埴輪 円筒	11号墳石室。	口縁部片。	陶、微、硬。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内外面に刷毛目。内面に筒足形。口縁部周辺横撫あり。焼成３層。	筒足付。
図版50 39 写50	埴輪 円筒	11号墳周堀№68 ・70ほか。	口径（22.6）。 高さ16.7＋α。	粘、微、軟、軽い。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内外面刷毛目。外面剥落あり。透あり。焼成３層。	風化あり。透。
図版50 40 写51	埴輪 円筒	11号墳周堀№49 ほか。	口径（22.3）。 高さ10.8＋α。	粘、微、軟、軽い。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内外面全面刷毛目。内外風化剥落。焼成３層。	小形か。細刷毛目。
図版50 41 写51	埴輪 円筒	11号墳周堀№71 ・14。	口縁部片。	粘・陶、含、並。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	中～大形の円筒。内外刷毛目。口縁部の内外面横撫あり。焼成３層。	筒足付。
第30図 42 写真図版51	埴輪 円筒	11号墳周堀№43。	最大径（23.0）。 高さ12.2＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙7.5Ｙ Ｒ5/6。	内外全面刷毛目。透あり。組作。突帯高い。焼成３層。	透。
図版50 43 写51	埴輪 円筒	11号墳周堀№84 ほか。	突帯部径（23.4）。高16.5＋α。	粘・陶、含、硬。 橙５Ｙ Ｒ5/6。	内外面刷毛目。透あり。組作。焼成３層。突帯高い。	透。
図版50 44 写51	埴輪 円筒	11号墳周堀№83 ほか。	突帯部径（23.4）。高19.5＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい褐7.5Ｙ Ｒ5/6。	内外面刷毛目。透あり。組作。焼成３層。突帯高い。	透。
図版50 45 写51	埴輪円筒大形	11号墳５層フク土。	突帯部径（20.1）。高さ16.0＋α。	粘・陶、含、並。 にぶい黄橙10Ｙ Ｒ7/4。	内外面刷毛目。透あり、楕円か。器面少し荒。組作。焼成３層。大形か。	透。
図版50 46 写51	埴輪 円筒	11号墳Ｊ10－123の５層。	突帯部径（21.4）。高18.8＋。	粘、微、並、軽い。 橙7.5Ｙ Ｒ7/6。	内外全面刷毛目。内外少し荒れる。透２個所、２段。焼成３層。	透。
図版50 47 写51	埴輪 円筒	11号墳カクラン。	突帯部径（21.2）。高12.2＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙7.5Ｙ Ｒ7/6。	内外面刷毛目。透あり。組作。焼成３層。突帯高い。	透。
図版50 48 写51	埴輪円筒小形	11号墳周堀№8。	透部下端径18.5。高さ13.0＋α。	粘、軽石大粒入る、含、並。にぶい黄橙10Ｙ Ｒ7/4。	内外全面刷毛目。透１対、円形か。突帯剥落気味。焼成３層。	透。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	法量(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
同図 49 写一51	埴輪 円筒	11号墳周堀No.42、同フク土。	突帯部径(21.0)。高11.4＋α。	粘・陶、含、硬。 橙7.5YR7/6。	外面刷毛目。内面指圧痕・指撫・刷毛目。透あり。焼成3層。	透。
同図 50 写一51	埴輪 円筒	11号墳周堀No.44・65・73ほか。	最大径(19.4)。高さ12.4＋α。	粘、微、軟、軽い。 橙7.5YR7/6。	内外面刷毛目。内外風化剝落顕著。焼成3層。	風化顕著。透。
第30図 51 写真図版51	埴輪 円筒	11号墳周堀No.42。	突帯部径(18.8)。高さ13.3＋α。	粘・陶、微、硬。 橙7.5YR8/6。	内面下方を除き刷毛目。組作痕あり。焼成3層。	
第31図 52 写真図版51	埴輪円筒小形	11号墳J10−64。	最大径(17.7)。高さ13.8＋α。	粘・微、硬。 橙7.5YR8/6。	外面刷毛目。内部わずか刷毛目、ほかは指撫。組作痕あり。焼成3層。	透。
同図 53 写一51	埴輪円筒大形	11号墳周堀No.93ほか。	最大径(19.3)。高さ25.4＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR7/4。	内外刷毛目。透1対、近円形。内面撫多い。焼成3層。	透。
同図 54 写一51	埴輪 円筒	11号墳6層、同墳土。	突帯部径(19.2)。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙7.5YR8/4。	内面部分的に刷毛目と撫痕。外面刷毛目。磨耗少ない。焼成3層。	
同図 55 写一51	埴輪 円筒	11号墳カクラン。	体部片。	粘・陶、含、緻。 暗灰黄2.5YR5/2。	内外刷毛目あり。割れ口少し消耗。焼け割れあり。焼成2層。	灰色。色もどし不良。
同図 56 写一51	埴輪円筒小形	11号墳周堀3層。	突帯部径(15.4)。	粘・陶、含、硬。 橙7.5YR8/6。	外面浅い刷毛目、小ハゼあり。内面工具撫痕と指撫痕。焼成3層。	透あり。
同図 57 写一51	埴輪円筒大形	11号墳周堀No.43・42ほか。	底径(16.4)。高さ19.4＋α。	粘・陶、含、並。 にぶい橙5YR7/4。	内外全面刷毛目。外面風化荒れ、基部粘土板。焼成3層。	基部粘土板S型。
同図 58 写一51	埴輪円筒大形	11号墳周堀No.87・55ほか。	突帯部径21.0。高さ21.1＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR7/4。	内外全面刷毛目。外面少し荒れる。透1対、円形か。焼成3層。	透円形か。基部粘土板S型
同図 59 写一51	埴輪 円筒	11号墳周堀No.84ほか。	基部径(8.2)。高さ10.4＋α。	粘・陶、含、硬。 橙7.5YR8/6。	外面少し荒れ。内外全面刷毛目。基部粘土板。焼成3層。	基部粘土板。
同図 60 写一51	埴輪 円筒	11号墳周堀No.10・12ほか。	最大径(16.6)。高さ10.2。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR7/4。	内外刷毛目。内面指撫、圧痕多い。基部粘土板S型。焼成3層。	基部粘土板S型。
第32図 61 写真図版52	埴輪 円筒	11号墳周堀No.83ほか。	基部径13.5。高さ18.2＋α。	粘・陶、含、硬。 橙7.5YR8/6。	内外面刷毛目。突帯下に指圧痕。器面少し風化。基部粘土板か。焼成3層。	基部粘土板か。
同図 62 写一52	埴輪 円筒	11号墳周堀No.36ほか。	最大径(17.6)。高さ24.0＋α。	粘、微、含、硬。 にぶい黄橙10YR7/2。	内外刷毛目。透あり。基部粘土板接合ながら合せ目不明。焼成3層。	透。基部粘土板接合。
同図 63 写一52	埴輪 円筒	11号墳J10−123。	突帯部径(19.8)。高さ21.8＋α。	粘、微、軟、軽い。 にぶい橙5YR7/4。	内外刷少し風化。透あり。組作。突帯高い。焼成3層。	透。
同図 64 写一52	埴輪円筒小形	11号墳周堀フク土ほか。	底径14.4。高さ9.5＋α。	粘・陶、多、硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	夾雑物多く異質。内外面全面刷毛目。少し風化気味、焼成3層気味弱い。	基部粘土板らしい。
同図 65 写一52	埴輪 円筒	11号墳周堀No.37・34ほか。	基部径(14.5)。高さ13.4＋α。	粘、微、含、硬。 にぶい橙5YR7/4。	外面少し荒れ。内外刷毛目。基部粘土板S型。組合せ目で割れ標品的。	基部粘土板S型。
同図 66 写一52	埴輪円筒小形	11号墳周堀No.94。	底径(12.3)。高さ15.5。	粘、微、軽、軟い。 橙2.5YR7/6。	内外大刷落。内外全面刷毛目。基部粘土板か欠損多く不明。焼成3層。	基部粘土板不明。
同図 67 写一52	埴輪 円筒	11号墳周堀No.58。同フク土。	基部径(11.8)。	粘、含、硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	内外面に刷毛目あり。割れ口少し消耗。焼成3層。	基部粘土板S型。
同図 68 写一52	埴輪 円筒	11号墳カクラン。	基部径(12.8)。	粘、微、並、軽い。 にぶい黄橙10YR7/3。	内外面に刷毛目あり。端部平部の凹凸いちじるしい。木炭・亜炭か含む。	基部粘土板S型。
同図 69 写一52	埴輪 円筒	11号墳J10−64の6層。	体部片。	粘・微、軟、軽い。 にぶい橙7.5YR7/4。	内面に篦記号あり。内外細刷毛目。外面最上部に横撫あり。焼成3層。	篦記号。細刷毛目。
同図 70 写一52	埴輪 円筒	11号墳フク土。	体部片。	粘、含、並。 にぶい橙5YR7/4。	内外に細刷毛目あり。内面に篦書沈線2条あり。焼成3層。	篦記号。細刷毛目。
同図 71 写一52	埴輪 円筒	11号墳周堀。	体部片。	粘、微、軟、軽い。 にぶい橙5YR7/4。	内外に刷毛目あり。内面に篦書沈線2条あり。全体に消耗。焼成3層。	篦記号。
同図 72 写一52	埴輪 円筒	11号墳フク土。	体部片。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙7.5YR8/4。	内外面に刷毛目。内面に篦記号。割れ口少し消耗。焼成3層。	篦記号。
同図 73 写一52	埴輪 円筒	11号墳カクラン。	突帯部片。	粘・陶、含、硬。 灰黄2.5Y5/2。	内外面に刷毛目あり。割れ口消耗気味。少し焼縁。焼成3層。	色もどし不良。
第33図 74 写真図版52	埴輪 朝顔	11号墳周堀No.2・3ほか。	口径50.0。高さ81.4。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙7.5YR7/4。	口縁部周辺横撫。以下2度以上の刷毛目多い。部分剥落。焼成3層。	粘土板か。透2段2対。
第34図 75 写真図版53	埴輪 円筒	11号墳J10−84。	最大径(25.4)。高さ18.8＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR8/6。	内外面剥落あり。内面上方指撫。透あり。突帯高い。焼成3層。	透。
同図 76 写一53	埴輪 朝顔	11号墳周堀No.6・5ほか。	口径(47.7)。高さ68.8＋α。	粘・陶、含、並。 赤橙10YR5/6。	外面下方剥落多い。内外刷毛目。突帯高い。2段各1対。焼成3層。	透2段。
第35図 77 写真図版53	埴輪 朝顔	11号墳周堀No.76・94ほか。	口径46.6。高さ19.3。	粘・陶、含、硬。 橙5YR5/6。	口縁部周辺横撫。以下2度以上の刷毛目あり。内面下方少荒。焼成3層。	内面に布様による擦痕。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
同図 78 写一53	埴輪 朝顔	11号墳周堀No.49 の5層。	最大径（45.6）。 高さ22.6＋α。	粘・陶、含、硬。 橙5YR5/6。	内外面刷毛目。2回以上部分的にあり。外面下方少し荒れ。焼成3層。	
同図 79 写一53	埴輪 朝顔	11号墳J10－84 ほか。	最大径（29.6）。 高さ36.9＋α。	粘・陶、含、硬。 橙5YR5/6。	内面下方刺落多い。刷毛目上方2回以上施す。透1対。焼成3層。	透。
同図 80 写一52	埴輪 鼎小形	11号墳フク土。	体部片。	粘・陶、含、硬。 橙5YR5/6。	内外に細刷毛目あり。内面に隆書沈線2条あり。焼成3層。	孤記号。細刷毛目。
第36図 81 写真図版53	埴輪 象家形	11号墳周堀No.22 ほか。	棟部片。	粘・陶、多、硬。 橙2.5YR橙。	外面凍ハゲ多い。割れ口消耗微。内面横粘土紐巻。側部は粘土板か。	家1。散化気味。
同図 82 写一53	埴輪 象家形	11号墳周堀No.86 ・90ほか。	棟部片。	粘・陶、多、硬。 にぶい橙2.5YR5/6。	外面凍ハゲ多い。割れ口消耗微。内面・側部粘土紐巻。焼成酸化気味。	家1。
同図 83 写一53	埴輪 象家形	11号墳周堀No.40 ・84。	棟部片。	粘・陶、多、硬。 橙5YR5/6。	外面凍ハゲ多い。割れ口消耗微。内面側部粘土紐巻。焼成は酸化気味。	家1。
同図 84 写一54	埴輪 象家形	11号墳周堀No.25。	鰭本。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR5/3。	外面凍ハゲ。割れ口消耗微。小口を除く全面刷毛目。焼成酸化気味。	家1。
同図 85 写一54	埴輪 象家形	11号墳カクラン。	鰭本。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR5/3。	外面凍ハゲ。割れ口消耗微。小口を除く全面刷毛目。焼成酸化気味。	家1。
同図 86 写一54	埴輪 象家形	11号墳カクラン。	鰭本。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR5/3。	外面凍ハゲ。割れ口消耗微。小口を除く全面刷毛目。焼成酸化気味。	家1。
同図 87 写一54	埴輪 象家形	11号墳周堀No.17。	鰭本。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR5/3。	外面凍ハゲ。割れ口消耗微。小口を除く全面刷毛目。焼成酸化気味。	家1。
同図 88 写一54	埴輪 象家形	11号墳周辺。	鰭本。	粘・陶、含、硬。 にぶい橙5YR5/3。	外面凍ハゲ。割れ口消耗微。小口を除く全面刷毛目。焼成酸化気味。	家1・2。
同図 89 写一54	埴輪 象家形	11号墳カクラン。	屋蓋部片。	粘、多、硬。軽い。 にぶい橙5YR5/6。	外面に刻文あり。内面無。割れ口少し消耗。焼成酸化気味。	家1・2。
第37図 90 写真図版54	埴輪 象家形	11号墳J10－64 ・65。	屋蓋部片。	粘、多、硬。軽い。 明赤褐5YR5/6。	内外面撫整形。割れ口消耗微。内面煤付着。焼成酸化気味の3層。	家1・2。
同図 91 写一54	埴輪 象家形	6号溝J10フク土。	屋蓋部片。	粘、多、硬。軽い。 にぶい橙5YR5/4。	内外面撫整形。割れ口消耗微。端部刺落。焼成酸化気味の3層。	家1・2。
同図 92 写一54	埴輪 象家形	11号墳カクラン。	屋蓋部片。	粘、多、硬。軽い。 にぶい橙5YR5/6。	内外面撫整形。割れ口消耗少。内面接合痕。焼成酸化気味の3層。	家1・2。
同図 93 写一54	埴輪 象家形	11号墳試掘。	軸部片。	粘・陶、多、硬。 橙7.5YR5/6。	内外面刷毛目。外面凍ハゲあり。円形の透。割れ口消耗微。焼成3層。	家1・2。
同図 94 写一54	埴輪 象家形	6号溝。	軸部片。	粘・陶、含、並。 橙7.5YR2/6。	割れ口消耗大。内外刷毛目。鎬柱表現と2層目面質部かも。酸化気味。	家1・2。
同図 95 写一54	埴輪 象家形	11号墳J10－64 ほか。	軸部片。	粘・陶、多、硬。 にぶい橙5YR2/6。	内外面刷毛目。上方に方形透あり。割れ口消耗微。焼成3層。	家1・2。
同図 96 写一54	埴輪 象家形	11号墳周堀No.26 ・31。	軸部片。	粘・陶、多、硬。 にぶい橙7.5YR5/6。	内外面刷毛目。刺落あり。内面粗痕あり。透あり。風化微。焼成3層。	家1・2。
同図 97 写一54	埴輪 象家形	11号墳周堀No.85。	屋蓋部か。	粘・陶、含、硬。 明赤褐2.5YR5/6。	家形棟端か。刺落あり。割れ口に接合痕あり。焼成3層気味。	家形2。
第38図 98 写真図版54	埴輪 象家か	11号墳石室。	屋蓋部垂木受横木端か。	粘・陶、含、並。 橙5YR5/6。	家形か不明。刺落あり。片側は接合痕。少し風化気味。焼成3層気味。	家形2。
同図 99 写一54	埴輪 象家形	6号溝。	屋蓋部。	粘、含、並。軽い。 明赤褐5YR5/6。	外面撫整形。裏面に工具痕と接合痕。割れ口消耗。焼成3層気味。	家3。
同図 100 写一54	埴輪 象家か	11号墳カクラン。	貼附部片。	粘、微、硬。 にぶい橙7.5YR5/6。	器面消耗少。家形3の胎土であるが大刀飾部かも。焼成3層。	家3か大刀。
同図 101 写一54	埴輪 象か	11号墳カクラン。	部位不明。	粘、微、並。軽い。 橙5YR5/6。	外面刷毛目と撫整。片側の割れ口接合面。割れ口消耗。焼成3層。	
同図 102 写一54	埴輪 象家形	11号周堀3層、同フク土。	屋蓋部片。	粘、多、並。軽い。 橙7.5YR5/6。	内外面刷毛目。割れ口消耗。器面荒れる。割れ口接合痕。焼成3層。	家4。
同図 103 写一54	埴輪 象家形	11号墳カクラン。	屋蓋部片。	粘、多、並。軽い。 にぶい橙7.5YR5/6。	内外面刷毛目。割れ口消耗。器面荒れ。割れ口に接合痕。焼成酸化気味。	家4。
同図 104 写一54	埴輪 象家形	11号墳カクラン。	屋蓋部片。	粘、多、並。軽い。 橙5YR5/6。	内外面刷毛目。割れ口消耗。器面荒れる。焼成酸化気味。	家4。
同図 105 写一54	埴輪 象大刀	11号墳カクラン。	柄元片。	粘、含、並。軽い。 にぶい橙5YR2/6。	割れ口、器面消耗微。外面刷毛目。内面指など圧痕。焼成酸化気味。	大刀2。
同図 106 写一54	埴輪 象大刀	11号墳3層J10。	柄頭片。	粘、含、並。軽い。 橙5YR5/6。	割れ口、器面消耗微。上面刷毛目。内面側柄との接合面。焼成酸化気味。	大刀2。
同図 107 写一54	埴輪 象大刀	11号墳カクラン。	玉鞘部。	粘、含、並。 にぶい橙7.5YR5/6。	割れ口少し消耗。内面指圧痕。外面撫。側部置。焼成酸化気味の3層。	大刀4。彩色白・黒。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
同図 108 写一54	埴輪形 象大刀	6号溝。	柄元片。	粘、含、並。軽い。 明赤褐5 Y R5/6。	胎土・焼成は大刀2に共通。消耗多い。焼成酸化気味。	大刀2疑似。
同図 109 写一54	埴輪形 象大刀	11号墳カクラン。	玉纏部片。	粘・含、並。 橙7.5 Y R5/6。	割れ口、器面消耗大。側部残存。三輪玉中央部大。焼成3層。	大刀。
第39図 110 写真図版55	埴輪形 象大刀	11号墳周堀№1 ・52ほか。	器高60.9＋α。	粘、含、並。軽い。 にぶい橙5 Y R5/6。	内面組作痕。玉纏部の柄元側に接合痕あり。器面・割れ口風化少。	大刀1。 焼成3層。
第39図 111 写真図版54	埴輪形 象大刀	11号墳カクラン。	玉纏部。	粘、含、並。 橙7.5 Y R5/6。	割れ口少し消耗。三輪玉貼附部剥落。焼成酸化気味の3層。	大刀4。
同図 112 写一54	埴輪形 象大刀	6号溝。	柄元部か。	粘、含、並。 橙7.5 Y R5/6。	割れ口、器面消耗。外面柄毛目。内面指整形痕。焼成酸化気味。	大刀5。
同図 113 写一54	埴輪形 象大刀	11号墳カクラン。	玉纏部。	粘、含、並。 にぶい橙5 Y R5/6。	割れ口、器面消耗大。玉纏部剥落痕。焼成3層。	大刀5。
同図 114 写一54	埴輪形 象大刀	11号墳J 10－84 の4層。	柄元部。	粘、含、並。 橙5 Y R5/6。	割れ口、器面消耗。外面貼付部剥落。内面組作り痕。焼成酸化気味。	大刀5。
第40図 118 写真図版54	埴輪形 象冑	11号墳周堀№21 ほか。	側部片。	粘、微、並。軽い。 にぶい橙5 Y R5/4。	表面に白・黒彩色あり。裏面剥落気味。図示4点は胎土共通。焼3層。	冑1。彩色 白・黒。
同図 119 写未掲載	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№23 ほか。	側部片。	粘、微、並。軽い。 橙7.5 Y R5/6。	彩色白・黒。3点の図示。裏面剥落多い。割れ口少し消耗。焼成3層。	冑2。彩色 白・黒。赤。
第41図 124 写真図版55	埴輪形 象冑形	11号墳カクラン ほか。	側部片。	粘、微、並。軽い。 橙7.5 Y R5/6。	彩色白・黒。3点の図示。各割れ口消耗。裏面剥落気味。焼成3層。	冑3。彩色 白・黒。
同図 125 写一55	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№33 ほか。	側部片。	粘、微、並。軽い。 にぶい橙5 Y R5/6。	彩色白・黒・赤。1点の図示・割れ口微消耗。焼成は酸化気味の3層。	冑4。彩色 白・黒・赤。
第42図 128 写真図版55	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№23 ほか。	体部片。	粘、微、並。 橙5 Y R5/6。	彩色黒。表面に荒刷み線あり。裏面風化剥落気味。焼成は酸化気味。	冑5。彩色 黒・白。
同図 129 写一55	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№38 ・48ほか。	側部片。	粘、微、並。軽い。 明褐7.5 Y R5/4。	彩色2。図示1点。割れ口微消耗。部分刷毛目痕。焼成は酸化気味。	冑6。彩色 白・黒・赤。
同図 130 写一55	埴輪形 象冑形	11号墳カクラン。	側部片。	粘、微、並。軽い。 明褐7.5 Y R5/4。	彩色見えず。図示2点。割れ口消耗大。剥落気味。焼成は酸化気味。	冑7。
第43図 133 写真図版56	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№42 ・44ほか。	側部～体部片。	粘、微、硬。軽い。 にぶい橙5 Y R5/6。	彩色1。割れ口風化少。部分刷毛目痕。図示2点。焼成酸化気味の3層。	冑8。彩色 白・黒。
第44図 134 写真図版55	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№33 ほか。	側部片。	粘、微、並。軽い。 橙7.5 Y R5/6。	彩色3。消耗少ない。内外部分的に刷毛目と撫消し。焼成酸化気味。	冑9。彩色 白・黒。
同図 136 写一56	埴輪形 象冑形	6号溝。	側部片。	粘、微、並。軽い。 明赤褐2.5 Y R5/4。	全体風化気味。彩色黒。粘土接合の宮塊部か。焼成は酸化気味の3層。	冑10。彩色黒。
同図 137 写一56	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№19 ほか。	側部片。	粘、微、並。軽い。 にぶい赤褐2.5 Y R5/4。	少し消耗。彩色2。裏面剥落。表面刷毛目。焼成は酸化気味の3層。	冑11。彩色 白・黒。
同図 138 写一56	埴輪形 象冑形	11号墳周堀№37。	側部片。	粘、微、並。軽い。 橙5 Y R5/6。	全体風化気味。彩色見えず。沈線2条。焼成は酸化気味の3層。	冑1～11の破片。
同図 139 写一56	埴輪形 象人か	11号墳カクラン。	耳部片。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙7.5 Y R5/4。	外面に刷毛目。円形貼付部中央に小孔あり。内面指撫痕。焼成3層。	人1。
同図 140 写一56	埴輪形 象人か	6号溝・11号墳 カクラン。	基部～体部片。	粘・陶、含、硬。 橙5 Y R5/6。	内面下方と外面に刷毛目あり。内面上方指などの圧痕。焼成3層。	人1。
同図 141 写一56	埴輪形 象人か	11号墳周堀№1。	部位不明。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙7.5 Y R5/4。	内外面に刷毛目あり。割れ口、器面消耗大。内面剥落多。焼成3層。	人1。
同図 142 写一56	埴輪形 象人か	11号墳フク土。	部位不明。	粘・陶、微、並。 にぶい橙5 Y R5/4。	貼付部片。内外指整形痕多。割れ口、消耗微。焼成3層。	人1。
同図 143 写一56	埴輪形 象人か	11号墳前平墳丘。	部位不明。	粘・陶、微、並。 にぶい橙7.5 Y R5/6。	表面指整形痕。割れ口は接合痕。割れ口、器面消耗微。焼成3層か。	人1。
同図 144 写一56	埴輪形 象人か	11号墳。	部位不明。	粘・陶、微、並。 にぶい橙7.5 Y R5/6。	表面指整形痕。割れ口、器面消耗微。焼成3層。	人1。
第45図 145 写真図版56	埴輪形 象人	6号溝。	肩部から腕元部片。	粘・陶、微、硬。 明赤褐5 Y R5/6。	割れ口少し消耗。内外刷毛目。出枘受け部あり。焼成3層気味。	人2。
同図 146 写一56	埴輪形 象人	6号溝J 10。	腕片。	粘・陶、微、硬。 明赤褐2.5 Y R5/6。	割れ口凹欠で消耗する。外面刷毛目。出枘部。焼成は芯側が淡褐酸化気味。	人2。
同図 147 写一56	埴輪形 象人か	11号墳カクラン。	体部片。	粘、微、並。軽い。 橙5 Y R5/4。	内外面刷毛目。割れ口消耗少。腕部接合断あり。色黒。焼成3層。	彩色黒。人3。
同図 148 写一56	埴輪形 象人か	11号墳カクラン。	体部片。	粘、微、並。 橙7.5 Y R5/6。	外面刷毛目。内面撫痕。割れ口少し消耗。焼成3層気味。	人2疑似。
同図 149 写一56	埴輪形 象人	6号溝。	体部片か。	粘、微、軟。軽い。 にぶい橙5 Y R7/4。	割れ口消耗。外面刺毛痕。素文。内面整形圧痕。焼成酸化気味。	人4。

図番号 写真番号	器種 器形	出土位置	法量(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
図版 150 写一56	埴輪形 象人か	11号墳カクラン。	髪、馬鹿先端部か。	粘、微、軽、軽い。 にぶい橙5YR7/4。	外面指圧痕、工具痕あり。割れ口消耗微。焼成酸化気味。馬部品かも。	人4。彩色黒ありか。人か。
図版 151 写一56	埴輪形 象人	11号墳。	体部片か。	粘、微、軟、軽い。 にぶい橙5YR7/4。	割れ口消耗。外面側、素文。内面指など整形圧痕。焼成3層。	人4。
図版 152 写一56	埴輪形 象人	6号調。	腕片。	粘、微、軟。 橙5YR7/6。	出物接合部あり。外面刷毛目。割れ口新古両方あり。焼成芯側黒色。	人1～5の破片か。
第45図 153 写真図版56	埴輪形 象人	11号墳前平墳丘。	腕片。	粘・陶、微、軟。 橙5YR7/6。	出物接合部あり。外面無紋。割れ口新古両方あり。焼成芯側黒色。	人1～5の破片か。
図版 154 写一56	埴輪形 象人	11号墳前平墳丘。	部位不明。	粘、微、軟。 橙5YR7/6。	器面割れ口風化顕著。出物接合部。整形不明瞭。焼成酸化気味。	人1～5の破片か。
図版 155 写一56	埴輪形 象人か	11号墳カクラン。	部位不明。	粘、微、軟。 にぶい橙7.5YR7/4。	剥突列の加飾文あり。割れ口消耗大。人形でないかも。焼成酸化気味。	人1～5の破片か。別種か。
図版 156 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	尾か。	粘、微、軟、軽い。 橙5YR7/6。	出物接合部あり。器面消耗少ない。わずか刷毛目あり。焼成3層。	馬1。彩色黒。
図版 157 写一56	埴輪形 象大刀	11号墳カクラン。	足部片。	粘・陶、含、硬。 にぶい褐7.5YR5/3。	鞘の割り込みあり。内外刷毛目。焼成3層。	
図版 158 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	基部片。	粘・陶、含、蹄。 灰オリーブ5Y5/3。	側部に蹄らしき整形面あり。全体に消耗。焼成2層。	灰色。色もどし不良。
図版 159 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	足部か。	粘、微、並。 にぶい橙7.5YR7/4。	割れ口、器面消耗。内外刷毛目あり。側、割り込み様の痕所。焼成3層。	馬1。
図版 160 写一56	埴輪形 象家か	11号墳周堀No.78。	棟端か。	粘・陶、多、硬。 橙5YR7/6。	小口端部荒削。側部指などの圧痕。焼成は酸化気味。消耗微。	家か。
図版 161 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	部位不明。	粘、微、並、軽い。 橙7.5YR7/6。	内外面刷毛目。割れ口、器面消耗微。焼成は酸化気味の3層。	馬1。
図版 162 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	部位不明。	粘・陶、微、硬。 橙5YR7/6。	外面に帯状の貼付文、沈線の施文あり。割れ口消耗微。焼成3層。	馬1。
図版 163 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	鬣部か。	粘、微、硬、軽い。 橙5YR7/6。	表面2個所に帯状の貼付あり。内面に指圧痕。消耗微。焼成3層。	馬1。
第46図 164 写真図版56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	胸帯か。	粘、微、軟、軽い。 橙7.5YR7/6。	整488－1と同一個体。割れ口消耗あり。三角文施文。焼成3層。	馬1。彩色黒。
図版 165 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	胸帯か。	粘、微、軟、軽い。 橙5YR7/6。	整488－2と同一個体。割れ口消耗少ない。三角文施文。焼成3層。	彩色黒。馬1。
図版 166 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	胸帯か。	粘、微、軽、軽い。 橙7.5YR7/6。	整488－1・2と同一個体。割れ口消耗あり。三角文施文。焼成3層。	彩色黒・白。馬1。
図版 167 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	部位不明。	粘、微、並、軽い。 橙5YR7/6。	割れ口、器面消耗。外面に帯状の貼付文。内面刷毛目。焼成3層気味。	馬1。
図版 168 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳フク土。	部位不明。	粘、微、並、軽い。 にぶい橙5YR7/4。	外面帯状の貼付文の施文。内面刷毛目。割れ口、器面消耗。	馬1。
図版 169 写一56	埴輪形 象馬か	11号墳カクラン。	部位不明。	粘、微、硬、軽い。 橙7.5YR7/6。	外面側に文様を施文。内面刷毛目の割れ口消耗微。焼成3層か。	馬1。
図版 170 写一56	埴輪形 象馬か 石室。	11号墳カクラン、 石室。	部位不明。	粘、微、軟、軽い。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面刷毛目。加飾部鋸歯文あり。割れ口少し消耗。焼成3層。	馬1。
図版 171 写一57	埴輪 形象	11号墳1/10～45。	端部片。	粘、微、硬、軽い。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に沈線3条あり。端部作り整う。焼成単層気味。	種不明1
図版 172 写一57	埴輪 形象	11号墳No.54。	端部片。	粘、微、硬、軽い。 にぶい橙7.5YR7/4。	外面に刷毛目と沈線2条あり。端部作り整う。焼成単層気味。	種不明1。
図版 173 写一57	埴輪 形象	11号墳前平墳丘。	隆帯貼付部。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙5YR7/4。	外面に刷毛目、隆帯あり。内面に刷毛目あり。割れ口消耗。焼成3層。	種不明4。
図版 174 写一57	埴輪 形象	6号調。	体部片。	粘、微、並、軽い。 にぶい橙7.5YR7/6。	外面刷毛目。内面指の擦と撫、紐作痕。焼成単層気味。	種不明2。
図版 175 写一57	埴輪 形象	6号調。	端部片。	粘、微、並、軽い。 にぶい橙7.5YR7/6。	体部変換部。人か。外面刷毛目。内面紐作痕と撫痕。焼成単層気味。	種不明2。
第47図 176 写真図版57	埴輪 形象	11号墳カクラン。	体部施文貼付部。	粘、微、軟、軽い。 橙5YR7/6。	外面板状加飾貼付あり、その上面篦書施文あり。焼成3層。	種不明3。
図版 177 写一57	埴輪 形象	11号墳カクラン。	隆帯貼付部。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙5YR7/4。	外面に刷毛目、隆帯あり。内面に紐作痕と撫痕。割れ口消耗。焼成3層。	種不明4。
図版 178 写一57	埴輪 形象	11号墳周堀No.48・5ほか。	基部突帯径17.7。高さ49.6＋α。	粘・陶、含、硬。 橙7.5YR7/6。	外面に二次被熱的焼け痕あり。外面少し荒れあり。焼成は3層。	刷毛目細かく丁寧。種不明。
図版 179 写一57	埴輪 形象	11号墳カクラン。	脚部。	粘・陶、微、硬。 にぶい黄橙10YR5/4。	内外面に刷毛目。側部に透かし粘土板接合面か不明の倒所あり。馬形か。	種不明5。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
図版 180 写一57	埴輪 形象	6号溝。	体部片。	粘、微、硬。軽い。 灰褐7.5Y R5/2。	朝顔形にしては内面整形方向異なる。割れ口消耗。焼成3層。	種不明？。
図版 181 写一57	埴輪 形象	11号墳。	体部片。	粘、微、並。軽い。 にぶい橙7.5Y R7/4。	外面に細綱毛目丁寧に入る。割れ口多く消耗。類側体なし。焼成3層。	他墳からの形象。細綱毛目。
図版 182 写一57	埴輪 形象	6号溝。	体部片。	粘、微、並。軽い。 橙5Y R5/6。	外面に細綱毛目、沈線あり。割れ口消耗多。類側体なし。焼成3層気味。	他墳からの形象。
第47図 183 写真図版57	埴輪 形象	6号溝。	体部片。	粘、微、並。軽い。 にぶい橙7.5Y R7/4。	外面に刷毛目。内面細作痕。割れ口消耗。類側体なし。焼成単一気味。	他墳からの形象。
第48図 184 写真図版57	土師器 短頸壺	11号墳周溝No.6。	口径21.4。 高34.7。	粘・胸、微、硬。 明赤褐2.5Y R5/8。	外面下半荒面。口縁部内外横撫。口縁部内面直下、外面下方凍ハメ。	素色物質容器。酸化気味。
第49図 185 写真図版57	鉄製 大刀子	11号墳石室No.4。	長39.9＋α。	割れは直線的で古代鉄。錆色は紫味がかり良鉄か。錆ぶくれあり。目釘穴あり。茎末端の刷り込みは外装用か。硬度3.0強。		古代鉄。 硬度3.0弱。
図版 186 写一57	鉄製 刀子	11号墳石室No.5。	長37.6＋α。 厚さ0.45。	青厚い。錆色茶味強い。錆ぶくれ微で精鋭か。柄色の細組あり。茎尻で巻きのかえしあり。硬度3.0強。茎丸尻で良好遺存。		古代鉄。硬度3.0強。
図版 187 写一57	鉄製 小刀	11号墳石室No.3。	長29.1。 反9.0。	わずか反りあり。刃部の内反り傾向は旧時研磨か。茎は刷込み、鉄目釘。柄の木質は本理走行煩なく。切先再研磨の大フクラか。		旧時研磨か。 硬度≒3.5。
図版 188 写一57	鉄製 大刀子	11号墳石室2層No.10。	長39.9＋α。	元に鞘口を思わせる金具らしき付着物あり。刃部は使用時研磨のため内湾。錆化少なく、色先側紫味あり。刃部硬度3.5以上。		古代鉄。硬度3.5以上。
図版 189 写一57	鉄製 小刀	11号墳石室No.2。	長約10.5。	割れは直線的で古代鉄。錆色は紫味がかり側所多い。茎末の側は錆ぶくれあり。硬度3.5前後。		古代鉄。 硬度3.5前後。
図版 190 写一57	鉄製 大刀子	11号墳石室内プク土。	長約8.4＋α。	左刃小側用表に浅い研出し痕あり。直線的な割れ口は古代鉄。錆ぶくれ少なく、錆色茶味部と黒紫部あり。刃硬度3.5強。		古代鉄。 硬度3.5弱。
図版 191 写一57	鉄製 大刀子	11号墳No.6。	長約4.4＋α。	切先片。錆ぶくれ少ない。色は茶味おびる。割れは直線的。峰は付く。硬度刃部3.5前後、棟側3.5以下。		整462の錆色に似る。
図版 192 写一57	鉄製 刀子	11号墳石室No.9。	茎片。 長約5.5＋α。	茎部で、茎元部で木質の遺存があり、棟・刃区より鞘口側にかけ骨角らしき黄色の物質が付着。その下に木質あり。吞口か。		古代鉄。硬度3.5～3.0前後
図版 193 写一57	鉄製 大刀	11号墳石室No.7。	長約7.0＋α。 厚さ0.65。	大きな錆ぶくれあり。錆色茶味強い。欠損は近代欠。錆背ヒビあり。硬度3.0強。側部内あり。背返り気味。鋒少しやせ気味。		古代鉄。硬度3.0強。
図版 194 写一57	鉄製 不明	11号墳石室内プク土。	長約3.7＋α。	直線的な割れは古代鉄。錆ぶくれ少ない。図下の表裏に木質遺存。錆色紫味強く、良鉄を思わせる。硬度3.5弱。		古代鉄。 硬度3.5弱。
図版 195 写一57	鉄製弓 飾金具	11号墳石室内プク土。	長約3.0。	錆色やや黒ずみ、良鉄。木質遺存し、その長さ1.75cm。中空のため軽い。硬度3.0弱で軟らかい。		硬度3.0弱。
図版 196 写一57	鉄製弓 飾金具	11号墳石室内プク土。	長さ2.7。	錆色やや紫味がかり良鉄。木質遺存し、その長さ1.9cm。中空か軽い。硬度3.0弱と軟らかい。		硬度3.0弱。
図版 197 写一57	鉄製弓 飾金具	11号墳石室。	長さ2.7。	図右端は旧時の折れ。木部の幅は1.9cm。中空らしく軽い。色調は茶味強い。硬度3.0強。		硬度3.0強。
図版 198 写一57	鉄製弓 飾金具	11号墳石室。	長さ2.8。 木質部幅2.0。	扁平な耳部が付き、身部の横断面は丸い。木質が付着し、旧時の弓の直径が知れる。耳部の硬度は3.0強。		硬度3.0強。
図版 199 写一57	鉄製 不明	11号墳石室。	長さ3.0＋α。	欠損多く、種不明。割れは直線的で古代鉄。錆ぶくれ少なく紫味がややあり良鉄を思わせる。硬度は3.0前後。		古代鉄。硬度3.0前後。
図版 200 写一57	鉄製 不明	11号墳石室。	長さ4.0。	直線的な錆割れ多くあり、古代鉄・錆鉄不明。厚さ均一気味。錆色暗い茶味強い。硬度3.0強。		古代鉄か錆鉄か。硬度3.0強
図版 201 写未掲載	石 凝灰岩	11号墳石室。	長さ4.1。	4面に敲化色変の側所が残されているため、石室構築等で打ち欠かれた剣片ではないし、大きな打痕もない。		石室構築の補助の礫か。
図版 202 写未掲載	粘土資 料	11号墳石室材。	乾燥状態。	石室構築に使用された粘土で、オリーブ黄5/4、白色粒石粒をまじえる。乾いても軽く陶土質でない。酸化の植物根跡痕入る。		洪積粘土。識りあり か。
第52図 343 写真図版57	鉄製 刀子か	11号墳J 10－123付近。	刃部片。 長さ4.3＋α。	割れは直線的であるが表面の浅剥落あり。錆色茶味かがる部分多。錆ぶくれ少ない。端部旧時欠損。軟らかい。		古 代～14世紀。硬度≒3。
図版 344 写一57	鉄製 釘	11号墳周堀。	長さ8.4前後。	図左端部も曲っている。錆色は茶味強く良鉄には見えない。割れの走行は粗鉄か洋鉄か不明。横断面は角釘様ではない。		硬度先端で3.5前後。
図版 345 写一57	鉄製 釘	11号墳J 10－63付近。	全長9.2＋α。	先端で硬度3.5以上、4.0以下。錆色黒紫側所あり。錆割れは長軸に発達し、古代鉄か和鉄か不明。良鉄・良鍛造を思わせる。		古代鉄・和鉄か不明。
図版 346 写一57	鉄製 鏃片か	11号墳。	長さ4.3＋α。	形状は鏃先耳部を再加工したように見えるが硬度3.5以下である。錆ぶくれあり、紫味弱く鉄味悪い。割れ走行古代鉄か。		古代鉄か。
図版 347 写一57	鉄製 鏃か	11号墳。	長さ3.0＋α。	横断面は方形星しく、鏃などの茎片に見える。錆色は茶味弱く鉄味悪い。割れの走行は古代鉄か。		古代鉄か。
図版 348 写一57	鉄製 種不明	11号墳フク土。	茎片か。	片側旧時、片側調査時欠損である。錆化中に縦割れ入り、古代鉄に見える。横断面形は楕円気味で、鏃などの茎片か。		古代鉄か。
図版 349 写一57	鉄製 種不明	11号墳カクニン面。	小鉄器の破片。	小口は旧時欠損。側部は調査時欠損。錆化と割れは縦方向にあり、古代鉄を思わせる。横断面形からは鏃ではなさそう。		古代鉄か。

図番号 写真番号	器種 器形	出土位置	法量(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と調整		備考
同図 350 写−57	剣主材 金具	11号墳J 10−84、2〜3層。	幅1.9。	黄銅色を呈する地金で、黄金ではない。表・裏に彫りあり。草木の葉を模文。細い柄状の先端は旧時の折りまげ。上方旧欠損。		13世紀以降か。硬度3.0前。
同図 351 写−58	石 凝灰岩	11号墳 削 平 墳丘。	長さ5.8。	3面や中軸化。角ばりに鋭さが残され、凝灰岩加工時の剣片としての余地あり。整化部は、にぶい黄橙10Y R⅞である。		
同図 352 写−57	石材 凝灰岩	11号墳カクラン。	剣片。小岩片を多くまじえる。	剣片である。一部に旧材面が残される。その丸みからすると大材ではない。全体整化気味の色調おびる。		
第52図 353 写真図版57	石材	11号墳付近。	長さ2.0。	赤味のある整206と同種の石材で暗赤⅞。片側が節理面となり、そのほかの面に打痕不明瞭。		硬度6と7の間。
同図 354 写−57	石製 黄石	11号墳削平墳丘。	長さ3.2。	淡い桃色を呈し、図表面上方端側が打点部で複数の打ち欠きが行われている。石蓋であれば剣片。火打金の打痕はない。		縄文時代か。
同図 355 写−57	石材	11号墳J 10−447。	長さ2.9。	赤味のある赤⅞を示す。側部は節理面のほか加工された面である。打痕は明瞭でない。		硬度6と7の間。
同図 356 写−58	縄文 深鉢	11号墳№3。	体部片。	粘、微、硬。 にぶい黄橙10Y R⅓。	内面荒れる。内面に研磨痕わずかに見える。外面羽状縄文。内面板撫。	
同図 357 写−57	須恵器 坏	J 10−84。 11号墳ほか。	口径 (13.4)。	粘・陶、微、軟。軽い。 灰白2.5Y⅞。	底面轆轤右回転糸切あり。内外面に轆轤目あり。焼成燻加える。	太田製。
同図 358 写−58	土師質 壺か瓶	11号墳周溝№37・92。	口縁部片。 口径 (16.1)。	粘、微、軟、軽い。 にぶい黄橙10Y R⅓。	内面に轆轤目あり。割れ口少し消耗。須恵器かもしれないが酸化気味。	
同図 359 写−58	須恵器 瓶	11号墳カクラン。	体部片。	陶、含、締。 暗灰黄2.5Y⅓。	内面に轆轤目あり。外面に自然釉。白色鉱物多い。焼成少し煙。	太田製
同図 360 写−57	土師器 甕	11号墳J 10−18の5層。	底部片。 底径3.8。	粘・含、硬。 橙7.5Y R⅚。	内外淡白化。器面少し荒れ、外面煤付着。割れ口3層。	
同図 361 写−58	土師質 皿	11号墳付近。	口縁部片。 口径 (9.5)。	粘、微、並、軽い。 にぶい橙7.5Y R⅚。	内外面に横撫板あり。割れ口少し風化。焼成単一。	中〜近世。
同図 362 写−58	土師質 皿	11号墳付近。	底部片。 底径 (6.8)。	粘、微、並、軽い。 にぶい橙7.5Y R⅚。	内面に轆轤目あり。割れ口風化微。焼成単一。	中世〜近世。
同図 363 写−58	土師質 皿	11号墳付近。	底部片。 底径 (5.9)。	粘、微、並、軽い。 にぶい橙5Y R⅚。	内外面に回転撫痕あり。割れ口少し風化。焼成単一。	中〜近世。
同図 364 写−58	土師質 皿	11号墳J 10−84。	底部〜体部片。 底径 (4.6)。	粘、微、並、軽い。 浅黄2.5Y⅚。	底面糸切、内面轆轤目。割れ口消耗、酸化気味。	15・16世紀か。
同図 365 写−58	施釉 皿	11号墳カクニン画。	口縁〜底部片。 口径 (11.9)。	陶、なし、締。 灰白⅞。	底面を除き施釉。高台は削り出しし。体部外面箆削目あり。	16〜17世紀。
同図 366 写−58	土師質 溜子	11号墳 削 平 墳丘。	最大径1.8。	粘、微、軟、軽い。雲母粒あり。橙7.5Y R⅚。	外面型押。表面皮様入面。裏面指圧様の凹み。焼成単一。	
同図 367 写−58	陶器瓢	11号墳カクラン。	体部片。	陶、含、締。 灰オリーブ5Y⅗。	外面釉あり。内面指圧痕。胎土に白色鉱物粒含む。	渥美か 12・13世紀。
同図 368 写−58	焼締陶 瓶	11号墳周辺カクニン画。	体部片。	陶、含、締。外面酸化。 灰白5Y⅚。	外面に自然釉。内面に紐作痕。夾雑物少なく締りよい。割れ口消耗。	常滑。 13〜16世紀。
同図 369 写−58	軟陶 焙烙	11号墳J 10−044フク土。	口縁部片。	粘、微、並、軽い。 灰オリーブ5Y⅚。	内外面横撫。器面、割れ口消耗。焼成3層。	小泉焼か。 19・20世紀。
同図 370 写−58	軟陶 焙烙	11号墳カクニン画。	口縁〜体部片。	粘・陶、微、並。雲母粒含。灰5Y⅚。	全体に撫あり。内耳附着。割れ口少し消耗。焼成3層。	小泉焼か。 19・20世紀。
同図 371 写−58	鉄滓	11号墳カクラン。	残存長5.2。	小形の椀滓。表面あずき色と黒紫色を呈す。側部に部分的に欠損後被熱したあずき色部あり。	裏面が底面痕。整217に鉄滓1点あり。	
第56図 1 写真図版58	埴輪 朝顔	12号墳周堀フク土。	頸部片。	粘・陶、多、並。 橙5Y R⅚。	外面に刷毛目。内面指撫撫痕。内面やや荒れる。焼成3層。	
同図 2 写−58	埴輪 朝顔	12号墳削平墳丘。	頸部片。	粘・陶、微、並。 橙5Y R⅚。	内面に紐作痕。割れ口消耗。交巻部撫。焼成3層。	
同図 3 写−58	埴輪 円筒	12号墳削平墳丘。	体部片。	粘、微、並、軽い。 橙5Y R⅚。	外面細刷毛目。内面刷毛目。内面紐作痕。焼成3層。	細刷毛目。透。
同図 4 写−58	埴輪 円筒	12号 墳 内 溝 J 11−250フク土。	基部片。	粘・陶、含、並。 橙7.5Y R⅚。	外面細刷毛目。内面指撫痕。基部端外面丸みあり。焼成3層。	細刷毛目。基部粘土板S型
同図 5 写−58	埴輪 円筒	12号墳周堀フク土ほか。	口縁部片。	粘・陶、微、締。 にぶい橙7.5Y R⅚。	口縁部の内外面指撫。内外面刷毛目。焼成3層。	締あり。
同図 6 写−58	埴輪 円筒	12号墳J 11−211フク土。	口縁部片。	粘・陶、微、並。 橙5Y R⅚。	口作りで特徴。口縁部の内外面に横撫。内外細刷毛目。焼成3層。	細刷毛目。
同図 7 写−58	埴輪 円筒	12号墳フク土。	口縁部片。	粘・陶、含、硬。 橙5Y R⅚。	口縁部の内外面に横撫あり。内外面に刷毛目。焼成3層。	
同図 8 写−58	埴輪 円筒	12号 墳 溝 フ ク土。	口縁部片。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙5Y R⅚。	内外面に大まかな刷毛目あり。外面の回転条痕シャープ。焼成3層。	

図番号 写真番号	類 器形	出土位置	量目（cm） 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
図図 9 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11－211 フク土。	口縁部片。	粘、微、軟。軽い。 橙5 Y R5/6。	口縁部の内外面に横撫あり。内外面細刷毛目。焼成3層。	
図図 10 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11－210 フク土。	口縁部片。	粘・陶、含、軟。 にぶい橙5 Y R5/4。	外面無文。内面横撫。全体に風化消耗気味。焼成3層。	
図図 11 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11－211 フク土。	口縁部片。	粘・陶、含、軟。軽い。 にぶい橙5 Y R5/6。	口縁部の内外面に横撫あり。内外面刷毛目。焼成単一。全体に消耗。	焼成単一。
第56図 12 写真図版58	埴輪 円筒	12号墳J 11－211 フク土。	体部片。	粘・陶、含、硬。 橙5 Y R5/4。	外面刷毛目。内面指撫痕。透あり。外面小ハゼ。焼成3層。	透。
図図 13 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11－211 フク土。	体部片。	粘、微、硬。軽い。 にぶい橙7.5 Y R5/4。	内・外面に細刷毛目。外面に覗書あり。割れ口消耗。焼成3層。	覗書あり。
図図 14 写－58	埴輪 円筒	12号墳溝上層J 11－309付近。	体部片。	粘、含、並。軽い。 橙7.5 Y R7/6。	内外面におおまかな刷毛目。突帯低い。焼成3層。	透。
図図 15 写－58	埴輪 円筒	12号墳溝上層J 11－309付近。	体部片。	粘・陶、含、硬。 橙5 Y R7/6。	内外面刷毛目。内面指撫痕。透やや大きな円形あ。焼成3層。	透。
図図 16 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11－211 下層。	体部片。	粘、含、並。 橙5 Y R7/6。	外面大まかな刷毛目。内面も同様。内面紐作痕。焼成3層。	透。
図図 17 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11-251 フク土。	突帯部片。	粘・陶、微、硬。 にぶい橙5 Y R7/4。	外面に大まかな刷毛目。内面に指整形痕。焼成3層。	
図図 18 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11－222 フク土。	突帯部片。	粘、微、並。軽い。 橙5 Y R7/6。	内外面に刷毛目。突帯と周辺横撫。内面指撫痕。焼成3層。	
第57図 19 写真図版58	埴輪 円筒	12号 墳 調、J 11－211フク土。	突帯部片。	粘・陶、微、硬。 橙5 Y R7/4。	突帯部貼付痕。外面に細刷毛目。内面紐作痕。焼成3層。	細刷毛目。
図図 20 写－58	埴輪 円筒	12号墳周堀フク 土。	突帯部片。	粘・陶、含、並。 橙5 Y R7/6。	外面に細刷毛目。器面は全体に消耗。内面無文。焼成3層。	細刷毛目。
図図 21 写－58	埴輪 円筒	12号墳J 11－211 フク土。	基部片。	粘・陶、含、硬。 橙7.5 Y R5/4。	外面細刷毛目。内面指撫痕。内面少し消耗。焼成3層。	細刷毛目基部粘土板S型
図図 22 写－58	埴輪 円筒	12号墳墳丘。	基部片。	粘・含、並。軽い。 橙5 Y R5/6。	外面細刷毛目。内面指撫痕。内・外面少し消耗。焼成3層。	細刷毛目。
図図 23 写－58	埴輪 形象	12号墳J 11－289 カクラン。	体部片。	粘、微、硬。軽い。 にぶい橙7.5 Y R。	外面、横刷毛。内面無文と紐作痕。全体に消耗。焼成単一気味。	
図図 24 写－58	埴輪 形象	12号墳。	部材片。	粘・陶、含、硬。やや軽。 橙7.5 Y R7/4。	形象部不明。下方に出納部あり。内外面無文。焼成芯側褐黒色、外黒化。	
図図 25 写－58	埴輪 形象	12号墳溝J 11－211上層。	体部片。	粘・陶、微、硬。 橙7.5Y7/6。	形象部不明。外面に沈線1条と疑似1条。内面紐作痕と無文。焼成3層。	
図図 26 写－58	埴輪 形象	12号 墳 部 平 墳丘。	体部片。	粘・陶、含、並。 橙7.5 Y R。	形象部不明。外面に隆帯2条あり。上方端部は透かし不明。焼成3層。	
図図 27 写－58	埴輪形 象大刀	12号墳フク土。	体部片。	粘、微、硬。 浅黄橙7.5 Y R2/3。	大刀柄部か。外面細刷毛目。内面紐作痕と撫痕。焼成単一気味。	
図図 28 写－58	埴輪 形象	12号墳J 11－271 カクラン。	体部片。	粘、微、硬。軽い。 橙7.5 Y R。	形象部不明。外面に細刷毛目。上方に沈線2条。焼成3層。	細刷毛目。
図図 29 写－58	埴輪形 象家か	12号墳。	端部片。	粘・陶、微、硬。 橙7.5 Y R。	家形屋蓋端部か。端面に大まかな刷毛目、ほかは無。焼成3層。	
図図 30 写－58	埴輪 形象	12号墳J 11－ 269、7層。	加飾部片。	粘、微、並。軽い。 にぶい橙7.5 Y R2/4。	鈴としての加飾部。部分的に赤彩色あり。大鈴のため馬などに使用か。	赤彩色。
図図 31 写－58	鉄製 釘か	12号 墳内 堀J 11－250フク土。	端部片。	割れ口は直線的で古代鉄。横断面は、隅丸方形を呈し、釘か。鉄色はやや紫味をおびる。硬度は3.5前後。		古代鉄。 硬度3.5前後。
図図 32 写－58	鉄製 不明	12号墳J 11－270 墳丘ほか。	端部片。	割れ口の鉄味は古代鉄。先端は尖らず丸みおびる。先・元とも硬度差少ない。鉄色は外周は茶味強く、割れ口紫味強い。		古代鉄。 硬度3.5以上
図図 33 写－58	鉄製 釘か	12号 墳 外 堀J 11－288フク土。	端部片。 5.8＋α。	割れ口は直線的で古代鉄。横断面は方形で釘か。鉄色はやや紫味おびる。割れ口付近欠損。硬度は3.5弱。		古代鉄。 硬度3.5弱。
図図 34 写－58	鉄製 鏃か	12号 墳 内 堀J 11－269№4。	部分片。 長さ7.0。	鏃先耳部片か。割れ口は直線的で鏃鉄。錆ぶくれ少ない。鉄色は茶味強い。片側は旧時の欠損。硬度は4.0前後		鏃鉄。 硬度4.0前後。
図図 35 写－58	鉄製 不明	12号 墳 外 堀J 11－210、3層。	最長部長さ5.3。	直線的に大く割れ、本来の形状を失なう。黒紫味強く良鉄を思わせる。茶味の側所少ない。硬度4.0弱。		鏃鉄。 硬度4.0弱。
図図 36 写－58	鉄製 不明	12号 墳 外 堀J 10－210、3層。	側部辺長さ3.5。	直線的に大く割れ鏃鉄。黒紫味強く良鉄を思わせる。茶味強い側所の割り合いは低い。硬度3.5強。		鏃鉄。 硬度3.5強。
図図37－1 写－58	土師質 皿	12号墳溝フク土。	口縁部片。 口径（12.0）。	粘、微、軟。軽い。 にぶい黄橙10 Y R7/2。	内外面に轆轤回転糸痕あり。割れ口少し消耗。焼成単一気味。	中世。
図図37－2 写－58	土師質 皿	12号墳溝フク土。	底部片。 底径（4.1）。	粘、微、軟。軽い。 にぶい黄橙10 Y R7/2。	底面に轆轤左回転の糸切り痕と板状圧痕。割れ口少し消耗。焼成単一。	中世。

図番号 写真番号	器種 器形	出土位置	法量(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
図版38－1 写－58	須恵器 直口壺	12号墳調フク土。	口縁部片。 口径（12.8）。	陶、微、緻。 灰5Y5/1。	体部外面に波状文2単位と隆線。内面無。焼成単一。	西毛～埼玉北部。
図版38－2 写－58	須恵器 壺か	12号墳J11－211付近。	頸部直上片。	陶、微、緻。 灰5Y5/1。	体部外面に波状文。内面無。焼成単一。	西毛～埼玉北部。
図版 39 写－58	陶器 耳壺か	12号墳周堀フク土。	体部片。 最大径（17.8）。	陶(灰)、微、緻。釉暗黒褐。灰5Y5/1。	外面上方に鉄釉。下方鉄釉。内面凹凸圧痕。割れ口僅多し。	軟質か国産か不明。
第57図 40 写真図版58	軟質陶器 鉢	12号墳調フク土。	底部片。	陶、微、軟。 明褐灰5Y R7/1。	内面磨耗度。底面糸切痕。体部外面回転横撫と線撫。焼成3層。	14～16世紀。太田・笠懸製。
第60図 1 写真図版58	埴輪 形象	13号墳周堀№1。	体部片。	粘、微、軟。軽いゃ。 橙5Y R7/6。	内外面に刷毛目痕。外面に剥落がある。焼成単一。	
図版 2 写－59	須恵器 壺	13号墳H8－158。	体部片。	粘・陶、含、軟。 にぶい橙5Y R5/6。	外面に平行叩、内面にあて目痕。割れ口消耗。焼成3層。	浜横粘土窯製で東毛製か。
第67図 1 写真図版59	土師器 高坏か	1号住床直K12－222。	体部片。	粘・陶、微、硬。 橙5Y R5/6。	内外面荒研磨あり。内外面の風化微。脚部平面荒削あり。焼成3層。	
図版 2 写－59	土師器 坩	1号住上層。同坩K12－222。	口径（12.0）。 赤10R5/6。	粘・陶、微、硬。 下半荒削。	外面刷毛目。口縁部周辺横撫。内面下半荒削。焼成単一。	
図版 3 写－59	石材 馬瑙	1号住床面№1。	29g 長さ4.4。	暗橙色に発色。表面に川原石様の原石面があり、裏面に結晶時に生じたと思われる節理面が残る。表面に打撃痕あり。		
第69図 1 写真図版59	土師器 器台	2号住フク土。	受部径7.8。 高さ5.6＋α。	粘、含、並。軽いゃ。 橙5Y R5/6。	受部内面凍ハゼあし。割れ口消耗。透あり。焼成は酸化。	円形透3穴。
図版 2 写－59	土師器 高坏	2号住フク土。	脚部径12.3。 高さ7.1＋α。	粘、微、硬。 明赤褐5Y R5/6。	外面研磨。脚部内面下半横撫。透あり。坏部割れ口接合面。焼成2層。	透円形3穴。部分吸炭。
図版 3 写－59	土師器 高坏	2号住フク土。	脚部径（17.4）。 高さ7.4。	粘・陶、含、硬。 橙7.5Y R5/6。	外面中位以下に研磨、上方に撫・強整形痕。坏部側欠損部消耗再用か。	透円形2段各3穴。
図版 4 写－59	土師器 壺	2号住フク土。	口縁部片。 口径（12.0）。	粘、多、並。 にぶい橙7.5Y R7/6。	少し消耗、内面凍ハゼあり。焼成時の焼ハゼ多い。焼成単一。	
図版 5 写－59	土師器 壺	2号住フク土。	頸部片。	粘、多、並。 にぶい橙7.5Y R5/6。	少し消耗。焼成時の焼ハゼが多い。割れ口に紐作痕。焼成単一。	
図版 6 写－59	土師器 壺	2号住フク土。	頸部片。	粘、多、並。 にぶい橙5Y R5/6。	少し消耗。焼成時の焼ハゼが多い。割れ口に紐作痕。焼成単一。	
図版 7 写－59	土師器 甕	2号住フク土。	口径（16.4）。 高さ16.4。	粘・陶、微、硬。 にぶい褐7.5Y R5/6。	内外面に刷毛目。外面煤・吸炭。割れ口消耗度。作調丁寧。	内面全面刷毛底部不整痕。
図版 8 写－59	土師器 甕	2号住フク土。	口径15.6。 高さ19.7。	粘・陶、微、硬。 にぶい赤褐5Y R7/6。	口縁部の内外横撫あり。外面と口縁内側に刷毛目痕。外面被熱色変あり。	質は整152近似。底本葉痕。
第70図 9 写真図版59	土師器 台付甕	2号住フク土。	口径13.8。 高さ16.1＋α。	粘、微、並。軽いゃ。 にぶい橙7.5Y R7/6。	外面に穿孔様小穴。内面に接合痕。穿孔面少し風化。	穿孔様穴は焼成後内側から
図版 10 写－59	土師器 壺	2号住フク土。	口径13.1。 高さ14.5＋α。	粘・陶、微、硬。 明赤褐5Y R5/6。	最下端成りは台付か不明。内面上方ハゼあり。焼成は酸化。	刷毛単位幅広い。
図版 11 写－59	土師器 壺	2号住フク土。	口径（15.8）。 高さ4.3＋α。	粘・陶、含、硬。 にぶい黄橙10Y R6/3。	体部外面の刷毛目施文興風。割れ口消耗度。焼成酸化に傾むく。	刷毛目特徴的
図版 12 写－59	土師器 壺	2号住フク土。	口径16.3。 高さ23.1＋α。	粘・陶、微、硬。 にぶい黄橙10Y R6/4。	台付甕か。体部外面刷毛目。内面上方接合痕。	
図版 13 写－60	土師器 壺	2号住フク土。	口径（16.4）。 高さ11.6＋α。	粘・陶、含、緻。 褐灰10Y R5/1。	体部外面に刷毛目あり。焼締り陶様。横刷毛目。割れ口消耗微。	還元。焼締。
図版 14 写－60	土師器 高坏	2号住フク土。	最大径14.2。 高さ10.1＋α。	粘、多、軟、軽いゃ。 橙7.5Y R5/6。	内外面風化顕著。透しあり。焼成酸化気味。整形痕ほとんど見えず。	円形透3穴。チャート多い
図版 15 写－60	弥生か 壺か	2号住フク土。	体部片。	粘、微、並。軽いゃ。 にぶい褐7.5Y R5/3。	外面に沈線・縄文、無文部あり。器形不明。上方接合面。焼成単一。	
図版 16 写－60	埴輪か	2号住。	体部片。	粘、微、軟。軽いゃ。 にぶい橙7.5Y R5/4。	内外果文であるが埴輪形象片か。焼成単一。割れ口消耗。	
第72図 1 写真図版60	土師器 高坏	3号住フク土。	口径7.9。 高さ6.3＋α。	粘、微、並。軽いゃ。 橙5Y R5/6。	脚部内面を削るほか研磨あり。器面全体に荒れている。焼成単一。	透3穴。
図版 2 写－60	土師器 高坏	3号住J12－358。	最大径7.3＋α。	粘・陶、微、並。 にぶい橙7.5Y R5/6。	上部の出土物部が焼成前か、使用時の再整形か不明。焼成単一。	透3穴。
図版 3 写－60	土師器 高坏	3号住J12－358。	脚部～体部片。	粘、微、並。軽いゃ。 淡黄2.5Y7/4。	脚部外面に浅い荒削。同内面荒削。体部外面残っ刷毛目。焼成単一気味。	透2＋α穴。
図版 4 写－60	土師器 高坏	3号住フク土。	口径（10.5）。	粘、含、軟。軽いゃ。 橙2.5Y R5/6。	全体に消耗し、荒れる。透3穴。焼成単一。	透3穴。
図版 5 写－60	土師器 壺	3号住№9、同フク土。	最大径（25.5）。	粘・陶、微、硬。 にぶい黄橙10Y R7/4。	外面刷毛目。内面整形痕。内面下方の器面に小剥多し。焼成3層。	

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目（cm） 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
同図　6 写一60	土師器 台付甕	3号住Ｊ12一358。	脚部片。	粘、微、並。軟い。 にぶい橙５Ｙ R⁶⁄₄。	外面刷毛目。内面底に砂付着。外面全体に消耗し、荒れる。焼成単一。	
第74図　1 写真図版60	土師器 甕	4号住№３・４、同ツク土。	口径（17.0）。	粘・陶、微、硬。 明赤褐2.5Ｙ R⁵⁄₆。	口縁部内外に横撫。以下内外面に刷毛目あり。焼成３層。	
第76図　1 写真図版60	土師器 器台	B地点３層№１。	口径9.0。 高さ3.9＋α。	粘、含、硬。 灰褐５Ｙ R⁵⁄₂。	内外面に研磨あり。器面少し荒れ、割れ目消耗あり。焼成酸化気味。	被熱色変あり。
第76図　2 写真図版60	土師器 甕	B地点№２、同３層。	底部片。 底径5.3。	粘・陶、多、硬。 にぶい黄褐10Ｙ R⁵⁄₃。	内外に黒色斑あり。外面刷毛目。内面撫・無銘。焼成部分燻まれる。	
第87図　1 写真図版60	鉄製 鉄滓	1号溝Ｊ10一5。	直径3.0。	小形の鉄滓で、旧部欠損直後接熱しているため、製作中か。裏面9頭。重さはややある。	遺跡出土鉄滓は２点のみ。	整281に鉄滓あり。
同図　2 写一60	埴輪形 象人か	1号溝付近Ｊ10一25。	部位不明。	粘、微、軟。 橙7.5Ｙ R³⁄₄。	片側に接合面あり。図下端は疑似。全体に少し消耗。	人１～５の破片か。
同図　3 写一60	鉄製 釘か	2号溝付近カクニン面。	長さ5.9＋α。	端部片側は旧状を示す。錆ぶくれ大きい。	鉄色茶味強い。横断面方形気味。硬度は3.5前後。	古代鉄か。硬度3.3前後。
同図　4 写一60	鉄製 不明	3号溝Ｊ11一76カクニン面。	長さ2.1＋α。	割れ走行は古代鉄。錆ぶくれ少。	鉄色茶味強い。欠損は近代欠損。硬度3.5強。	古代鉄。硬度3.5強。
同図　5 写一60	鉄製 鉄	3号溝付近。	長さ8.3＋α。	層状剥落があり和鉄か。	鉄色白けがかる茶味の色で被熱か。鉄質は不良。硬度は、切先で3.0強、軟らかい。	和鉄か。19・20世紀。
同図　6 写一60	土師器 甕	4号溝Ｊ11-38.5層。	体部片。	粘、含、軟。軟い。 橙7.5Ｙ R⁵⁄₆。	内面磨耗と凝ハゼ小剥落あり。外面研磨。焼成は内面燻黒色。外面橙色。	透単位不明、円形。
同図　7 写一60	土師器 器台	5号溝フク土。	脚径9.7。 高さ6.3。	粘・陶、微、硬。 明褐7.5Ｙ R³⁄₄。	脚部内面を除き研磨。同内面少し剥落。割れ口消耗。焼成酸化気味。	透単位不明、円形。
同図　8 写一60	土師器 甕	5号溝カクニン面。	口縁部片。 口径（16.6）。	粘・陶、微、硬。 明赤褐５Ｙ R⁴⁄₆。	頸部周辺外面は、刷毛目後横撫。割れ口風化無。焼成３層。	
同図　9 写一60	陶器 碗	5号溝Ｊ12-359ほか。	体部片。	陶胎（白）、なし、緻。釉天目（黒褐）。	轆轤左回転。外面の露胎を除き施釉。外面釉端は釉溜り。外面下半黒斑。	前期15～16世紀。
同図　10 写一60	陶器 鉢	5号溝Ｊ12-357。	口径（31.2）。	陶胎（淡灰）、なし、緻。釉長石（灰）。銅（緑）。	全面に施釉。内面に緑色釉の線１条。外内面縁端目と削目あり。	18世紀頃。
同図　11 写一60	陶器 壺か	6号溝。	底径（12.0）。	陶胎（黄灰）。微、緻。無釉部分。	全体にやや酸化気味。底面中央側に外切痕あり。周辺回転箆削。	製作地不明。17～19世紀か。
同図　12 写一60	須恵器 甕	6号溝。	体部片。	陶、微、緻。重い。 暗青灰５ＢＧ⁴⁄₁。	内外面煮文。外面に工具条痕あり。胎土中石英微粒多く含む。	県外搬入。8・9世紀か。
同図　13 写一60	須恵器 大甕	6号溝。	体部片。	陶、含、軟。 暗赤褐５Ｙ R³⁄₄。	外面に平行叩撫痕。内面に青海波当見跡無消耗あり。焼成部分燻。	太田・笠懸製。
同図　14 写一60	軟陶 鉢	6号溝フク土。	口縁部片。	陶・粘、微、軟。 灰白５Ｙ⁷⁄₂。	内外面に轆轤あり。内面下方わずかに刷目。割れ口消耗あり。	東毛。13・14世紀。
同図　15 写一60	須恵器 瓶	6号溝。	底部～体部片。 底径（18.8）。	粘・陶、含、緻。 オリーブ灰10Ｙ⁷⁄₂。	割れ口・器面消耗。外面平滑。内面焼ハゼ板あり。焼成単一。	東毛製。8～10世紀。
同図　16 写一60	陶器 擂鉢	6号溝。	体部片。	陶胎、含、緻。鉄分多い灰釉か、外面にあり。	内面卸目あり。外面施釉か。割れ口に紐作痕。	信楽か。17・18世紀。
同図　17 写一60	軟質陶 鉢	6号溝フク土。	口縁部片。 口径（27.4）。	粘・陶、微、軟。 灰白2.5Ｙ⁷⁄₂。	内外面に擦痕あり。割れ口消耗。焼成３層。	在地。13・14世紀。
同図　18 写一60	陶器 壺	6号溝。	体部片。	陶・微、緻。 灰7.5Ｙ⁷⁄₂。	外面に叩目、部分灰釉。内面に紐作り痕、指擦痕あり。焼成部分燻。	瀬美。12・13世紀。
同図　19 写一60	磁器 花瓶か	6号溝。	脚端径（10.0）。	磁胎（白）、なし、緻。青磁釉（淡い色調）。	内外に青磁釉。釉は乳濁気味。生掛けか虫喰い状の釉小穴あり。	伊万里系18世紀頃。
同図　20 写一60	瓦 十能瓦	6号溝。	端部片。 灰白５Ｙ⁷⁄₂。	粘、微、並。軟。	裏面細砂付着。表面に糸切らしき（撫・擦かも）跡。焼成３層。	小泉焼。20世紀。
第88図　21 写真図版60	軟陶 鉢	7号溝カクニン面。	体部片。	粘・陶、微、硬。 灰オリーブ５Ｙ⁵⁄₃。	内面と外面上方に横撫。外面方擦痕あり。内面磨耗微。割れ口風化微。	県内製か。13～15世紀。
同図　22 写一60	鉄製 不明	7号溝カクニン面。	長さ3.9。	欠損生ずるが端部は旧状。錆ぶくれ多く、茶味強く、良鉄に見えず。硬度3.5前後。	割れの走行は古代鉄か。	古代鉄か。硬度3.5前後。
同図　23 写一60	陶器 瓶	8号溝カクニン面。	口縁部片。 口径4.9。	陶胎（灰）、微、緻。 浅黄５Ｙ⁷⁄₃。	内外灰釉。灰釉表面は、鉄い光沢で古代灰釉調であるが形状異域。	県外搬入。
同図　24 写一60	磁器 猪口	9号溝Ｋ12-184。	口径5.2。	磁胎（白）、なし、緻。染付（淡青）。	染付網代文と千鳥施文。高台端部を除き透明釉かかる。	20世紀。
同図　25 写一60	土師器 器台	9号溝Ｋ12-184。	口径（8.8）。	陶・粘、微、並。 にぶい橙7.5Ｙ R⁵⁄₄。	脚部内面を除き荒研磨。脚部内面荒削。透３穴。焼成３層。	透３穴。
同図　26 写一60	土師器 器台	10号溝Ｊ12-379。	受部径8.4。 高さ4.9＋α。	粘・陶、微、並。 にぶい黄橙10Ｙ R⁷⁄₃。	脚部内面を除き研磨。透単位間かく特徴的。割れ口消耗少。焼成酸化。	透特徴的。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	規目（cm） 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要	備考
図版　27 写一61	土師器 小形壺	16号調 J 12-379 №8。	口径（5.2）。 高3.6。	粘・陶、含、硬。 に赤い黄橙10Y R5/4。	体部外面下方刷毛目。内面指圧痕。器面少し荒れる。焼成微化気味。	部分後炭あり。
図版　28 写一61	土師器 甕	11号調。	底径（7.6）。	粘、微、並。軟いい。 灰白10Y R5/2。	外面刷毛目あり。内面側面落あり。割れ口消耗多い。焼成単一。	漂白化。
図版　29 写一61	土師器 高坏	11号調K13-234、9層No.1。	坏部片。 口径（17.0）	粘、微、軟。軟いい。 橙2.5Y R5/6。	内面剥落多いい。器面風化、漂白化。外面工具痕。焼成3層。	
第88図　30 写真図版61	軟陶 内耳鍋	14号調。	口縁部片。	粘、含、硬。軟いい。 暗青灰5 B G5/1。	内外面横撫目あり。外面下方に型肌痕あり。焼成5層。	小泉焼か。 19・20世紀。
図版　31 写一61	軟陶 鉢形	15号調。	体部～底部片。	粘、微、並。軟いい。 灰青褐10Y R5/1。	底部は石目状。内面横撫目あり。外面煤付着。焼成横気味。	小泉焼か。 18・19世紀。
図版　32 写一61	鉄製 鋤か	23号調カクラン 面。	長さ10.2。	端部のうち実線は旧形状で近代欠を除き、旧欠状態。錆味は古代鉄を思わせ、色は茶味強く、錆ぶくれ少。硬度3.0強で軟。	古代鉄か。硬度3.0強。	
図版　33 写一60	鉄製 青か	14・15調。	直径2.2。厚さ0.3。高さ0.7。	錆ぶくれ少しあり。状態は和鉄か古代鉄か不明。形状は、柄の黄金具様。錆色は茶味強い。		
第89図　1 写真図版61	縄文 深鉢	縄文包含層 J 11-192No.11。	最大径（20.7）。 高さ19.6＋α。	粘、含、並。軟いい。 灰褐5 Y R5/2。	繊維含む。器面内外荒れ、割れ口消耗。縄文結束、半截竹管施文。	繊維含む。
図版　2 写一61	縄文 深鉢	縄文包含層 3～6層。	口縁部片。	粘、微、軟。軟いい。 浅黄2.5Y R5/4。	外面に半截竹管文あり。口縁部下に円形透あり。焼成3層。割れ口消耗。	繊維含む。
図版　3 写一61	縄文 深鉢	J 11－192No.10。	体部片。	粘・陶、多、硬。 明赤褐5 Y R5/4。	外面縄文。内面研磨。割れ口に繊維痕あり。焼成内面より褐、暗褐、橙。	
図版　4 写一61	縄文 深鉢	12号墳北7層。	底部片。 底径（6.8）。	粘、微、並。軟いい。雲母 粒含。に赤い橙5 Y R5/6。	外面に縄文施文あり。底面型研磨。内面荒れる。割れ口少し消耗。	
図版　5 写一61	縄文 深鉢	12号墳調フク土。	体部片。	粘、含、硬。 橙7.5Y R5/6。	外面に縄文。内面に繊維圧痕。割れ口にも繊維痕。焼成3層。	
第92図　1 写真図版61	埴輪 形象	K13－332。	端部片。	粘、微、並。 明赤褐5 Y R5/6。	形象種不明。内外面無文。外面に隆帯1条あり。割れ消耗。焼成3層。	
図版　2 写一61	弥生 壺	K13－332付近。	体部片。	粘、微、並。軟いい。 橙7.5Y R5/6。	外面に沈線2条。内面少し漂白化。割れ口風化微。焼成単一。	
図版　3 写一61	弥生 壺	K13－216ＦＡ下No.1。	頸部片。	粘、微、軟。軟いい。 に赤い橙7.5Y R5/6。	外面に波状文、櫛状文入る。波状少し荒い。割れ口少し風化。焼成2層。	
図版　4 写一61	弥生 壺	K13－332付近。	体部片。	粘、微、並。軟いい。 橙7.5Y R5/6。	外面に沈線渦文あり。内面少し漂白化。割れ口少し風化。焼成単一。	
図版　5 写一61	土師器 小形坏	K13－342・343。	口径8.7。	粘、微、硬。軟いい。 明赤褐5 Y R5/4。	体部外面篦削。口縁部の内外面に横撫あり。焼成単一。	
図版　6 写一61	土師器 壺	K13－274の9層No.7。	頸部片。 頸部径（10.3）。	粘、微、軟。軟いい。 に赤い橙7.5Y R5/6。	漂白化。器面全体風化強い。内面指圧痕あり。	
図版　7 写一61	土師器 甕	K13－234の9層No.4。	口縁部片。口径（15.0）。	粘、微、軟。軟いい。 橙5 Y R5/6。	内外面消耗。漂白化。整形痕見えず。焼成単一気味。	
図版　8 写一61	鉄製 不明	K13－332。	鱗部片。 長さ5.4＋α。	種不明。層状剥落が進行し、和鉄。錆色茶味強く、錆ぶくれも多く粗悪。硬度は3.0強で、軟らか。	和鉄。	
図版　9 写一61	足痕跡 石青型	K13－156No.2。		滑り跡あり。調査時の掘り上げ具。石青型として良好。水平に対し、大きく傾むき、滑って生じた足痕跡。		
図版　10 写一61	足痕跡 石青型	K13－156No.1。	調査時の掘り上げ時に出土で小傷が生じ石青型としては不良。深さ1.5～1cm前後の想。水平に歩いて生じた足痕跡。			
第97図　1 写真図版61	軟陶 不明	1号土坑J 10。	底部片。	粘、微、硬。軟いい。 灰褐2.5Y 5/2。	内面に少し煤かゝる。割れ口消耗。整形不明。	19・20世紀。
図版　2 写一61	土師 甕	2号土坑フク土。	体部片。	粘・陶、微、硬。 に赤い黄褐5/4。	内面刷毛目。外面篦研磨。焼成単一。風化なし。	
図版　3 写一61	縄文 深鉢	7号土坑フク土。	体部片。	粘、微、硬。軟いい。 に赤い赤褐5 Y R5/4。	外面縄文施文。割れ口消耗微。内面側少し荒れる。焼成単層気味。	
図版　4 写一61	弥生か 不明	7号土坑。	体部片。	粘・陶、微、並。 橙7.5Y R5/6。	外面沈線と弧を描く小文様。内面丁寧に研磨。焼成単層気味。	
図版　5 写一61	土師器 高坏	11号土坑フク土。	脚部径（10.1）。 高さ7.7。	粘、微、硬。 明赤褐5 Y R5/6。	坏部の内外面研磨。脚部の内外面は速い回転の横撫。割れ口消耗。	
図版　6 写一61	土師器 坩	11号土坑フク土。	頸部片。	粘、含、軟。軟いい。 明褐7.5Y R5/6。	内外面研磨。研磨や荒い。器肉薄いい。割れ口少し消耗。焼成3層。	
図版　7 写一61	土師器 坏	11号墳フク土。	口縁部片。	粘、微、硬。軟いい。 赤褐5 Y R5/4。	内外面横撫。外面休部篦削。割れ口風化微。焼成単一。	
図版　8 写一61	土師器 甕	11号土坑フク土。	口径（21.4）。 高さ9.8＋α。	粘・陶、含、硬。 に赤い赤褐5 Y R5/4。	口縁部の内外面横撫。体部外面篦削。内面下方荒れあり。焼成解化。	割れ口消耗微。

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目（cm） 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
同図　9 写－61	埴輪形 象大刀 土.	11号土坑 フク土。	玉纏部。	粘、微、軟。軟い。 橙2.5Y R⅝。	内外とも無整形強い。三角玉部貼付。 焼成は出土埴輪中段も濃い酸化橙色	大刀３。消耗強。
同図　10 写－61	土師質 か　皿	12号土坑。	体部片。	粘・陶、微、並。 にぶい赤褐５Y R⅝。	内面剥落気味。割れ口少し消耗。焼成３層気味。	
同図　11 写－61	土師器 坩	13号土坑。	口縁部片。	粘、微、硬。 明赤褐2.5Y R⅝。	器肉薄く、内・外面に丁寧な研磨あり。焼成単層気味。	
第97図　12 写真図版61	土師器 甕	14号土坑。	口縁～体部片。	粘・陶、微、硬。 にぶい褐7.5Y R⅝。	類部内面と体部外面に細刷毛目。内面の下半は無文。焼成単一気味。	外面部分的に煤および。
同図　13 写－61	土師器 甕	15号土坑。	口縁部片。 口径（16.1）。	粘・陶、含、硬。 赤褐2.5Y R⅝。	外面に刷毛目あり。口縁部の内外面に横撫あり。焼成単層気味。	
第100図　14 写真図版62	土師器 甕	ピット９。 J 12－378。	体部片。	粘・陶、含、硬。 赤褐５Y R⅝。	小片のため整形不明瞭。消耗強。焼成単層。	
同図　2 写－62	軟陶 鉢	ピット16。 J 11－18。	口縁部片。	陶、微、硬。 灰白５Y⅝。	割れ口消耗顕著。内面使用磨耗少ない。内外横撫目あり。焼成３層気味。	被熱ありか。 13～15世紀。
第103図　1 写真図版62	縄文 深鉢	６号風倒木Ｊ 11－192。	体部片。	粘、含、並。軟い。 褐7.5Y R⅝。	外面に羽状の縄文。内面に研磨痕。 割れ口に繊維が見える。	
第105図　1 写真図版62	鉄製 鋤先	J 10－250カクニン面。	長さ10.2＋α。	刺茎の状態は鋤鉄を思わせる。 い。硬度は硬く、4.0前後。	黒色茶味色強い。錆ぶくれ少なく	鋤鉄か。 硬度4.0前後。
同図　2 写－62	鉄製 不明	J 11－133カクニン面。	錆化のため不明。 長さ2.2＋α。	端部の一部しか見えず、錆ぶくれ中に入る。鉄色茶味強い。品位は不良。硬度は、3.0強で軟らか。		時代色不明。 硬度3.0強。
同図　3 写－62	鉄製 不明	J 11－154カクニン面。	長さ2.2＋α。	端部の一部を残す。欠損は近代以降。鉄味は古代鉄を思わせる。鉄色は茶味強い。硬度は3.5弱。		古代鉄か。硬度3.5弱。
同図　4 写－62	青磁 碗	J 11－327。	体部片。	磁胎（淡灰）、なし、緑。 釉暗オリーブ。	鎬手の蓮弁文碗。鎬筋は弱く盛期過ぎの感あり。割れ口消耗。	龍泉窯系。13世紀。
同図　5 写－62	土師質 皿	J 12－399付近。	底部片。 底径（7.0）。	粘・陶、微、硬。 橙５Y R⅝。	底面に輪轆左回転の糸切痕。内面に油煙付着。焼成単一。	輪轆左回転。
同図　6 写－62	土師質 皿	K 12－48。	体部片。	粘、微、硬。軟い。 橙7.5Y R⅛。	内外横撫あり。割れ口風化傾。焼成単一。	中・近世。
同図　7 写－62	埴輪 形象	K 12－28（台地縁辺）。	部材片。	粘、微、並。軟い。 橙7.5Y R。	形象種不明。上方欠損。下方接合部分。焼成芯側暗黒色、外面酸化。	
同図　8 写－62	鉄製 不明	K 12－48。	長さ3.3＋α。	種不明であるが、横断面隅丸方形を呈するため茎片か鋤片。錆色やや紫味あるが錆ぶくれあり粗鍛。硬度4.0弱で、硬い。		古代鉄。硬度4.0弱。
同図　9 写－62	鉄製 不明	K 12－281。	全長7.4。	割れ目に層状の錆化のため和鉄。側面に刃部らしき個所があり、硬度4.0弱を示し、硬い。錆色茶味強い。		和鉄。 中・近世。

西長岡南遺跡Ⅲ

図番号 写真番号	種 器形	出土位置	量目（cm） 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
第111図　1 写真図版62	埴輪 円筒	10号墳周溝No.42 ・61ほか。	口径23.2。 高さ35.7。	粘・陶、微、硬。 橙2.5Y R⅝。	外面に筒記号あり。内外細刷毛目。 内面絞作痕。焼成３層。粘土板不明。	筒記号。透。黒色物質付着。
同図　2 写－62	埴輪円 筒小形	10号墳周溝No.169 ・191。	口径18.4。 高さ30.7＋α。	粘・陶、硬。重い。 にぶい橙7.5Y R⅛。	口縁部の内外面横撫。内面筒記号あり。内外細刷毛目あり。透１対２穴。	筒記号。透。
同図　3 写－62	埴輪 円筒	10号墳周堀No.181 ・51ほか。	口径20.7。 高さ33.9＋α。	粘・陶、微、硬。重い。 橙2.5Y R⅝。	内面に筒記号「×」あり。透円形１対２穴。内面横撫。焼成酸化気味。	筒記号。透。
同図4－1 写－62	埴輪 円筒	10号墳南堀フク 土ほか。	口径（19.1）。 高さ31.2＋α。	粘・陶、微、硬。 橙7.5Y R⅝。	内外面に刷毛目あり。内面に筒記号あり。焼成酸化気味の３層。	筒記号。
第112図5－1 写真図版62	埴輪 円筒	10号墳No.165ほか。	口径（20.4）。 高さ17.8。	粘・陶、微、並。 にぶい橙7.5Y R⅛。	内面刷毛目微、指撫あり。内面に絞作痕。突帯低い。焼成３層。	外面に筒記号。
同図　6 写真図版62	埴輪 円筒	10号墳No.21。 周北堀ほか。	口径（18.8）。 高さ19.7＋α。	粘、微、並。軟い。 橙2.5Y R⅝。	内面に筒記号あり。内外細刷毛目。 内面深く横撫。絞作痕。焼成３層。	筒記号「×」。 細刷毛目。
同図　7 写－62	埴輪 円筒	10号墳周堀No.159 ほか。	口径（20.2）。 高さ7.8＋α。	粘・陶、並。軟い。 明赤褐５Y R⅝。	内面に筒記号あり。内外細刷毛目。 内面に絞作痕あり。焼成単一。	筒記号「一」。 細刷毛目。
同図　8 写－62	埴輪小 形円筒	10号墳南堀北堀 フク土ほか。	口径（17.0）。 高さ10.2＋α。	粘・陶、含、硬。 橙2.5Y R⅝。	内外面刷毛目。口縁部内外面横撫。 内面筒記号。焼成酸化の橙色。	筒記号。
同図　9 写－62	埴輪 円筒	10号墳周堀No.43 ・119ほか。	突帯径（16.4）。 高さ26.0＋α。	粘・陶、含、硬。重い。 にぶい橙５Y R⅝。	内面細刷毛目。外面凍ハゼと風化消耗顕著。割れ口微化気味の３層。	透。基部粘土板接合５段。
同図　10 写－62	埴輪 円筒	10号墳周堀No.61 ・191ほか。	突帯径（15.4）。 高さ24.8＋α。	粘・陶、微、硬。重い。 にぶい橙7.5Y R⅝。	内外面に刷毛目。内面に絞作痕。外面の剥落顕著。焼成３層。	透。基部粘土板接合５段。

図番号 写真番号	器種 器形	出土位置	法量(cm) 残存状態	胎土・焼成・色調と摘要		備考
図版 11 写一63	埴輪 円筒か	10号墳No.89。	口縁部片。	粘、微、硬。軽い。 橙7.5Y R5/6。	内面に沈線あり。外面刷毛目。端部の内外面横撫。焼成単一。	覆記号。
第112図 12 写真図版63	埴輪 円筒	11号墳北堀フク土。	口縁部片。	粘・陶、含、緻。 におい赤褐5/2。	外面に刷毛目。口縁部周辺横撫。内面刷毛痕ヲ消し。焼成単一気味。	焼締り。
図版 13 写一63	埴輪 円筒	10号墳北堀フク土。	体部片。	粘・陶、微、硬。 橙7.5Y R5/6。	内外面に刷毛目あり。内面に沈線あり。上方内外横撫。焼成単一。	覆記号。
図版 14 写一63	埴輪 朝顔	10号墳南堀。	体部片。	粘、微、並。軽い。 橙7.5Y R5/6。	内外面刷毛目あり。内面一部撫あり。突帯端部黒い。焼成単一気味。	黒色物質付着。
第113図 15 写真図版63	埴輪 形象	10号墳南堀フク土。	端部片。	粘、含、硬。軽い。 橙7.5Y R7/6。	内外面に刷毛目後撫と撫跡。割れ口シャープ。焼成単一気味。	40の胎土近似。
図版 16 写一63	埴輪形 象家か	10号墳南堀フク土。	屋蓋棟部片か。	粘・陶、硬。 橙7.5Y R5/6。	外面に篠部刻、刷毛目覆書あり。内面指撫あり。焼成3層。	覆書あり。
図版 17 写一63	埴輪 形象	10号墳南堀フク土。	端部片。	粘、含、硬。軽い。 橙5Y R5/6。	内外面に刷毛目後撫。割れ口少し消耗。焼成単一気味。	41の胎土近似。
図版 18 写一63	埴輪形 象か	10号墳北堀フク土。	端部片。	粘、微、並。軽い。 橙7.5Y R5/6。	内外面に刷毛目あり。割れ口風化微。焼成単一。	
図版 19 写一63	埴輪 形象か	10号墳堀フク土。	端部片。	粘、微、硬。少し重い。 橙7.5Y R5/6。	片側は接合面で剥落。片側指などの圧痕。焼成3層。割れ口シャープ。	
図版 20 写一63	鉄器 鏃	10号墳周溝北No.1。	長さ5.8+α。	尖根の鏃先に見える。覆被部は調査時でなく、もっと遡る矢損。割れは古代鉄。錆色茶味強い。硬度差があり、4.0~3.0。		古代鉄。硬度3~4.0。
図版 21 写一63	鉄器 不明	10号墳周溝北。	長さ4.8+α。	割れ口は直線的で古代鉄。刃部の加工は見えない。錆色茶味がかる。錆ぶくれあり。硬度3.5強。		古代鉄。硬度3.5強。
図版 22 写一63	鉄製 不明	10号墳周堀北No.3。	長さ12.9+α。	錆割れに縦割れ多く古代鉄。錆化多く、茶味強い。中ほどで太い側所が錆区の側所のようにも見える。硬度3.0強。		古代鉄。硬度3.0強。
図版 23 写未掲載	鉄製 不明	10号墳周堀北No.3。	長さ6.1+α。	錆割れに縦割れ多く古代鉄。錆ぶくれ多く、茶味強い。横断面方形を呈し鏃か。硬度3.0強。		古代鉄。硬度3.0強。
図版 24 写一63	須恵 坏	10号墳南堀。	底径(8.2)。	粘・陶、微、軟。軽い。 灰黄2.5Y5/1。	内外面に輪轆目。全体に軟質。焼成単一。	竪整・太田。9世紀初頭。
図版 25 写一63	土師質 皿	10号墳北堀。	口縁部片。	粘、微、硬。軽い。 におい橙5Y R5/6。	内外面横撫。器面少し風化。焼成単一。	14~16世紀。
図版 26 写一63	土師器 坏	10号墳北堀。	口縁部片。	粘、微、並。軽い。 明赤褐5Y R5/6。	口縁部の内外面横撫。そのほか整形痕不明。焼成単一。	
図版 27 写一63	弥生か 壺か	10号墳南堀。	体部片。	粘、微、並。軽い。 におい褐7.5Y R5/6。	外面に沈線文ある。焼成は単一。器面全体消耗。	
第115図 1 写真図版63	埴輪形 象馬か	3号土坑フク土。	脚と胴部との接合点か。	粘、多、軟。少し重い。 におい黄橙10Y R7/6。	くびれ部角度は朝顔形でない。割れ口風化顕著。焼成単一。	
図版 2 写一63	埴輪 形象	4号土坑。	端部片か。	粘、含、並。軽い。 橙7.5Y R5/6。	内外面撫跡。割れ口消耗。焼成3層気味。	
図版 3 写一63	埴輪 円筒	4号土坑。	基部片。	粘、微、緻。軽い。 灰黄褐10Y R5/2。	外面に細刷毛目。内面指撫痕。基部粘土板かも。焼成単一気味。	焼締り。細刷毛目。
図版 4 写一63	埴輪 形象か	4号土坑。	体部片。	粘、微、硬。軽い。 におい黄橙10Y R7/6。	内外面に刷毛目あり。外面に篠書あり。焼成3層。割れ口風化微。	篠書あり。
図版 5 写一63	磁器 小碗	4号土坑。	底径(3.7)。	磁胎(白)、なし、緻。染付青	外面に海浜図を染付。高台端部を除き透明釉施釉。	大正か。
図版 6 写一63	磁器 碗	4号土坑。	口径(11.0)。	磁胎(白)、なし、緻。染付青青。	内外面に型紙印刷文染付あり。高台端部を除き透明釉。	明治印刷。
図版 7 写一63	埴輪形 象家か	5号土坑フク土。	屋蓋棟部片か。	粘、微、硬。少し重い。 橙7.5Y R5/6。	内外面に刷毛目あり。突帯剥落。割れ口風化消耗。焼成3層。	
図版 8 写一63	軟陶コン炉か	5号土坑フク土。	体部片。	粘・陶、微、硬。 におい橙7.5Y R5/6。	下部に石目状の凹凸があり型跡か。内面撫跡。足欠損。焼成3層。	近代~現代。小泉焼か。
図版 9 写一63	土師質 か不明	6号土坑。	口縁部片。	粘、微、並。軽い。 明褐7.5Y R5/6。	器種不明。全体に消耗。整形痕不明。焼成3層。	古代~中世。
図版 10 写一63	土師質 焙烙	7号土坑フク土。	口縁部片。	粘、微、並。軽い。 橙7.5Y R5/6。	口縁部の内外面に横撫。器面全体消耗。焼成単一。内耳か。	近代。小泉焼か。
第116図 1 写真図版63	瓦 十能瓦	I 8~41。	小口・側部片。	粘・陶、微、並。 灰7.5Y1/1。	裏面に石目様の凹凸。表面に撫。焼成は5層。	小泉焼か。20世紀。
図版 2 写一63	瓦 十能瓦	I 8~41。	小口・側部片。	粘・陶、微、並。 灰7.5Y1/1。	裏面に撫痕。表面に部分撫痕。焼成は標・灰・黒灰・灰・標の5層。	小泉焼か。20世紀。
図版 3 写一63	瓦 十能瓦	I 8~41。	小口・側部片。	粘・陶、微、並。 灰7.5Y1/1。	裏面に石目様の凹凸。表面に撫。焼成は5層。	小泉焼か。

第５篇　科学分析と鑑定

第１章　群馬県、西長岡南遺跡の自然科学分析

株式会社　古環境研究所

１、西長岡南遺跡の地質とテフラ

１、はじめに

大間々扇状地東部に位置する西長岡南遺跡の発掘調査では、良好な土層の断面が作成された。そこで地質調査とテフラ検出分析を行い、土層の層序についての記載を行うとともに、テフラ検出分析を行って土層の堆積年代に関する資料を得ることになった。調査の対象とした地点は第１地点と第２地点の２地点である。

２、土層の層序

(1)　第１地点

ここでは、下位より亜円礫層（層厚10cm以上、礫の最大径168mm）、灰色砂質シルト層（層厚10cm、Ⅵ層）、暗灰色土（層厚14cm、Ⅴ層）、白色軽石混じりで褐色がかった暗灰色土（層厚６cm、軽石の最大径５mm、Ⅳ層）、黒灰色粘質土（層厚26cm、Ⅲ層）、褐色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚16cm、Ⅱ層）、亜円礫混じり暗褐色砂質土（層厚13cm、Ⅰ層）の連続が認められた（附図１）。

(2)　第２地点

この地点では、下位より亜円礫混じり暗灰色砂層（層厚５cm以上、礫の最大径31mm）、暗褐色砂質土（層厚６cm）、黒灰色粘質土（層厚７cm）、成層したテフラ層、暗灰色砂質土（層厚３cm）、黒灰色土（層厚15cm）、暗灰色砂質土（層厚19cm）、作土（像工25cm）の連続が認められた（附図２）。これらの土層のうち成層したテフラ層は、下位より黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.7cm）、桃色粗粒火山灰層（層厚0.6cm）、黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.6cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、桃色細粒火山灰層（層厚２cm）から構成されている。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As-B、新井、1979）に同定される。

３、テフラ検出分析

(1)　分析試料と分析方法

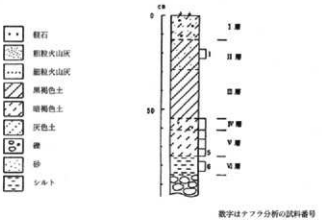
２地点の土層断面から採取された土壌試料10点を対象にテフラ検出分析を行って、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラを検出して、土層の堆積年代に関する資料を得ることにした。分析の手順は次の通りである。

１)、試料10ｇを秤量。

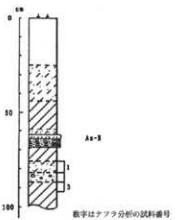
２)、超音波洗浄装置により泥分を除去。

３)、80℃で恒温乾燥。

４)、実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。



附図１　西長岡南遺跡の土層柱状図



附図２　西長岡南遺跡の土層柱状図

(2)　分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。第１地点では、試料番号５（Ⅴ層下部）以上の試料に軽石粒子が認められた。試料番号５～３（Ⅴ層上部）には、スポンジ状によく発泡した灰白軽石（最大径2.8mm）が比較的多く含まれている。斑晶には斜方輝石が認められる。この軽石は、その特徴から４世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As-C、新井、1979）に由来するものと考えられる。

その上位の試料番号２（Ⅳ層）には、この軽石のほかに発泡のあまりよくない白色軽石（最大径3.1mm）が認められる。この軽石の斑晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。この軽石は、その岩相から６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来するものと考えられる。また試料番号１（Ⅱ層）からは、比較的よく発泡した淡褐色の軽石(最大径2.0mm)が多く検出される。この軽石の斑晶には斜方輝石が認められ、その特徴からこの軽石は As-B に由来するものと考えられる。

第２地点では、試料番号３～１に Hr-FA に由来すると考えられる白色軽石（最大径7.2mm）や As-C に由来すると考えられる灰白色軽石（最大径2.2mm）などが比較的多く認められた。

４、考　察

第１地点では、Ⅴ層に As-C に由来する軽石が比較的多く、Ⅳ層中には As-C の軽石のほかに Hr-FA に由来する軽石が比較的多く、さらにⅡ層中に As-B に由来する軽石が多く検出された。これらのことからⅤ層中に As-C、Ⅳ層中に Hr-FA、Ⅱ層中に As-B に各々も降灰層準があるものと考えられる。なおⅥ層とその下位は、洪水起源の砂質シルト層と礫層で、軽石の粒子が流失してしまっている可能性も考えられる。この場合 As-C の降灰層準はさらに下位となるのであるが、今回の分析ではⅥ層中に As-C の軽石がまった

附表１　西長岡南遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
第１地点	1	+++	淡褐	2.0
	2	++	白，灰白	3.1，2.0
	3	++	灰白	1.8
	4	++	灰白	2.8
	5	++	灰白	1.8
	6	−	−	−
第２地点	1	++	白，灰白	7.2，1.5
	2	++	白，灰白	4.1，2.2
	3	++	白，灰白	5.2，1.9
	4	−	−	−

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，−：認められない．軽石の最大径は，mm．

く検出されなかったことから、ここではＶ層中に As-C の降灰層準があると考えておく。

一方、第２地点では、試料番号３以上に As-C と Hr-FA の軽石が検出され、その下位の試料番号４には検出されなかった。このことから試料番号３付近に As-C と Hr-FA の降灰層準があるものと考えられる。ただし２層のテフラが共存していることから、試料番号３の砂層基底に不整合のあることも考えられる。

５、小　結

西長岡南遺跡において地質調査とテフラ検出分析をあわせて行った結果、第１地点のＶ層中に浅間Ｃ軽石（As-C、４世紀中葉）、Ⅳ層中に榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、６世紀初頭）、さらにⅡ層中に浅間Ｂテフラ（As-B、1108年）の降灰層準が認められた。また第２地点では As-B の一次堆積層が検出された。

参考文献

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，№157，p.41-52.
町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.
坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.

２、西長岡南遺跡の植物珪酸体分析

１、はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。ここでは、植物珪酸体分析を用いて水田跡（稲作跡）の探査を試みた。

２、試　料

試料は、第１地点について５点、第２地点について２点の計７点である。試料採取個所を分析結果の柱状図に示す。

３、分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）、試料の絶乾（105℃・24時間）

２）、試料約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02ｇ）

※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）、電気炉灰化法による脱有機物処理

４）、超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

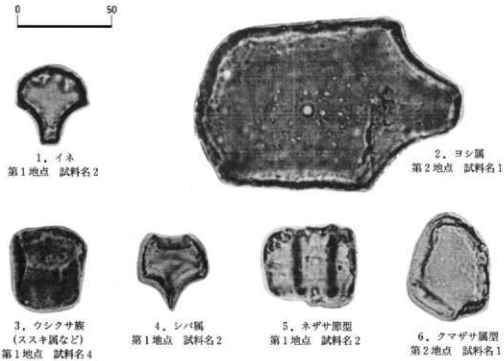
５）、沈底方による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

６）、封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

７）、検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。

附写真　植物珪酸体の顕微鏡写真



計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科はネザサ節の値を用いた。その値は2.94（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24、0.48である。

４、分析結果

水田跡の探査が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な５分類群に限定した。分析結果を附表１および附図１、附図２に示し、写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

５、考　　察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料１ｇあたりおよび5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1)　第１地点

Ⅱ層（As-B混、試料１）からⅥ層（試料５）までの各層について分析を行った。その結果、Ⅱ層（試料１）、

附表１　西長岡南遺跡の植物珪酸体分析結果（主要な分類群について計数）

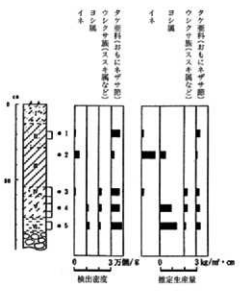
検出密度（単位：×100個/ｇ）

分類群／試料	第１地点					第２地点	
	1	2	3	4	5	1	2
イネ	7	40	8			8	8
キビ族（ヒエ属など）							
ヨシ属		8		16	23	31	31
ウシクサ族（ススキ属など）			23	24	15	16	53
タケ亜科（おもにネザサ節）	73	24	70	71	91	47	214

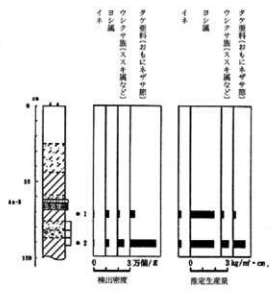
推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ		1.17	0.23			0.23	0.22
（イネ穂）	0.21	0.41	0.08			0.08	0.08
キビ族（ヒエ属など）	0.07						
ヨシ属		0.50		0.99	1.44	1.98	1.93
ウシクサ族（ススキ属など）	0.35		0.29	0.29	0.19	0.19	0.66
タケ亜科（おもにネザサ節）		0.11	0.33	0.34	0.44	0.23	1.03

※仮比重を1.0と仮定して算出



附図１　西長岡南遺跡第１地点の植物珪酸体分析結果
※おもな分類群について表示



附図２　西長岡南遺跡第２地点の植物珪酸体分析結果
※おもな分類群について表示

Ⅲ層（試料２）、Ⅳ層（試料３）からイネの植物珪酸体が検出された。

このうち、As-B下層のⅢ層では密度が4,000個/ｇと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

As-B混のⅡ層およびHr-FA混のⅣ層では密度が1,000個/ｇ未満と低い値である。植物珪酸体密度が低い原因としては、１）稲作が行われていた期間が短かったこと、２）土層の堆積速度が速かったこと、３）採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられるが、これら以外にも上層や他所からの混入の可能性も考えられることから、地点数や試料数を増やすなどさらに詳しい調査が必要と考えられる。

(2)　第２地点

As-B 直下層（試料１）および砂礫直下層（試料２）について分析を行った。その結果、両試料からイネが検出された。密度はいずれも1,000個/g未満と低い値であるが、前者は直上を As-B 層で、後者は砂礫層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、各層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

6、まとめ

以上のように、第１地点のⅢ層（As-B 下層）ではイネの植物珪酸体が比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、第１地点のⅡ層（As-B 混）とⅣ層（Hr-FA 混）および第２地点の As-B 直下層と砂礫直下層でも稲作が行われていた可能性が認められた。

参考文献

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点・植生史研究，第２号：p.27―37

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―，考古学と自然科学，９：p.15―29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)―福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L.）生産総量の推定―，考古学と自然科学，12：p.29―41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―，考古学と自然科学，17：p.73-85.

第２章　西長岡南遺跡Ⅱ出土の動物の足跡について

獣医師　　大　江　正　直

１、発見状態と石膏型状態

西長岡南遺跡Ⅱの最北地域の低地から動物のものと思われる足跡が30以上発見された。この動物の足跡は附図１足痕跡と位置図及び、附図２足痕跡石膏型実測図並びに石膏型がとられている。調査所見によればこの足跡が発見された場所は低地面上に水路を思わせる22号溝が南北の方向に走り、低い畔様の高まりの想定と北接し水田跡の可能性が考えられる場所であったとある。時代としては Hr-FA 火山灰の下で４・５世紀と考えられると言うことである。附図１足痕跡と位置図における動物の足跡は円形のもので、大きさもほぼ同程度のものであることを示している。幸い附図２に見られるとおり２つの足跡について石膏型がとられてあるので以下この足跡の石膏型について考えて行きたい。

この２つの石膏型のうち№２は発掘時のヘラの跡が一面にあり、動物の足跡として動物の種類等を判断出来る状態にないので、やや良程度の№１のみについて判断して行くこととする。なお附図１の他の足跡は№１と同様に円形の輪郭を示しており（附写真５～８）、大きさもほぼ同じ程度に見られるので、これらの足跡は№１と同じ種類の動物の足跡と考えて行きたい。

２、西長岡南遺跡Ⅱ出土の足跡をもつ動物の種類及び大きさ

(1)　石膏型№１の形状及び大きさ

①　石膏型№１の形状

この足跡は比較的遺残状態が良好であるが足跡の左右側面の後半部は風化のため側壁面の傾斜がやや不明瞭になっており、また足跡底面の左側中央部（動物の左側、石膏型の右側）が風化のための石膏面がやや盛り上がっている。

この足跡は底面に対して側壁面がくっきりとさり立っているので、この足跡は硬い蹄をもつ動物の蹄跡であると考えられる。この蹄跡の外周は楕円形に近く蹄尖部はやや丸味を帯びている。右蹄側壁の湾曲はやや強い。左蹄側壁の前側の湾曲は少なくのっぺりした感じである。蹄跡の左右後端部には鮮明な蹄踵跡が見られる。右蹄踵部は大きくて良く発達しているが左蹄踵部は小さい。左右蹄踵部の間には小さな菱形をした蹄叉の跡が浮き上がっている。この蹄跡には偶蹄類に見られる副蹄跡は全く見られず、また蹄尖部は丸くて二つに分かれてはいない。（この石膏型を見るとかなり細かい所まで蹄の形と蹄の動きの跡がついていて土壌がかなり粘性を帯びていると考えられるので、若しも副蹄を有するならば副蹄跡が残っていても不思議ではない）。

②　石膏型№１の大きさ

この蹄跡は長さ9.2cm、幅8.5cmで右側後端は左側後端より0.8cm長い。蹄尖部の蹄壁と蹄底面との角度は70度で、蹄底面と水平面の角度は15度である。蹄尖部の深さは3.5cm、右側蹄壁部の深さは３cm、左側蹄壁部の深さは２cmであり、左側部より右側部の方が深い。蹄踵部の深さ0.8cmである。

(2)　この石膏型№１の蹄跡をつけた動物の種類

①　四肢に硬い蹄を持っている動物であること（有蹄類である）。

②　蹄尖部が割れていなくて副蹄がないこと（偶蹄類でない）。

石青型No.１は拓影図では差程に感じないが非常に遺残状態の良い石青型であるのに驚かされる。僅かに蹄側壁の後部に風化の痕が見られるだけである。遺残状態が良い一つの原因は、調査所見によるとここは黒色粘質土であって水田跡の可能性が高いところであると言うことであり蹄跡が大変良くついていることによるものである。そのためこの石青型からはこの馬の着地時に行った動作が読みとれて大変興味深いものがある。

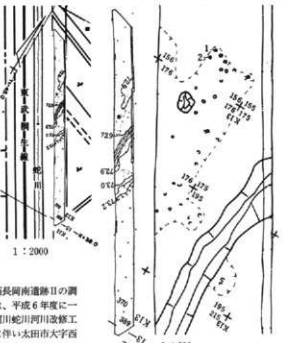
石青型No.１は下図のように蹄底面と水平面との角度は15度で傾斜地を上ろうとしたことがわかるが、着地時右蹄側壁のめり込みの深さの方が左蹄側壁のめり込みの深さより１cm深くついているので、この馬は低い所から少し高目の傾斜地へ上るため蹄尖部から蹄の右側にかなり力を入れて着地し、蹄踵部に至るまで力を入れて体勢をととのえたことは蹄踵部の痕が鮮明に残っていることでも良くわかる。次の瞬間前進を続けるために蹄尖部に力を入れて右後肢を踏み出したと想像される。着地から踏み出すまで余り時間的にずれがなかったことは、１つの蹄跡の中に２つの動作の痕が現われていることでも良くわかり、下図の蹄尖部に点線の所から前が、心持ち蹄底面が折れ曲っていることは着地の瞬間に蹄の外側に力を入れてふんばり、次の瞬間に蹄尖部に力を入れて踏み出したことを示している。

この踏み込む時に外側の蹄壁から着地して行くことはこの馬の後肢が外向きであり、後肢がＸ状姿勢（後肢の飛節の関節が寄り、後から見ると後肢がＸ状に見える）又は曲飛（後肢がくの字形に後に曲っている）であることを示している。また後肢がＸ状姿勢や曲飛を現わす根本的な原因は尻の傾斜にあり、尻が後方に傾斜する角度が強い（斜尻）ことによる。この斜尻は日本のように傾斜地が多い地形に順応した姿勢と考えられる。日本の昔の絵巻に見られる牛・馬には強い斜尻、Ｘ状姿勢、曲飛が見られる。

後肢にＸ状姿勢や曲飛が見られる時は、後肢は体の外側に向って円を描くように動き、地表をかすめるようにして着地するので通常の場合は内側の蹄踵の後に蹄が地表をかすめた痕が着くのが普通であるが、この場合は傾斜地を上ることを予測したため馬が比較的小幅で歩み、平坦地を歩く時のように大幅に歩かなかったためかすめた痕は右蹄踵部についたものである。

石青型No.２はヘラの痕が一面についているので詳明は不明であって蹄跡と判断出来ない。長径9.8cm、短径8.7cmである。

附図１　足痕跡と位置図



▲西長岡南遺跡Ⅱの調査は、平成６年度に一級河川蛇川河川改修工事に伴い太田市大字西長岡字南で調査が行なわれた。調査域は、前年度と合わせ、4,880㎡におよび、４世紀頃の住居跡４、６世紀頃の古墳16基が発見された。それらは、台地上に存在していた。調査地の最北地域で低地の一部が上図のように調査きされた。以南の台地縁に住居跡、その以南に16基の古墳が広がり古墳群をなす。

▲低地側の俗名山Ⅱr-FA。浅間山As-Cの調査部全図である。面上には、蹄足痕跡が30以上発見され、古くは湿潤地であった。

▲足痕跡の分布を示す。下図石青型は、図中の１・２に一致。低地面上に、水路を流れる22号溝、畦様の高まりが北接し、左図中の標高73.2mの傾斜面から、北側の72.9mまでの範囲に水田跡の可能性が考えられ、時期は火山灰が乱れ、４・５世紀という。

附図２　足痕跡石青型実測図

▼下図は、現場での足痕跡石青型である。２は調査時の荒傷が多かったため、整理班に傷跡を除去してもらった後の拓影図である。１は荒傷など少なく、掘り上げ後、間もない頃に採取された型のようである。

▼この蹄跡は全体として細い。前蹄は丸く、後蹄は細いためこの蹄跡は後蹄である。右蹄側壁の湾曲が強く、右蹄蹄の発達が良い。良く発達している方が外側なので右後肢の蹄跡である。右蹄踵部の後に蹄が地表をかすめた痕がついている。

▼蹄底と蹄尖壁のなす角度は70度である。普通後蹄の角度は50～55度であるので、この馬が着地し再び発進した時に蹄尖壁が前側に押され多少広がったものと考えられる。

③　蹄踵部中央に菱形の蹄叉があること（蹄叉のあることは馬の特徴の一つである）。

④　右側蹄壁の湾曲が強く、左側蹄壁の中央より後の湾曲が少ない。また右側蹄踵部の発達が良く左側蹄踵の発達が悪いこと（右肢の蹄跡である）。

⑤　蹄尖部の蹄壁と蹄底面との角度が70度であること。(前蹄の角度は概ね45度であり、後跡の角度は50～55度であるのでこの蹄跡は後肢である)。

以上の理由によりこの石膏型は馬の右後肢の蹄跡であることがわかる。

(3)　この石膏型№１の蹄跡をつけた馬の大きさ

この蹄跡は長さ9.1cm、幅8.5cmである所から小型馬の蹄跡と考えられる。この馬の蹄跡の大きさは、現代馬で言えば体高110cmのシェットランドポニーの大きさと同程度の大きさである。

３、西長岡南遺跡Ⅱ出土の馬の蹄跡をつけた個体数

調査所見によればこの遺跡は第三紀層・第四紀層から成る金山丘陵と八王子丘陵から出る自然湧水が潤おしている黒色粘質土をもつ水田地帯と、洪積層より成り立っている大間々扇状地との境いに存在し、この台地付近は洪積層に水が吸われてかなり乾くものと考えられる。馬の蹄跡の存在する所は低湿な場所であり、それ以外の土地は湿潤でなかったため馬の蹄跡がつかなかったと考えられると言うことであった。従って連続性の少ないこの30個の蹄跡だけでは馬の個体数の判定には至っていないし、困難と考えられた。

４、石膏型№１の蹄跡をつけた馬の動き

調査所見によればこれらの蹄跡群に平行するように蹄跡群の東側から蹄跡群の北西部を遮るような形で低い畦様の高まりが想定されるという。この右後肢の蹄底面は水平面に対して約15度の角度を持っており、この低い畦様の高まりを越えようとしたものとも考えられる。この石膏型は右蹄側壁の方が左蹄側壁より１cm深く土中にめり込んでいるので、僅かな傾斜地ではあるが蹄尖部及び蹄の右側に力を入れて踏み込み、着地後蹄踵部に至るまで力を入れて着実に踏みつけたものと考えられる（左右蹄踵部の痕が鮮明に残っている)。またこの石膏型の右蹄踵部には僅かではあるが（長さ2.7cm）着地に際して右後肢が地表をかすめた痕が残っている。またこの馬は右後肢に着地後更に前進を続けさせたことは蹄底面が蹄尖部の左側で斜めに折れ曲るように僅かに角度がついているので再び蹄尖部に力を入れて発進した様子を知ることが出来る。

５、考　　察

これらの馬達がこの水田跡地にいた理由は勿論稲刈り後の稲の株を食べる為であったと推定しておきたい。その前提となる放飼いは平安時代に左右馬寮が馬関係を統括していた時代の馬の飼い方として、①櫪飼い（「たてかい」今日の舎飼いに当る)、②繋飼い（「つなぎがい」牧に繋いで調教したり、飼育したりする)、③放飼（牧に放牧する）と言う飼い方が行なわれたが一般農民の手のとどくところではなかったであろう。古代において群馬で行なわれたであろうと考えられる馬の基本的な飼い方はⓐ集落の付近における馬の柵内飼育、ⓑ夏の間に集落の近くの雑木林か河川敷等中の芝地・野草地に放飼する、ⓒ冬の間は収穫後の水田・畑跡に放飼するか、または部落の近くの雑木林か河川敷等中の枯草地に放飼する方法を併用する。勿論この３つの方法だけで馬が飼えるものではなく、その間農産物の残渣や刈草や干草等を給与して不足勝ちの栄養を補ったであろうと言うことは言うまでもないことで、「手豆で馬を飼う」と言う手間暇かけて家畜を飼う飼い方が古代から現代に至るまでの日本の馬の飼い方であったと考えられる。

ⓐ集落の付近における馬の柵内飼育については先ず舎飼いを併用することが頭に浮ぶが舎飼いについては駅家のような公的な建物の発掘はあっても農民の厩舎の発見は余り聞いたことがなく、機能分別や地界の柵列跡は古代であっても中世でも、しばしば発見されているので古代では農民達の馬を飼養していた場所は基本的には柵の中で飼養していたのが普通であったであろうと考えられる。古代の周辺地域における馬の柵内飼育は毎日使役する以外の馬も一緒に飼っていることは労力的にもまた飼料面でも行き詰りを生ずるので残余の馬はⓑ、ⓒの放飼に出していたものと考えられる。畜産国でない日本には昔から基本的な飼い方であるこの柵内飼育についての呼び名（名称）が無いことは誠に不思議なことである。このその日に使役する馬だけを集落付近の柵内で飼うことは馬の栄養維持の面では大切なことであった。青草だけで肥った馬は一度全力疾走するとたちまちやせてしまうので(穀物で肥えた馬は青草のみで飼育した馬よりやせ難い)、毎日又は数日毎に馬を休ませることはぜひとも必要なことであって、元軍（蒙古軍）の精兵（正規兵）は１人当り20頭の馬を持ち、毎日馬を代えて休ませたと言うことであるが栄養回復に２～３週間の休息は理にかなったことであると考えている。

ⓑ夏の間集落近くの雑木林か河川敷等中の野草地に放飼することについて、当時の馬飼養がすべて集落共同で行なわれていたことは出土する馬の蹄跡が殆んど群の状態で出土していることを見て良くわかる。昼間は放飼し、夜は狼害その他を防ぐため柵内に追い込んだであろう。(夕方この柵内に馬を追い込む方法は必ず柵内で若干の飼料例えば青草、干草、農産物の残渣を給与する方法をとると馬達は夕方になると柵の入口に集まっているので入口付近のみ蹄跡が極端に多くなる。柵内では排尿し、その上を多くの馬が歩いてこねるのですぐに土壌中に不透層が出き、常にその場所は湿っている。柵内には通常そのような場所が数個所出来る）前述したように群馬のような肥料分の少ない火山灰土に覆われた雑木林中の野草は収量も少なく馬の栄養を維持することは仲々大変なことであったと考えられる。このことは古代の牧で栄養不足やその他の原因で繁殖成績が悪く定められた60％の産駒を得ることが難しくて牧長や牧子が大変苦しみ牧子が逃亡したりしている所を見ると良くわかる。

ⓒ冬の間は収穫後の水田・畑跡に放飼するかまたは集落の近くの雑木林か河川敷等中の枯草地で放飼する方法を併用することは当然のことであろうが、我々が目にする古代馬や古代の野生鹿の蹄跡は殆んどこのⓒのうちの水田跡地や畑跡地である。然し雑木林の僅かな枯草や笹等ではやっと命をつなぐだけで増殖を期待することなど無理なことであろう。しかし収穫後の水田・畑跡に放飼した場合穂刈りした後の稲藁や刈取後の稲の再生した芽等は誠に良い飼料で筆者も第二次大戦時中国で半年間補充馬の歩行輸送に従事し、行軍中夜は水田跡地に放飼しながら昼移動した経験があるが、稲の再生株や稲刈り後の株や畦畔に生えている僅かな雑草で馬の栄養をかなり良い状態に保てたことを記憶している。青草だけで肥る能力は草食獣の中で馬が一番優れていることを身をもって知らされた。ただ馬は飼料効率が良いと言っても農業技術も生産する収量も低い古代に於て、しかも肥料分の少ない火山灰土に覆われた群馬の雑木林の間に生えている収量の少ない貧弱な草地で飼育することは広い面積に放牧出来るならばいざ知らず、部落の周辺の畑・水田跡地や雑木林や河川敷を主なる飼養の場とした古代の馬飼養は容易なことではなかったであろう。古代では正に馬も飼う人人も共に苦しみぬいてやっと生きて来たと言うことが偽らぬ所であろう。時代と共に群馬の馬の頭数が増えたのは一重に農家戸数の増加と農業技術の進歩に伴なった農産物収量の上昇によったことであることを忘れてはならない。また農家が自分の食べる食物を減らして馬に給与したからにほかならない。

馬の体高と蹄の大きさとの関係について種々御教示を賜わった群馬県馬事公苑の大根田貞夫氏、渡辺守彦氏に深甚な感謝の意を表します。

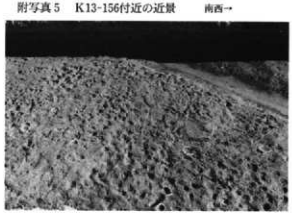
附写真1　石膏型1

附写真2　石膏型2

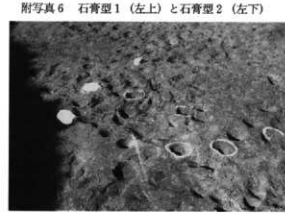
附写真3　八王子丘陵（右奥）と低地　　南東→

附写真4　K13-156付近蹄足痕群　　北西→

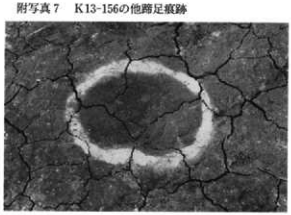
附写真5　K13-156付近の近景　　南西→



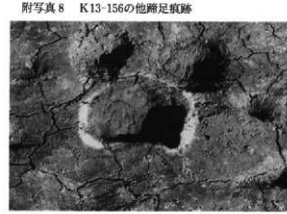
附写真6　石膏型1（左上）と石膏型2（左下）



附写真7　K13-156の他蹄足痕跡



附写真8　K13-156の他蹄足痕跡



第３章　西長岡南遺跡出土埴輪胎土の材料分析と顔料分析

藤根　久・古橋美智子（パレオ・ラボ）

１、はじめに

西長岡南遺跡は、太田市北西部の八王子丘陵南西の裾部に位置する。この遺跡では、住居跡や周堀をもつ古墳などが検出されている。また、こうした遺構に伴って、円筒形、器財形、家形などの埴輪も検出されている。

埴輪は、須恵器などのように高温で焼成されていないため、材料粘土の起源を指標する珪藻化石や骨針化石などが含まれていることが十分期待される。胎土中のこれら微化石類を記述することにより、海成粘土や淡水成粘土（湖沼成や沼沢地成など）などの材料粘土の起源を知ることが可能である。また、胎土中には砂あるいは数mmの礫を含むことが多いことから、これら砂粒組成の特徴記載により、砂粒組成あるいは混和材の特徴について検討することが可能である。こうした微化石類や砂粒組成の特徴を調べることにより、在地土器を対象とした場合には該当地域の土器材料を明らかにすることができる。

ここでは、西長岡南遺跡出土埴輪10点と比較試料として駒形神社窯出土埴輪３点、および古墳石室内の粘土１点について、薄片を作成し偏光顕微鏡による観察を行った。なお、古墳石室石材２点についても岩石学的記載を行った。さらに、周堀から検出した赤色顔料と11号墳周堀から出土した埴輪形象楯形付着顔料についても、蛍光Ｘ線分析計を用いて調べた。

２、埴輪胎土の材料分析

a、試料と処理

検討した試料は、11号墳周堀と10号墳周堀から出土した埴輪10点、駒形神社窯表採埴輪３点、11号墳石室内に埋材として使用された粘土１点である（附表１）。

附表１．胎土材料の検討した埴輪

番号	出土地点	器種	西長岡整理No.	備考
1	11号墳Ｊ10-84ほか	埴輪・朝顔	57	
2	11号墳周堀No.２・３ほか	埴輪・朝顔	60	2'チャートのみ取り出した礫
3	11号墳周堀No.18ほか	埴輪円筒大形	4	
4	11号墳周堀No.73・93ほか	埴輪円筒小形	5	
5	11号墳周堀No.44・65・73ほか	埴輪円筒	25	
6	11号墳周堀No.８	埴輪円筒小形	7-34	
7	10号墳周堀No.42・61ほか	埴輪円筒	3-25	
8	10号墳No.21・同北堀ほか	埴輪円筒	26	
9	10号墳南堀覆土ほか	埴輪円筒	3-27、1・2	
10	駒形神社窯表採	埴輪形象	31　駒１	
11	駒形神社窯表採	埴輪形象	31　駒２	
12	駒形神社窯表採	埴輪円筒	31　駒３	
13	11号墳周堀No.23ほか	埴輪形象楯形	500-1	白・黒・赤顔料３色の分析
14	11号墳	石　凝灰岩	21-280	
15	11号墳	石　凝灰岩	21-285	
16	11号墳周堀	ベンガラ赤色顔料		顔料分析のみ
17	11号墳石室	粘土材		650℃・６時間焼成

ここでは、埴輪胎土の特徴を最大限に引き出すために、埴輪薄片を作成し、偏光顕微鏡による観察を行なった。各埴輪胎土は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の埴輪薄片（プレパラート）を作成した。

(1) 埴輪試料は、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、全体にエポキシ樹脂を含浸させ固化処理を行なった。平面を作成した後、同様にしてその平面をエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行なった。(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドグラスに接着した。(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02㎜前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。なお、石室内の粘土は、電気炉を用いて650℃・6時間の焼成を行った後、埴輪と同様に薄片を作成した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100㎜格子目盛を用いて任意の位置における約50㎛（0.05㎜）以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50㎛前後）を対象とし、石英・長石類および微化石類以外の粒子が約100個以上になるまで同定・計数した。また、この計数とは別に、埴輪薄片全面について、微化石類（珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。さらに、植物珪酸体化石は、約10～30㎟程度の面積について計数し、単位面積当たりの植物珪酸体化石数を求めた。

b、分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類する（菱田ほか、1993）。なお、埴輪胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

〔骨針化石〕

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生息する。

〔珪藻化石〕

珪酸質の殻を持つ微小な藻類で、その大きさは10～数百㎛程度である。珪藻は、海水域から淡水域まで広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境を持つ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復元が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種）・珪藻化石（汽水種）・珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（？）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

〔植物珪酸体化石〕

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によって異なるが、主に約10～50㎛前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここではファン型と棒状を対象とした。

〔胞子化石〕

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～50μm前後の小型の無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積物中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

〔石英・長石類〕

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶のように光学的特徴を持たないものは石英との区別が難しいためこれらを一括して扱う。なお、石英・長石類（含雲母類）は、黄色などの細粒雲母類が包含されている石英である。

〔長石類〕

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。

斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円上の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。

カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（しまうま模様をしたもので微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSiO_2%の多い深成岩や低温でできた泥質や砂質の変成岩などに産する。ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

〔雲母類〕

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剝がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO_2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩及び堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類という。

〔輝石類〕

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO_2%が少ない深成岩、SiO_2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてSiO_2%が中間から少ない火山岩によく見られ、SiO_2%のもっとも少ない火成岩や変成岩にも含まれる。

〔角閃石類〕

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO_2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

〔ガラス〕

透明の非結晶の物質で、電球のガラスの破片のような薄くて湾曲した（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、濁ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

〔複合鉱物類〕

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石を伴う粒子を複合鉱物類（含角閃石類）とした。

〔斑晶質・完晶質〕

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

〔複合石英類〕

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒のものから細粒のものまで様々である。ここでは、便宜的に粒子中の最小石英粒子の粒径が約0.01㎜未満のものを微細とし、0.01～0.05㎜のものを小型、0.05～0.1㎜のものを中型、0.1㎜以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類（等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

〔砂岩質・泥岩質〕

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつものである。含まれる粒子の大きさが約0.06㎜以上のものを砂岩質とし、約0.06㎜未満のものを泥岩質とする。

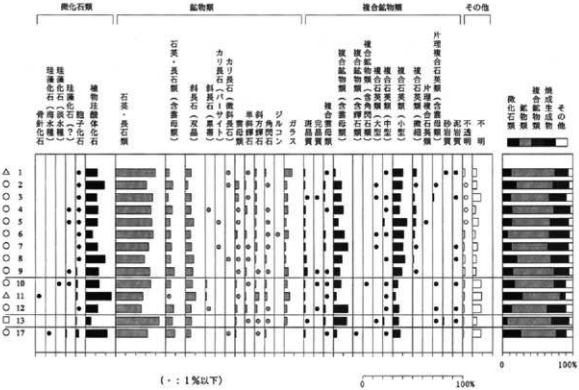
〔不透明・不明〕

解放ニコル、直交ニコルのいずれにおいても不透明なものや、変質のため鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

附表２．埴輪胎土および粘土中の微化石類・砂粒組成

分　類　群	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	17
微化石類														
骨針化石	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
珪藻化石（海水種）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
珪藻化石（淡水種）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—
珪藻化石（？）	—	—	—	2	2	—	—	—	1	2	—	—	—	3
黛子化石	1	2	1	1	1	1	1	2	3	5	5	2	3	9
植物珪酸体化石	35	50	25	29	29	15	25	52	30	37	77	26	14	62
鉱物類														
石英・長石類	117	82	83	82	87	81	68	76	80	95	81	54	117	91
石英・長石類（含雲母類）	11	20	6	16	11	11	12	14	21	14	2	17	19	27
斜長石（双晶）	17	7	13	13	20	11	13	22	17	19	31	12	17	15
斜長石（累帯）	—	—	—	2	—	—	—	—	—	4	3	1	—	—
カリ長石（パーサイト）	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—
カリ長石（微斜長石）	1	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1
雲母類	—	10	8	2	2	5	1	2	2	4	2	4	4	3
単斜輝石	2	3	1	5	—	3	2	1	3	1	3	4	1	—
斜方輝石	5	5	4	5	3	3	5	3	2	3	13	5	1	1
角閃石	4	2	—	2	1	2	1	5	2	5	8	2	2	4
ジルコン	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
ガラス	24	8	8	9	5	10	3	4	10	8	17	6	8	—
複合鉱物類														
斑晶質	3	3	2	4	3	3	3	7	8	3	3	3	1	4
完晶質	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	1	—	—
複合雲母類	1	5	3	2	—	4	4	—	2	1	1	4	5	2
複合鉱物類（含雲母類）	6	22	18	23	12	24	30	23	15	21	9	31	36	10
複合鉱物類（含輝石類）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
複合鉱物類（含角閃石類）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
複合石英類（大型）	—	2	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—
複合石英類（中型）	2	—	2	1	4	2	—	1	—	—	1	1	3	1
複合石英類（小型）	30	26	18	16	34	24	21	32	22	14	8	13	16	22
複合石英類（微細）	11	2	4	8	8	4	1	3	2	—	—	—	—	—
片理複合石英類	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
片理複合石英類（含雲母類）	—	1	3	—	—	—	—	—	—	1	—	1	1	—
砂岩質	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—
泥岩質	1	—	2	—	—	—	1	1	—	1	—	2	1	—
その他														
不透明	7	2	2	2	1	4	3	6	5	5	5	3	3	3
不　明	12	12	19	7	14	6	10	10	8	23	27	18	12	24
総ポイント数	291	265	224	231	239	215	206	265	234	271	298	210	268	284

附図１．埴輪胎土および粘土中の粒子組成図（全分類群を基数とした百分率で表示）
〔粘土の区分（試料No.左）〕
○：淡水成粘土（淡水種珪藻化石などの出現）　□：水成粘土（不明種珪藻化石・骨針の出現）　△：水性粘土（脆子化石のみ出現）



c．各胎土の特徴および計数の結果

埴輪胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（附表２、附図１）。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。また、計数した単位面積当たりの植物珪酸体化石数も示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

〔埴輪の記載〕

No.１：50～100μmが多い（最大粒径2.1mm）。石英・長石類＞斜長石（双晶）、複合石英類＞赤色粒子（70～200μm）、斜方輝石、角閃石、脆子化石、植物珪酸体化石（密度：約30.15個／mm²）

No.２：50～200μmが多い（最大粒径1.1mm）。石英・長石類＞複合石英類（含雲母類）、複合石英類、赤色粒子（70～900μm）、軽石型ガラス（２′のチャート礫；チャートを特徴づける放散虫化石が多く含まれ、石英により置換されている）、珪藻化石（淡水種：*Pinnularia* 属、*Nitzschia* 属、*Eunotia* 属、*Cymbella* 属、*Surirella* 属、不明種）、脆子化石、植物珪酸体化石（密度：約30.20個／mm²）、植物遺体

No.３：50～200μmが多い（最大粒径2.4mm）。石英・長石類＞斜長石（双晶）、複合石英類＞複合石英類（含雲母類）、赤色粒子（40mm～1.6μm）、珪藻化石（淡水種：*Melosira ambigua.*不明種）、脆子化石、植物珪酸体化石（密度：約29.07個／mm²）、植物遺体

No.４：50～200μmが多い（最大粒径2.4mm）。粗い粒子が多い。石英・長石類＞斜長石（双晶）、複合石英類＞複合石英類（含雲母類）、軽石型ガラス、ジルコン、赤色粒子（50～550μm）、不透明粒子、珪藻化石（淡水種：

Pinnularia borealis, Cymbella 属、不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約27.97個／㎟）、植物遺体

№５：100μm前後が多い（最大粒径1.4mm）。石英・長石類＞複合石英類、軽石型ガラス、赤色粒子（30μm～1.4mm）＞斜長石（双晶）、軽石型ガラス、珪藻化石（淡水種：*Hantzschia amphioxys, Navicula mulica, Cymbella* 属、*Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約27.49個㎟）、植物遺体

№６：100～200μmが多い（最大粒径1.8mm）。石英・長石類＞複合石英類（含雲母類）＞斜長石（双晶）、複合石英類、珪藻化石（淡水種：*Hantzschia amphioxys, Pinnularia borealis, Pinnularia* 属、*Eunotia* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約26.25個／㎟）、植物遺体

№７：100～200μmが多い（最大粒径2.3mm）。石英・長石類、複合石英類（含雲母類）＞赤色粒子（40～850μm）、軽石型ガラス（2.3mm）、珪藻化石（淡水種：*Pinnularia viridis, Hantzschia amphoxys, Eunotia pectinalis* var. *minor, Pinnularia* 属、*Surirella* 属、*Nitzschia* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石(密度：約19.98個／㎟）、植物遺体

№８：50～100μmが多い（最大粒径1.8mm）。石英・長石類＞斜長石（双晶）、複合石英類（含雲母類）、複合石英類＞赤色粒子（50μm～1.8mm）、軽石型ガラス、珪藻化石（淡水種：*Hantzschia amphioxys, Synedraulna, Pinnularia* 属、*Navicula* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約41.67個／㎟）植物遺体

№９：100～300μmが多い（最大粒径1.9mm）。石英・長石類＞長石類（含雲母類）、斜長石（双晶）、複合石英類（含雲母類）、複合石英類、珪藻化石（淡水種：*Stauroneis acula, Hantzschia amphioxys, Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Diploneis* 属、*Surirella* 属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石(密度：約27.12個／㎟）、植物遺体

№10：200～350μmが多い（最大粒径1.3mm）。石英・長石類＞長石類（含雲母類）、斜長石（双晶）、複合石英類(含雲母類)、複合石英類＞赤色粒子(40μm～1.2mm)、軽石型ガラス、珪藻化石(淡水種：*Eunotia pectinalis* var. *minor, Hantzschia amphioxys, Pinnularia obscura, Synedra ulna, Surirella* 属、*Eunotia* 属、*Diploneis* 属、不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約36.59個／㎟）、植物遺体

№11：200～400μmが多い（最大粒径1.6mm）。石英・長石類＞斜長石（双晶）、軽石型ガラス、赤色粒子（40μm～1.6mm）＞斜方輝石、複合石英類、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約43.83個／㎟）

№12：50～300μm（最大粒径4.6mm）。石英・長石類＞複合石英類（含雲母類）＞長石類（含雲母類）、複合石英類、赤色粒子（50μm～1.2mm）、珪藻化石（淡水種：*Eunotia praerupta* var. *bidens, Hantzschia amphioxys,*不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約24.69個／㎟）、植物遺体

№13：50～200μmが多い（最大粒径2.1mm）。石英・長石類＞複合石英類（含雲母類）＞長石類（含雲母類）、斜長石（双晶）、珪藻化石（不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石（密度：約14.18個／㎟）

№17：50～150μm、300μm前後が多い（最大粒径1.4mm）、石英・長石類＞斜長石（双晶）、複合石英類、赤色粒子（20μm～1.1mm）＞複合石英類（含雲母類）、珪藻化石（淡水種：*Pinnularia viridis, Eunotia* 属、*Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、*Cymbella* 属、海水種：*Coscinodiscus* 属または *Thalassiosira* 属、不明種）、胞子化石、骨針化石、植物珪酸体化石（密度：約34.48個／㎟）、植物遺体

〔岩石の記載〕

№14：凝灰岩。石英、長石類、斜長石（双晶）、斜長石（累帯）、泥質岩片、磁鉄鉱から構成される。ガラス細片は石英や沸石類あるいは緑泥石に置換され、モザイックまたは絹糸放射状を呈する。なお、微化石類は含まれない。

№15：凝灰岩。石英、長石類、斜長石（双晶）、斜長石（累帯）、磁鉄鉱、斑晶質岩片（安山岩）、砂岩片、泥

岩片から構成される。基質のガラス形態をもつガラス片は、石英や沸石類あるいは緑泥石に置換され、モザイックまたは絹糸放射状を呈する。なお、微化石類は含まれない。

d．化石による材料粘土の分類

検討した埴輪胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数百μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度）、放散虫化石が数百μm（ここでは検出されない）、骨針化石が10～100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～２mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981）。このことから、植物珪酸化石を除いた微化石類は、埴輪胎土の材料となる粘土中に含まれ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、埴輪製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した埴輪胎土は、微化石類により、ａ）淡水成粘土を用いた胎土、ｂ）水成粘土を用いた胎土、ｃ）水成と思われる粘土を用いた胎土、に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる。

ａ）淡水成粘土を用いた胎土（№２～10、12、17）

これらの胎土は、水成環境に見られる淡水種珪藻化石が含まれる胎土である。この胎土中には、水域に生育する *Pinnularia* 属や *Cymbella* 属あるいは *Eunotia* 属などが含まれる。特に、№７や№10、№12や№17の胎土中には、沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis* などが見られる。№３の胎土では湖沼浮遊生指標種群の *Melosira ambigua* が検出される。№４～10および№12では、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* などが含まれる。ただし、№17の胎土中には、海水種の *Coscinodiscus* 属または *Thalassiosira* 属と思われる珪藻化石を１個体含むが、他の大半の珪藻化石が淡水種であるため、淡水成粘土とした。

ｂ）水成粘土を用いた胎土（№13）

これらの胎土中には、水成堆積物中でみられる珪藻化石や胞子化石が含まれる。ただし、含まれる珪藻化石は、種が特定できないため、堆積環境等は明かでない。

ｃ）水成と思われる粘土を用いた胎土（№１、11）

これらは、僅かではあるが水成堆積物中に良く見られ、珪藻化石と共に出現する胞子化石を含む胎土である。

e．主成分分析による砂粒の特徴

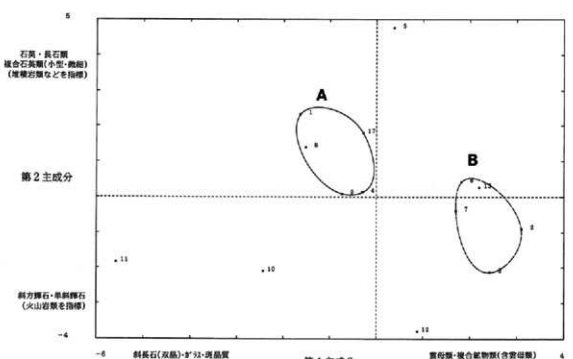
ここで設定した分類群のうち、50μm以上の複合鉱物類（岩石片類）は構成する鉱物や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。これは、対象とする岩石片が細粒で、岩石名を決定するのに必要な大きさがないことが原因である。このため、示される埴輪胎土中の鉱物、岩石片の岩石学的特徴は、地質学的状況（遺跡周辺の地質など）に一義的に対応しない。ここでは、埴輪胎土の材料のうち砂粒組成の特徴を復元する目的で主成分分析を試みた。主成分分析とは、多くの変量の値をできるだけ情報の損失なしで、１個または総合的指標（主成分、ここでは、例えば堆積岩類などの源岩組成）で代表させる方法である（田中ほか、1984）。

ここでは、田中ほか（1984）による主成分分析プログラム“ＰＣＡ”を使用した。なお、プログラムは、主成分散布図の出力の一部を変更して使用した。個体数は14試料で、変量数は粘土以外の特徴を調べるため

附表３．砂粒を対象とした主成分分析結果（相関行列の固有値と固有ベクトル：第１－第７主成分）

分類群＼主成分	1	2	3	4	5	6	7
鉱物類							
石英・長石類	0.01750	0.24059	−0.14411	0.16900	0.39326	0.08648	0.11755
石英・長石類（含雲母類）	0.15120	0.03347	0.40894	0.14428	−0.05489	0.01369	0.17964
斜長石（双晶）	−0.35717	0.03497	−0.09813	0.02400	−0.18017	−0.10467	0.02791
斜長石（累帯）	−0.28387	−0.21767	−0.11895	0.03952	0.00303	−0.08592	0.11259
カリ長石（パーサイト）	0.08705	0.16878	−0.13100	−0.04973	−0.38635	−0.27163	0.11631
カリ長石（微斜長石）	0.00246	0.14897	0.32746	0.11410	0.16828	−0.01895	−0.33850
雲母類	0.25092	−0.20710	−0.02366	0.08637	0.10145	0.00156	−0.38296
単斜輝石	0.00421	−0.22856	0.07595	−0.41191	−0.03839	−0.03530	0.03328
斜方輝石	−0.21122	−0.19486	−0.14321	−0.23463	−0.07503	−0.31474	−0.24209
角閃石	−0.37844	−0.05731	0.12084	0.03222	0.12130	−0.16489	−0.06576
ジルコン	0.06695	0.02517	−0.01126	−0.24594	0.16918	−0.01483	−0.01871
ガラス	−0.18847	−0.04556	−0.19367	−0.28977	0.29432	0.16904	−0.13301
複合鉱物類							
珪晶質	−0.10833	0.05497	0.35464	−0.14901	−0.25564	0.27040	−0.01792
完晶質	0.01908	−0.27458	−0.03014	0.13412	−0.19948	0.44978	0.00682
複合雲母類	0.32194	−0.22939	0.06143	−0.11062	0.07725	−0.20270	0.07965
複合鉱物類（含雲母類）	0.23876	−0.21804	0.04161	−0.11735	−0.17170	−0.10277	0.34722
複合鉱物類（含輝石類）	−0.01495	0.10992	0.27329	0.34585	0.06932	−0.19147	−0.08831
複合鉱物類（含角閃石類）	−0.13041	−0.12814	−0.06054	0.23055	0.01617	0.16338	0.17794
複合石英類（大型）	0.30999	−0.10013	−0.01681	−0.09994	0.15245	−0.19839	−0.23393
複合石英類（中型）	0.07142	0.22359	−0.38179	0.09543	−0.02396	0.04679	0.01421
複合石英類（小型）	0.14547	0.33265	0.11302	−0.09392	−0.20705	0.12847	−0.20712
複合石英類（微細）	0.02236	0.27009	−0.18646	−0.23265	0.01213	0.24962	−0.16133
片理複合石英類	0.02063	0.29144	−0.24525	0.06187	−0.31092	−0.07014	−0.05507
片理複合石英類(含雲母類)	0.17188	−0.24604	−0.20893	0.21787	0.00133	0.22766	−0.25427
砂岩質	0.09203	0.05458	−0.13072	0.09945	0.34591	−0.03339	0.42065
泥岩質	0.10910	−0.25763	−0.13049	0.13497	−0.18516	0.24010	−0.00605
その他							
不透明	−0.26320	−0.05261	0.19504	−0.14445	0.10943	0.27520	0.05725
不　明	−0.18143	−0.18528	−0.06843	0.36614	−0.09928	−0.20378	−0.21208
固有値	5.39964	4.69162	3.48469	3.02245	2.47958	1.89250	1.84106
寄与率（%）	0.19284	0.16756	0.12445	0.10795	0.08856	0.06759	0.06575
累積寄与率（%）	0.19284	0.36040	0.48485	0.59280	0.68136	0.74894	0.81470

附図２．第１－第２主成分散布図（数字は試料No.に対応する）



微化石類を除いた28分類群を用いた。なお、計算値は、百分率で小数１桁まで求めた数値を用い、相関行列の固有値および固有ベクトルを計算した。

主成分分析の結果、第７主成分までの累積寄与率は約81.47％に達する（附表３）。このうち第１主成分と第２主成分の寄与率は、それぞれ約19.28％と約16.76％であり、第３主成分以下の寄与率は徐々に小さくなる。ここでは第１－第２主成分散布図を作成し(附図２)、胎土中の砂粒の分類とこれが示す意味について述べる。

第１主成分は、含雲母類や複合鉱物類（含雲母類）などに関して正の相関が大きく（変質度合いの高い岩石など）、斜長石（双晶）やガラスあるいは斑晶質などに関して負の相関が大きい（テフラや火山岩類などを指標）。一方、第２主成分は、石英・長石類や複合石英類（小型）あるいは複合石英類（微細）などに関して正の相関が大きく(堆積岩類あるいは凝灰岩類などを指標)、斜方輝石や単斜輝石などに関して負の相関が大きい（火山岩類を指標）。

相関行列に基づく第１－第２主成分散布図では、大きく２群からなる胎土と分散する胎土群に分類される。Ａ群は、４埴輪胎土と古墳石室内粘土からなり、第１および第２主成分のほぼ中間域に分布する。

一方、Ｂ群は、第１主成分の右側に分布し、５埴輪胎土からなる。その他の胎土では、堆積岩あるいは凝灰岩類の特徴を顕著に示す№５、両輝石が多いなど火成岩類の特徴を顕著に示す№12、斜長石（双晶）やガラスなどのテフラの特徴を顕著に示す№11や№10などがある。

ただし、これらの主成分分析の結果では、大きく２群と分散する胎土に分類されるが、後述するように、各胎土中においては含有量の違いはあるものの、この地域の岩石学的あるいは地質学的特徴を示す凝灰岩質片が共通して含まれるため、ここで示す分類が地質学的に大きな違いを示すとは考えにくい（すなわち全く異なった地域を示すような違いではない）。

ｆ．胎土材料についての考察

ここでは、埴輪胎土の材料について、含まれる微化石類の記載と砂粒組成による分類を行った。粘土の起源では、珪藻化石の同定により沼沢湿地付着生指標種群を含む沼沢地成粘土や湖沼成粘土、その他粘土に分類できる。なお、８胎土中からは、陸域指標種群の珪藻化石（陸生珪藻とも呼ばれる）がみられる。これらの陸生珪藻は、赤褐色粒子中などで比較的集まって出現することから、埴輪製作上興味がある。

また、砂粒組成の主成分分析では、多く２群とその周辺に分散分布する埴輪胎土が分類された。この地域には、八王子丘陵の西南斜面に分布する安山岩質火砕岩類を主体とする藪塚層がある。この藪塚層は、下位から北長岡溶結凝灰岩部層・滝ノ入軽石凝灰岩部層・湯ノ入凝灰岩部層・大鷲軽石凝灰岩部層に分けられる（日本の地質『関東地方』編集委員会、1986）。これらの埴輪胎土中には、この地域の凝灰岩基盤を反映して、凝灰質岩片が含まれている。これらの岩石片は、解放ニコルでモザイックな構造をもち、直交ニコルで透過する光の少ない岩片である。こうしたことから、ここで対象とした埴輪胎土は、比較的類似した組成をもつものと考えられ、主成分分析による分類は、わずかな違いを反映しているものと考える。なお、ここで検討した埴輪胎土に共通した特徴として、直交ニコルで観察した場合、石英・長石類や斜長石などの鉱物以外の基質は、透過光が少なく、胎土全体が暗いのが特徴である。これは、材料的に凝灰岩類が多いためと考えられる。

一方、これら凝灰岩起源の変質したガラスとは異なり、透明感のある新鮮なガラスや大型の軽石型ガラスが含まれている。軽石型ガラスは、肉眼的な同定はやや難しいものの、実体顕微鏡を用いて灰白色の粒子と

附表４．埴輪胎土の粘土起源や砂粒による分類、およびその他特徴

番号	器　種	粘土の起源	砂粒組成	鉱物類	凝灰岩質岩片	植物珪酸体密度(個/㎟)
1	埴輪・朝顔	水成？	A		◎	30.15
2	埴輪・朝顔	沼沢地類	B	軽石型ガラス	○	30.20
3	埴輪円筒大形	湖沼成	B		○	29.07
4	埴輪円筒小形	沼沢地類（陸生珪藻）	A	軽石型ガラス	◎	27.97
5	埴輪円筒	沼沢地類（陸生珪藻）	堆積岩	軽石型ガラス	◎	27.49
6	埴輪円筒小形	沼沢地類（陸生珪藻）	B		○	26.25
7	埴輪円筒	沼沢地成（陸生珪藻）	B	軽石型ガラス	△	19.98
8	埴輪円筒	沼沢地類（陸生珪藻）	A	軽石型ガラス	△	41.67
9	埴輪円筒	沼沢地類（陸生珪藻）	A		○	27.12
10	埴輪形象	沼沢地成（陸生珪藻）	テフラ	軽石型ガラス	◎	36.59
11	埴輪形象	水成？	テフラ	軽石型ガラス	△	43.83
12	埴輪円筒	沼沢地成（陸生珪藻）	火山岩		○	24.69
13	埴輪形象楯形	水　成	B		◎	14.18
17	粘土材	沼沢地成	A		△	34.48

＊凝灰質岩片（モザイックな岩片）：◎：特に多い、○：多い、△：少ない

して識別される。軽石型ガラス以外のガラスは、いずれの胎土中においても見られるが、砂粒全体に対しては量的に少ないため、混和材混入時に既存のテフラが混入したものと考える。

先にも述べたように、対象とした埴輪胎土中には、イネ科植物の葉身で形成される植物珪酸体の化石が多く含まれている。単位面積当たりの個数は、約14.18～43.83個／㎟と高く、他の土器類に比べ１桁程度高いものと推定される。植物珪酸体化石の含有量が高い原因は、水田耕作土のようにイネ起源の植物珪酸体が多い場合とイネ科植物を焼いた時に出来る灰質が偶発的または意図的に混入する場合などがある。偶発的に混入する場合には、胎土ごとに含量のばらつきがあることが予想されるため、これら埴輪においては否定的と考える。なお、意図的に混入した場合は、藤根ほか（1996）が示した灰白色の植物珪酸体化石密集塊が付随することがあるが、これら胎土中には確認されない。これら胎土中の植物珪酸体化石の多産は材料的に興味ある現象である。埴輪は、通常に使用する土器とは異なり、墳丘に配列する特殊な意味をもつことから、材料的に興味ある現象である。なお、胎土薄片での植物珪酸体化石は、ヨシ属などの大型のものは同定が比較的容易であるが、詳細な形態観察が出来ないため同定するのが困難である場合が多い。ここで含まれる植物珪酸体化石は、明らかなヨシ属のものとヨシ属よりも小型のものとが見られる。

３、顔料分析

ａ．試料と分析方法

試料は、11号古墳周堀出土赤色顔料（附表１の№16）と11号墳周堀№23ほか埴輪形象楯形（表１の№13）である。

11号古墳周堀出土壺内の赤色顔料（附表１の№16）は、マイラー容器に入れて、測定試料とした。

また、11号墳周堀№23ほか埴輪形象楯形（表１の№13）は、表面に付着した黒色顔料、赤色顔料、白色顔料からセロハンテープを用いて、それぞれ接着した剥離面を測定試料とした。

分析装置は、セイコー電子工業㈱製の卓上型蛍光Ｘ線分析計 SEA-2001L である。Ｘ線管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、Ｘ線検出器は Si（Li）半導体検出器である。測定条件は、測定時

間100秒、照射径３㎜、電圧50KV、試料室内は真空である。なお、いずれのＸ線スペクトル中においても、ロジウム（Rh）のピークが検出されるが、これは分析装置のＸ線管球に由来するＸ線である。

ｂ．結　果

〔11号古墳周堀出土赤色顔料〕

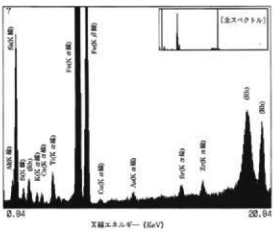
附図３に赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトルを示す。試料には、主な主成分元素としてケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）のピークが顕著に認められ、その他にアルミニウム（Al）、イオウ（S）、カリウム（K）、チタン（Ti）、銅（Cu）、砒素（As）が検出される。さらに微量成分として、ストロンチウム（Sr）、ジルコニウム（Zr）のピークが検出される。水銀（Hg）や鉛（Pb）のピークは、検出されない。なお、ロジウム（Rh）のピークはＸ線管球に由来するＸ線である。

〔埴輪形象楯形付着顔料〕

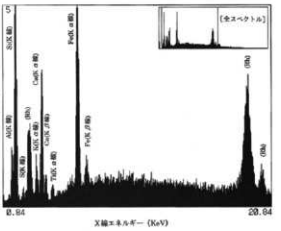
１）黒色顔料

附図４に埴輪形象楯形付着黒色顔料の蛍光Ｘ線スペクトルを示す。試料には、主な主成分元素としてケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）のピークが顕著に認められ、その他にアルミニウム（Al）、イオウ（S）、カリウム（K）、チタン（Ti）などのピークが検出される。

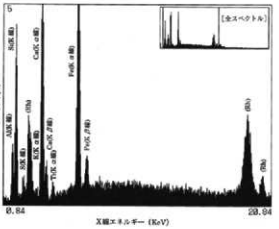
附図３．11号古墳周堀出土赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル



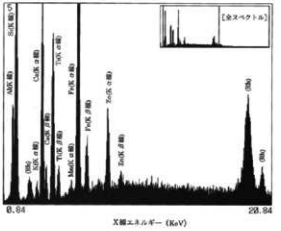
附図４．№13埴輪表面付着黒色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル



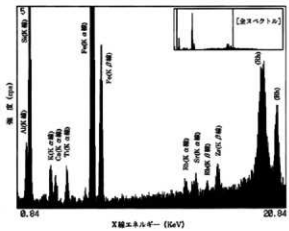
附図５．№13埴輪表面付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル



附図６．№13埴輪表面付着白色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル



附図７．№13埴輪胎土の蛍光Ｘ線スペクトル



２）赤色顔料

附図５に埴輪形象楯形付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトルを示す。試料には、主な主成分元素としてケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、鉄（Fe）のピークが顕著に認められ、その他にアルミニウム（Al）、イオウ（S）、カリウム（K）、チタン（Ti）などのピークが検出される。水銀（Hg）や鉛（Pb）のピークは、検出されない。

３）白色顔料

附図６に埴輪形象楯形付着白色顔料の蛍光Ｘ線スペクトルを示す。測定試料は、セロハンテープにより接着した試料であるが、厚みのある塗布面を採取することができた。試料には、主な主成分元素としてケイ素（Si）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、鉄（Fe）のピークが顕著に認められ、その他にアルミニウム（Al）、イオウ（S）、カリウム（K）などのピークが検出される。また、微量成分として亜鉛（Zn）も検出される。

Ｃ．考　察

〔11号古墳周堀出土赤色顔料〕

一般的に、赤色顔料として、水銀朱（HgS）、ベンガラ（Fe_2O_3など）、鉛丹（Pb_3O_4）が知られている。分析結果からは、試料に鉄（Fe）のピークが明瞭に認められたが、水銀（Hg）や鉛（Pb）は認められない。赤色顔料の１つであるベンガラは、鉄（Fe）の化合物が主な成分となっている。このことから、この赤色塊は、顔料である場合にはベンガラと考えられる。

ベンガラは、赤色の主成分が鉄（Fe）のものを総称して言う（本田、1995など）。古代においては、鉄分に富んだ土壌（たとえば褐鉄鉱を含むものなど）を焼いてつくられたと考えられている（山崎、1987など）。もちろん、天然の赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した場合もあると思われる。また、北野（1994）によると、近世においては、上記の他に、硫化鉄（磁硫鉄鉱：FeS、黄鉄鉱：FeS_2）が風化して形成された緑礬（りょくばん、硫酸鉄（II）：$Fe_2SO_4 \cdot 7H_2O$）を原材料とし、これを焙焼して酸化鉄（III）を製造し、ベンガラを生産していたことが知られている。さらに、矢彦沢ほか（1995）は、黄鉄鉱を含むグライ土層の堆積物の風化過程において、含水酸化鉄（III）（$Fe_2O_3 \cdot nH_2O$）が沈積することを確認し、これがベンガラの原材料になる可能性を示唆している。なお、岡田（1997）は、漆器などに使用したベンガラには、薄片観察により珪藻化石が確認されることから、珪藻を伴う沼沢地環境下で生成されたことを指摘している。

ここでは、蛍光Ｘ線分析による元素組成を行ったが、イオウが検出されていることから、硫化鉄の可能性が大きい。

〔埴輪形象楯形付着顔料〕

１）黒色顔料

黒色顔料としては、二酸化マンガンと炭素（墨）が知られているが（山崎、1987など）、この黒色顔料にはマンガンは含まれていないか、あるいはわずかである。実体顕微鏡で観察すると、細粒灰黒色部中に多くの黒色炭片が見られることから（附図版のｃ）、炭起源の黒色顔料と思われる。

２）赤色顔料

11号古墳周堀出土赤色顔料で述べたが、この付着赤色顔料も酸化鉄からなるベンガラと思われる。ただし、イオウ（S）が検出されているが、補修剤の石膏（gypsum;$CaSO_4 \cdot 2H_2O$）の影響が考えられることから、硫化鉄起源かどうかは断定できない。なお、この赤色顔料は、実体顕微鏡観察から、白色顔料の上塗りとして塗られていることが観察された（附図版のｂ）。

３）白色顔料

しっかりとした塗布面であることから、補修剤の石膏などの汚染は少なく、カルシウムを主体とした白色顔料であることが分かる。白色顔料としては、白土（しらつち；白色の粘土）や胡粉（ごふん；貝殻の粉末）あるいは漆喰、新しい時代では鉛白（鉛化合物）などが知られている（山崎、1987）。ここでの白色顔料の元素組成では、カルシウム（Ca）が多く含まれるものの、貝殻中に含まれるリン（P）が検出されないことから、炭酸カルシウムからなる石灰質などの起源である可能性が高い。なお、チタン（Ti）は、岩石中に比べて多く含まれているのが特徴的である（半定量分析では約2.54％である）。

引用文献

安藤一男（1990）　淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42、２、73-88。

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）　『増補改訂　地学事典』、平凡社、1612 p。

菱田　量・車崎正彦・松本　完・藤根　久（1993）　岩石学的方法に基づく胎土分析について―弥生時代後期の土器を例にして―。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集、34-35。

小杉正人（1988）　珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究、27、１-20。

田中　豊・垂水共之・脇本和昌（1984）　『主成分分析』『パソコン統計解析ハンドブックⅡ　多変量解析編』、共立出版、160-175。

日本の地質『関東地方』編集委員会編、（1986）日本の地質３　関東地方。335 p。共立出版株式会社。

藤根　久・菱田　量・車崎正彦（1996）　第２節　弥生土器の胎土分析。『下戸塚遺跡の調査―第２部　弥生時代から古墳時代前期―』、648-692。早稲田大学校地埋蔵文化財調査室。

車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）　(39) 土器胎土の材料―粘土の起源を中心に―。日本考古学協会第62回総会研究発表要旨、153-156。

市毛　勲（1984）『増補　朱の考古学』、第２版、考古学選書12、雄山閣出版。324 p。

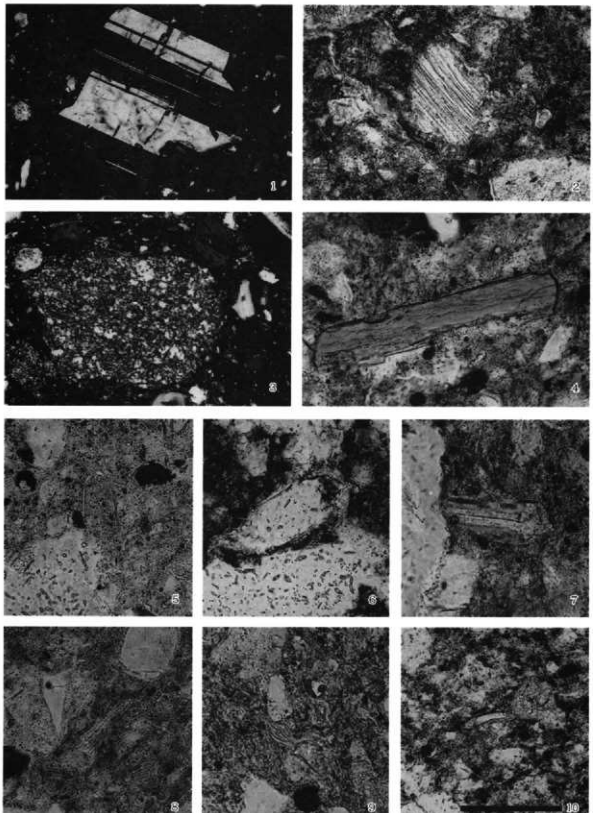
本田光子（1995）『古墳時代の赤色顔料』『考古学と自然科学』、31・32、63-79。

北野信彦（1994）『近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点Ⅱ-文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について―』『古文化財の科学』、39、93-102。

岡田文男（1997）　パイプ状ベンガラ粒子の復元。文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、38-39。

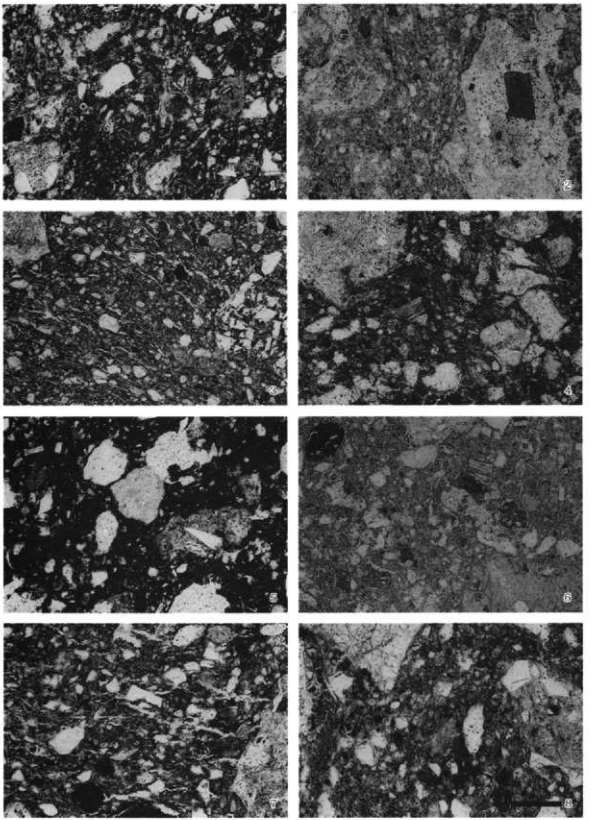
矢彦沢清允・両角秀俊・藤松　仁・村上　泰・森嶋　稔（1995）『弥生式土器の彩形に使われたベンガラの由来―フォッサマグナ東端地域を中心として―』『考古学雑誌』、80、４、75-87。

山崎一雄（1987）『古文化財の科学』、思文閣出版、352 p。



附図版1　埴輪胎土中の粒子顕微鏡写真　（スケールbar：No.1～3：200μm，No.4～9：100μm，No.10：50μm）

1．斜長石（双晶）　No.1
2．ガラス　No.6
3．複合石英類（含雲母類）　No.10
4．角閃石　No.8
5．珪藻化石（*Pinnularia* 属）　No.2
6．珪藻化石（*Surirella* 属）　No.5
7．珪藻化石（*Pinnularia* 属）　No.6
8．珪藻化石（*Stauroneis acuta*）　No.9
9．珪藻化石（*Diploneis* 属）　No.9
10．珪藻化石（*Hantzschia amphioxys*）　No.10



附図版２　埴輪胎土の偏光顕微鏡写真　（スケールbar：200μm）

１．状況写真　№１　２．状況写真　№２　３．状況写真　№３　４．状況写真　№４
５．状況写真　№５　６．状況写真　№６　７．状況写真　№７　８．状況写真　№８